

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 5 —

甘木市所在立野遺跡の調査

1 9 8 4

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 5 —

甘木市所在立野遺跡の調査



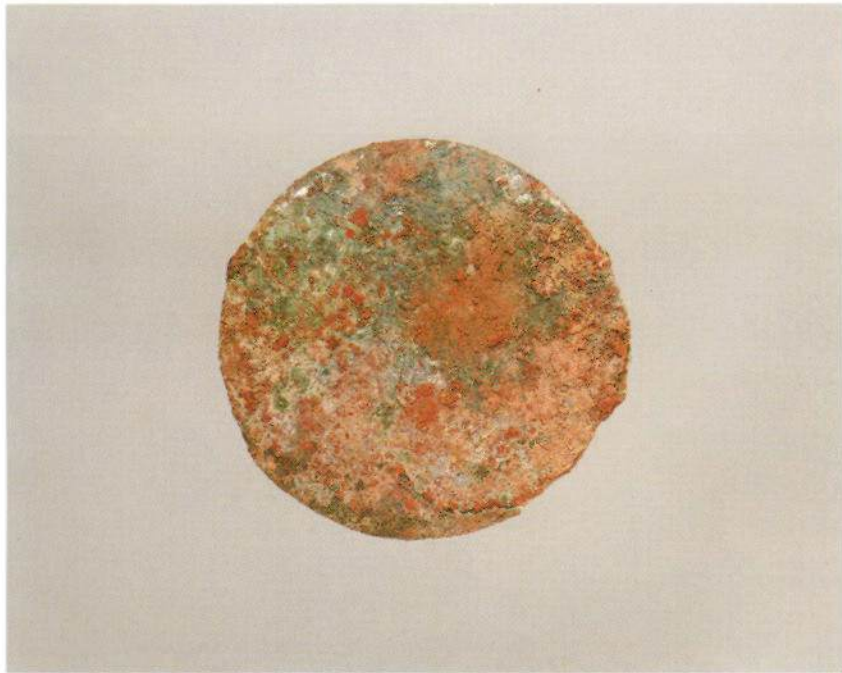
立野遺跡航空写真



10号方形周溝墓第1主体出土筒形銅器



11号方形周溝墓第1主体出土重圈文鏡(裏面)



11号方形周溝墓第1主体出土重圈文鏡(表面)

序

九州横断自動車道建設工事にともなう事前の発掘調査は昭和54年度にはじまり、本年度で6年目を迎えました。その間、地元の方々の多大な御協力により、朝倉町・甘木市・大刀洗町・小郡市内の遺跡を発掘調査しました。年を経るごとに工事の発注量が増え、発掘調査は日増しに緊迫度が増幅されつつあります。

昭和56年4月から発掘調査を開始した第11地点調査を終了し、立野遺跡としては2冊目の報告書を刊行するはこびとなりました。文化財保護活動や地域の歴史を知るうえで活用して頂ければ幸甚に存じます。

発刊にあたりまして、発掘調査に際し、貴い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ、種々御協力頂いた関係者の皆様方に深く感謝致します。

昭和59年6月30日

福岡県教育委員会

教育長 友野

隆

例 言

- 1 本書は、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡について、日本道路公団から委嘱を受け、福岡県教育委員会が発掘調査を実施した第5冊目の報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、昭和56年度から58年度にかけて調査した立野遺跡^{たての}A・D地区で、立野遺跡の第2冊目の報告である。
- 3 遺構の実測図は調査担当者、調査補助員が作成し、池田和博・高山浩一・吉橋秀美の助力を得た。製図は各執筆者の他に、塩足里美・本田ひろみ嬢の多大な助力を得た。遺物の実測・製図は各執筆者が担当した。
- 4 遺構写真は、調査担当者が撮影し、遺物写真は九州歴史資料館石丸洋・平島美代子氏の助力を得た。
- 5 遺物整理は、九州歴史資料館の岩瀬正信氏の指導のもとに、九州歴史資料館と福岡県文化課甘木発掘事務所で行なった。出土遺物は、現在、甘木事務所に保管している。
- 6 本文中の遺物番号は通し番号とし、写真図版の番号と対応する。
- 7 表に記載した遺構各部の面積はプラニメーターによる測定値である。その際、使用した図面は土壙 $\frac{1}{10}$ 、方形周溝墓・円墳は $\frac{1}{100}$ に縮尺したものである。
- 8 本書の執筆は、木下修・児玉真一・伊崎俊秋・武田光正が分担し、文末に名記し、文責を明らかにした。
- 9 本書の編集は伊崎の助力を得て、児玉が担当した。

本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	4
III	立野遺跡 A地区の調査	7
	1 調査の経過	7
	2 遺構の配列	8
	3 土 壙	10
	4 方形周溝墓	19
	5 円 墳	82
	6 随 葬 墓	87
	7 土 壙 墓	94
	8 その他の遺構と遺物	124
IV	立野遺跡 D地区の調査	127
	1 調査の経過	127
	2 遺構の配列	127
	3 土 壙	129
	4 円 墳	132
	5 土 壙 墓	142
V	まとめ	155
	1 土壙群について	155
	2 方形周溝墓と円墳	157
	3 飛鳥・奈良時代の土壙墓	168

図版目次

巻頭図版	1	立野遺跡全景（南西上空から）	4
	2	筒形銅器（A地区10号方形周溝墓第1主体出土）	62
	3	重圈文鏡（A地区11号方形周溝墓第1主体出土）	57
図版	1	立野・宮原遺跡周辺空中写真（1/5,000）	4
	2	立野・宮原遺跡周辺空中写真（1/5,000）	4
	3	立野・宮原遺跡周辺空中写真	7
	4	立野遺跡A地区全景	7・94
	5	立野遺跡A地区全景	7・94
	6	（上） 2号土壙	10
		（中） 3号土壙	10
		（下） 9号土壙	18
	7	（上） 10号土壙	18
		（中） 12号土壙	18
		（下） 14号土壙	18
	8	（上） 西支群全景	94
		（下） 西支群方形周溝墓の配列	94
	9	（上） 円墳群の配列	94
		（下） 東支群全景	94
	10	（上） 1号方形周溝墓全景	19
		（下） 同台状部空中写真	19
	11	（上） 1号方形周溝墓内部主体	19
		（下） 同粘土枕	19
	12	（上） 1号方形周溝墓開棺後全景	19
		（下） 同棺底粘土除去後の床石の状況	19
	13	（上） 1号方形周溝墓北周溝の土器出土状態	19
		（下） 同北周溝土器出土状態	19
	14	（上） 1号方形周溝墓北周溝土層断面と土器出土状態	19
		（下） 同西周溝の土器出土状態	19
	15	（上） 2号方形周溝墓内部主体	27
		（中） 同開棺後全景	27

図 版 15	(下) 同粘土枕	27
16	3号方形周溝墓全景	27
17	3号方形周溝墓土器出土状態	29
18	(上) 4号方形周溝墓全景	35
	(下) 5号方形周溝墓土器出土状態	38
19	(上) 6号方形周溝墓全景	39
	(下) 内部主体と土壙の切り合い状況	40
20	(上) 6号方形周溝墓内部主体全景	40
	(下) 同開棺後全景	40
21	(上) 6号方形周溝墓北隅の土器出土状態	40
	(下) 7・8号方形周溝墓全景	43・47
22	(上) 7号方形周溝墓内部主体全景	43
	(下) 同開棺後全景	43
23	7号方形周溝墓第2主体の粘土枕と棺材の加工痕	45
24	(上) 7・8号方形周溝墓の周溝土層断面	43
	(下) 7号方形周溝墓土器出土状態	45
25	(上) 7号方形周溝墓北溝土器出土状態	45
	(中) 同東溝土器出土状態	45
	(下) 同北隅鉄器出土状態	45
26	(上) 8号方形周溝墓北隅土器出土状態	47
	(下) 同北周溝の土器出土状態	47
27	9号方形周溝墓全景	49
28	(上) 9号方形周溝墓西南隅の土器出土状態	49
	(下) 同西周溝底の随葬墓	54
29	10号周溝周溝墓全景	54
30	(上) 10号方形周溝墓内部主体全景	54
	(下) 同開棺後全景	54
31	10号方形周溝墓内部主体の粘土枕	54
32	(上) 10号方形周溝墓第1主体鉄器出土状態	57
	(下) 同筒形銅器出土状態	57
33	10号方形周溝墓土器出土状態	57
34	(上) 11号方形周溝墓全景	59

図 版	34	(下) 同内部主体全景	60
	35	11号方形周溝墓内部主体開棺後全景	60
	36	11号方形周溝墓北周溝の土器出土状態	60
	37	11号方形周溝墓西周溝の土器出土状態	60
	38	11号方形周溝墓土器出土状態	60
	39	(上) 10・11号方形周溝墓周溝土層断面	73
		(下) 12号方形周溝墓北周溝底の随葬墓	73
	40	13号方形周溝墓全景	74
	41	(上) 13号方形周溝墓内部主体	75
		(下) 同南周溝土器出土状態	75
	42	(上) 14号方形周溝墓全景	77
		(下) 同内部主体全景	77
	43	(上) 1号墳全景	82
		(下) 2号墳全景	82
	44	2号墳内部主体全景	82
	45	2号墳内部主体石積みの状態	82
	46	(上) 2号墳周溝内土器出土状態	82
		(下) 3号墳全景	85
	47	(上) 1号石蓋土壙墓	87
		(下) 2号石蓋土壙墓と6号土壙墓	87
	48	(上) 3号石蓋土壙墓	88
		(下) 4号石蓋土壙墓	90
	49	(上) 5号石蓋土壙墓	93
		(下) 6号石蓋土壙墓	93
	50	(上) 2号土壙墓	92
		(下) 3号土壙墓	93
	51	(上) 4号土壙墓	96
		(下) 6号土壙墓	98
	52	6号土壙墓遺物出土状態	98
	53	(上) 14号土壙墓	101
		(中) 18号土壙墓	104
		(下) 22号土壙墓	107

図	版	54	(上) 23号土壙墓	107
			(中) 25号土壙墓	111
			(下) 27号土壙墓	111
	55	(上) 28号土壙墓	112	
		(下) 33号土壙墓	113	
	56	(上) 31号土壙墓	113	
		(中・下) 36号土壙墓	116	
	57	(上) 39号土壙墓	118	
		(中) 42号土壙墓	118	
		(下) 44号土壙墓	118	
	58	(上) 46号土壙墓	120	
		(下) 49号土壙墓	122	
	59	(上・下) 48号土壙墓	122	
	60	1・3号方形周溝墓出土土器	22・30	
	61	3・5・6号方形周溝墓出土土器	30・38・41	
	62	6～9号方形周溝墓出土土器	41・45・48・50	
	63	9・10号方形周溝墓出土土器	50・58	
	64	10・11号方形周溝墓出土土器	58・63	
	65	11号方形周溝墓出土土器	63	
	66	11・13号方形周溝墓出土土器と12号方形周溝墓の壺棺	63・73・75	
	67	16号方形周溝墓・2号墳出土土器	80・84	
	68	土壙墓出土土器	96	
	69	土壙墓出土土器	106	
	70	土壙墓出土土器	120	
	71	A地区出土陶磁器	120	
	72	A地区出土鉄器	22	
	73	A地区出土鉄器	27	
	74	(左) 10号方形周溝墓第1主体棺外副葬遺物	57	
		(右上) 11号方形周溝墓第1主体出土鏡	57・62	
		(右下) 5号土壙墓(1)M1(2)出土紡錘車	57・98	
	75	6号方形周溝墓内部主体棺材の盃状穴	42	
	76	(上) 立野遺跡D地区全景	127	

図 版	76	(下)	同西半部全景	128
	77	(上)	1号墳全景	132
		(下)	同周溝西部の土層断面	132
	78	(上)	2号墳全景	132
		(下)	同内部主体	133
	79	(上)	3号墳全景	134
		(下)	同内部主体	136
	80	(上)	4号墳全景	136
		(下)	同内部主体	136
	81	(上)	5号墳全景	138
		(下)	同内部主体	139
	82	(上)	6号墳全景	139
		(下)	同内部主体	139
	83	(上)	6号墳随葬墓	141
		(下)	1号土壙墓	142
	84	(上)	2号土壙墓	142
		(下)	3号土壙墓	144
	85	(上)	4号土壙墓	144
		(下)	5号土壙墓と5号土壙	144
	86	(上)	5号土壙墓	144
		(中)	7号土壙墓	147
		(下)	6号土壙墓	147
	87	(上)	7号土壙墓土器出土状態	147
		(中)	8号土壙墓	149
		(下)	9号土壙墓	149
	88	(上)	1号土壙	129
		(下)	2号土壙	129
	89		土壙墓出土土器	144・147・149
	90		土壙墓・1号墳周溝内出土土器とD地区出土鉄器	141・147

插图目次

本文対称頁

第1図	九州横断自動車道路線図	2
第2図	立野遺跡と関連遺跡分布図 (1/50,000)	折込み
第3図	1・2号土壙実測図 (1/30)	11
第4図	3・4号土壙実測図 (1/30)	12
第5図	5・6号土壙実測図 (1/30)	13
第6図	土壙7・8号実測図 (1/30)	14
第7図	9・10号土壙実測図 (1/30)	15
第8図	11・12号土壙実測図 (1/30)	16
第9図	13・14号土壙実測図 (1/30)	17
第10図	1号方形周溝墓実測図 (1/100)	20
第11図	1号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)	21
第12図	1号方形周溝墓土層図 (1/60)	22
第13図	1号方形周溝墓出土土器実測図① (1/4)	23
第14図	1号方形周溝墓出土土器実測図② (1/4)	24
第15図	2号方形周溝墓実測図 (1/100)	25
第16図	2号方形周溝墓内部主体実測図 (1/60)	26
第17図	3号方形周溝墓実測図 (1/100)	28
第18図	3号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)	29
第19図	3号方形周溝墓土層図 (1/60)	30
第20図	3号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	31
第21図	4号方形周溝墓実測図 (1/100)	33
第22図	4号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)	34
第23図	4号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)	36
第24図	4号方形周溝墓土器実測図② (1/4)	37
第25図	5号方形周溝墓実測図 (1/100)	38
第26図	6号方形周溝墓実測図 (1/100)	折込み
第27図	5号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	39
第28図	6号方形周溝墓内部主体実測図 (1/60)	折込み
第29図	6号方形周溝墓土層図 (1/60)	41
第30図	6号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	折込み

第31図	盃状穴実測図 (1/4)	42
第32図	7号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)	折込み
第33図	7号方形周溝墓土層図 (1/60)	43
第34図	7号方形周溝墓実測図 (1/100)	44
第35図	7号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	46
第36図	8号方形周溝墓実測図 (1/100)	47
第37図	8号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	48
第38図	9号方形周溝墓実測図 (1/100)	折込み
第39図	9号方形周溝墓土層図 (1/60)	49
第40図	9号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)	50
第41図	9号方形周溝墓出土土器実測図② (1/3)	51
第42図	9号方形周溝墓出土土器実測図③ (1/4)	52
第43図	9号方形周溝墓溝内随葬墓 (1/3)	53
第44図	10号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)	折込み
第45図	10号方形周溝墓実測図 (1/100)	55
第46図	10号方形周溝墓第1主体遺物出土状態実測図 (1/40)	56
第47図	10号方形周溝墓第1主体出土遺物実測図	57
第48図	10号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	58
第49図	11号方形周溝墓実測図 (1/100)	折込み
第50図	11号方形周溝墓土層図 (1/60)	59
第51図	11号方形周溝墓遺物出土状態実測図 (1/20)	60
第52図	11号方形周溝墓第1主体実測図 (1/30)	61
第53図	11号方形周溝墓第2主体実測図 (1/30)	62
第54図	重圈文鏡実測図 (実大)	63
第55図	11号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)	64
第56図	11号方形周溝墓出土土器実測図② (1/3)	66
第57図	11号方形周溝墓出土土器実測図③ (1/3)	67
第58図	11号方形周溝墓出土土器実測図④ (1/4)	68
第59図	11号方形周溝墓出土土器実測図⑤ (1/3)	69
第60図	12号方形周溝墓実測図 (1/100)	71
第61図	12号方形周溝墓壺棺実測図 (1/4)	72
第62図	12号方形周溝墓壺棺墓実測図 (1/20)	73
第63図	13号方形周溝墓実測図 (1/100)	74

第64図	13号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)	75
第65図	13号周溝墓土層図 (1/60)	75
第66図	13号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	折込み
第67図	14号方形周溝墓土層図 (1/60)	77
第68図	14号方形周溝墓実測図 (1/100)	78
第69図	14号周溝墓内部主体実測図 (1/30)	79
第70図	15号方形周溝墓実測図 (1/100)	80
第71図	16号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	81
第72図	2号墳実測図 (1/100)	折込み
第73図	1号墳内部主体実測図 (1/30)	83
第74図	2号墳出土土器実測図 (1/3)	84
第75図	2号墳随葬墓実測図 (1/30)	85
第76図	方形周溝墓・土壙墓・石蓋土壙墓出土鉄器実測図 (1/2)	86
第77図	1号石蓋土壙墓実測図 (1/30)	88
第78図	2・3号石蓋土壙墓実測図 (1/30)	89
第79図	4号石蓋土壙墓実測図 (1/30)	90
第80図	1・2号土壙墓実測図 (1/30)	91
第81図	3号土壙墓実測図 (1/30)	92
第82図	5号石蓋土壙墓実測図 (1/30)	93
第83図	6号石蓋土壙墓実測図 (1/30)	94
第84図	4・6号土壙墓実測図 (1/30)	95
第85図	土壙墓出土土器実測図① (1/3)	97
第86図	紡錘車実例図 (1/2)	98
第87図	7～9号土壙墓実測図 (1/30)	100
第88図	10～12号土壙墓実測図 (1/30)	102
第89図	13～16号土壙墓実測図 (1/30)	103
第90図	17～20号土壙墓実測図 (1/30)	105
第91図	21～24号土壙墓実測図 (1/30)	108
第92図	土壙墓出土土器実測図② (1/3)	101
第93図	25～28号土壙墓実測図 (1/30)	109
第94図	土壙墓出土鉄器実測図 (1/2)	112
第95図	29～33号土壙墓実測図 (1/30)	114
第96図	34～37号土壙墓実測図 (1/30)	115

第97図	38～40号土壙墓実測図 (1/30)	117
第98図	42～44・47号土壙墓実測図 (1/30)	119
第99図	48・49号土壙墓実測図 (1/30)	121
第100図	土壙墓, その他の遺構出土土器実測図③ (1/3)	125
第101図	1～3号土壙実測図 (1/30)	129
第102図	3号土壙出土土器実測図 (1/3)	130
第103図	4～7号土壙実測図 (1/30)	131
第104図	1号墳実測図 (1/150)	132
第105図	2号墳実測図 (1/100)	133
第106図	2号墳内部主体実測図 (1/30)	134
第107図	3号墳内部主体実測図 (1/30)	134
第108図	3号墳実測図 (1/100)	135
第109図	4号墳内部主体実測図 (1/30)	136
第110図	4号墳実測図 (1/100)	137
第111図	5号墳実測図 (1/120)	138
第112図	5号墳内部主体実測図 (1/30)	139
第113図	6号墳実測図 (1/100)	140
第114図	6号墳内部主体実測図	折込み
第115図	D地区出土鉄器実測図 (1/2)	141
第116図	13号土壙墓実測図 (1/30)	142
第117図	1～3号土壙墓実測図 (1/30)	143
第118図	4～6号土壙墓実測図 (1/30)	145
第119図	土壙墓および周溝出土土器実測図 (1/3)	146
第120図	7～9号土壙墓実測図 (1/30)	148
第121図	10～12号土壙墓実測図 (1/30)	150
第122図	方形周溝墓・円墳の面積	158
第123図	神蔵古墳・池ノ上墓墳群出土土器	164
第124図	大願寺遺跡出土土器	165
第125図	上々浦遺跡出土土器	166
第126図	立野・宮原遺跡の集落と墓地の関係想定	172

表 目 次

第1表	九州横断道路関係遺跡一覧表	折込み
第2表	昭和58年度調査工程表	3
第3表	第11地点発掘調査工程表	3
第4表	土壙計測表	151
第5表	方形周溝墓計測表	152
第6表	円墳計測表	153
第7表	土壙墓計測表	153~154

付 図 目 次

付図1	立野・宮原遺跡周辺地形図及び立野遺跡遺構配置図	7
付図2	立野遺跡A地区遺構配置図	8
付図3	立野遺跡D地区遺構配置図	127
付図4	1号方形周溝墓供献土器配置図	19
付図5	3号方形周溝墓供献土器配置図	29
付図6	9号方形周溝墓供献土器配置図	49
付図7	11号方形周溝墓供献土器配置図	60

I はじめに

58年度で横断道関係の調査は5年目に入った。各工区とも工事が発注され、調査と工事が合い接して行なわれる状況となった。58年度の調査は立野・^{たての}宮原遺跡(第11地点)、長島遺跡(第27地点)、^{かきばる}柿原古墳群(第57地点)とも昨年度からの経続事業として4月当初から開始した。

調査は3班体制で、ほぼ1年を通じて従事し、前記の3地点の他に5地点と16ヶ所について試掘を行なった。なお、小郡市街地については、建物移転後に試掘を行なう予定である。

甘木市立野・宮原遺跡は3年目の調査に突入した。古墳・方形周溝墓を検出した立野A地区の他、6～8世紀代の竪穴住居跡・建物跡が密集する立野C地区、宮原A・D地区を調査したが、宮原D地区の一部を次年度に若干繰り越した。甘木市柿原古墳群はI地区の調査を12月に完了し、3月よりF地区に入った。I地区では横穴式石室、石棺系竪穴式石室80余基が台地上のみでなく、谷部に多く検出された。また、遺物としては陶質土器の出土も見ている。下層では縄文早期の土器の他、晩期の住居跡4軒が検出されている。なお、道路公団の工事進捗に伴い、G・H地区の本格的土取工事が8月より開始され、まさに戦場の様相を呈して来ている。

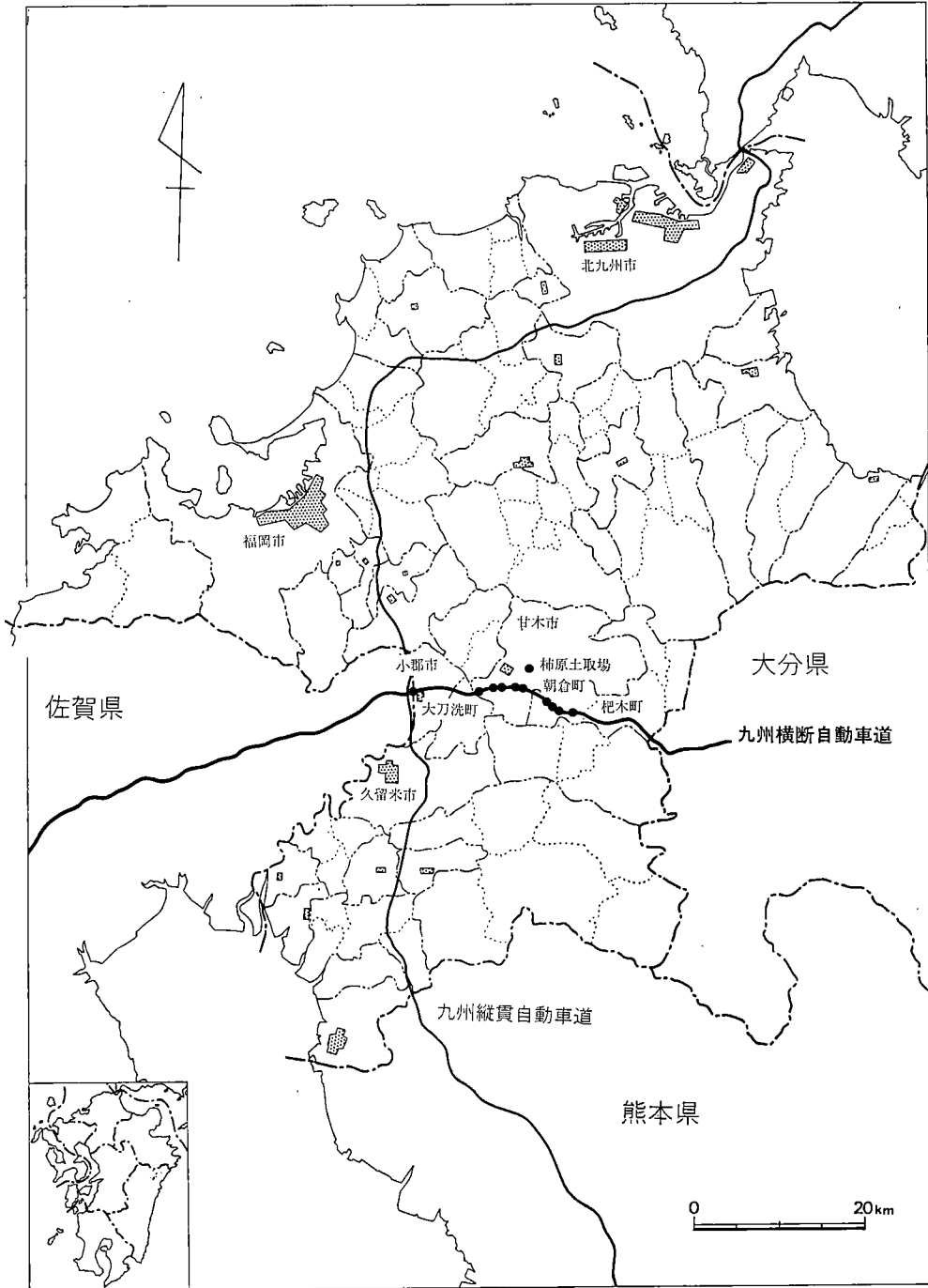
朝倉町長島遺跡は、工事用道路用の土取場として、C地区の調査を行なった。その結果、奈良～平安時代の竪穴住居跡55軒の他、建物跡、土墳墓や縄文時代早期・後期・晩期の包含層を確認した。工事用道路に関連しては、中妙見遺跡(第28地点)及び^{はる}原の東遺跡(第29地点)の一部を調査した。原の東遺跡では弥生時代中期の甕棺墓群26基が検出され、地域的に甕棺が少ない所だけに注目される。

高原遺跡(第16地点)は、甘木市金川地区の圃場整備事業との係わりで、水路が調査地点を縦断するために生じたものであり、急拠10月から対応せざるを得ない状態になった。小郡市正尻遺跡(第1地点)は小郡市内で最初の調査地点となり、弥生時代中期前半の貯蔵穴群が良好な状況で検出された。大刀洗町山隈の宮巡遺跡では道路状の遺構を検出した。

6月～9月中旬にかけて、遺跡の性格を把握するために試掘調査を行なった。その結果、小郡インターチェンジ予定地のほか、大刀洗町甲条の第10地点、甘木市牛鶴の第18地点については遺構の存在が認められず、調査を完了した。

整理作業は甘木事務所と大宰府市の九州歴史資料館で行なった。事業の進行に伴う作業量の増加のため、甘木事務所に4名増員し対応に務めた。調査報告書は、西原C遺跡(3集)と柿原古墳群(4集)の2冊を刊行した。しかし、今後調査量の増加に伴ない、整理期間が十分確保できるか危惧せざるを得ない状況になりつつある。

なお、小郡市・大刀洗町の調査開始にあたっては、両教育委員会にお世話になった。記して感謝の意を表します。調査関係者は第4集による。(木下)



第1図 九州横断自動車道路線図

第 1 表 九州横断道路関係遺跡一覧表

地点	遺 跡 名	所 在 地	内 容	面 積	調 査 地 区 と 面 積						備 考	報 告 書
					54年度	55	56	57	58	59		
1	小郡正尻遺跡	小郡市小郡	弥生集落・歴史溝	11,200					5,000		完了	
2		〃	弥生・古墳散布地	10,400								
3		〃 大板井	弥・古, 小郡官衙隣接	910								
4		〃	大板井城跡	9,200								
5		〃 井上	散布地	3,600								
6		〃 薬師町	弥生・古墳散布地(首切塚)	32,000					500			
7		〃 今隈	弥生散布地	7,200					200			
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	中世散布地	4,000					3,600		完了	
9	春園遺跡	〃 〃	弥生・古墳・甕棺	10,800					100			
10		〃 甲条本郷	〃	34,400			700		300		遺構なし, 完了	
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	弥生末～平安集落, 方形周溝墓・円墳・土壙墓等	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000	完了	2・5集
12	小石原川西条里	〃 上浦	中世	48,000			810				完了	
13	〃 東条里	〃 上浦馬田	〃	56,000	200						完了	1集
14	上々浦遺跡	〃 上浦	弥生・古墳集落	18,400	200						完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃 一ツ木・屋永	弥生・古墳集落	54,800	A, B地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400				1・2・3集
16	高原遺跡	〃 屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400			
17		〃 牛鶴	墳墓	100								
18		〃 〃	散布地	2,550					300		遺構なし, 完了	
19	中島田遺跡	甘木市大字中島田 朝倉町石成	古墳集落	70,000					700			
20		朝倉町大庭	散布地	8,400					300			
21		〃 大庭(乙王丸)	弥生・古墳集落	34,800				800	600			
22	狐塚南遺跡	〃 入地	古墳集落	10,400					300			
23		〃 鳥集院	散布地	2,600								
24		〃 〃	中世散布地・歳田廃寺	2,490								
25		〃 〃	〃 〃	2,400								
26		〃 須川	散布地	1,600				70			遺構なし, 完了	
27	長島遺跡	〃 〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落跡	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			
28	中妙見遺跡	〃 〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458		完了	
29	原の東遺跡	〃 菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600			
30		〃 〃	箱式石棺	4,000								
31		〃 〃	〃	2,000								
32		〃 〃	〃	2,400				300			遺構なし, 完了	
33		〃 山田	古墳	2,000								
34		〃 〃	散布地	3,600								
35		〃 〃	弥生・散布地	2,600								
36		〃 〃	古墳散布地	2,000								
37		〃 〃	〃	2,400								
38		〃 〃	弥生・中世・箱式石棺	125								
39		杷木町大字志波	弥生・古墳・中世散布地	22,000								
40		〃 〃	中世・散布地	2,500								
41		〃 〃	〃 〃	18,000								
42		〃 〃	〃 ・一字一石経	8,000								
43		〃 久喜宮	古墳群	12,000								
44		〃 〃	古墳4～5基	1,800								
45		〃 〃	散布地	2,400								
46		〃 〃	〃	1,800								
47		〃 林田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								
48		〃 〃	散布地	1,800								
49		〃 〃	〃	3,200								
50		〃 〃	〃	2,400								
51		〃 〃	〃	5,200								
52		〃 〃	〃	2,000								
53		〃 〃	〃	3,500								
54		〃 〃	〃	1,800								
55		〃 〃	古墳	1,600								
56		〃 〃	散布地	2,400								
57	柿原古墳群	甘木市大字柿原	古墳群, 縄文集落	200,000		測 量 14,700	900	8,300	15,000		土取場	4集
58		朝倉郡大字山田	〃	40,000	測 量 4,435				2,500		土取場	
計				870,575	8,685	22,300	20,470	29,570	48,498			

I はじめに

第2表 昭和58年度調査工程表

遺跡名(地点)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
立野・宮原(11)	→ 立野 A					立野 C		→		宮原 D		→
柿原 (57)	→ 5				柿原 I				→			柿原 F →
長島 (27)					長島 C		→ 18					
中妙見 (28)		26	8									
原の東 (29)						1	→ 26					
高原 (16)							6	→ 17				
正尻 (1)							31				28	→
宮巡 (8)											20	→ 31
試掘			24			19						

第3表 第11地点調査工程表

56年度

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	担当者・報告書
立野遺跡	A												
	B								完了				石山
	C												石山・児玉・佐々木
	D								完了				石山・新原・児玉
	E								完了				石山・新原
宮原遺跡	A												石山・児玉・新原・馬田・佐々木・池辺
	B												石山・新原・児玉
	C												石山・池辺
	D												石山

57年度

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
立野遺跡	A												児玉・佐々木
	B												報告書作成 第2集
	C												報告書作成 第2集
	D												報告書作成 第2集
	E												報告書作成 第2集
宮原遺跡	A												石山・浜田・児玉・新原・中間・佐々木・池辺
	B		完了										
	C												完了 石山・池辺・児玉
	D												完了 石山・児玉・小池・池辺

58年度

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	
立野遺跡	A		完了											報告書作成 児玉・伊崎 第5集
	B													
	C													完了 児玉・伊崎
	D													報告書作成 第5集
	E													
宮原遺跡	A													完了 児玉・伊崎
	B													
	C													
	D													完了 児玉・伊崎

Ⅱ 位置と環境

たての立野遺跡は福岡県甘木市大字下浦字立野に所在し、集落遺構と埋葬遺構とからなり、東接するみやばる宮原遺跡とともに集落遺構が主体を占める。両者を合わせると400軒以上の竪穴住居跡、200棟以上の掘立柱建物や多数の土壙を検出している。その時期幅は6世紀末～8世紀代の間に納まるものが大部分で、弥生時代や5世紀代、あるいは平安・鎌倉時代のものが一部存在する。

この遺跡の営まれた台地は、東西・南北とも約5キロメートル程の不整形なもので、小さな谷が無数にあり西は宝満山に源を発する宝満川が、東は古処山・馬見山等に源を発する小石原川が、その東には佐田川がおのおの南流して筑後川に注いでいる。立野遺跡は小石原川に面する台地東南縁辺部に営まれ、東・南側は現在、一面の田・畑となっている。遺跡の営まれた周辺は、表土下にチョコレート色の微粒子土があり、この面で遺構プランが視認され、その下位には順に黄色粘質土・黄灰色粘土・砂利層となっている。砂利層の起伏ははげしく、表土下30cmで砂利の見える部分もある。

今回報告する立野遺跡A・D地区は方形周溝墓・円墳が主体をなし、同時期のいくつかの石蓋土壙墓や木蓋土壙墓の他に7・8世紀代の土壙墓が存在する。周溝墓の埋葬施設や単独で存在する石蓋土壙墓の棺材には、通称“柿原石”^{かきばるいし}が使用され、現在、発掘調査中の柿原古墳群（註1、第2図-11）周辺に存在することが確認されている（註2）。“柿原石”は小石原川より西側にその存在は知られていないようで、立野遺跡から小石原川を狭んで東北東約10kmの位置の柿原古墳群周辺から棺材を搬入した可能性が強い。

ところで、甘木・朝倉地方では最近、周溝墓（方形・円形）の類例が増加しつつあり、小郡市内の関連遺跡を含めてその内容を素描し、歴史的環境を概観しておこう。

筑後平野北縁部の両筑平野で、周溝墓の報告例として、小郡市津古3号墳（註3）・横隈山遺跡（註4）朝倉郡松尾遺跡（註5）・八並遺跡（註6）・池ノ上墳墓群（註7）・古寺墳墓群（註8）・大願寺遺跡（註9）などがある。

津古3号墳は西鉄大牟田線津古駅南西の低丘陵上に構築され、他に2基の前方後円墳が接近して構築されている。3号墳の台状部は一辺13m程で、周溝を含めると東西17.5m、南北19.5mで、1m弱程の封土が遺存していた。封土の遺存はほんの一部で、内部体はすでに消滅していた。4世紀後半に比定される前方後円墳の2号墳前方部が本墳を一部切っており、また周溝内供献土器より、3号墳が2号墳に先行することは明らかである。1号墳は小郡市の有志で墳丘測量されたがその実体はまだ不明で、2・3号墳との先後関係は不明であるが、1号墳は2・3号墳西側の低い部分に離れて構築されており、立地の面からあるいは二者に後続する可能性がある。いずれにせよ、盛り土を持った方形墳（方墳と報告されているが）の系列が前方後

II 位置と環境

円墳に直続する重要な遺跡である。

横隈山遺跡は津古古墳群南南西1.5kmの丘陵上に位置する。遺跡の中心時期は弥生時代前期末から中期にかけての集落遺構だが、第7地点の環濠外側の東面した斜面に3基の方形周溝墓が検出されている。その実体は不明な部分が多いが、北方約700mの位置に前方後円墳が存在する。実体不明で周溝墓との関係は津古古墳群程には明確ではない。

朝倉郡夜須町松尾古墳群は、前方後方墳として著名な焼ノ峠古墳北方約300mに位置する。両者は同一丘陵上にあり、松尾古墳群は谷状の小平野に面した丘陵縁辺部に、焼ノ峠古墳はやや奥まった高所に南面して構築されている。松尾1号墳は台状部の一辺が10m前後、周溝幅2～2.5m、深さ0.6m程の方形周溝墓で、南隅から少し北側に陸橋部が存在する。陸橋部のすぐ西の溝底に随葬墓として石蓋土壙墓が営まれる。2号墳は箱式石棺2基を内部主体とする円形周溝墓で周溝を含めて直径は18～19mである。西北西側の周溝底に組合式木棺墓が営まれ、周溝底付近から土師器が出土している。焼ノ峠古墳は主軸長40m程の前方後方墳で周溝内から二重口縁壺・広口壺・小形丸底埴が出土している。前方後方墳と周溝墓の関係の知れる重要な遺跡である。

焼ノ峠古墳や松尾古墳群の北西約2.5kmの低位丘陵上に方形周溝墓5基以上の存在が知られる塚本・沼尻方形周溝墓がある。正式調査がなされないままに消滅し、その実体は不明である(註10)。

焼ノ峠古墳の北北東約4kmの丘陵上で2基の周溝墓と箱式石棺墓・石蓋土壙墓・甕棺墓など多数が調査された。周溝墓は方形周溝墓(1号)と方形気味の平面プランを呈する円形周溝墓(2号)である。1号周溝墓は報文にある「中央土壙」が内部主体であるのか否か不明な点を残す。東側周溝中より壺・甕各2個体ずつ出土している。2号周溝墓は径19.5～18.5mで、内部主体は柿原石を使った箱式石棺である。東側周溝底から台坏碗・碗・高坏各1個体ずつが出土している。2基の周溝墓周辺や周溝を切って7基の箱式石棺墓や石蓋土壙墓が存在し、そのうちの一部は随葬墓的な性格をもつものと推定される。

甘木市平塚大願寺遺跡は、大平山から南に派生した低位段丘の西縁に位置し、約1.2km南の同丘陵南縁には神蔵古墳(註11)が存在する。大願寺遺跡の方形周溝墓は周溝を含めて一辺が18.6m、周溝幅2.5m、深さ1.3mの規模で、内部主体は長さ約5m、幅約1mの粘土槨(木棺墓)である。主体部は完全に盗掘されていたが、柳田康雄氏によれば『小図小言』集に「平塚大願寺塚」出土と墨書された鏡があり、その鏡は径22.7cmで「張氏作鏡真巧、仙人喬赤松氏、師子辟邪世」と銘文を復原でき、現状では三角縁三神五獣鏡にだけこの銘文があるそうである(註12—903頁)。また、周溝内から、二重口縁壺・広口壺・小形壺・甕等の土師器が出土している。先述の神蔵古墳は主軸長40m程の前方後円墳で前方部の長さは8mと短い。内部主体は竪穴式石室で盗掘されていたが、副葬品として三角縁神獸鏡1面・鉄剣2振り・鉄斧・鉄製鋤

II 位置と環境

先各1点が出土している。

池ノ上・古寺墳墓群は大願寺遺跡北方約3kmの大平山から派生した丘陵に位置する。4世紀中頃から9世紀にわたる墓地である。陶質土器が多量に供献・副葬品として出土し、また、共伴土師器から初期須恵器とともにその年代を推定し得た貴重な遺跡である。両墳墓群の調査範囲は東南から北西に走る尾根筋約415mに及び、南側の池の上1・2・3号墳側から北に向っておおむね順次構築されていっただろうと推定されている。周溝を有さない単独の埋葬施設群もおおよそ上述のように考えられている。この墳墓群で特徴的なことは、陶質土器を供献・副葬する例が異常に多いことと、副葬品を持つ埋葬施設が多い点に求められ、全体で7割を超える埋葬施設が何らかの供献品か副葬品を持っている。また、これら被葬者集団の中から、すぐ西に存在する鬼の枕前方後円墳に系譜的につながる首長の成長が予測されている。

遺跡分布図の範囲に含まれないが、宝満川上流右岸の丘陵上に峠山古墳群(註13)があり、4基が調査されている。1号が方形周溝墓で他は円形周溝墓・円墳で、1号→2号→4号→3号の順に築造されている。問題とするのは1号墓で1辺12~12.6mの台状部周囲に幅1.8mの溝が巡り、北溝中央で途切れて幅広の陸橋部を形成する。1.5m程の盛土が存在したが、内部主体は不明である。溝底に随葬墓として木蓋土壙墓が存在し、東隅で周溝が埋まった後に甕棺墓が営まれ、棺外に三角縁鏡片・鉄鏃・ガラス玉各1個が検出された。また、構内から、二重口緑壺・広口壺・埴・坏等が出土している。

以上のように、筑後川北岸の両筑平野においてはかなりの周溝墓の存在が知られ、中には前方後円墳との関係を推測し得る資料も報告されている。また、周溝に供献土器が存在することは共通する要素として認められるが在地の土器はごく稀で、外来系土器を中心としたものである。(児玉)

- 註 1 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—4— 1984
2 新原正典「位置と環境」同上
3 波多野亮三「津古遺跡群」(『筑紫史論』第三輯)1975
4 小郡市教育委員会『横隈山遺跡』1974
5 夜須町教育委員会『城山遺跡群』1972
6 酒井仁夫「八並遺跡検出周墓溝墓について」1976 九州考古学 52
7 甘木市教育委員会『池ノ上墳墓群』1979
8 甘木市教育委員会『古寺墓墳群』1982
甘木市教育委員会『古寺墓墳群II』1983
9 柳田康雄「第二編・原始」(『甘木市史』上巻)1982
10 柳田康雄氏の御教示による。
11 甘木市教育委員会『神蔵古墳』1978
12 9に同
13 1973年福岡県文化課調査。小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相」(『古文化談叢』第4集1978)に故前川威洋氏作成の遺跡全体図および各遺構の一覧表が掲載されている。



- ① 立野遺跡(第11地点)
 - ② 小郡正尻遺跡(第1地点)
 - ③ 宮巡遺跡(第8地点)
 - ④ 宮園遺跡(第9地点)
 - ⑤ 宮原遺跡(第11地点)
 - ⑥ 上上浦遺跡(第14地点)
 - ⑦ 下原遺跡(第15地点)
 - ⑧ 西原遺跡(第15地点)
 - ⑨ 高原遺跡(第16地点)
 - ⑩ 中島田遺跡(第19地点)
 - ⑪ 柿原古墳群(第57地点)
 - 12 津古古墳群
 - 13 塚本・沼尻方形周溝墓群
 - 14 三国のハナ古墳
 - 15 横限山古墳
 - 16 横限山遺跡
 - 17 小郡郡衙跡
 - 18 向築地遺跡
 - 19 大板井遺跡
 - 20 井上廃寺跡
 - 21 千濁遺跡
 - 22 焼峠古墳
 - 23 松尾古墳群
 - 24 小隈窯跡
 - 25 八並遺跡
 - 26 八並窯跡
 - 27 栗田遺跡
 - 28 仙道古墳
 - 29 持丸古墳群
 - 30 鬼の枕古墳
 - 31 古寺墳墓群
 - 32 池ノ上墳墓群
 - 33 柿原野田遺跡
 - 34 石成古墳
 - 35 小田茶臼塚古墳
 - 36 小隈室満遺跡
 - 37 神蔵古墳
 - 38 小田集落遺跡
 - 39 小田遺跡
 - 40 栗山遺跡
 - 41 大願寺遺跡
 - 42 上川原遺跡
- 印は横断面関係の遺跡

第2図 立野遺跡と関連遺跡分布図(1/50,000) 第28図 6号

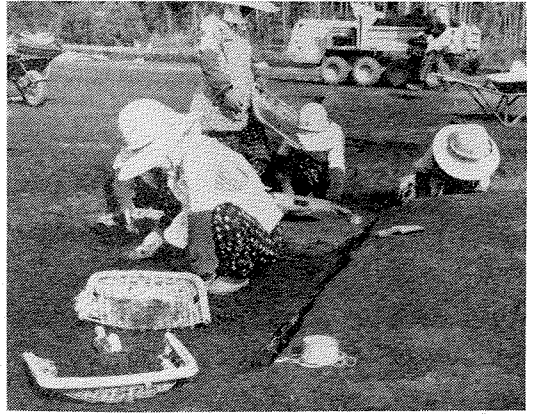
Ⅲ 立野遺跡 A地区の調査

1 調査の経過 (図版3～5, 付図1・2)

当地区は昭和56年度に西半部を試掘調査し、1号方形周溝墓の主体部、3号石蓋土壙墓、1号墳の主体部の計3ヶ所の遺構の存在を確認していた。この間、B地区およびC地区の側道部分の調査を実施中であった。56年度末頃に側道工事を東から(宮原遺跡B・C地区一付図1参照)行うとの公団の意向が伝えられ、立野遺跡B・C地区の調査終了とともに、急拠、宮原B・C地区へ移動し、調査を開始した。同地区の調査終了間際になって、側道工事は西(立野遺跡A地区東半部北辺)から行うという変更の通知があった。しかし、当教育委員会は、当初の東側からという設定で調査計画を作り、ユンボによる表土剥ぎを続行中でもあり、素直に公団側の要望を受け入れ兼ねた。よって計画通り、東側から宮原遺跡A・D地区の北側道部分の調査を続行し、側道西側の立野A区北東端部は、現状では墓地でもあり、公団にわたしてしまった。

よって9号周溝墓の北側の周溝は舗装された側道の下に埋まってしまい、調査できなかった。

本地区の第1次調査は昭和57年10月1日に開始し、構造物建設に伴って破壊される1～4号周溝墓を含めた以西を調査対象地とした。周溝墓は整然と配置されており、2号周溝墓を除いて、周溝から土器が多量に出土し、特に3号周溝墓からは鼓形器台が出土した。出土土器には、在地の土器は殆どなく、中国・近畿系の土器が主体を占める。他に土壙3基、石蓋土壙墓2基、土壙墓4基を調査した。11月27日に調査を終了し、立野遺跡B・D・E地区の集落遺構の報告書(第2集)を作成した後、58年1月10日から第2次調査にはいった。調査は東側の14



調査風景

Ⅲ 野立遺跡A地区の調査

・15号周溝墓から西に向かって行い、途中、航空写真撮影後、6月5日にすべての調査を終了した。2度にわたる調査で検出した遺構は、方形周溝墓16基、円墳3基、石蓋土墳墓6基、土墳墓53基、土墳14基である。

なお、第1次調査は児玉が、第2次調査は児玉・伊崎が担当し、第2次調査では木下修・佐々木隆彦の来援を受け、調査補助員武田光正・日高正幸、および、池田和博・高山浩一・吉橋秀美には実測図作成に際して多大な助力を得た。(児玉)

2 遺構の配列 (図版3～5・6, 付図2)

本調査区は大別して三時期の遺構が存在する。各時期の遺構はおのこの調査区全面にわたって存在し、各時期ことの遺構の偏在性は認められない。

まず、方形周溝墓が構築される以前に土墳(P1～P14)が営まれ、P1・P4・P10・P12が方形周溝墓に切られている。各土墳の配列や形状、埋土に共通性が認められ、前記4基と同様に他の10基の土墳も方形周溝墓に先行すると考えられる。しかし、出土遺物が皆無であり、所属時期を明確にすることはできないが、弥生時代中期初頭頃を不限とし、縄文時代に含まれる可能性を残している(註1)。その性格については後述されるが、これらは複数でグループをなしている。P1～P5は5～8m間隔でほぼ東西に一直線に並ぶ。P6～P8, P9～P11, P12～P14はおのこの3基二組で、約5mの間隔でゆるやかな弧を描きながらほぼ南北に並ぶ。この種の遺構は数基でグループを形成することに意味があるようである。

上記の土墳が埋没してかなり経った頃、方形周溝墓が構築され始める。東・西に二つの支群にわかれ、東支群は7基(9～15号)、西支群は9基(1～8・16号)が調査区の中に存在し、内部主体は箱式石棺である。両支群の間には幅約60mの空間がある。旧地形はこの空間部分が浅い谷状になっており、東・西両支群の方形周溝墓が構築された部分は微高地状を呈している。

東支群ではこの微高地状の部分の等高線がほぼ南北に走り、方形周溝墓の向きは等向線の方に合致している。戦前に掘削した溜池のため、東支群の東半部の等高線は南北に密に走る。東支群の方形周溝墓は15号を除いて必ず隣接する周溝墓どうしで溝の切り合いがあり、西支群のように各周溝墓間に墓道状の掘り残しは存在しない。周溝の各辺は東西・南北方向に掘られ方形周溝墓は整然と並ぶ。各周溝墓の構築順序については後述するが、東支群の方形周溝墓の並びは南北方向よりも、東西方向を意識しているようである。それは内部主体の検出されない9・12・15号を除いて主体部の主軸方位が、東西方向を示すものが多く、南北方向は13号だけであること、東西方向に並ぶ10・14号周溝墓に後続して11号周溝墓が構築され、しかも11・14号周溝墓の南辺がほぼ一直線に並ぶ事などから了解されよう。また、随葬墓をもつ方形周溝

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

墓があり、9号は西溝南端部と東溝中央部の溝底に木蓋土壙墓が、11号周溝墓陸橋部北西に5号石蓋土壙墓が、14号周溝墓北側に6号石蓋土壙墓が存在する。石蓋土壙墓については、上記の各周溝墓に伴うものか、他の周溝墓に伴うものか必ずしも明瞭ではないが、それについては後述する。

西支群では東支群ほどには明確な等高線の走り方を認知できない。この部分の攪乱が部分的にはあるがかなり広範囲にわたっていることを考慮すれば、方形周溝墓の向きは本来的にはほぼ等高線に沿ったものであったろうと推測する。方形周溝墓は東支群と同様に整然と配置され、周溝どうしの切り合い関係は東支群ほどではない。方形周溝墓の配列は、東支群では東西方向が意識されていただろうと推測したが、西支群では北西—南東（北—南）方向に整然と配置され、とりわけ、5～8号周溝墓とその西側の3・4号周溝墓との間には幅1m前後の細長い空間があり、“通路”のように見受けられ、“墓道”の存在を示唆している。このように、南北方向を意識しているだろうということは、1号を除いて埋葬施設の主軸方位が南北にはほぼ合致すること、南北方向に並ぶ2・4号周溝墓が構築された後、3号周溝墓が両者を切ってその間に構築されたことから伺い知れよう。このように南北方向を意識しながらも常に西側の周溝墓との関係をも考慮に入れており、3・5号周溝墓の南東溝、4・7号周溝墓の北西・南東溝はおのおのほぼ一直線に並ぶように配置されている。また、随葬墓を伴うものがあり、2号周溝墓に2号石蓋土壙墓が、3号周溝墓に1号土壙墓が、6号周溝墓に2号土壙墓と3号石蓋土壙墓が付随する。また、1号石蓋土壙墓は、4号か16号周溝墓に伴うと推定する。東・西両支群とも周溝への供献土器や溝の切り合いから判断して、極めて短期間のうちに16基の方形周溝墓が構築されたようである。

方形周溝墓の構築が終わって、西支群のすぐ東側に3基の円墳（1～3号）が構築される。円墳群は東支群から30m以上離れ、西支群の方形周溝墓群に接近していることから、西支群の集団に系譜的に連なると推測する。1・3号墳はすでに内部主体が削平されており、部分的に周溝が浅く残るだけである。2号墳は竪穴式石室を内部主体とし、随葬墓として4号石蓋土壙墓と3号土壙墓を伴う。

方形周溝墓や円墳の構築された時期から200年程経て土壙墓が営まれはじめる。東半部では46号土壙墓が、西半部では5号土壙墓がまず営まれ、7世紀前半～8世紀にわたって53基の土壙墓が存在する。これらは谷をはさんで大きく東・西の2群にわかれ、東側微高地に29号～49号が、西側微高地に4号～28号が営まれている。両群内でおのおの東に分布のまとまりを示すが、長期にわたって営まれたためか、主軸方位に画一性もなく、かなり散漫な在り方を示す。また、方形周溝墓の台状部や周溝内にも存在し、この時期には周溝墓の盛り土がほぼ流出し、周溝を覆いつくしていただろう。しかし、円墳にはそのような状況はなく、特に3号墳周辺の土壙墓群は決して墳丘や周溝内にはいつて営まれることなく墳丘西半部に周溝に沿って弧を

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

描いて分布する。この時期に3号墳は完在していたであろうことを示し、1・2号墳においても同様であったらう。

この立野遺跡A地区とした部分は4世紀から8世紀の間のうちほぼ5・6世紀を空白期とし、墓地として使われた。竪穴住居や掘立柱建物など集落遺構が全く存在しない。4世紀以降、土地の使い方の面で一定の規制の存在を推測させる遺跡である。(児玉)

3 土 墳

1号土墳(P1, 第3図) 1号周溝墓の南側周溝中央部に位置し一部分は削平されている。上端の平面形態は隅円長方形を呈しており、壁面は略垂直に掘られている。上端より84cmの深さで水平な床面が形成され、床面長軸上やや西寄りに小穴を検出した。小穴内に柱痕、杭痕は検出されていない。埋土は2号土墳と同様で大半は黒色土であり、人為的に埋められてはいないと考えられる。遺物は出土していないが、周溝墓との切り合い関係より周溝墓よりは古い時期の遺構である。規模はやや小型である。

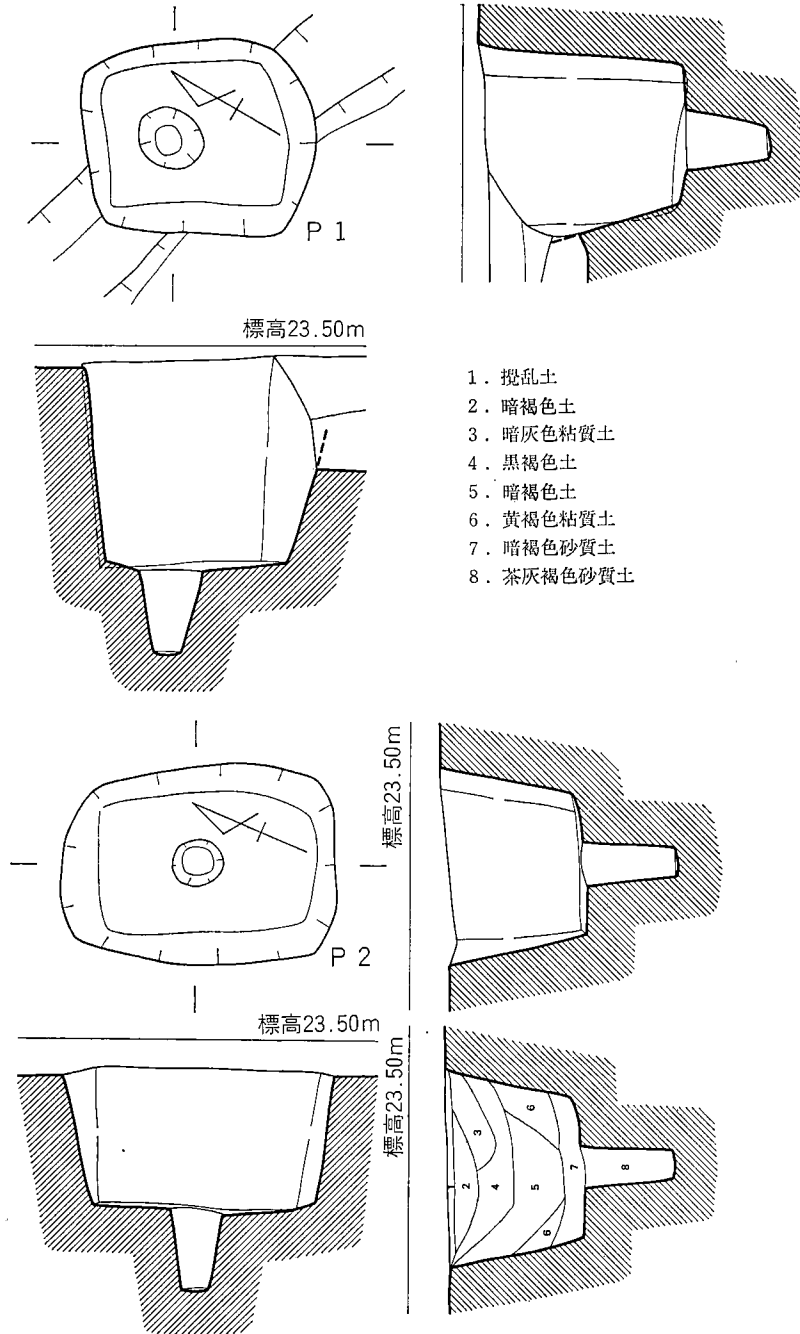
2号土墳(P2, 図版6, 第3図) P-1より東北東11mの地点で検出した上端の平面形態が隅円長方形の土墳である。壁面は略垂直に掘られ、上端より56cmで水平に近い床がつくられている。床面中央に小穴を検出したが土層図でも分るように小穴内は掘削された直後に埋められたと考えられる。P-1と同様に(他の小穴を有する土墳も同様ではあるが)柱及び杭痕は検出していないがこの問題は後述することにした。遺物は全く出土していない。規模はやや小型である。

3号土墳(P3, 図版6, 第4図) 4号周溝墓内でP-2より東北東8.5mの地点で検出した。上端の平面形態は南辺が崩れ落ちているが隅円長方形を呈し、壁面は略垂直に掘られている。隅円長方形で水平な床の中央に小穴を検出したが堆積状況はP-2と同様であった。遺物は全く出土していないが、4号周溝墓より古い時期の遺構である。長軸方位は1~3号土墳とも略同じ方位である。規模はやや小型である。

4号土墳(P4, 第4図) 7号周溝墓の南辺周溝内底面、P-3より東北東10mの地点で検出した。過半は周溝で削平されて旧態をとどめてはいないが、上端の平面形態・壁面は前出の3基と同様であったと考えられる。床面の平面形態は不整形を呈しているが一部は後世のピットで壊されており、上端同様隅円長方形であったと考えられる。埋土は黒色土であった。床面はやや丸味を持ち、長軸上西寄りに小穴を検出した。出土遺物は全く無いが、周溝墓との切り合い関係より7号周溝墓より古い時期の遺構である。

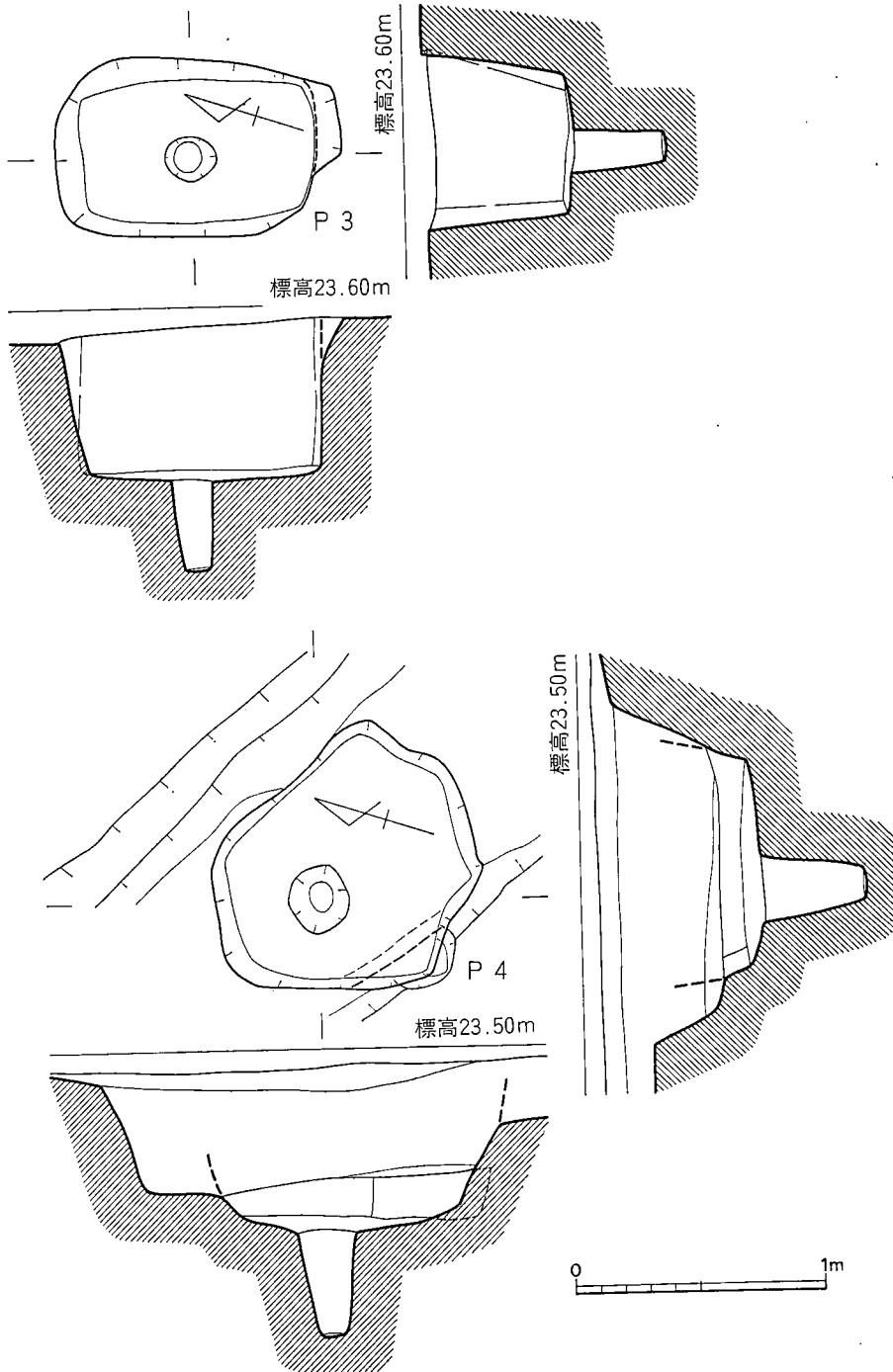
5号土墳(P5, 第5図) 8号周溝墓内でP-4より東北東に12mの地点で検出した。一部分は調査区外であるが上端の平面形態は円形になると推定される。壁面は急傾斜をなし、上端

III 立野遺跡A地区の調査



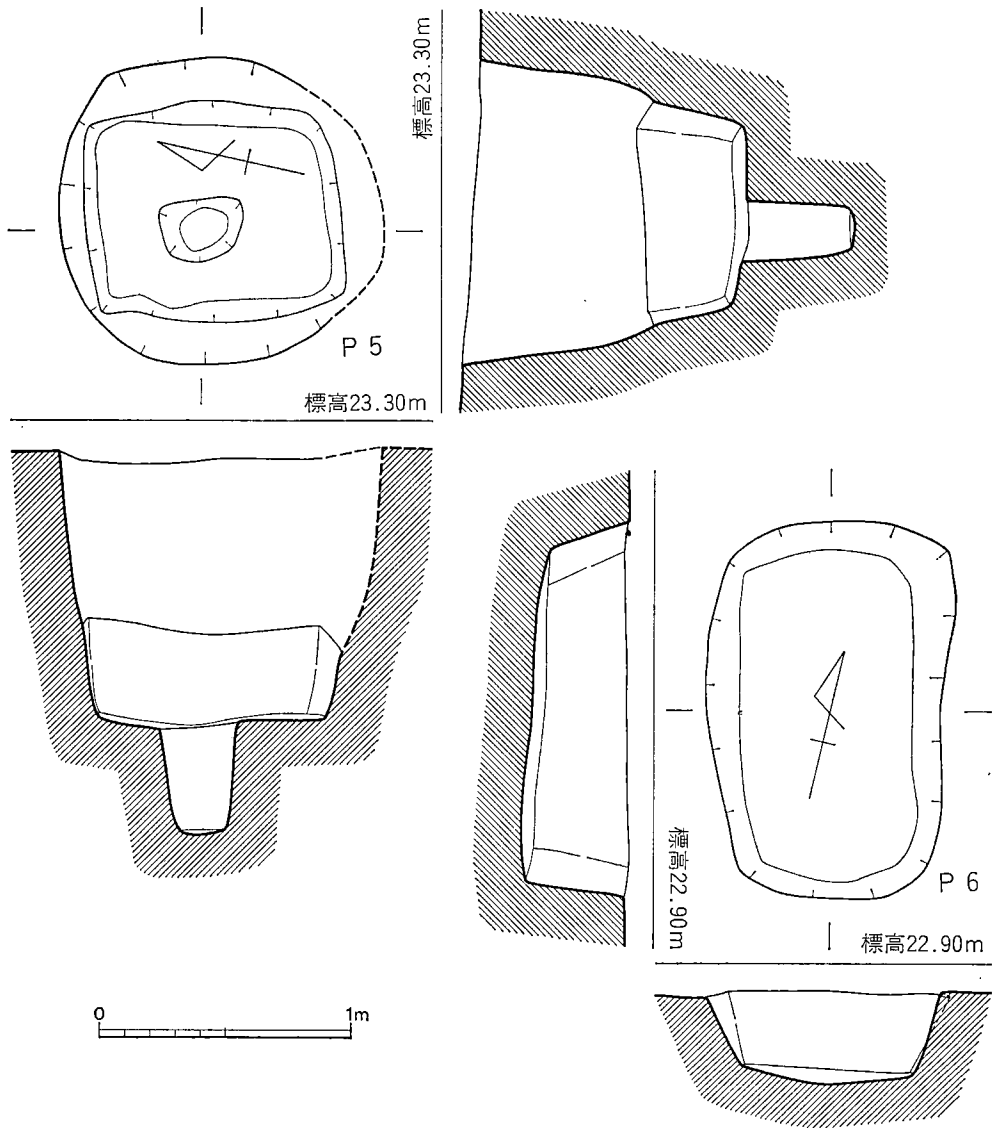
第3図 1・2号土坑実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査



第4図 3・4号土坑実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査

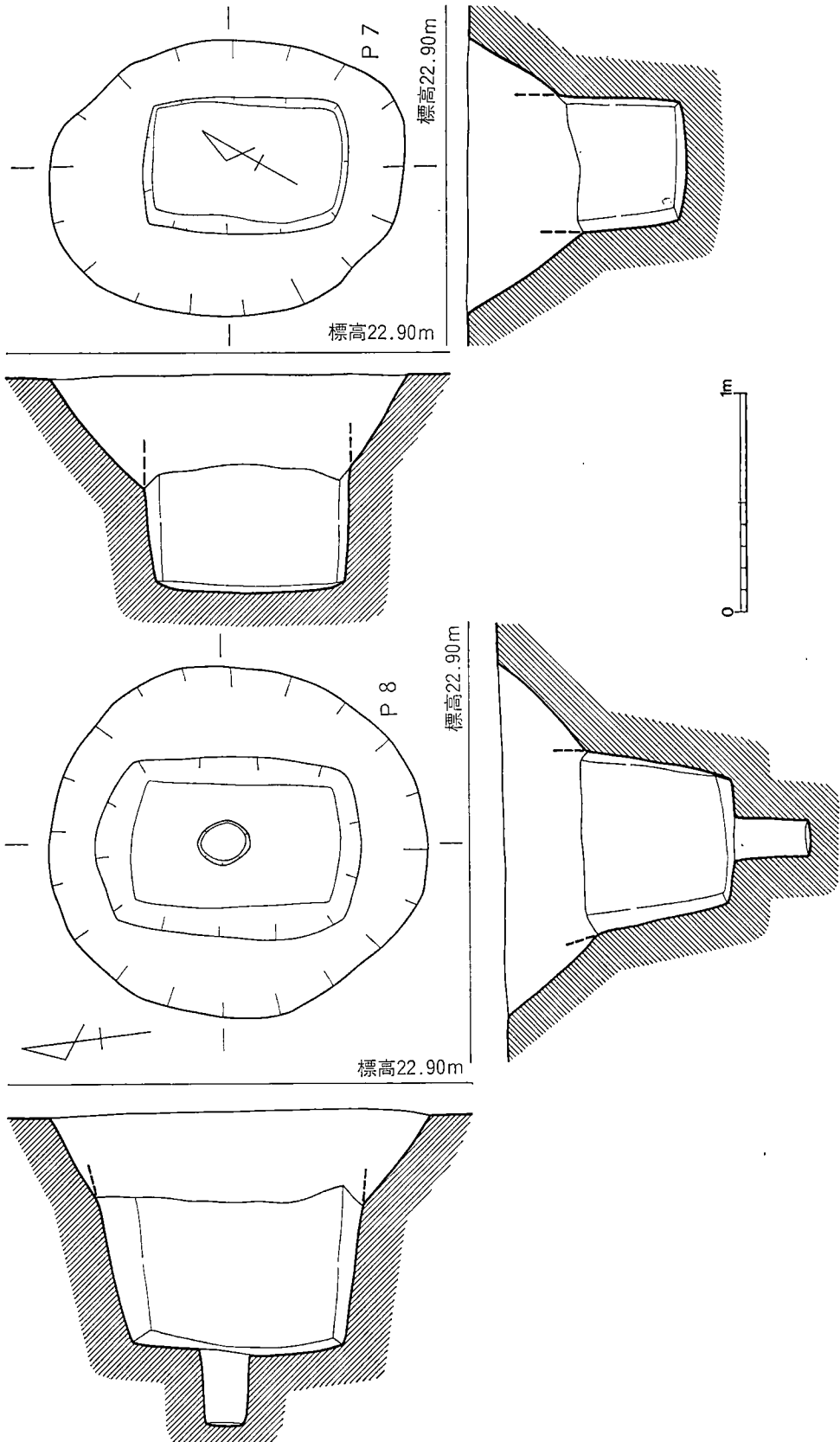


第5図 5・6号土坑実測図 (1/30)

より70cm以下の平面形態は隅円長方形を呈する掘り方である。埋土は黒色土である。水平な床面の略中央に小穴を検出したが堆積状況は前出の土坑と同様である。遺物は全く出土していない。

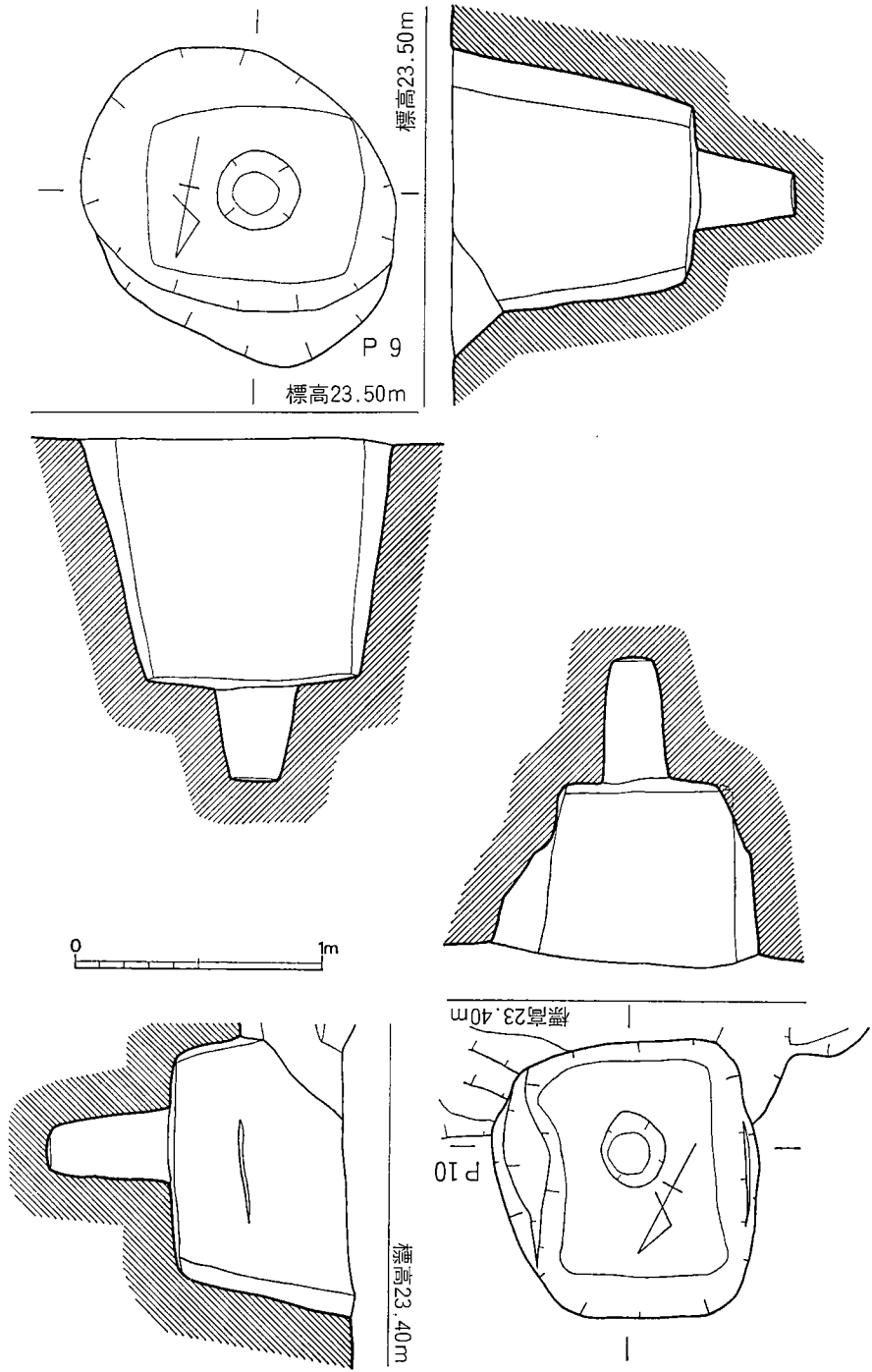
6号土坑 (P 6, 第5図) 東・西2支群の周溝墓の略中央部で、わずかに谷状になった所で3基の土坑が半弧状に並んで検出され、その北側のものが本土坑である。上端の平面形態は隅円長方形を呈し、壁面は緩やかな傾斜を持つ掘り方である。床面はやや丸味を持ち小穴は存

III 立野遺跡A地区の調査



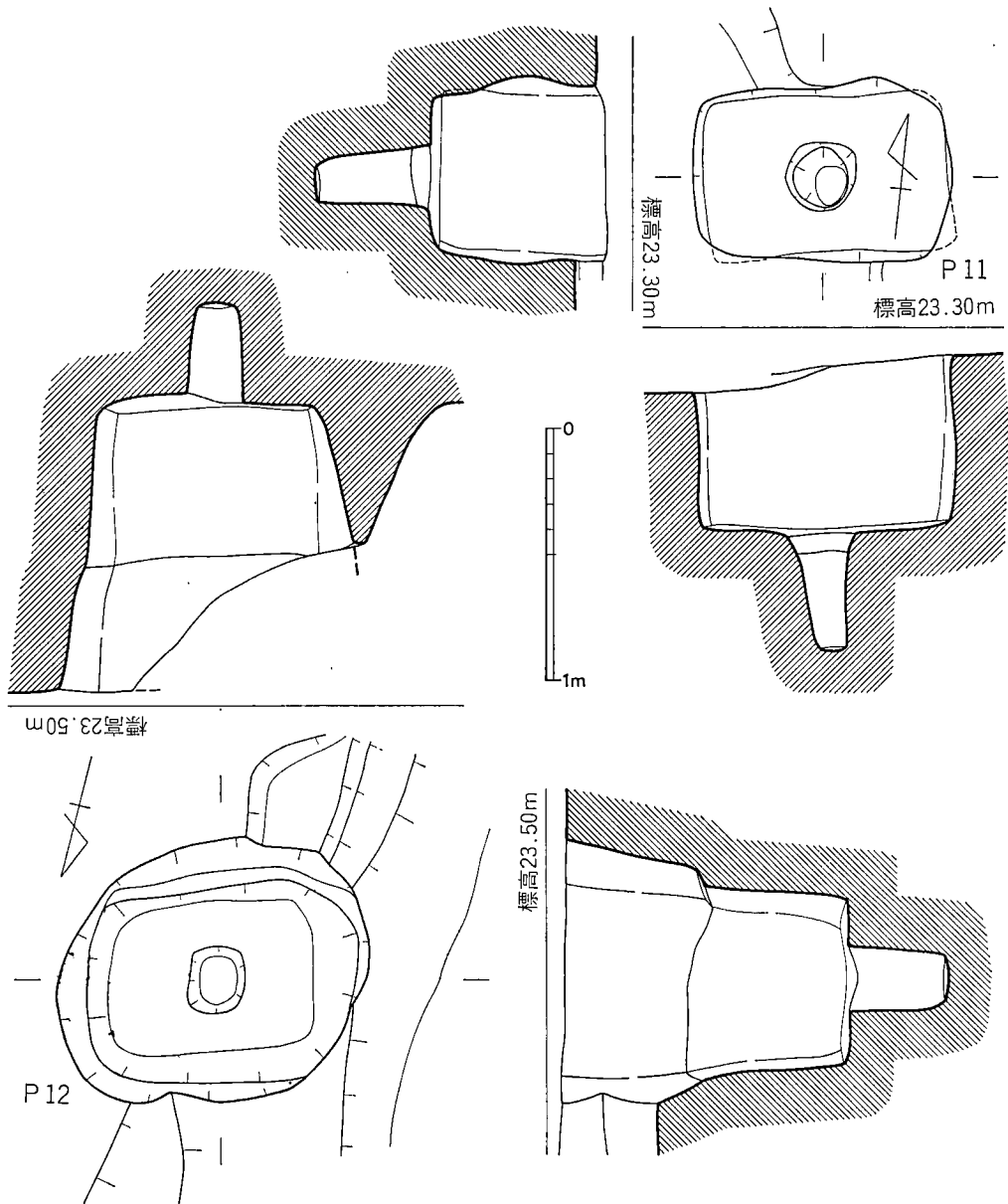
第6図 土坑7・8号実測図(1/30)

III 立野遺跡A地区の調査



第7図 9・10号土坑実測図(1/30)

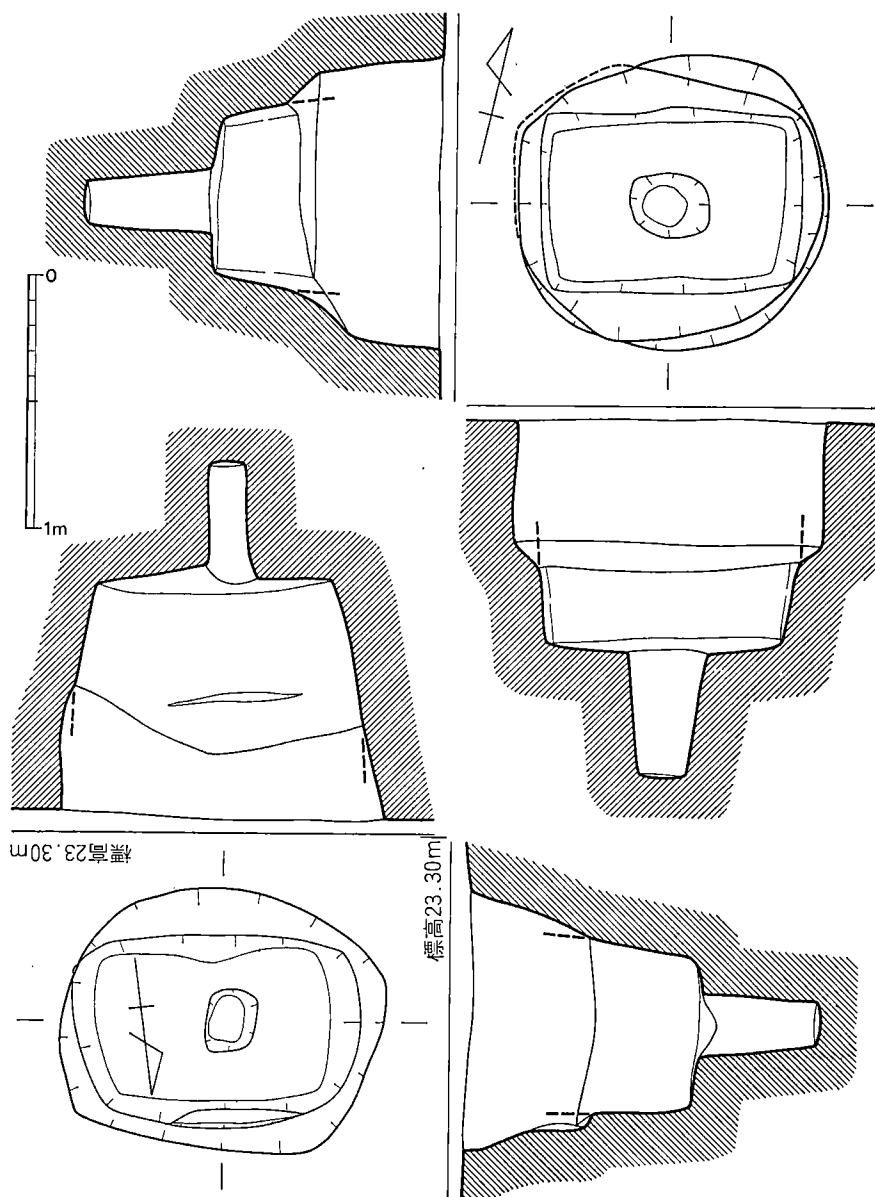
III 立野遺跡A地区の調査



第8図 11・12号土坑実測図 (1/30)

在しない。埋土は前述の土坑同様黒色土である。他の土坑と比較して浅いので、本土坑の用途は異なる可能性を残している。遺物は全く出土しなかった。

III 立野遺跡A地区の調査



第9図 13・14号土坑実測図 (1/30)

7号土坑 (P 7, 第6図) P-6の南6.5mの地点で、先述した3基の中央に位置する土坑である。上端の平面形態は長楕円形を呈する。壁面は上端より45cmまでは緩やかな傾斜で、その下方の平面形は隅円長方形を呈し垂直に掘られている。床面はやや丸味を持っており小穴は在しない。堆積状況は他と同様で黒色土が充填していた。遺物は全く出土していない。規模

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

は大型である。

8号土壙（P 8， 第6図） P-7の南5mの地点で、上端の平面形態が円形を呈する土壙である。壁面はP-4・7と同様に上端より35cmまで緩やかな傾斜で、その下方は隅円長方形の平面形で略垂直に掘られている。床面は若干丸味を持ち略中央部に小穴を検出した。小穴内は他と同じく何ら痕跡は検出し得なかったし、堆積状況も同様である。遺物は出土していない。規模は大型である。

9号土壙（P 9， 図版6， 第7図） 9号周溝墓の台状部中央西寄りで検出した。上端の平面形態は不整形円形を呈するが、北側の一部が崩れたものと考えられる。壁面はやや急傾斜をなしている。やや丸味を持つ床面中央部に小穴を検出した。堆積状況は他の土壙と全く同じであり、遺物は出土していないが9号周溝墓より古い時期の遺構と考えられる。

10号土壙（P10， 図版7， 第7図） 9号周溝墓の陸橋部で検出し一部周溝に壊された土壙である。上端の平面形態は長楕円形と推定される。壁面は短軸両壁ともやや急傾斜な二段掘りで、長軸壁は緩傾斜をなしている。床面は水平に近く、両端の幅が中央部の幅より広く外彎気味になっており長軸上の西寄りにやや深い小穴が掘られていた。埋土は黒色土が大半であり他と同様の状況である。遺物は全く出土しなかった。

11号土壙（P11， 第7図） 11号周溝墓周溝部の北西隅より北に2mの地点で、時期不明の不整形な窪みの下層より検出した。他の土壙と比較してやや小型の土壙で上端の平面形態は隅円長方形を呈している。壁面は垂直かオーバラップ気味に掘られている。床面は水平でP-10と同じく両端の幅が中央部の幅より広く外彎気味になり、中央部にやや深い小穴が掘られている。堆積状況は他の土壙と同じ様相で、遺物も全く出土していない。

12号土壙（P12， 図版7， 第8図） 11号周溝墓の西辺周溝に切られた状況で検出した。上端の平面形態は長楕円形と推定される。壁面は急傾斜をなし、上端より50cm程で平面形隅円長方形を呈する二段掘りである。しかし、P-5・9・10と同じく壁面の崩れた可能性もある。床面は水平でその中央部に小穴が掘られている。堆積状況は他の土壙とほぼ同様で遺物も出土していない。時期は11号周溝墓より古い。

13号土壙（P13， 第9図） 11号周溝墓の南辺中央より南に2.5mの地点で、42号土壙墓に隣接して検出した。上端の平面形態は略円形を呈する。壁面は上端より40cmまでが（北西部の一部は崩れたと考えられ）略垂直に、その下方の平面形は隅円長方形を呈し、緩やかな傾斜を持った後急勾配で床に続き、二段掘りである。略水平な床面の中央部にやや深い小穴が掘られている。堆積状況は他の土壙と大差はなく、遺物も出土していない。

14号土壙（P14， 図版7， 第9図） P-13の南西11m地点で43号土壙墓に隣接して検出した。上端の平面形態は長楕円形を呈している。壁面は上端より45cmまで緩やかな傾斜でその下

方はほぼ垂直に掘られており、やや不明瞭な二段掘りである。床面は小穴に向かって緩斜し、長軸上の両端の幅が中央部の幅より広くやや外彎気味になっている。小穴は床長軸上よりやや西寄りに掘られている。堆積状況は他の土壌と大差なく、遺物は全く出土していない。(武田)

4 方形周溝墓

1号方形周溝墓(図版10~14, 第10・11図)

調査区の西端に位置し、北側周溝は2号周溝墓の南側周溝(以下南溝と記す。他も同)と切り合っている。2号周溝墓の周溝は幅が狭く、両周溝の重なった部分の土層に切り合い関係は見られず、1号が2号の狭い周溝を掘り上げたものと考えられる。また、E-E'の土層断面では1号が2号を切っており、よって1号は2号に後続する。本周溝墓の北および西側は地山面から15~20cm程の削平をうけ、南隅・南側周溝は後世(6C後半~末頃)の溝によって切られている。周溝に囲まれた台状部の規模は1辺9m程で、幅1~1.5m、深さ0.5m前後の周溝がめぐり、西隅で途切れて幅1m程の陸橋部を形成する。陸橋部は周溝を徐々に浅くし、掘り残すことによってつくられている。周溝断面は逆台形を示し、その層序は、最下層が地山の黄色粘質土を多く含んだ暗褐色土で遺物は全く含まず、その上に盛り土の流入と見られる黄色粒子(地山)を混入した暗褐色土~黒褐色土系の層が3層程存在し、この中に土器が含まれる。周溝内の供献土器は溝底から20~30cm上にあり、北側周溝に集中的に供献されている。

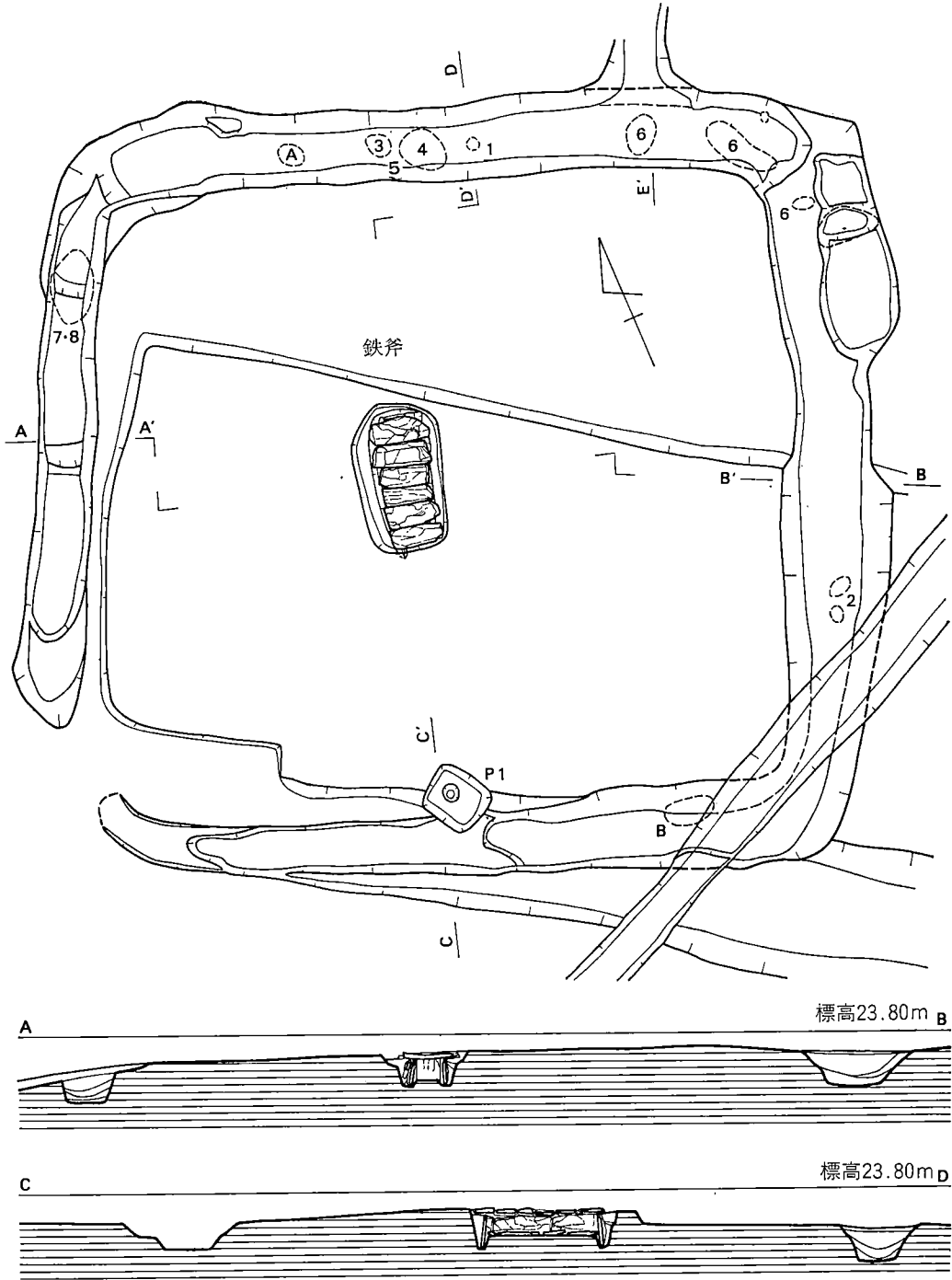
内部主体(図版11・12, 第11図)

台状部のほぼ中央に位置し、主軸をN-18°-Eにおく箱式石棺である。墓壙は二段掘りで、上端で主軸長2.15m、幅1.25mを測る。石棺は床面で主軸長1.65m、北の頭位側幅は35cm、南の足位側幅は26cm、最大幅45cmを測り、足位側が狭い。床面には4枚の板石が敷かれ、蓋石下面と床石との間隔は30cm前後である。頭位は東で灰白色粘土で枕を付設している。周壁の棺材間のすき間は粘土で目張りされていたようだが、その大半は床面に剝落していた。この粘土による目張り後に、棺内面に赤色顔料を塗布し、さらに蓋石内面に赤色顔料を塗布した後に閉棺し、蓋石を黄色粘土でおおっている。棺材は通称“柿原石”と呼ばれているものである。なお、石棺の組み方の順序は、最初に小口の石材を設置し、次に床石を並べ、小口壁をはさむように側壁を構築している。その後、床石上に粘土を敷き、枕を設置している。

出土遺物(図版13・14, 第10図, 付図4)

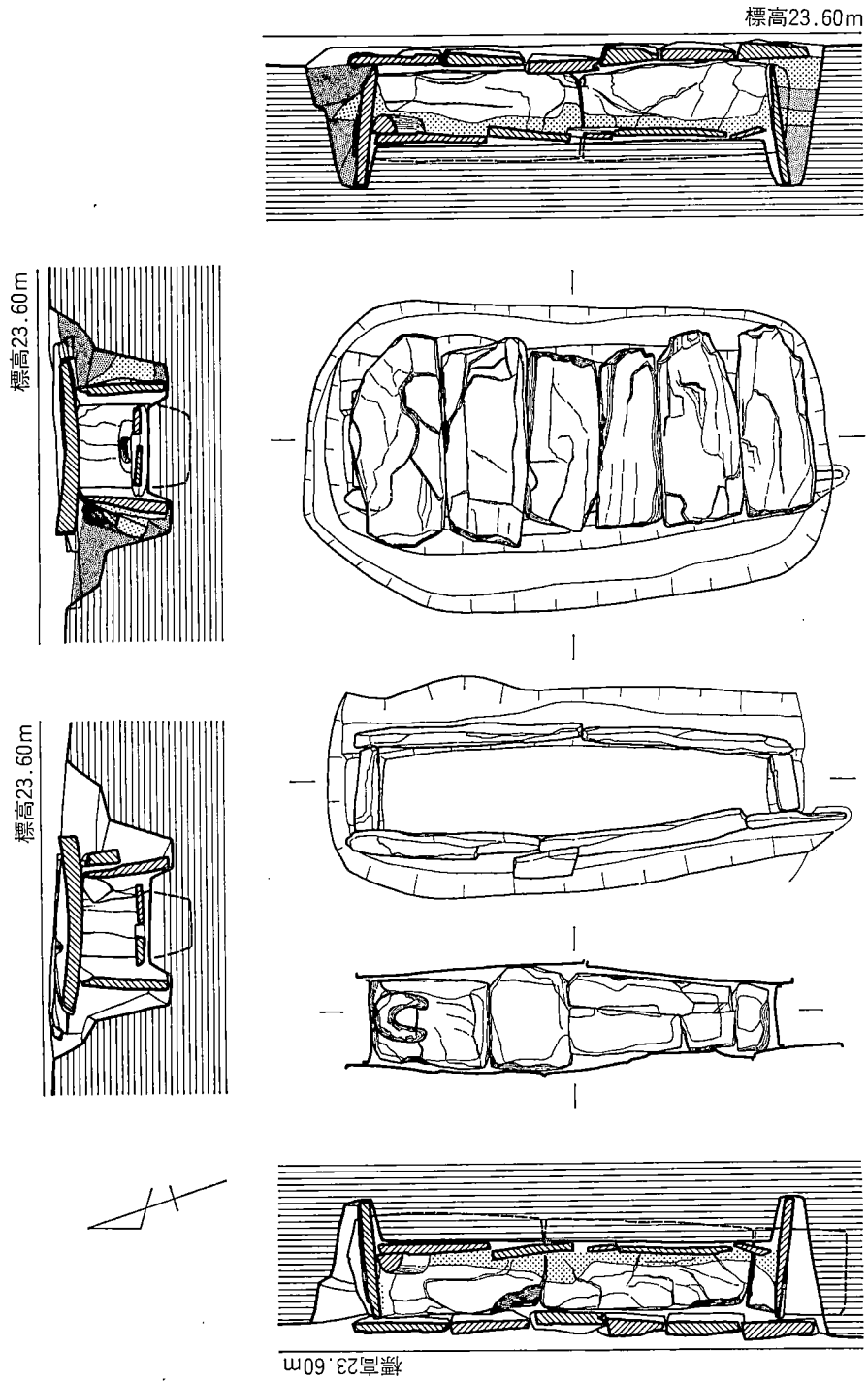
主体部北方約1.8mの地点で、攪乱土中から鉄斧1点、周溝内から8個体分余の土器が出土している。鉄斧は、攪乱時に主体部から移動した可能性があり、棺外副葬品の可能性を残している。土器は溝底から20cm前後以上浮いて出土し、主に黒褐色土中に含まれる。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



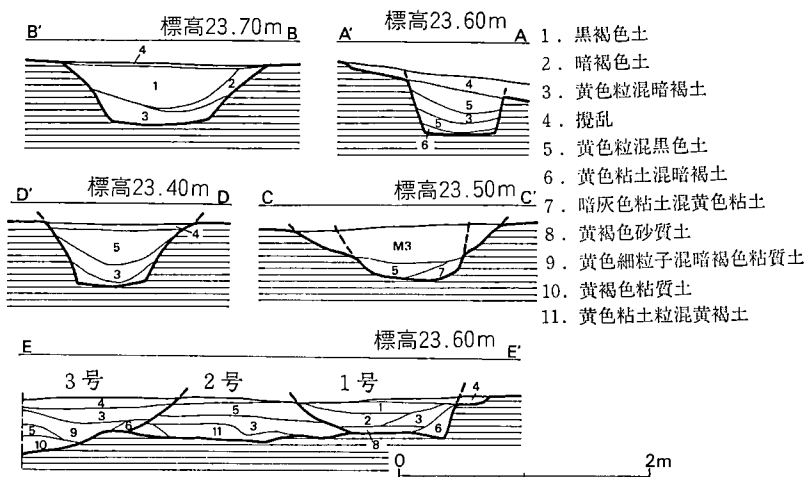
第10図 1号方形周溝墓実測図 (1/100)

III 立野遺跡A地区の調査



第11図 1号方形石溝蓋内部主体実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査



第12図 1号方形周溝墓土層図 (1/60)

鉄 器 (図版72, 第76図)

鉄 斧 (1) 袋部過半と刃部を欠失するもので肩はない。現存長7.9cm, 幅5cmを測る。木質の銹着はなく, 木柄からはずさされていたものと見られる。

土師器 (図版60, 第13・14図)

実測に耐えるのは8個体で, 甕1点, 壺5点, 高坏1点, 甕か壺の底部片1点である。第10図のA・B地点から出土したものは細片で, 5 (第13図) と同様な壺破片である。

甕 (1) 北側周溝中央部で溝底から25cm浮いて黒色土層中から出土した完形品で, 口縁部径10cm, 器高9.6cm, 胴部最大径11cmをはかる。扁球形の胴部に“く”字形に折れる口縁部が続く。外面は刷毛目調整を, 内面はヨコナデ・ナデ調整を行い, 底面に指頭圧痕が残る。胎土に石英粒を含み, 焼成良好である。外面は灰茶褐色, 内面は明茶橙色を呈し, 黒斑が肩部とその対称位置の胴部下半にある。胴部中位以下は二次加熱を受けピンク色を呈する。

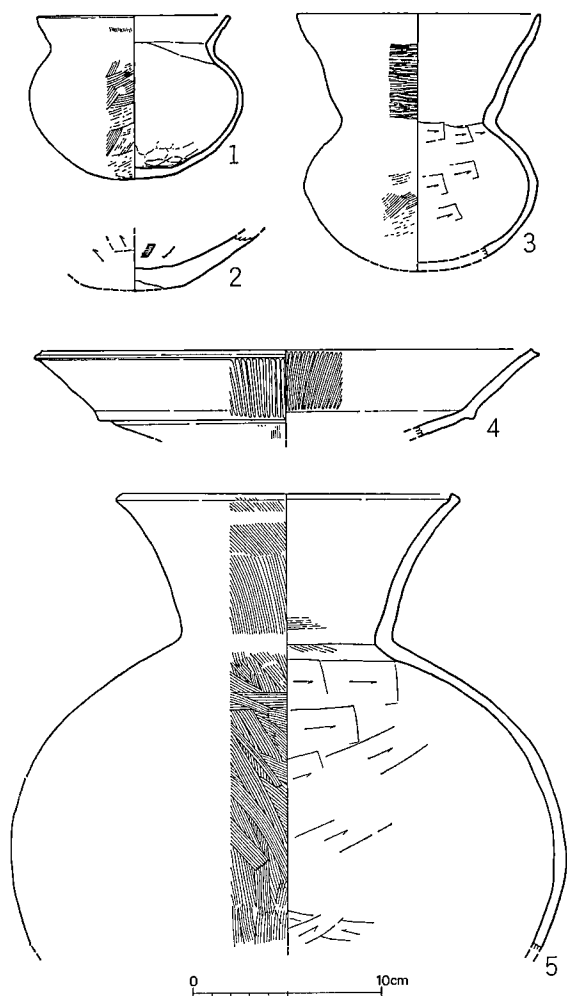
壺 (3・5~8) 3は北周溝で検出し, 甕1と同一層位内に含まれる。底部を欠くが丸底になると思われる, 口縁部径12.8cm, 推定器高13.6cm, 胴部最大径12.3cmを測る。胴は扁球形で口縁部は大きく開口する。二次加熱により器壁が荒れているが, 外面は頸部に横位ヘラミガキ, 体部に刷毛目調整を施す。内面は口頸部にヨコナデ, 胴部にヘラケズリを行う。胎土は大粒砂粒が器面に目立ち, 焼成は良好で明淡茶褐色を呈する。5は3のすぐ東側で3と同一層中から出土した広口壺で, 胴部下半を欠失する。口縁部径18.2cm, 現存高24cm, 胴部最大径29.3cmを測る。器面の遺存状態のよい整美な土器である。後述する6と同様に口縁端部を上方につまみ上げている。外面は, 刷毛目が美しく残り, 内面は頸部の屈曲部にわずかに刷毛目が残るが, それより上位はヨコナデ調整を行い, 屈曲部から一段下がった部分からヘラケズリを行

III 立野遺跡A地区の調査

う。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成良好で明橙色～黄灰色を呈する。6は、北東隅周溝に割られて散乱した状況で検出した。溝底から15～20cm浮いて出土し、黒褐色土中に含まれる。口縁部の $\frac{1}{6}$ 、胴部の $\frac{1}{3}$ を欠くが、ほぼ完形に復原される二重口縁壺で、口縁部径20cm、器高43cm、胴部最大径36.4cmを測る。胴部はほぼ球胴で、直立する頸部が接続し、口縁部はほぼ直立しながら先端付近でやや外反し、端部はつまみ上げられている。内外面とも刷毛目調整を行い、底部付近は刷毛目調整後にヘラケズリを行う。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶灰色を基調とする。

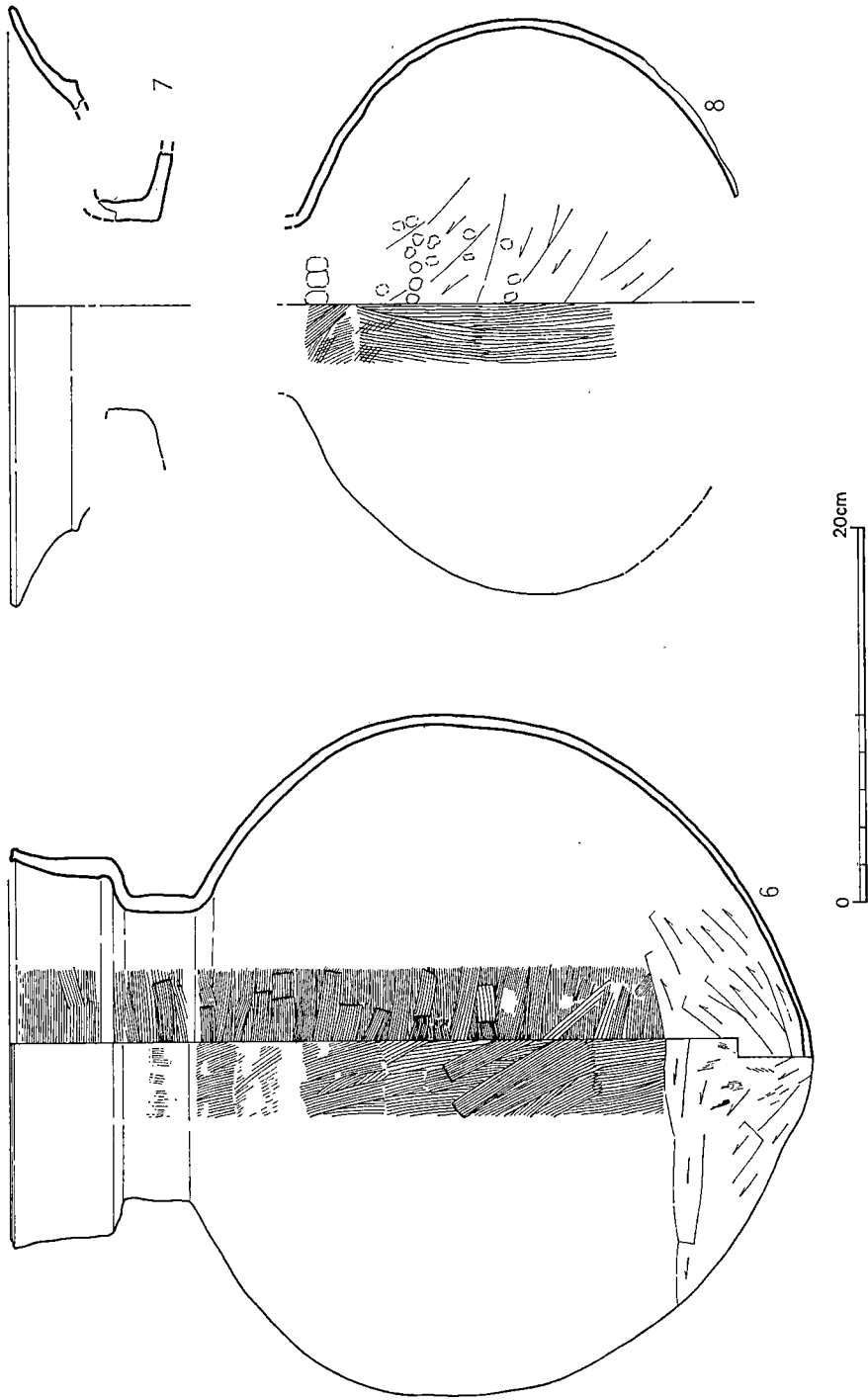
高 坏（4）壺5と共に出土した $\frac{1}{4}$ 周程の破片で復原口径26.8cmを測る。内外面とも縦位の暗文で加飾する。砂粒を多く含み、器面がざらつく。焼成良好で淡茶灰色を呈する。

7は西側周溝北部で検出した二重口縁の壺で、溝底より10cm程浮いて細片となり8と共に出土した。極小片の反転図で、推定口縁部径31.8cmを測る。頸部外面にわずかに刷毛目が残るほかは、すべてヨコナデ調整である。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶灰色を呈する。8は縁緑部と底部を欠くが、二重口縁の壺になると思われる。胴部最大径は中位よりやや下にあり、30.5cmを測る。外面は縦位刷毛目調整を施し、内面はヘラケズリの上に指頭圧痕が随所にのこる。胎土は白色微粒を多く含むが精良で、焼成良好にして明茶灰色を呈し、肩に黒斑が残る。



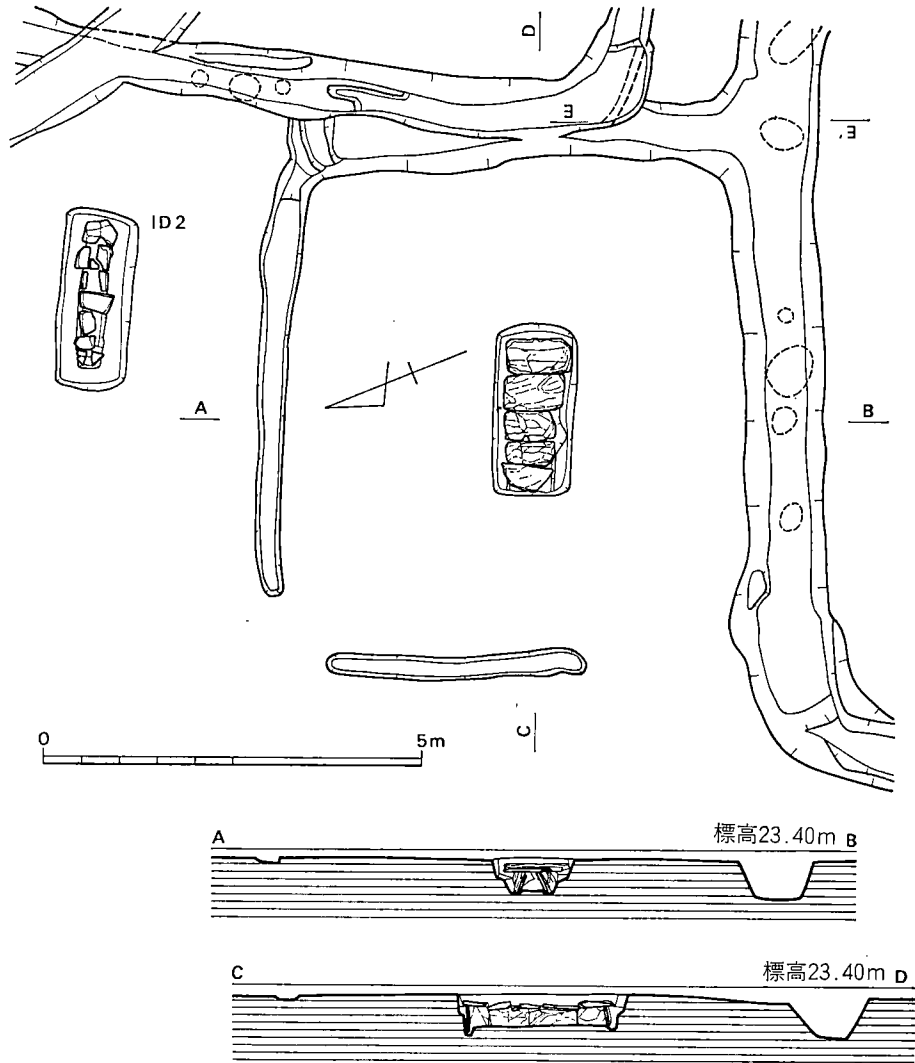
第13図 1号方形周溝墓出土土器実測図① (1/4)

III 立野遺跡A地区の調査



第14図 1号方形周溝墓出土土器実測図② (1/4)

III 立野遺跡A地区の調査



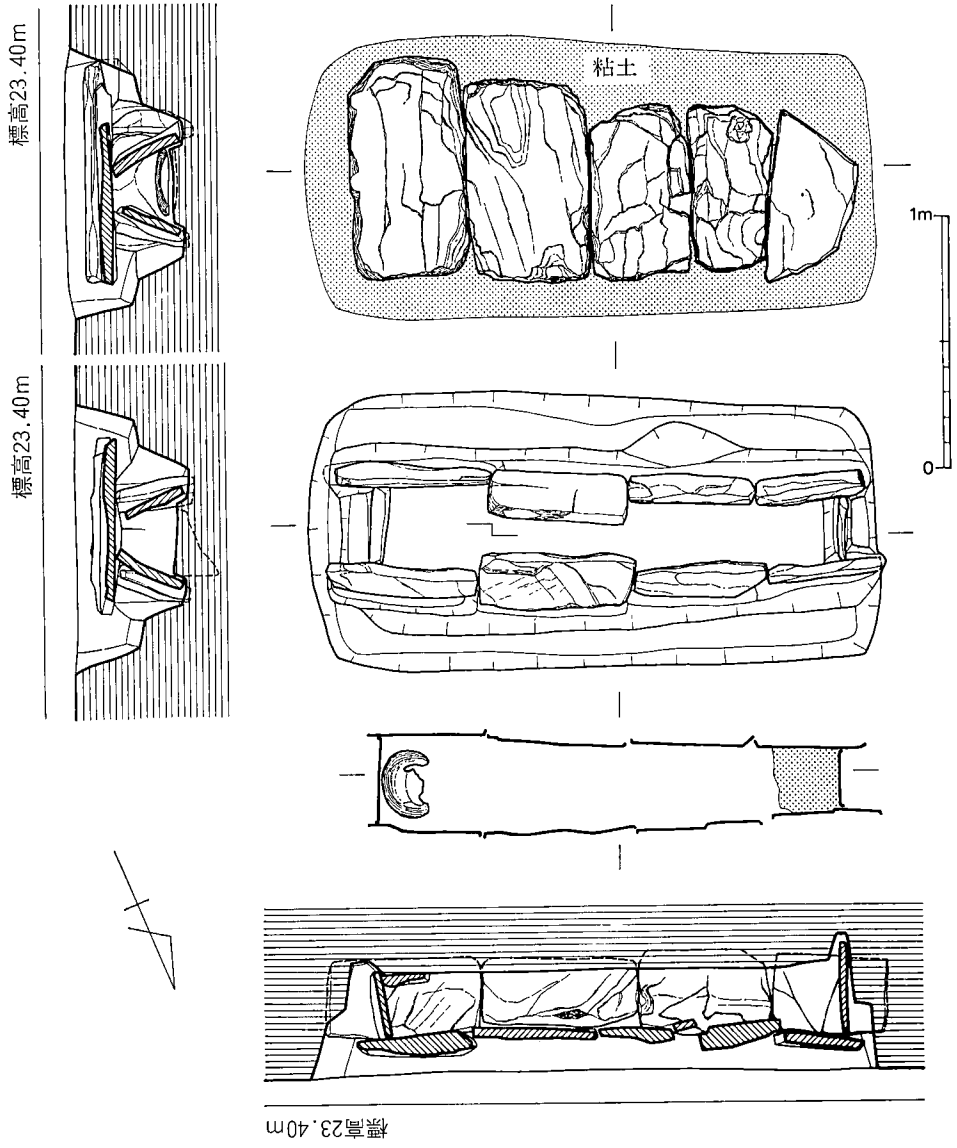
第15図 2号方形周溝墓実測図 (1/100)

2号方形周溝墓 (図版15, 第15図)

1号周溝墓の北, 3号周溝墓の西に位置する。周溝の土層断面の観察では1・3号周溝墓に切られて両者に先行する。台状部の規模は東西主軸6.5m, 南北主軸は6mでやや横に幅広である。北および西側周溝は幅20cm前後, 深さ5cm程の浅いもので, 3号周溝墓に切られた東側周溝の遺存部が幅30~50cm程度, 深さ30cm前後と推測されるのと比べて貧弱なものである。現状では北隅と西隅で周溝が途切れるが, 溝自体が削平されて細く狭いため, 途切れた部分が陸橋部となるか否かは不明ではある。しかし西隅の溝の途切れた部分が北側よりも広く, あるい

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

標高23.40m



第16図 2号方形周溝基内部主体実測図 (1/60)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

は1号のように、この部分に陸橋部が存在したのかもしれない。

内部主体（図版13, 第16図）

台状部のはほぼ中央に位置し、主軸をN-69°-Eにおく箱式石棺である。墓壙は二段掘りで、上端で主軸長2.25m、幅1.1mを測る。石棺は床面で主軸長1.8m、東の頭位側幅は35cm、足位側幅は25cmで、床面から蓋石下面までは25cm程度である。灰白色粘土を使った枕が付設され、足位側小口部にも粘土が詰められており、この粘土中から刀子片が出土している。棺材には柿原石が使われ、両側壁が小口壁を狭むように組まれ、壁面には赤色顔料が塗布されている。蓋石下の墓壙埋土は黄灰色粘土に砂質土を混ぜたものを使用し、蓋石架構後に、黒色土ブロックを混入した灰白色粘土で墓拡を埋めている。

副葬遺物（図版73, 第76図）

足位側粘土中から刀子片1点が出土している。精査したが他に破片は存在せず、折損部の状態より判断して当初から破片を副葬していたものと思われる。

刀子（2）身の先端部の破片で、現存長4.8cm、幅1.1cm、背部厚さ2mm弱を測るきわめて薄いものである。

3号方形周溝墓（図版16・17, 第17図）

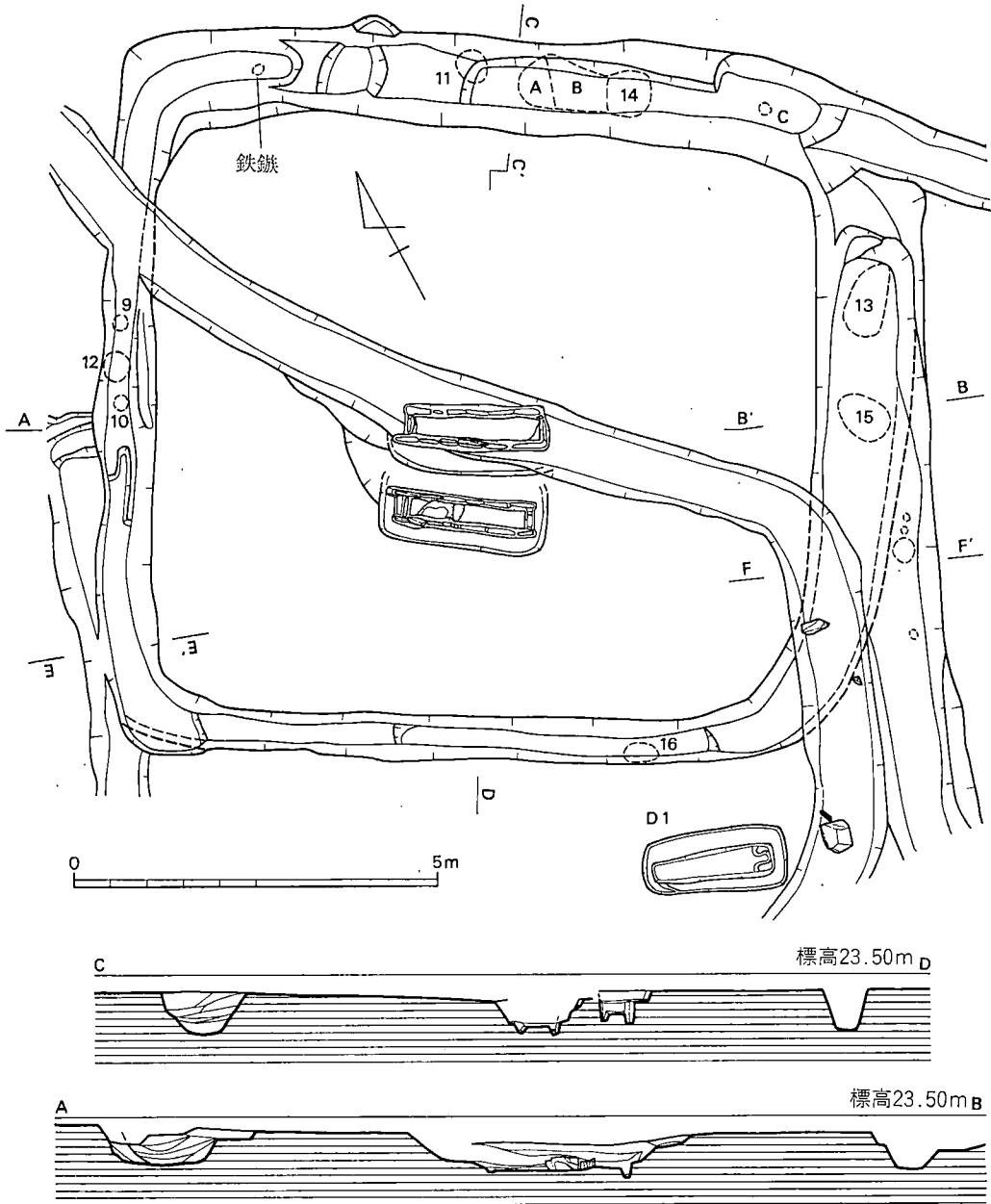
西支群の中央に位置し、台状部の中央が6世紀末頃の溝によって切られ、主体部は破壊されている。台状部の規模は東西9m、南北8m程で東西にやや幅広である。周溝は一巡せず、東隅で途切れて陸橋部を形成する。また、西溝は2号周溝墓の東溝を、東溝は4号周溝墓の西溝を切っている。周溝幅は、南溝が幅0.5m程、西溝が0.7m前後、東・北溝が1m程と、その幅は一定しない。断面は逆台形を呈し、盛り土の流入と思われる。溝底から20cm程上に地山の黄色土粒子を含む褐色系統の層が2～3層見られる。この中に供献土器が出土する。溝底は平坦な東溝を除いた他の3溝ではいくつかの段落ちが見られる。周溝の深さは50cm前後で、特に深い部分はない。

内部主体（図版16, 第18図）

台状部の中央に1号主体が、その0.8m南に2号主体が埋地されている。ともに箱式石棺で、棺材は抜き取られている。両棺の配列状況から1号主体が先行して構築されたと推定する。

1号主体 二段掘りの墓壙内に、主軸をS-61°-Eにおく箱式石棺で、6世紀末頃の溝が縦断し、棺材はほとんど抜き取られている。頭位は南東側で棺材を据える掘り方から判断して、主軸長1.8m、幅0.3～0.4m程と推定される。使用石材数は両側壁とも各6枚であろう。遺存した壁体内面には赤色顔料が塗布されていた。

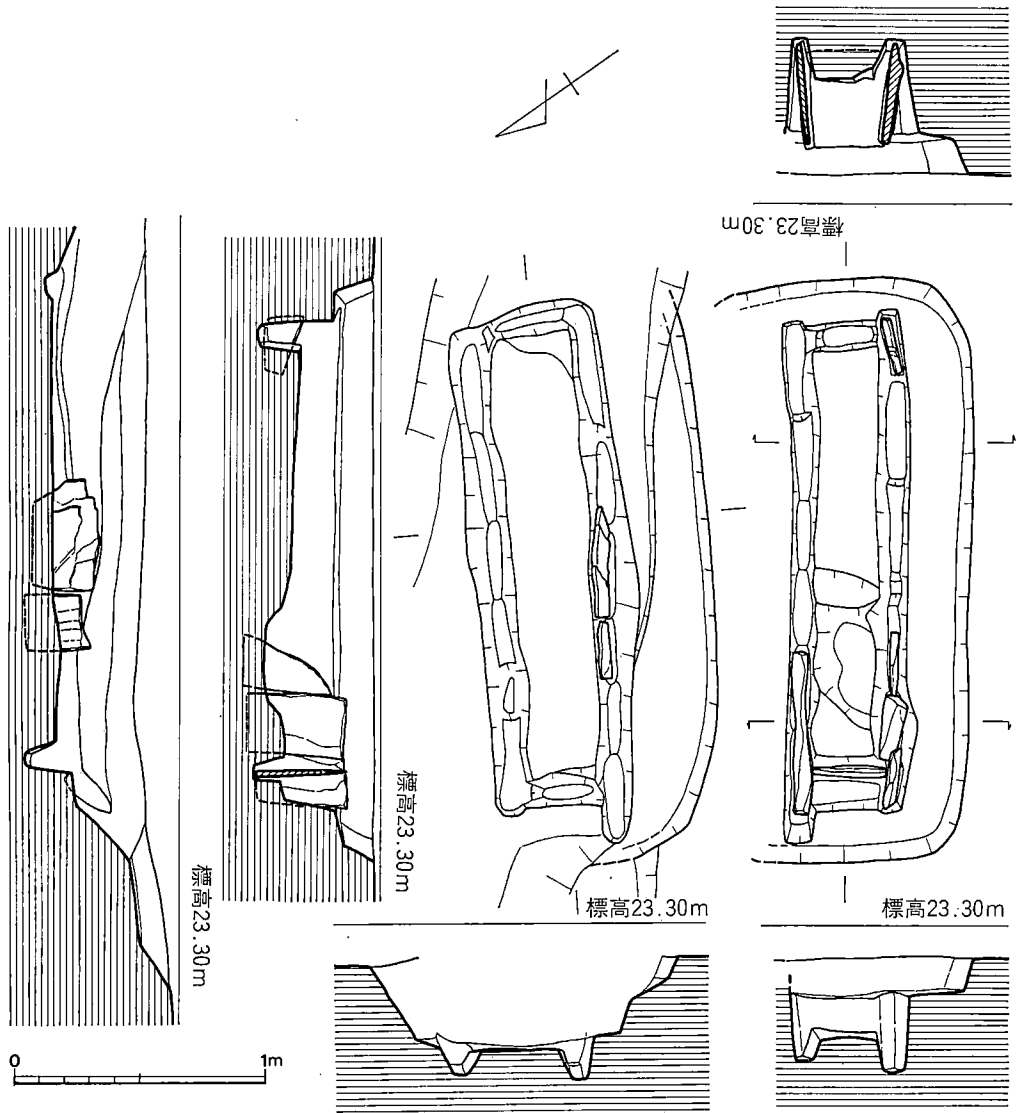
III 立野遺跡A地区の調査



第17図 3号方形周溝墓実測図 (1/100)

2号主体 二段掘りの墓壙内に、主軸を $S-45^{\circ}-E$ におく箱式石棺で、足位側の棺材を除いてほとんど抜き取られている。頭位は南東側で、棺材を据える掘り方痕から判断して、主軸長1.7m、頭位側幅0.35mと推定され、足位側幅は0.3mである。使用石材数は両側壁とも7枚

III 立野遺跡A地区の調査



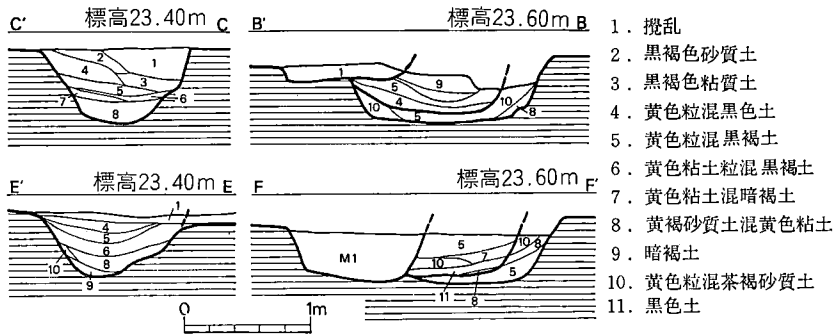
第18図 3号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)

と推測され、両側壁が小口壁を狭み込むように組み立てられている。遺存した棺材には赤色顔料が塗布されていた。

出土遺物 (図版17, 第17図)

棺内副葬品は検出されておらず、すべて周溝内埋土中から出土した。鉄鏃1点と、浅鉢1・埴2・鼓形器台1・壺2・大型埴1・底部片1の土師器である。南周溝からの出土土器は1点で、他の3つの周溝への土器の供献が多いという傾向は、1号周溝墓の場合と同様である。

III 立野遺跡A地区の調査



第19図 3号方形周溝墓土層図 (1/60)

鉄器 (図版72, 第76図)

鉄 鏃 (3) 北周溝の西側で、周溝底面より約10cm浮いて黒色土中から出土した。身の先端と莖尻を欠き、現存長11.2cmを測る。身は平造りで莖に矢柄の一部が錆着している。

土師器 (図版60・61, 第20図, 付図5)

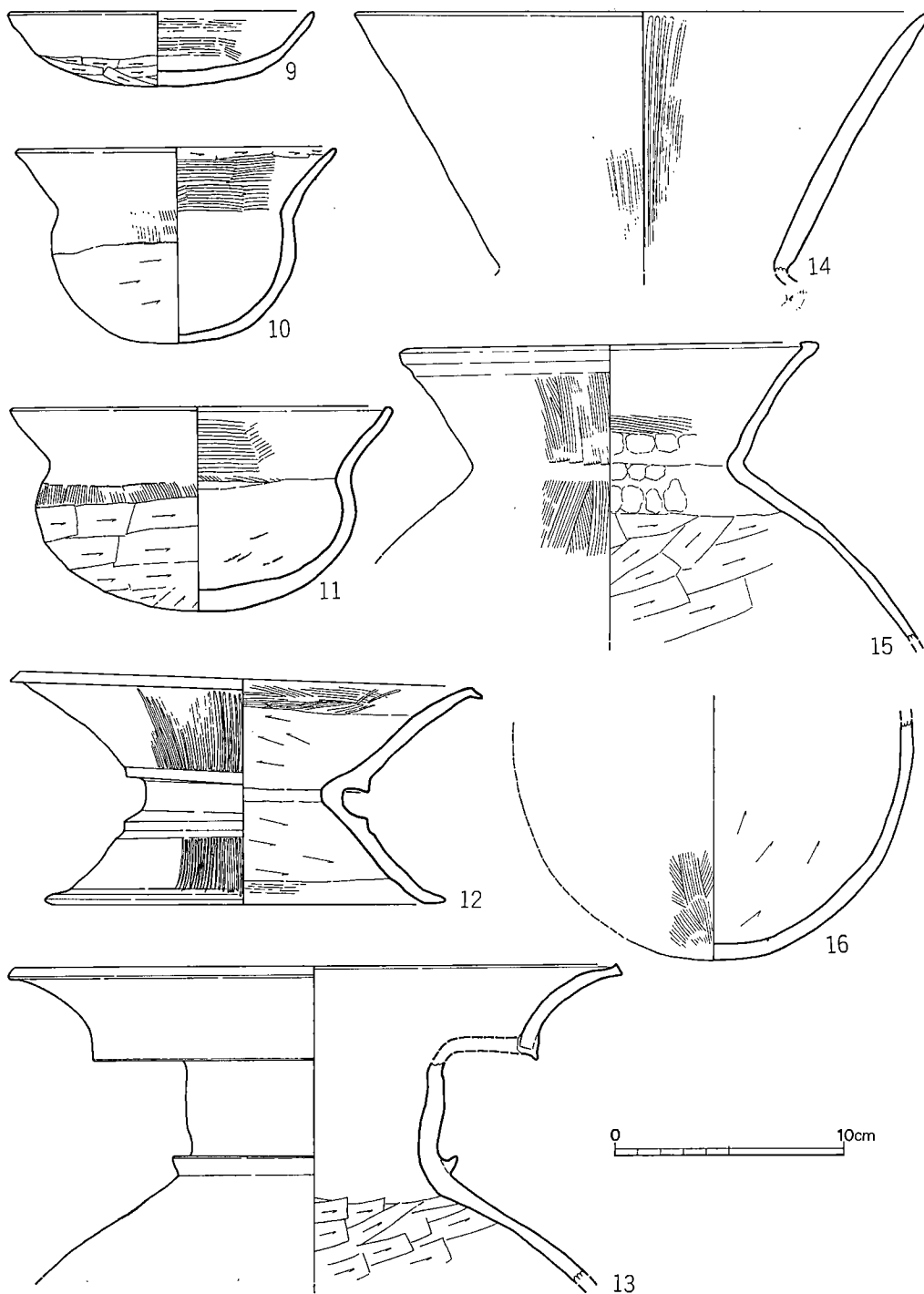
実測に耐えるのは8個体で、第17図中のA~Cは細片のため詳細は不明である。出土位置については第17図・付図5を参照されたい。

浅 鉢 (9) 口縁部を $\frac{1}{3}$ 程欠失する。口縁部径13.5cm, 器高3.3cmを測る。外底面はヘラケズリし、内面は横位の刷毛目調整を行う。内底面には赤色顔料が付着している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で硬質である。赤味を帯びた茶褐色を基調とし、部分的に黄褐色を呈する。

壺 (10・11) 10は $\frac{1}{3}$ 程欠失する。口縁部径14cm, 器高8.5cmを測る。口縁部内面は横位刷毛目調整を行い、その後口縁端部内面を横位にヘラケズリを行う。このヘラケズリは半周以上はするが、ヘラケズリをせずにヨコナデを行った部分もある。胴部内面はヨコナデ・ナデ調整を行い、外面は肩を刷毛目調整、それ以下はヘラケズリを行うが、器面が荒れており、ヘラケズリの単位はつかめない。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で、黄灰褐色を呈する。11は完形品で口縁部径16.7cm, 器高9cmを測る。内面は全面に赤色顔料が点々と付着し、塗られた状態ではなく、赤色顔料の容器であったと思われる。口縁部は10と違って内彎し、端部を丸くおさめる。調整は10と同様であるが、胴部下内面に工具痕が残る。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成は極良で硬く焼き上がっている。色調は、外面は暗灰褐色を呈し、黒斑を有する。内面は、生地は明黄色だが、赤色顔料が付着し、赤黒い部分が多い。

鼓型器台 (12) 口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。口縁部外径20.8cm, 台裾部外径17.5cm, 器高10.2cmを測る。屈曲部は器高のほぼ中位にあり、その上・下に三角突帯が一巡する。口縁端部は外につまみ出されて折り曲げられる。口縁部内面は横位刷毛目調整とヘラミガキを行い、それ以下はヘラケズリを行う。台裾部も同様に横位刷毛目調整を行い、それ以上は

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第20図 3号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

ヘラケズリを行う。外面は三角突帯の上・下を縦位のヘラ描きの暗文で加飾し、赤色顔料を塗布していたようである。他の部分はヨコナデ調整である。胎土は、器面に目立たないが白色砂粒を多く含み、焼成良好で、やや黄味を帯びた淡茶褐色を呈する。

壺(13・15) 13は小片の推定復原図であり、径・傾き等は不正確である。復原口縁部径27cmの二重口縁の壺で、口縁は大きく外反し、端部はやや肥厚する。頸部は中ふくれで内彎気味の三角突帯を有する。肩はややナデ肩気味である。全体に二次加熱を受け、調整は不明であるが、胴部内面はヘラケズリを行う。白色砂粒を多く含み、二次加熱のため器壁はもろくなり、暗灰褐色を呈する。同じ器形のものが、甘木市西原遺跡の溝8上層から出土しており(註2)、胴部はやや縦長の球胴になると思われる。15は口縁部径18.4cm、現存高13cmを測る広口壺で、口縁端部は内側に肥厚する。屈接する頸部内面には指圧痕が三段にわたって見られ、その上位は横位刷毛目調整を、その下位はヘラケズリを行う。外面は縦位刷毛目調整がきれいに残る。金雲母や石英粒を含み、焼成良好で淡茶褐色を呈する。

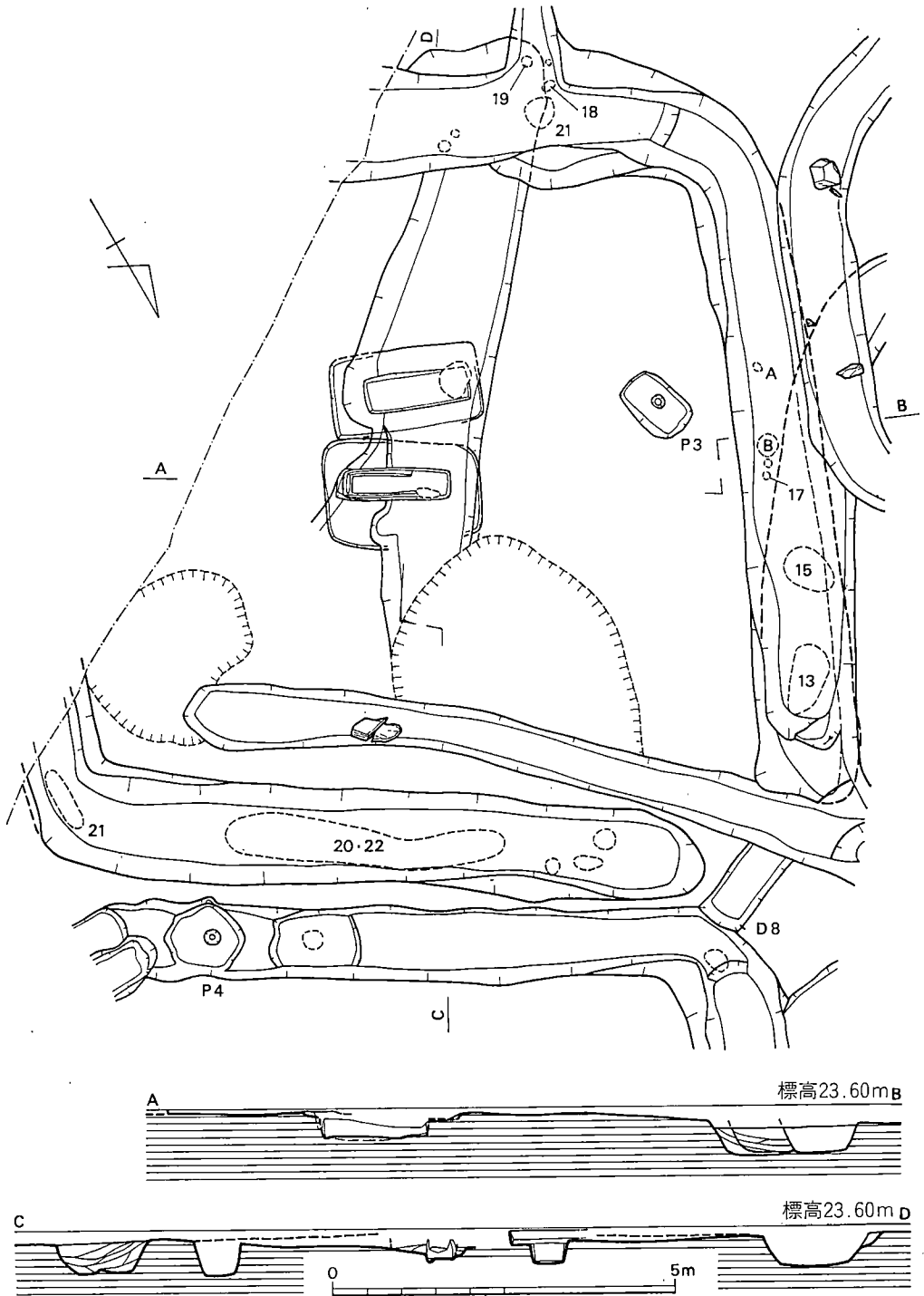
埴(14) 口縁部径25.1cmを測る大型の埴で胴部を欠失する。上記の西原遺跡溝9で完形に図示されたものが出土している(註3)。西原遺跡例は頸部が細く締まり、口縁部に比して小さな胴部がつくのに対して、本例は頸部の締まりはきつなく、比較的大きな胴がつくようである。器面が荒れて調整痕の遺存状態はよくないが、内外面ともに縦位のヘラミガキを行っている。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成はややあまく、赤茶褐色を呈する。

壺底部(16) 壺の底部と推定される小片で反転図である。底部がしっかりとしていないため、正確な図ではない。器内が厚く、内面はヘラケズリの上をナデ調整、外面は刷毛目調整し、胴部下半に黒斑がある。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で、外面は暗～黒褐色、内面は茶褐色を呈する。

4号方形周溝墓(図版16, 第21図)

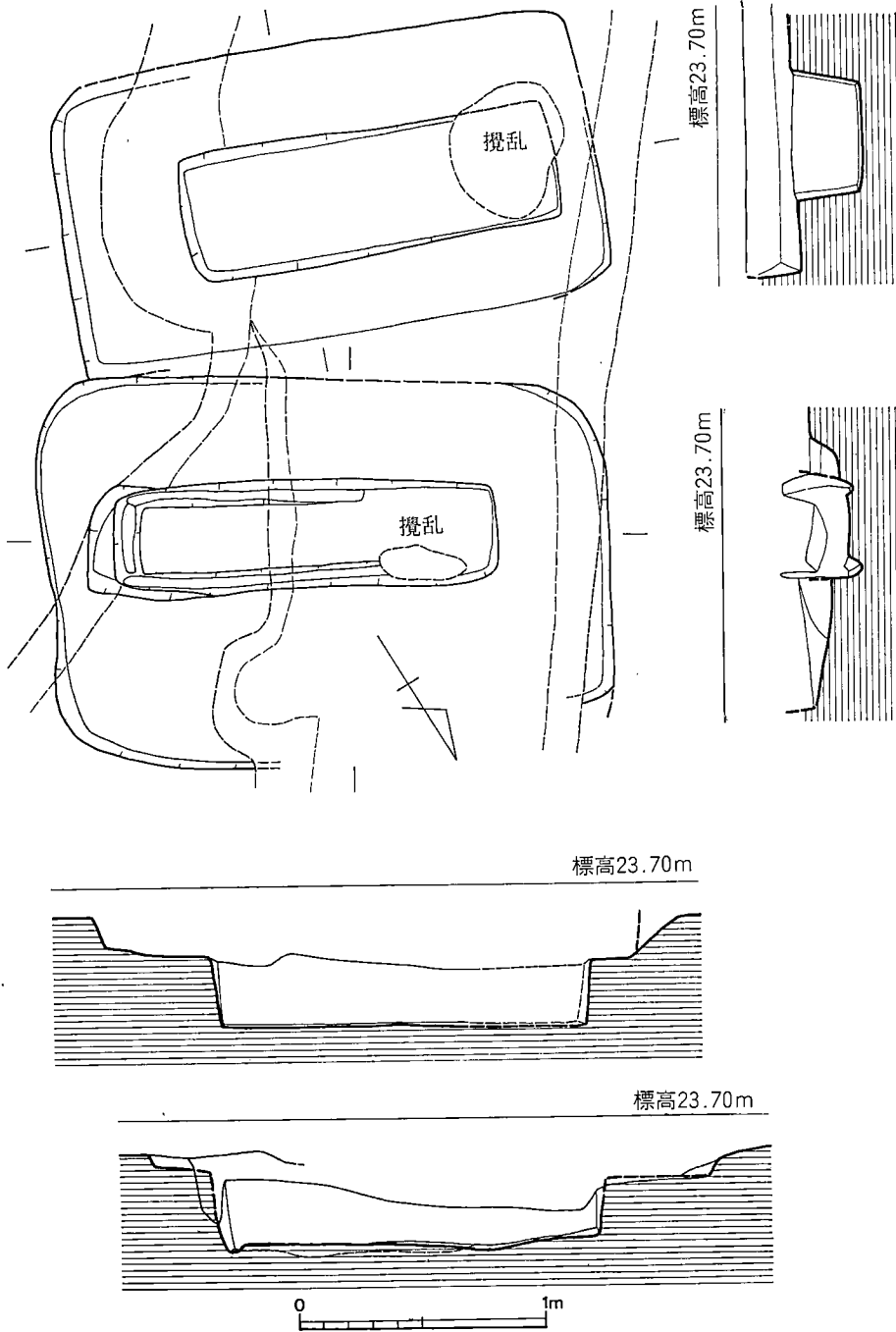
3号周溝墓のすぐ南東側にあつて、南側の半程が調査区外にのびる。西側は3号周溝墓の東溝に切られ、また台状部は大きく攪乱されており、主体部の遺存状態はきわめて悪い。台状部の規棟は北辺9.5m、西辺9m程で、東・南辺の規模は不詳ながら平面形は東・南辺のやや短い不正方形を呈するようである。周溝は一巡せず、北隅に陸橋部を形成する。周溝は比較的幅広く、1.5m前後を測る。溝底はほぼ平坦で、南隅に段落ちが一ヶ所存在するだけである。周溝断面はほぼ逆台形を呈し、地山の黄色土粒子を多く含む褐色土系統の層が台状部から流れこんだ状況で存在し、盛り土が存在したことを物語っている。

III 立野遺跡A地区の調査



第21図 4号方形周溝墓実測図 (1/100)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第22図 4号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

内部主体（図版18、第22図）

台状部のほぼ中央付近に1号主体が、南接して2号主体が埋置されている。両棺とも後世の溝状遺構と大木の抜根の際に大きく攪乱されている。配置状態から2号主体に先行して1号主体が営まれたと思われる。

1号主体 台状部の中央に位置し、墓墳のやや南に偏して棺が設置されている。頭位は東側で、棺の規模は床面内法で主軸長1.4m、幅30cm程と考えられる。棺材に石材を使ったのか、木材を組み合わせたのかは不明である。他の周溝墓の内部主体の例から、箱式石棺の可能性は強いと考える。

2号主体 1号主体に南接し、抜根の為に大きく破壊されている。二段掘りの墓墳で、墓墳のほぼ中央に棺を組んでいる。棺の規模は棺底内法で主軸長1.4m、幅35cm程度と思われる。棺材については1号主体と同様に決め手に欠ける。

出土遺物（第21図）

周溝埋土中から7個体以上の土器が出土している。実測可能なのはこの7個体だけで、他は細片のため不詳である。19は、本周溝墓に伴う資料ではなく、本周溝墓南側からさらに南の調査区外にのびる細い溝があり、この溝中から出土した。他に一基の周溝墓（16号方形周溝墓）の可能性が強いが、記述の都合上、ここに含めて報告する。土器は、溝底から出土するものではなく、先述した盛り土と思われる土層がかぶった状態で出土している。

土師器（第23・24図）

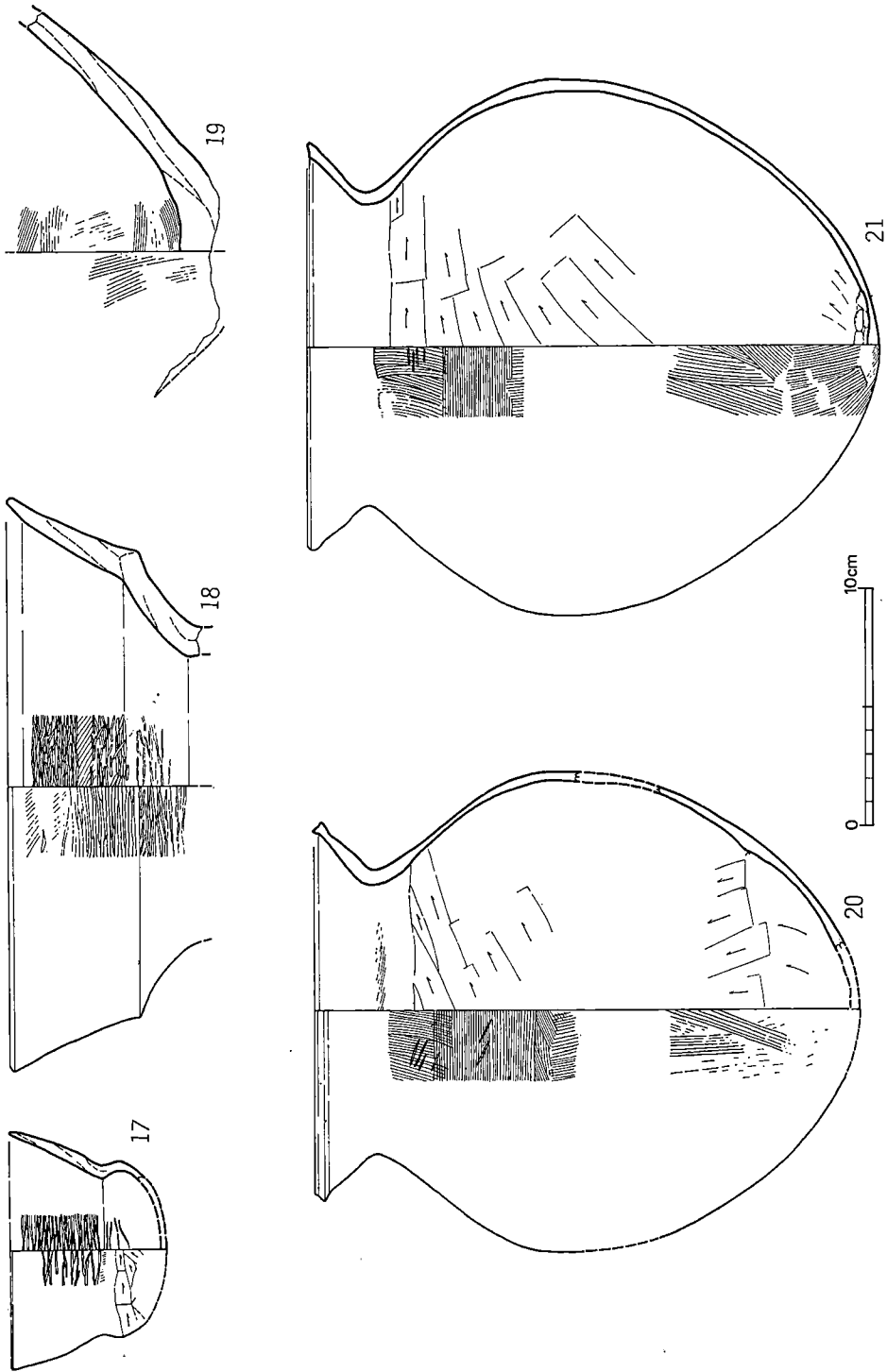
図示できるのは7個体で、第21図中A・Bは甕か壺の小片である。

卍（17） 極小片の反転図である。推定口縁部径10cm、器高6.6cmを測る。口縁部は内彎気味で器肉が厚く端部を丸くおさめる。胴部は浅いようで、底部は丸底であろう。口縁部は内外面ともヘラミガキを行い、屈接部外面は刷毛目がわずかに残り、それより下位はヘラケズリを行う、胴部内面はわずかにヘラミガキの痕跡がある。胎土は精良緻密で、焼成良好で茶褐色を呈し、器面は平滑である。

壺（18・22） 18は反転図で、推定口縁部径24cmを測る二重口縁壺である。内外面とも細かいヘラミガキを行い、器面は平滑である。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で赤味を帯びた橙色を呈する。22も反面図で、球胴の二重口縁の壺になると推測する。現存高は33cmで胴部最大径は中位にあり42cm程に復原される。底部は丸底であったと思われるが、焼成後に擦孔されたようである。外面は縦位刷毛目調整を行い、内面はヘラケズリを行うが、風化しており単位はつかめない。胎土に砂粒を多く含み、焼成はふつう程度で濁淡茶灰色を呈する。

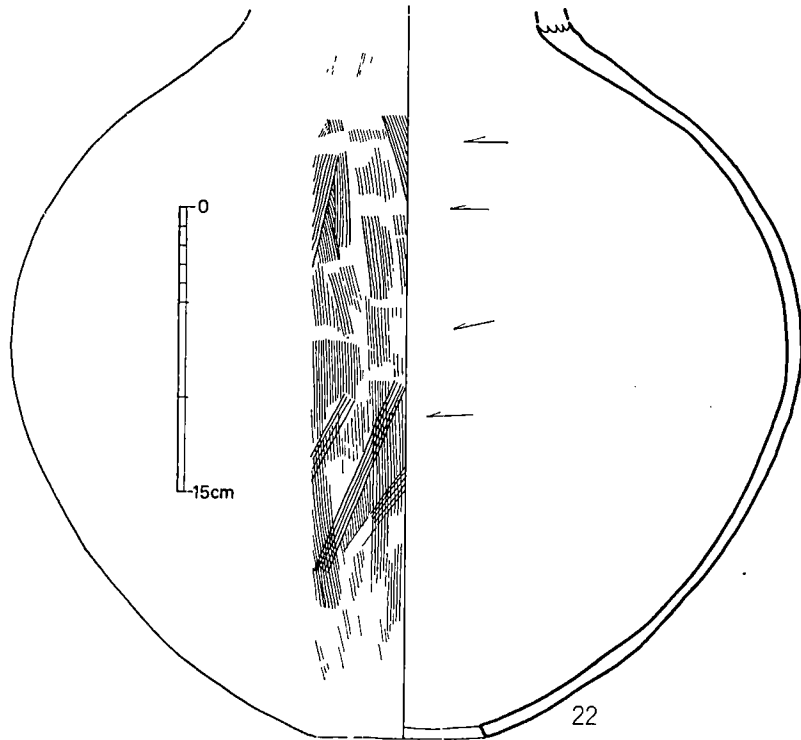
甕（20・21） 20は反転復原図で、胴部下半と上半から口縁部との関係についても全くの推定図である。口縁部径15cm、器高23cm程に復原され、胴部最大径は中位よりやや上にあり、20.2cm程である。頸部は器肉が厚く内面に刷毛目が残り、口縁端部は斜め上方につまみ上げら

III 立野遺跡A地区の調査



第23図 4号方形溝墓出土土器実測図① (1/3)

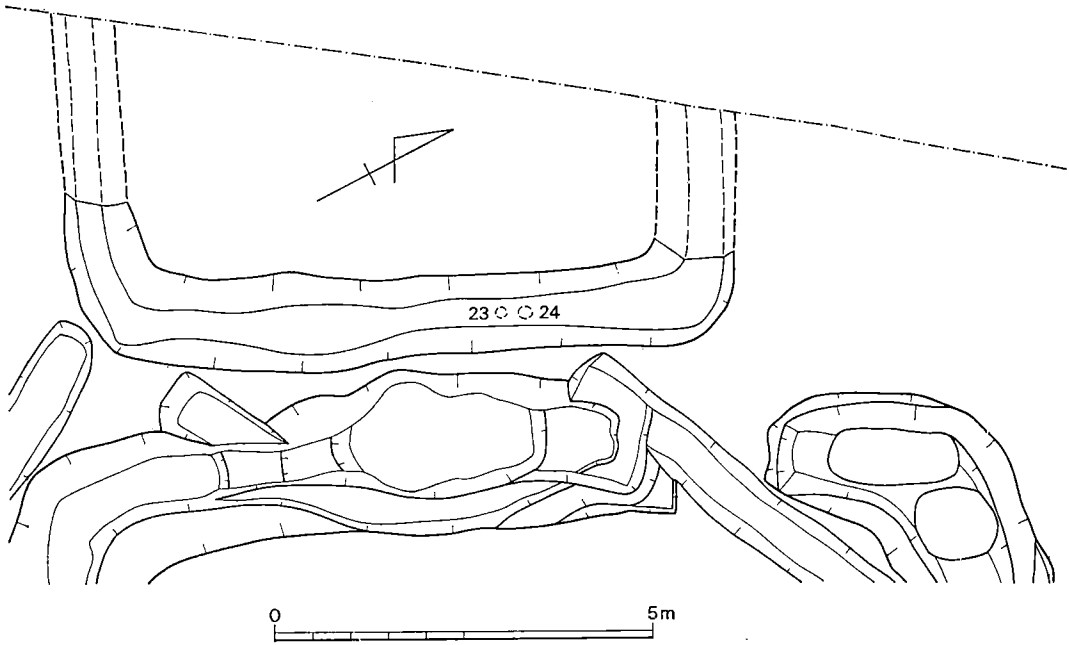
III 立野遺跡A地区の調査



第24図 4号方形周溝墓土器実測図② (1/4)

れている。口縁部内外面はヨコナデ調整を行う。内面は頸部の屈接部から一段下がった部分以下をへらケズリし、特に肩は薄く仕上げられており、厚さは2mm程度である。胴部外面は縦位・横位の刷毛目調整を施し、刷毛目の下に部分的に右下がりのタタキ目が残る。胎土には白色砂粒を多く含み、金雲母片が少し目につく。焼成は良好で、外面はススと思われるものが厚く付着して膜をつくり黒光りする。内面の口縁部付近は橙色、胴部は灰褐色を呈し、底部付近は異物が付着して黒ずむ。21は20よりひとまわり大型の甕で、お互いに接合しない底部と口縁部から胴部下半部にかけての2つの部分を図上復原した。形態・つくりもほぼ同様であるが、口唇部のつまみ上げ方に若干の相違が見られる。底部はすぼまり、内底面に指頭圧痕が残り、黒ずんでいる。外面にススと思われるものが厚く付着して膜をつくり、特に口縁部は黒光りする。胎土・焼成・色調は20と同様である。

底部片(19) 16号周溝墓から出土した壺あるいは甕の底部片である。底部は器面が剝落しているが、凸レンズ状の底部になるかもしれない。厚手で砂粒を多量に含むため器面がザラつき、全体に荒いタッチの土器である。焼成は良好で、外面はくすんだ淡茶灰色を呈し、内面は暗灰褐色を呈する。



第25図 5号方形周溝墓実測図 (1/100)

5号方形周溝墓 (図版19, 第25図)

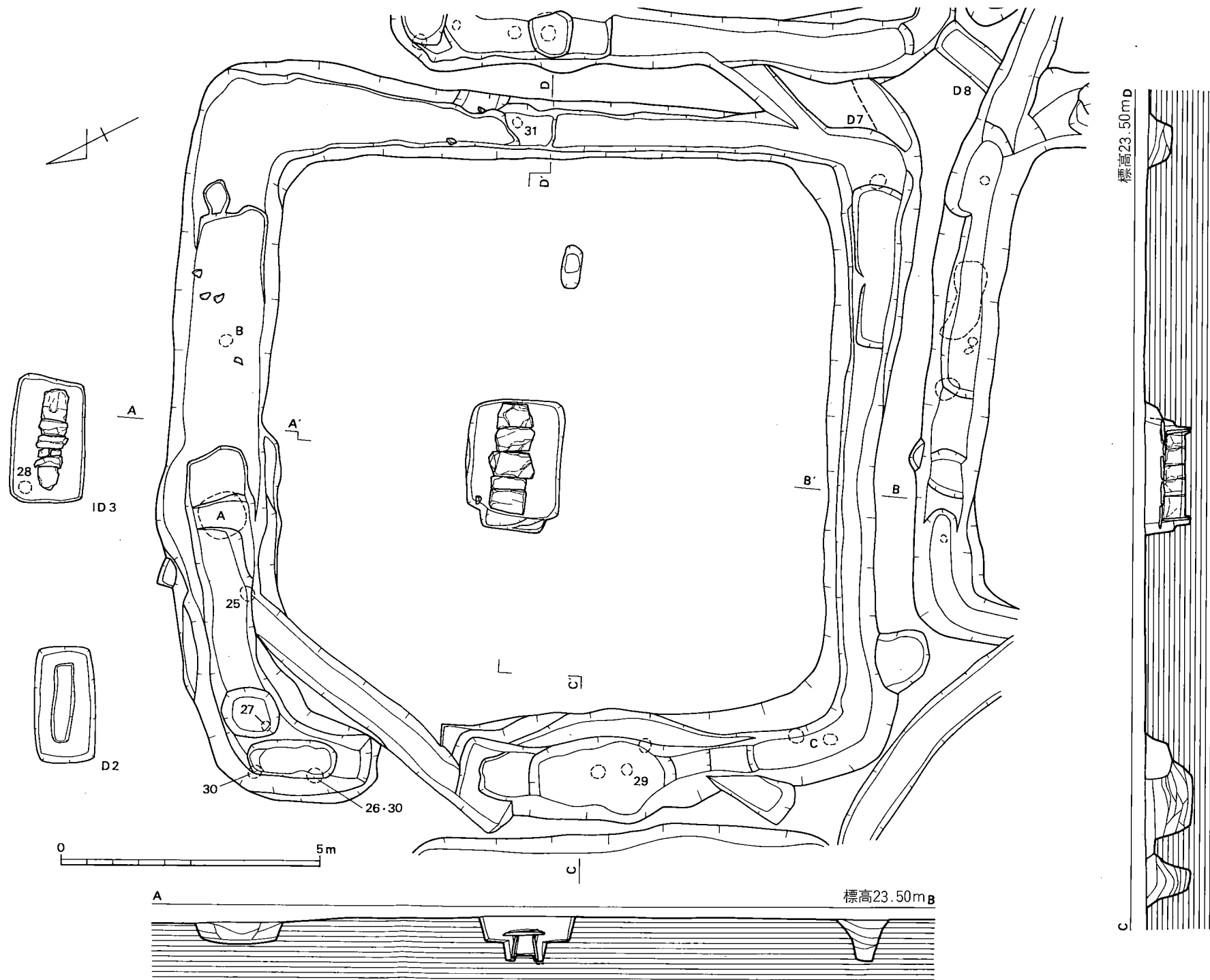
6号周溝墓のすぐ北西に位置し、東周溝を残してそれ以西は破壊され、砂利で整地されている。主体部は農道下に位置し、横断道の路線内ではあるが、生活道路であるため、調査できなかった。先述の理由で、主体部もあるいは破壊されているかも知れない。台状部の東辺は、南・北隅の崩落を考慮に入れても、7m弱で、西支群では小型に属する。周溝の外縁ラインは、供献土器出土地点より約1m南付近から北へ向かってやや内側にはいり込んだ形で掘られている。このことは第25図のように6号周溝墓の西溝が陸橋部付近で外側（5号周溝墓側）に大きく幅を拡げることに関係するかと見受けられ、あるいは6号周溝墓に後続して構築されたのかも知れない。周溝幅は1m前後で、断面は逆台形を呈すが、周溝立ち上がりの傾斜の方がやや急である。

出土遺物 (図版61, 25図)

東周溝北半部で土師器2個体が出土しただけである。周溝底部に堆積した地山の流入土の上に置かれ、暗褐色～黒色土が周囲に堆積している。

土師器 (図版61, 第27図)

甕 (23・24) 23は球胴の甕で、口縁部を打ち欠かれたものようである。周辺からも口縁部の破片は1片も検出していない。現存高13.7cm、胴部最大径16.1cmを測る。内面は頸部の屈

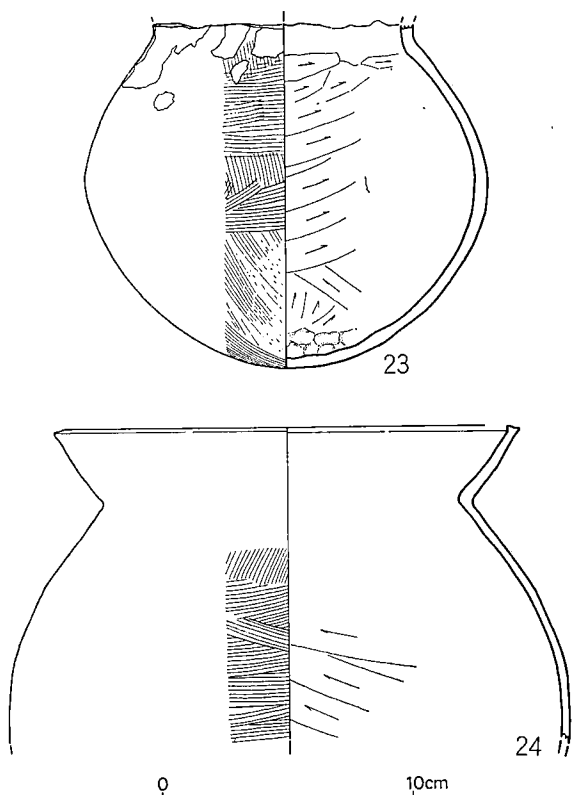


第26图 6号方形周沟墓实测图 (1/100)

III 立野遺跡A地区の調査

接部から一段下がった部分以下をヘラケズリし、内底面には指頭圧痕が見られる。外面は頸部直下から肩にかけて口縁部を打ち欠いた折りに生じたと思われる器面の剝離があり、剝離した部分にだけススが付着していない。外面全体に縦・横位の刷毛目調整を行う。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成良好で茶橙色を呈するが、外面はススと思われるものが厚く付着し、黒光りする。24は小片の反転図で、径・傾きは不正確である。推定口縁部径18cm程で、口縁部はやや内彎し、端部は内側につまみ出している。肩はナデ肩で、胴部最大径は中位よりも上にあるように見受けられる。内面はヘラケズリされるが、器面剝落のため範囲は不明である。器肉は薄く仕上げられ、外面は刷毛目調整痕がはっきりと残る。口唇部外面と、土器の割れ口にも赤色顔料

が付着しているが、器面の剝落が著しいために胴部内面には赤色顔料の付着は現状では見られない。しかし、割れ口にも赤色顔料が付着していることは、土器が赤色顔料の容器として使われ、割れた（割られた？）後に、その割れ口に付着したものであろう。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成良好で、外面はススかと思われるものが付着して黒光りし、内面は淡茶灰色を呈する。



第27図 5号方形周溝墓出土土器実測図（1/3）

6号方形周溝墓（図版19、第26図）

西支群の中で最大の周溝墓である。南隅と西溝、北溝の一部は後世の溝が走り攪乱されている。台状部の規模は一辺11m前後で、隅円のほぼ正方形を呈する。幅1～2mの周溝が巡り、西溝北側で途切れて陸橋部を形成する。陸橋部は幅1.2m程度で、その左右両側の周溝内に土壙状の落ち込みが存在し、中から土器を検出している。この土壙状遺構は、必ずしもそれを埋葬施設と判断できる証拠に乏しいが、埋葬施設としての可能性は残る。周溝幅は一定しない

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

が、他の周溝墓と隣接しない北溝と隅の部分は幅広く掘られている。南溝は直線的ではなく内側にカーブしており、それは3号周溝墓の北溝を意識し、それを破壊せずに0.8m前後の一定の距離を保つように計画的に周溝墓を配置・構築した結果だと推測される。各周溝墓構築に際してのそのような計画的配慮の結果、各周溝墓間には幅1m未満の通路状のものが掘り残され、本周溝墓の東・西・南にも「ハカミチ」として使用できる通路が存在する。周溝は北・東溝が浅く深さが0.4~0.5mに対して、西・南溝が深く0.8m前後を測る。周溝内埋土は台状部から流入して堆積した状況を呈し、盛り土の存在したことを示している。

北溝北側に2号土壙墓、3号石蓋土壙墓が存在する。両埋葬施設の主軸方位は、本周溝墓の内部主体の主軸方位や北溝とほぼ平行であり、かつ、北溝から約2mしか離れず接近して存在することから、6号周溝墓に伴うものと思われる。

内部主体（図版19・20、第28図）

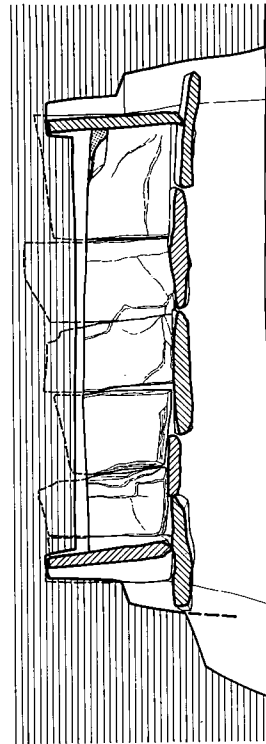
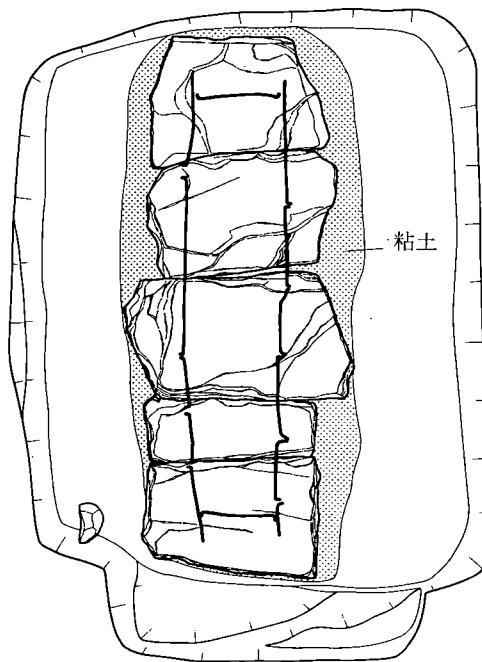
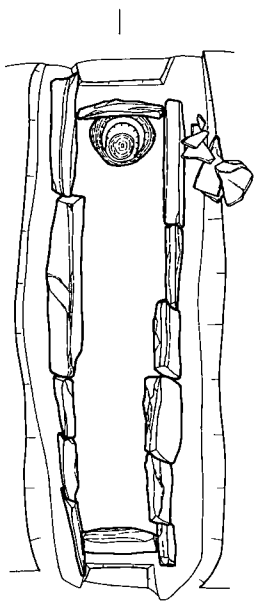
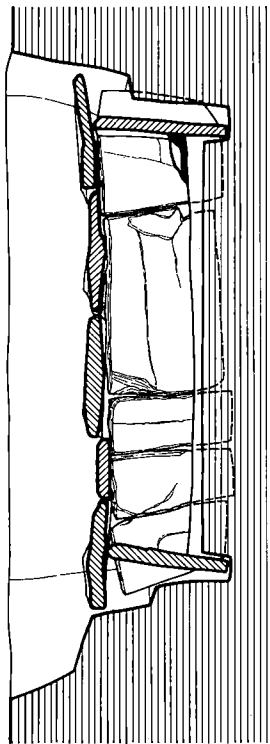
台状部の中央からやや北側に埋置された箱式石棺である。墓壙検出時に石棺を埋置する墓壙が幅1.3m、主軸長2.3m程の長方形の墓壙（状）から切られている状態であった。ボーリング探査の結果、約40cm下に石材の存在を確認し、土層観察用の土堤を残して新しい方の墓壙を掘り下げたが、平面的にも、土層断面にも埋葬施設の存在は検出できなかった。なおこの墓壙底は石棺の蓋石上面でとまっていた。この墓壙状の残りが、図で西側に張り出した落ち込み状のものである。埋土は黄灰色粘土に表土の暗褐色ブロックが混入しており、後述する7号周溝墓の第2主体の墓壙埋土と同様であった。よって、2番目の埋葬施設を作ろうとして墓壙を掘り下げた時、先行して営まれた箱式石棺の蓋を掘りあてたため、その行為を中止し、丁寧に埋め戻したものと推測する。また、石棺の蓋を開けた痕跡もない。

箱式石棺は二段掘りの墓壙深く埋置され、主軸をS-59°-Eにおく。墓壙は上端で主軸長約2.4m、幅1.85mを測る。棺材は柿原石を用い、長側壁が小口壁を挟み込むように組んでいる。頭位は南東で粘土枕を設置している。床面での寸法は主軸長1.66m、幅は頭位側で37cm、足位側で30cmで、床面から蓋石下面まで36cmを測る。棺内面は赤色顔料を塗布している。壁体と墓壙との空間は黄色粘質土、黄灰色粘土を充て、蓋石架構直前に、棺材整形時に生じた石片を頭位西側の壁体横に置いて粘土を敷き、蓋石を架構している。また西側長側壁の足位側から、1番目の石材の外面に盃状穴があり、石棺の内面は全面に赤色顔料が塗布されていた。

出土遺物（図版21・第30・31図）

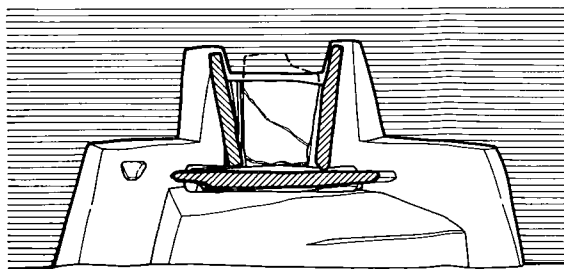
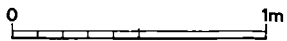
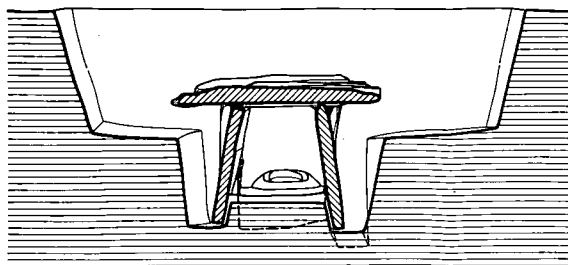
南溝を除いた周溝から土師器が出土しているが完形品はない。出土層位は既述の周溝墓のそれと同様で溝底から出土することはなく、溝底から5~30cm浮いており、盛り土の流入土がかぶった状況で出土している。

標高23.40m



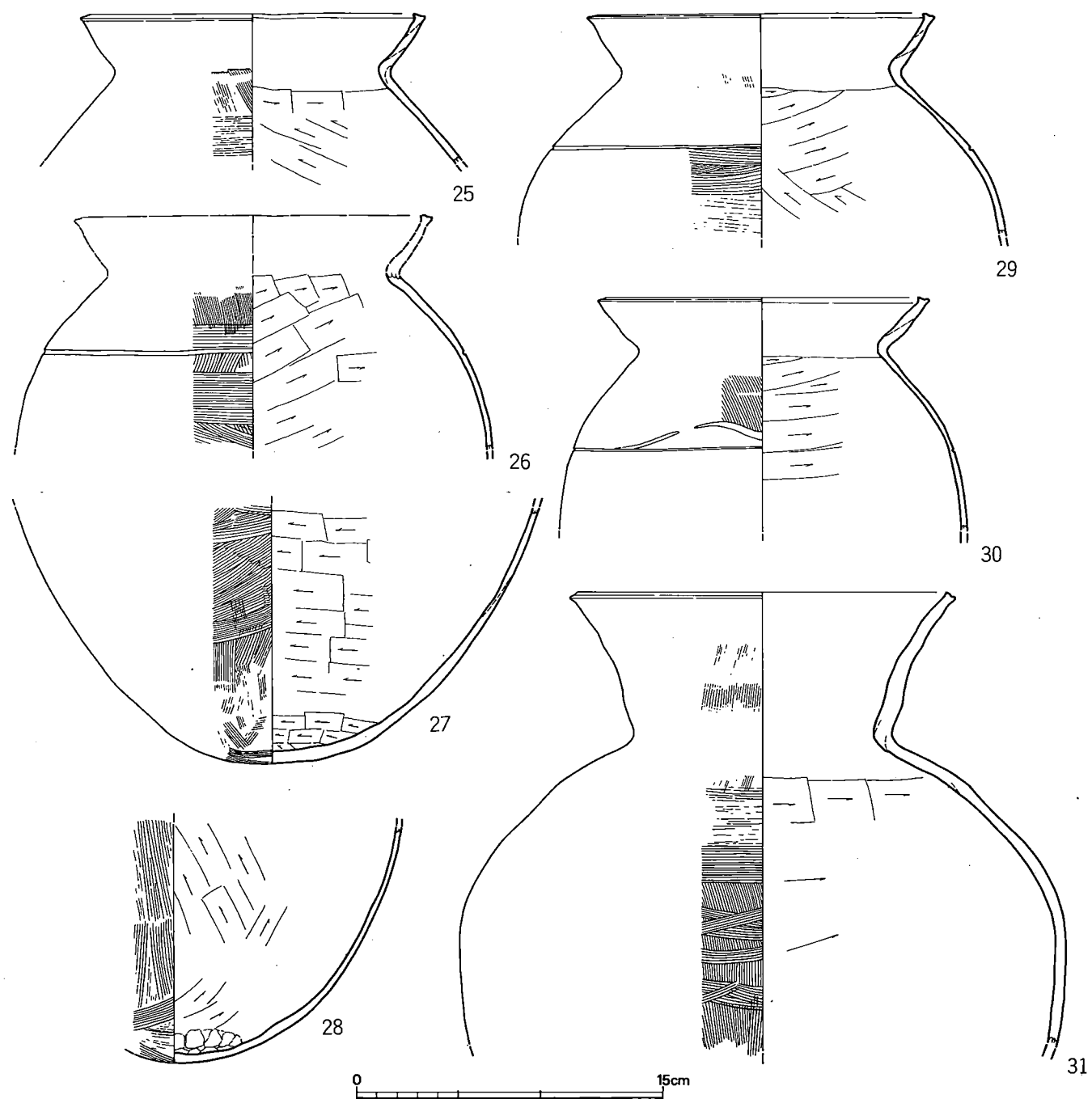
標高23.40m

標高23.40m



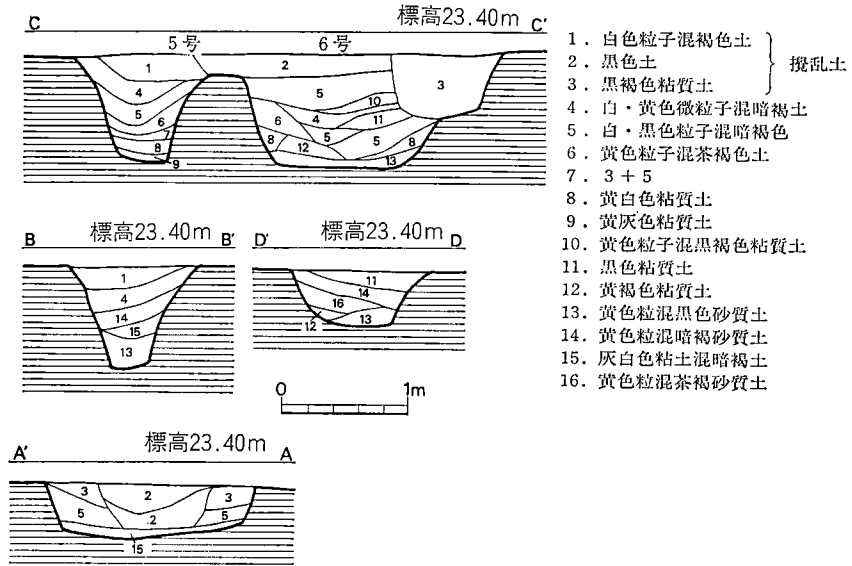
標高23.40m

第28图 9号方形周溝墓内部主体实测图 (1/60)



第30图 6号方形周沟墓出土土器实测图(1/3)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第29図 6号方形周溝墓土層図 (1/60)

土師器 (図版61・62, 第30図)

実測できたのは甕4点, 壺2点である。第26図で, A・B・Cと図示したものは細片で実測不能だが, 器形は布留系の甕形土器である。

甕 (25・26・29・30) 25は周溝の肩部傾斜面に検出した小破片の反転図で, 復原口径16cm程度である。口縁部はやや内彎し, 端部は斜め上方につまみ上げる。肩部はナデ肩を呈する。頸部屈接部から一段下がった内面は横位のヘラケズリを行い, それ以下は左上り方向のヘラケズリを行う。口縁部内外面はヨコナデし, 外面は頸部の縦位刷毛目の下位は横位刷毛目がうすく残る。胎土は白色砂粒の他に金雲母片を含み, 焼成はふつうで, 器面が剝落し, くすんだ淡茶灰色を呈する。26は肩に丸味をもつが25とほぼ同様のつくりの甕で, 肩に一条の沈線が巡る。白色砂粒を多く含み, 焼成良好である。外面は黒色異物が付着して黒光りし, 内面は淡茶灰色を呈する。29は小片反転図で, 復原口縁部径16cmを測る。口縁部はやや内彎し, 端部は斜め上方につまみ上げられる。肩はややナデ肩気味で横位の沈線が存在するが器面が荒れており詳細はわからない。内面は頸部のやや下から下位はヘラケズリを行い, 肩部の器厚は極端に薄くなり厚さ2mm程である。口縁部内外面はヨコナデをし, 頸部にわずかに刷毛目が残る, 沈線より下位は横位刷毛目調整が残る。胎土に白色砂粒・金雲母を含み, 焼成ふつう程度で, 外面は黒色異物が付着して黒光りし, 内面は淡茶灰色を呈する。30は陸橋部北側の長円形土壇で2ヶ所にわかれて出土した。体部中位付近の破片が26と共に出土している。口縁部径15cmを測り, 口縁部は中位で肥厚するため一見内彎気味に見える。胴部はヘラケズリのため器肉は薄く

III 立野遺跡A地区の調査



第31図 盃状穴実測図(1/4)

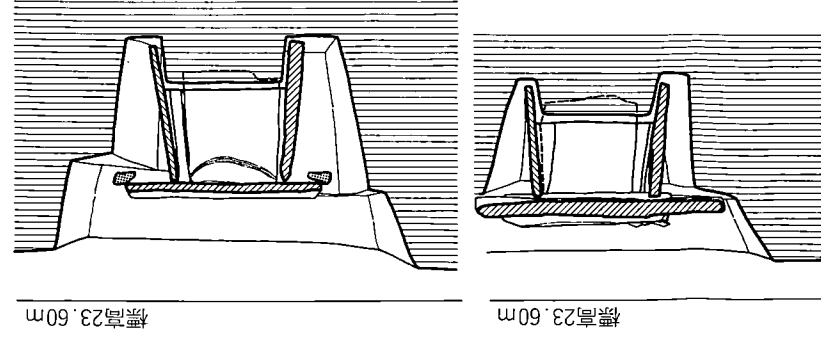
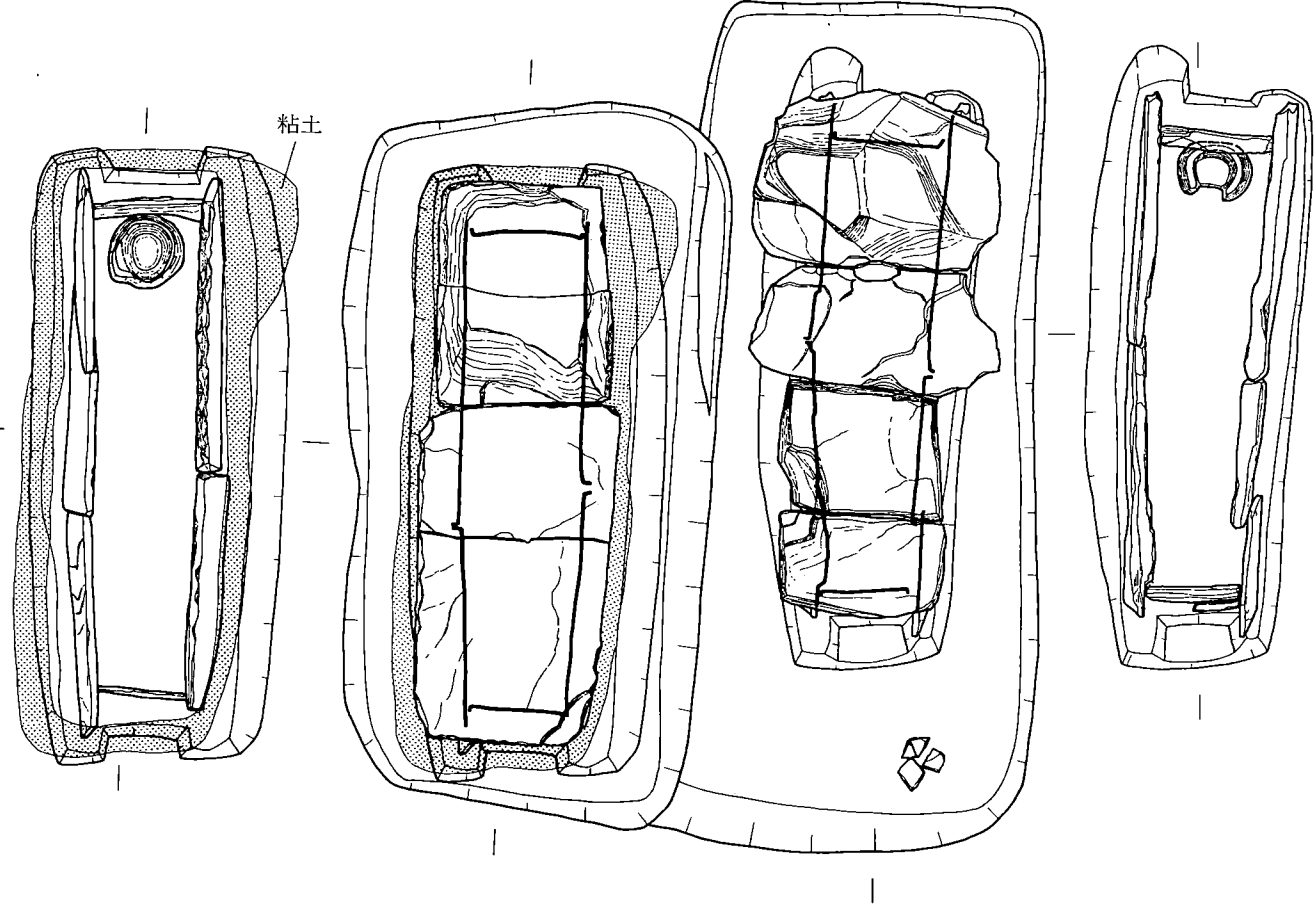
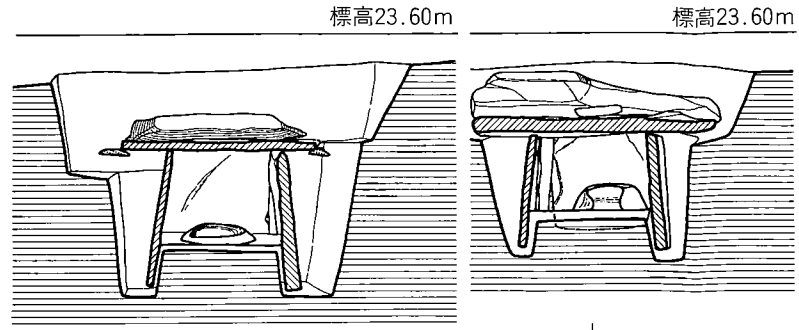
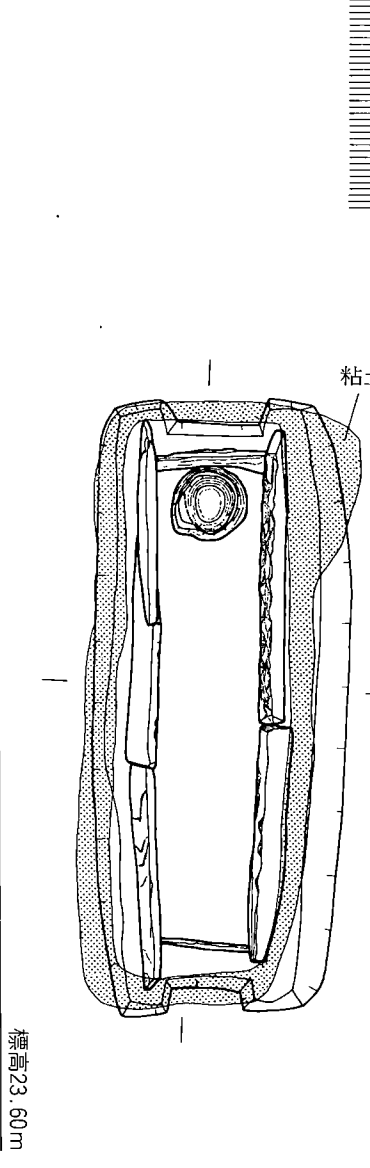
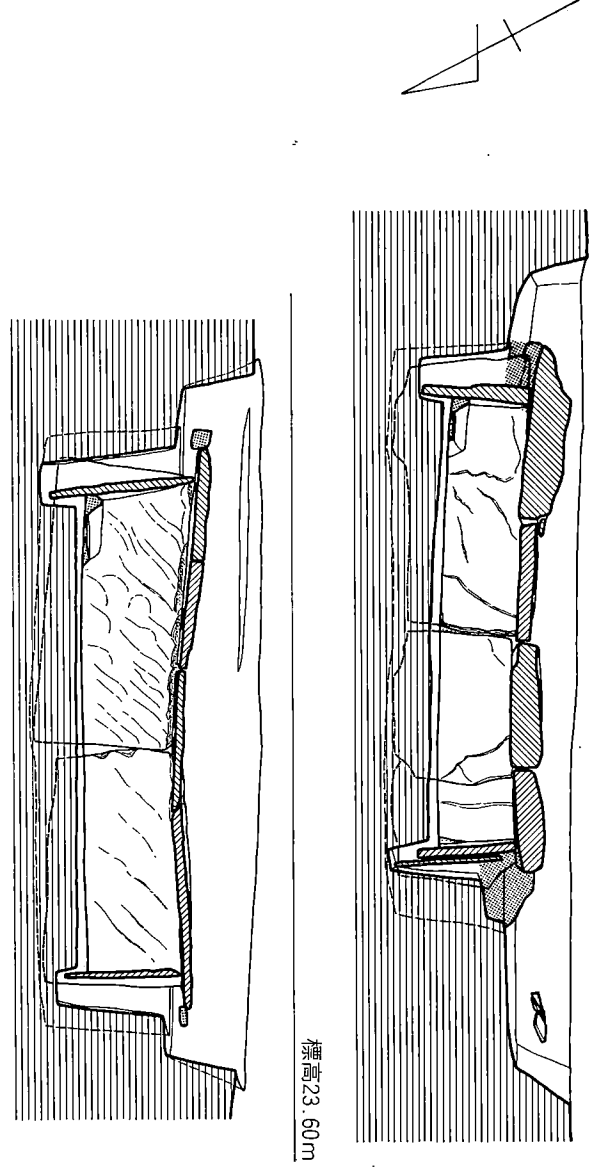
その棺材は柿原石で縦50.5cm, 幅22~28cm, 厚さ4~6cmを測る。幅広の方が天で、蓋石が架構された方にあたる。剝離しやすい石材のため、盃状穴か否か判断し難いものもあるが、それと判断できるものは11個で、棺材天場から16cmまでの範囲には見られない。穴の直径は3cm前後ではほぼ一定し、深さは5mm未満である。その配置は右斜め上方から左下にはほぼ並ぶように見受けられ、少なくとも2列はあるようである。

仕上げられている。肩に細い沈線が一巡し、その上位に不連続な蛇行した凹線状のものが存するが一巡するか否かは不明である。胎土・焼成・色調等は29と同様である。

壺(27・31) 31と同様な広口壺の底部片である。口縁部の極細片が1片あるが図示できない。内面は横位ヘラケズリで、外面は刷毛目調整がきれいにのこる。胎土に白色砂粒が多く目立ち、焼成良好で内面は暗灰~濃黒灰色、内面は淡茶灰~灰褐色を呈する。31は反転図で口縁部径18cm, 現存高22.2cmを測る。口縁部は中位から上はやや外反度を強め、端部は斜め上方にわずかにつまみ上げられている。体部内面は横位のヘラケズリを行い外面は縦位刷毛目の上から横位刷毛目調整を施す。胎土は白色砂粒が多く、焼成良好で淡茶灰色を基調とする。

盃状穴 (図版75, 第31図)

盃状穴の見られるのは、石棺の西長側壁の足位側から1番目の棺材外面である。よって、石棺の解体調査の時、棺材に付着した裏込めの土を除去した後に盃状穴に気付いた次第である。



第32图 7号方形周溝墓内部主体实测图(1/4)

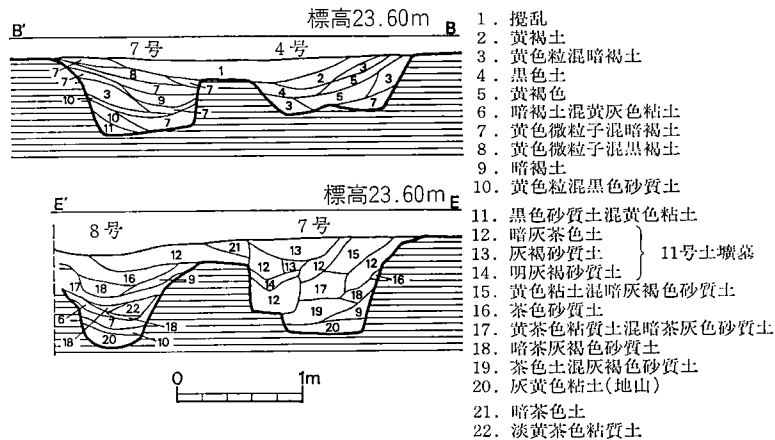
7号方形周溝墓 (図版21, 第34図)

4号周溝墓と並んで東側に存在する周溝墓で、東側は新しい溝で、南隅を歴史時代の土墳墓により攪乱されている。台状部の規模は東西10m前後、南北9m前後を測り、やや東西に幅広である。周溝は北溝中央で途切れて陸橋部を形成する。陸橋部の平面観は外からの入り口部は幅1.6mを測るが、台状部側へ0.5m程入った所から溝が張り出して幅が狭まり、台状部へ入った所で幅1mとなる。周溝幅は1~1.4m程で、他の周溝墓と同様に南溝は狭くつくられている。周溝底はほぼ平坦だが、東隅を除いた各隅部周辺には段落ちが存在する。周溝の深さは0.7~0.8mで、特に南溝埋土の土層断面には盛り土が流れ込んで堆積した状況が明瞭に観察される。本周溝墓も、6号周溝墓と同様に、陸橋部側を除いた三溝の外側に通路状のものが存在する。

内部主体 (図版22・23, 第32図)

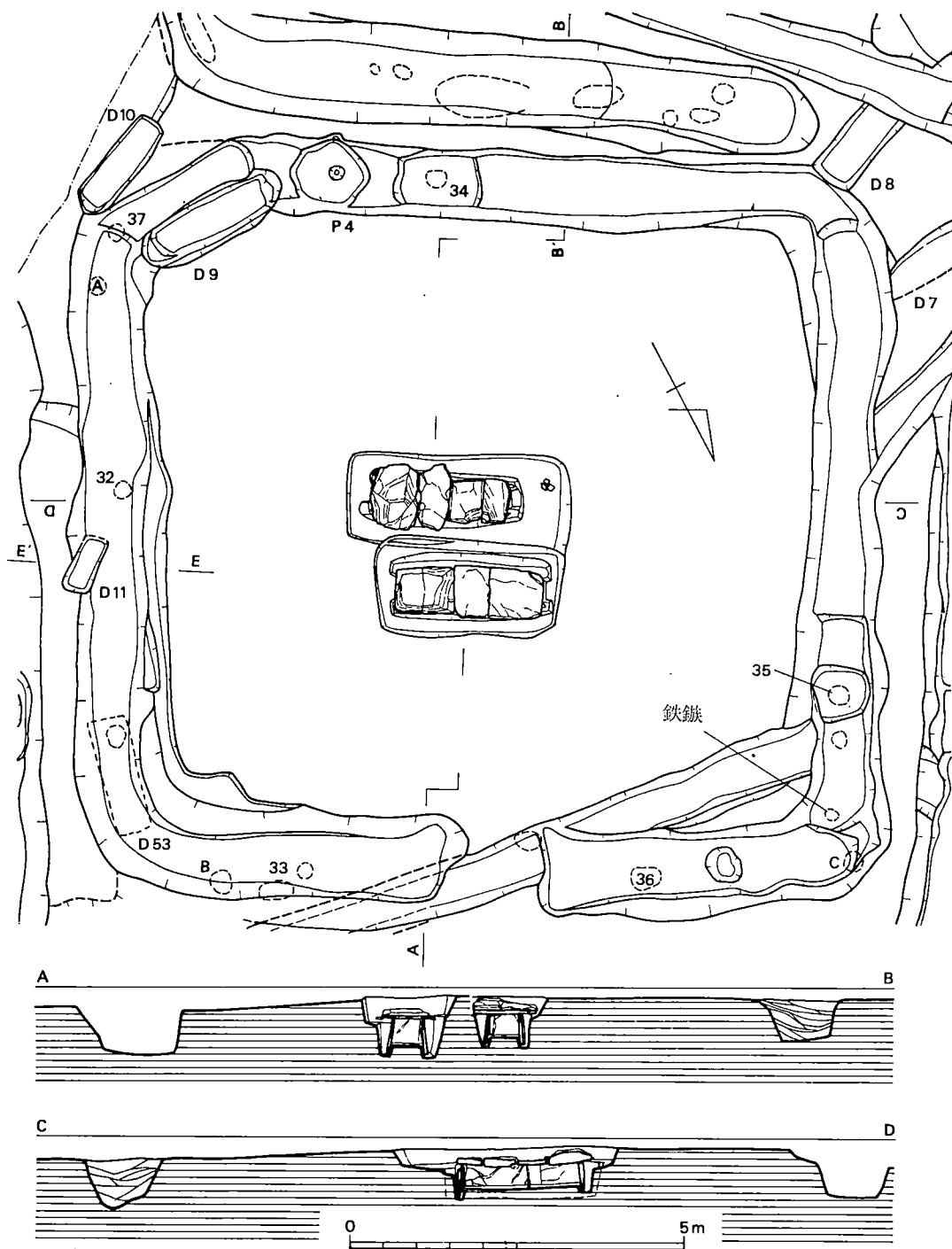
2基存在し、ともに箱式石棺である。両石棺の墓壙の切り合い関係から、台状部中央に1号主体が営まれ、続いて2号主体が営まれる。1号主体の遺構検出面での墓壙埋土は黄灰色粘土だけで、2号主体は黄灰色粘土に表土である暗褐色ブロックがまじる。これは1号主体の埋土に地山の粘土だけが特別に選ばれて使用され、埋葬後に封土を盛り、2号主体は当然ながら封土最上層の表土から掘り込まれ、埋壙埋土の上層には粘土に表土を混ぜたものを使用したことを物語っている。

1号主体 主軸方位をS-63°-Eにおく箱式石棺である。墓壙は二段掘りで主軸長3.37m、幅1.5m程を測り、長大なものである。石棺は墓壙の中央よりやや南側に片寄って構築されている。棺材は大きな柿原石を使用し、長側壁が小口壁を挟み込むように組んでいる。北側の長側壁と小口壁が組み合わさる部分は小口壁の幅に合わせて長側壁の石材をはつている。頭位



第33図 7号方形周溝墓土層図 (1/60)

III 立野遺跡A地区の調査



第34図 7号方形周溝墓実測図(1/00)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

は南東側で粘土枕が設置されている。棺内法は底面で主軸長1.78m、幅は頭位側で45cm、足位幅35cmで狭くなり、床面から蓋石下面までの高さは30cmである。棺内壁および蓋石下面は全面に赤色顔料を塗布している。なお、北西側の墓壇埋土中に、棺材整形時にできた破片を納めている。

第2主体 二段掘り墓壇の奥深くに構築された箱式石棺で主軸方位は、S-59°-Eを示す。墓壇は上端で主軸長2.75m、幅1.45mを測る。墓壇のほぼ中央に石棺が組まれ、1号主体と同様に、小口壁が長側壁に挟み込まれるようにつくられている。頭位は南東側で粘土枕が設置されている。棺内法は床面で主軸長1.9m、幅は頭位側で47cm、足位側で40cmを測り、足位側が狭くなる。床面から蓋石下面までの高さは37cmで、全体に1号主体よりも広い。内面は全体に赤色顔料を塗布している。棺材は全体に薄い柿原石を使用し、ノミではつった痕跡が随所に残る。なお、蓋石架構前に灰白色粘土をうすく敷いている。

出土遺物（図版22・23、第34図）

各周溝からまんべんなく土器が出土しているが、ブリッジの存在する北溝に集中する。出土層位は周溝底面から10~40cm位浮いており、暗褐~黒褐色系統の土の中に含まれる。また、北隅で床面より20cm程浮いて鉄鏃1点が出土している。

鉄器（図版72、第76図）

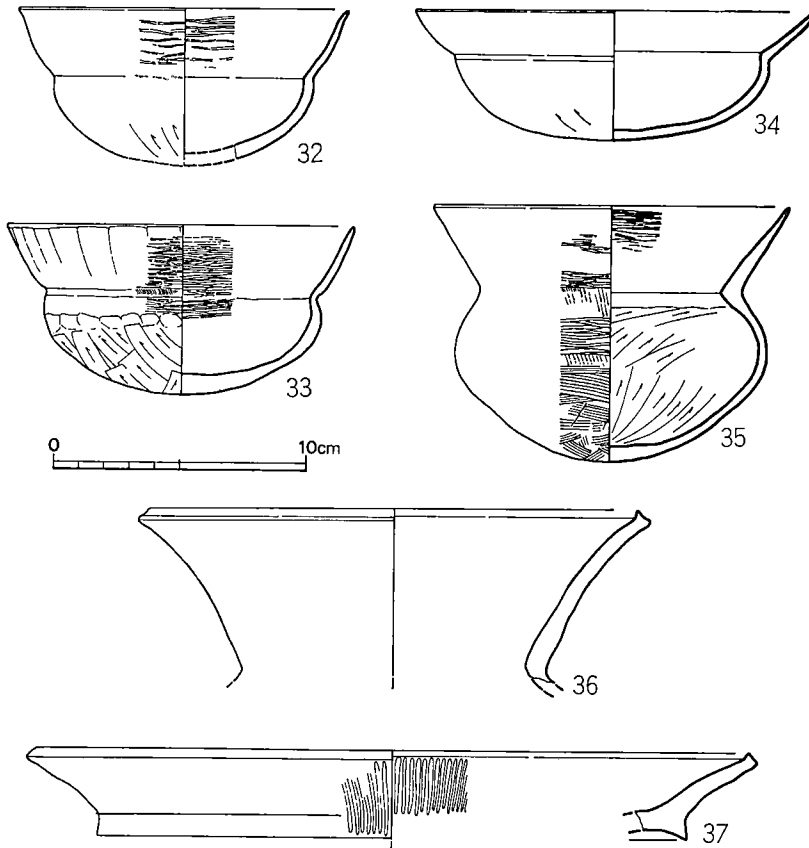
鉄鏃（4） 茎尻付近を欠失し、現存長8cmを測る両丸造り三角形式の鉄鏃で篋被が存する。

土師器（図版62、第35図）

実測できたのは埴4点、壺2点である。他は小片のため、器種すら推定できないものも存在する。第34図でA・B・Cと図示したもののうち、A・Bは広口壺の小破片で、Cは器種不明の小片群である。

埴（32~35） 32は小片からの反転図で復原口縁部径13cm、推定器高6.2cmを測る。口縁部は内彎し、端部はわずかに外反する。口縁部内外面は横位のヘラミガキを施し、胴部外面はヘラケズリを行う。胎土は白色砂粒を若干含むか精良で、焼成良好である。化粧土が施されたと思われる部分があり、赤茶色を呈する。33は口縁部径13.8cm、器高6.8cmを測る。口縁部は内彎し、内外面は細かなヘラミガキを施す。口縁部外面はヘラミガキに先だって縦位にヘラで軽く削ったのか、縦に純い稜線が見える。頸部の屈接部外面は細い刷毛目が残り、胴部上位は内外面ともヘラミガキされ、外面のヘラミガキ直下は指圧痕がのこり、それ以下はヘラケズリを行う。遺存度は悪いが優品で、胎土・焼成・色調等は32と同様で化粧土が施されている。34はほぼ完形品で口縁部径16cm、器高5.1cmを測る浅い埴である。内外面とも器面の剝落が著しく調整痕は残らない。底部にわずかにヘラケズリが残る。胎土は精良で、焼成は不明だが軟質化

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第35図 7号方形周溝墓出土土器実測図(1/3)

し、バインダー処理して取り上げた。明茶橙色を呈するが、化粧土を施したと思われる部分があり、赤茶色を呈する。35は胴部の1/3を欠失する以外は完形品で、口縁部径14cm、器高10.2cmを測る。口縁部は32~34のように内彎せず直線的で、先端に向かって厚みを減ずる。胴部最大径は中位より上にあり、底部はやや尖り底気味である。口縁部内面上半部はヘラミガキ痕が残り、同外面は荒い刷毛目の上にヘラミガキをまばらに行う。胴部内面はヘラミガキを行い外面は、上半部は口縁部と同様に荒い刷毛目の上からヘラミガキを行い、下半部は横位を基調とする刷毛目調整を行う。胎土・焼成・色調・化粧土については33と同様である。

壺(36, 37) 36は広口壺で口縁部径19cmを測る。口縁端部は上方につまみ上げられる。器面は風化し、調整痕は残らない。胎土は白色砂粒と金雲母片を含み、焼成は本来良かったようで、淡茶灰色を呈する。37は二重口縁壺の小片で反転図である。口縁部の推定径は28cm程である。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げられている。内外面は縦位の暗文がはいる。胎土に白色砂粒と金雲母片を多く含み、焼成良好で淡茶色を呈する。

8号方形周溝墓

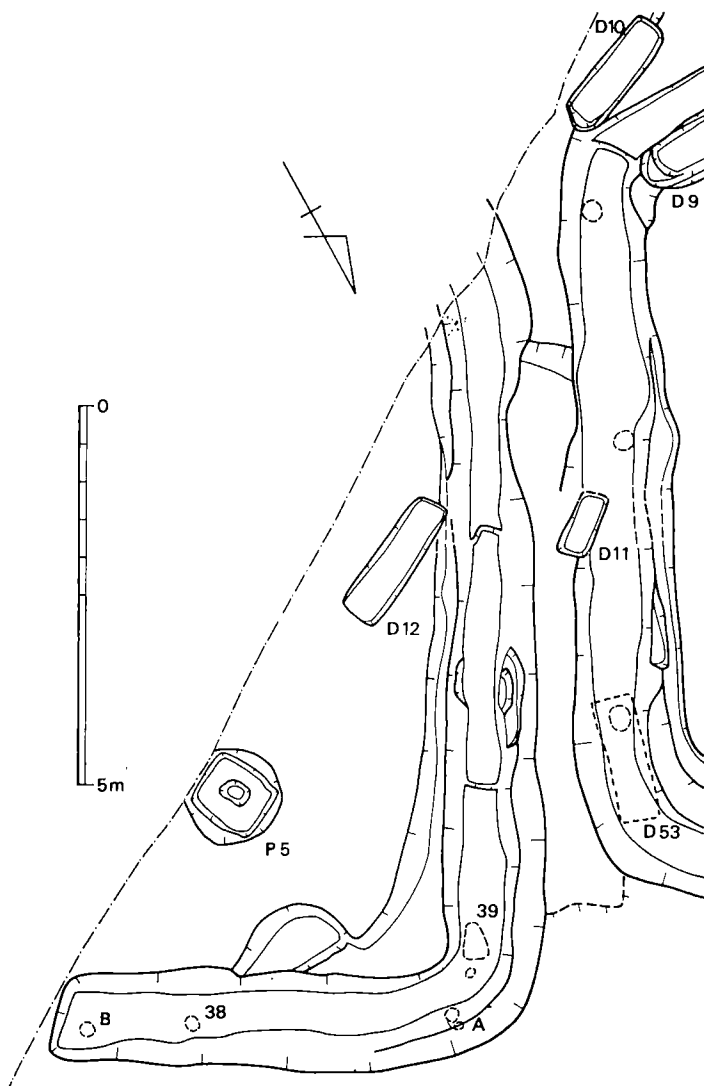
(図版21, 第36図)

7号周溝墓の南に位置し、その大半が調査区外にのびる。北隅角周辺は後世の攪乱がある。陸橋部が7号周溝墓と同様に北溝中央部に設置されていると想定すれば台状部の北辺長は約11m、また西溝南端部がほぼ隅角部直前のようなカーブを見せ、他の周溝墓の平面観から西辺長は10m程度と推定する。また、本周溝墓に直接には伴わないが、台状部に土壙墓1基(12号土壙墓)と5号土壙墓が存在する。本周溝墓も周溝土層断面の観察によれば、封土の存在を示唆するものである。なお、本周溝墓の大半が路線外にのびるため、主体部は調査区内にはない。

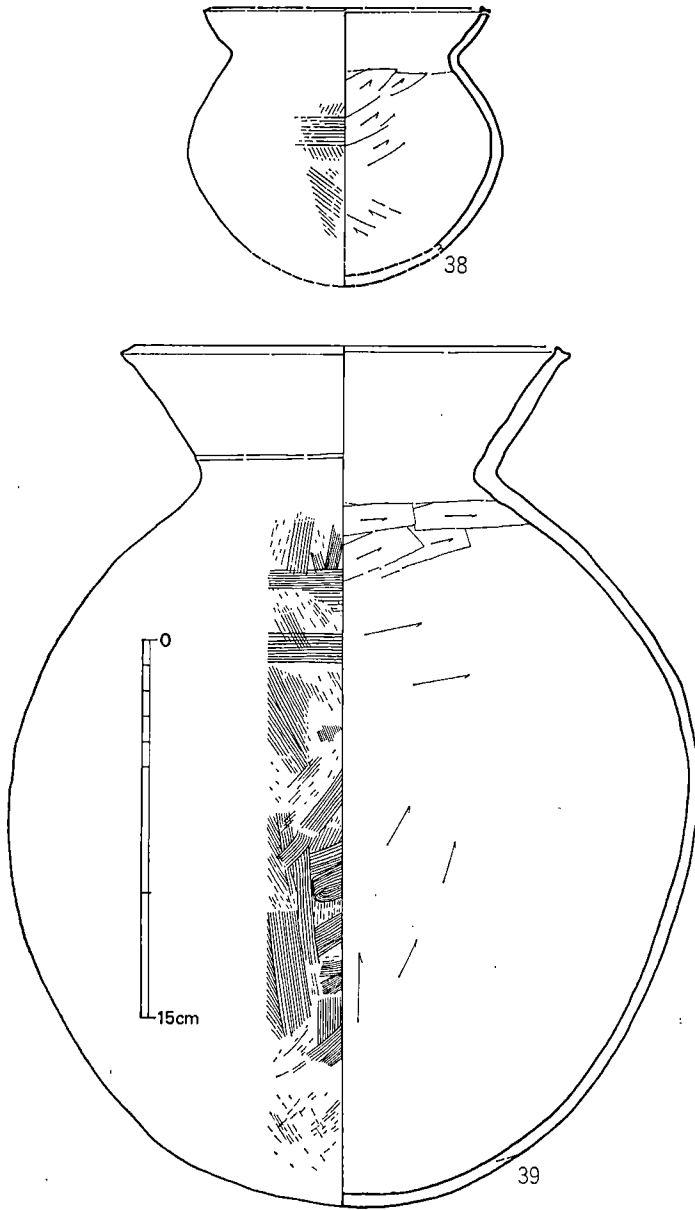
しかし、他の例から類推して、埋葬主体部は箱式石棺であったらうと考える。

出土遺物(図版26, 第36図)

周溝北隅から陸橋部の間で土師器を検出した。すべて、周溝底面から30cm以上浮いて、黒色土中から出土している。第36図中のAは39と、Bは38と同一器種で、あるいはおのおの同一個体の可能性があるが、細片のため不明である。



第36図 8号方形周溝墓夷測図(1/100)



第37図 8号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)

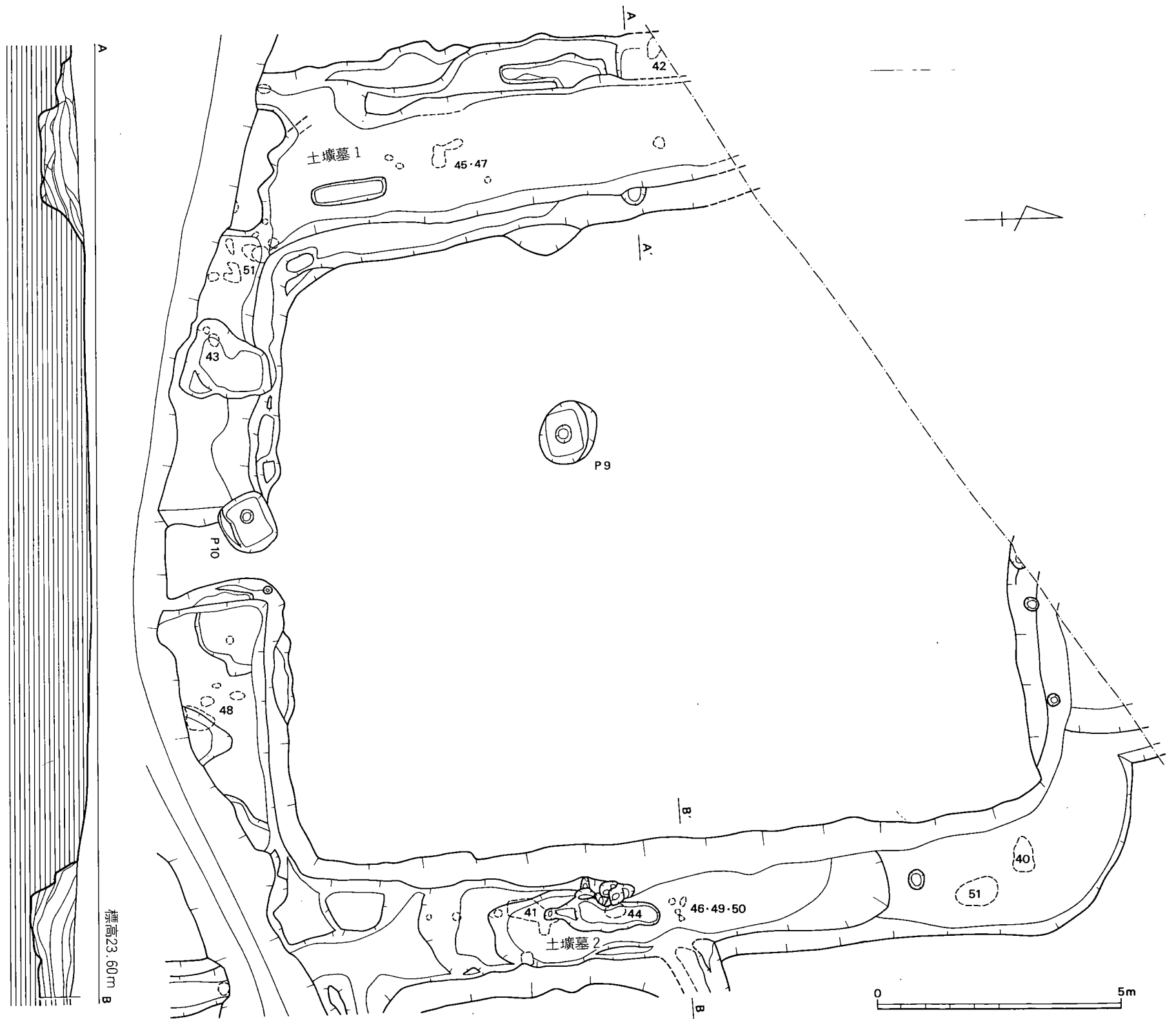
ヘラケズリ，外面は刷毛目調整を行うが，刷毛目の方向は一定せず，曲線を描く部分が多々ある。胎土は白色砂粒，金雲母片を含み，焼成良好で淡茶灰色を呈し，胴部下半に黒斑がある。

土師器

(図版62, 第37図)

甕 (38) 布留系の小型甕で，口唇部と底部を欠失する。口縁部の推定径11cm，同器高は11cm程度であろう。胴は球胴で最大径は中位にあり12.5cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ，胴部内面はヘラケズリ，外面は横位・斜位の刷毛目が残る。胎土に白色砂粒を多く含み，焼成は不良でバインダー処理して取りあげた。淡茶灰色～茶褐色を呈する。

壺 (39) 口縁部径17cm，器高34cmを測る広口壺で，口縁部はつまみ上げられ古い様相を呈するが，胴部最大径は中位にあり，底部は大きな丸底で，全体に底部の比重が重く下ぶくれの感じの土器である。口縁部内外面はヨコナデ，胴部内面は



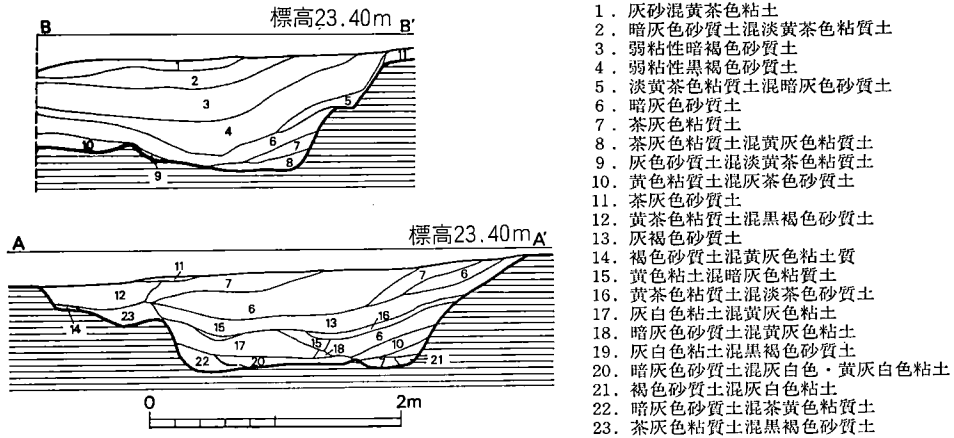
第38图 9号方形周溝墓实测图 (1/100)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

9号方形周溝墓 (図版27, 第38図)

立野遺跡A地区最大の方形周溝墓で、東支群の最も北寄りに位置する。東溝が12, 13号周溝墓と切り合っている。北周溝部分は、すでに公団に引き渡していた為に、調査前に側道工事が完了し、調査はできなかった。また、南溝部分も、試掘調査をすることなく公団に渡していたため、排水溝が掘られ、このため南溝の立ち上がりは破壊されて全く遺存しない。

台状部の規模は東西13m, 南北15m程で、地山面の標高は台状部中央に向かって高くなる。周溝は一巡せず、南溝中央に幅1.2m程の陸橋部が存在する。周溝幅は他の方形周溝墓と比較して格段に広く、西溝で幅4m, 深さ0.8m, 東溝で幅2m, 深さ0.9~1mを測る。しかし、側道下の北西隅を除いた他の3隅は浅くなっており、特に北東隅は深さ20cm前後と極端に浅くなる。また北溝東側では北にのびそうな溝を検出し、あるいは他に1基の周溝墓が存在する可能性を残している。埋葬主体部はその痕跡すら確認することができなかった。おそらく、封土中にあったものと考えられる。なお、随葬墓として西溝南側および東溝中央部に土壙墓各1基を検出した。



第39図 9号方形周溝墓土層図 (1/60)

出土遺物 (図版28, 第38図, 付図6)

北溝を除いた3つの周溝からまんべんなく土器が出土している。47が溝底から30cm, 51が同じく10cm~20cm程浮いて出土した他は、ほぼ溝底直上か、浮いても5cm内外である。このような土器の出土状況は他の方形周溝墓には見られない。また鉄器が3点出土している。

鉄器 (図版72, 第76図)

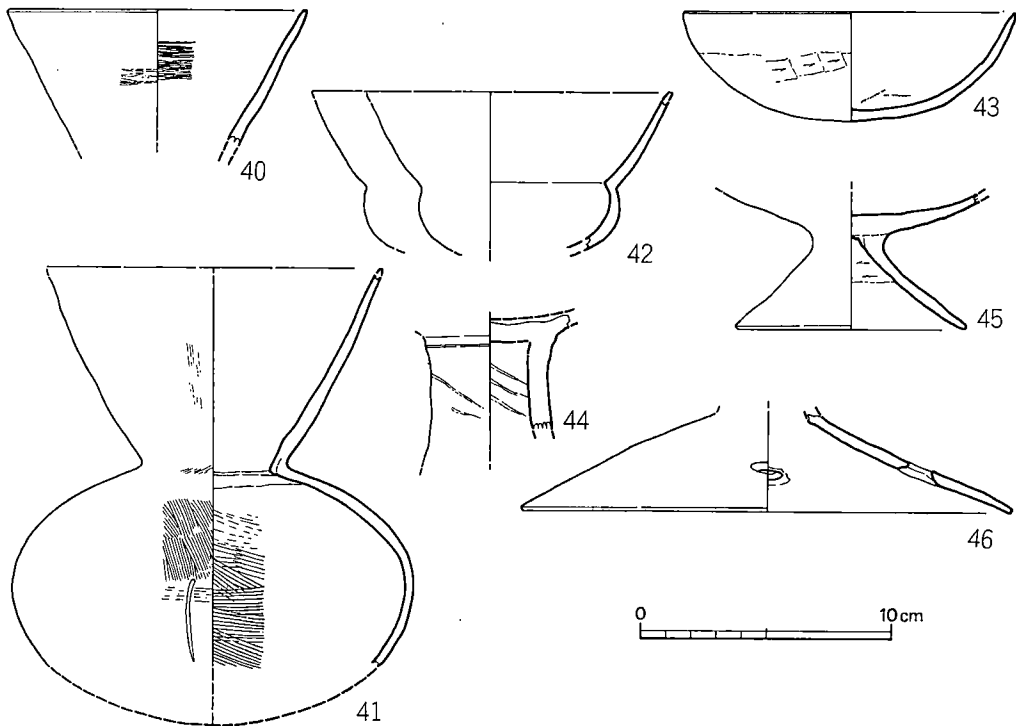
鉄 鍔 (5) 周溝南東隅で溝底より20cm前後浮いて暗褐色系統の埋土中で検出した。茎を欠失するが、現存長6.5cm, 身の最大幅2.4cmを測る。身の断面は片丸状で刃部長3.5cmである。

刀 子 (7) 高坏46北方から出土した刀子状の小片で、現存長3.5cm, 身幅約2cm, 茎幅1.1

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

cmを測る。茎尻の形状は銹のため、図のように完結するか否か不明である。また、身に明瞭な刃部は見られない。あるいは製作途中のものかとも考えられるが、遺存状態が悪く何とも決し難い。

不明鉄器（6） 遺存部の厚さと幅から刀子の茎かとも考えられる。



第40図 9号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)

土師器（図版62・63，第40～42図）

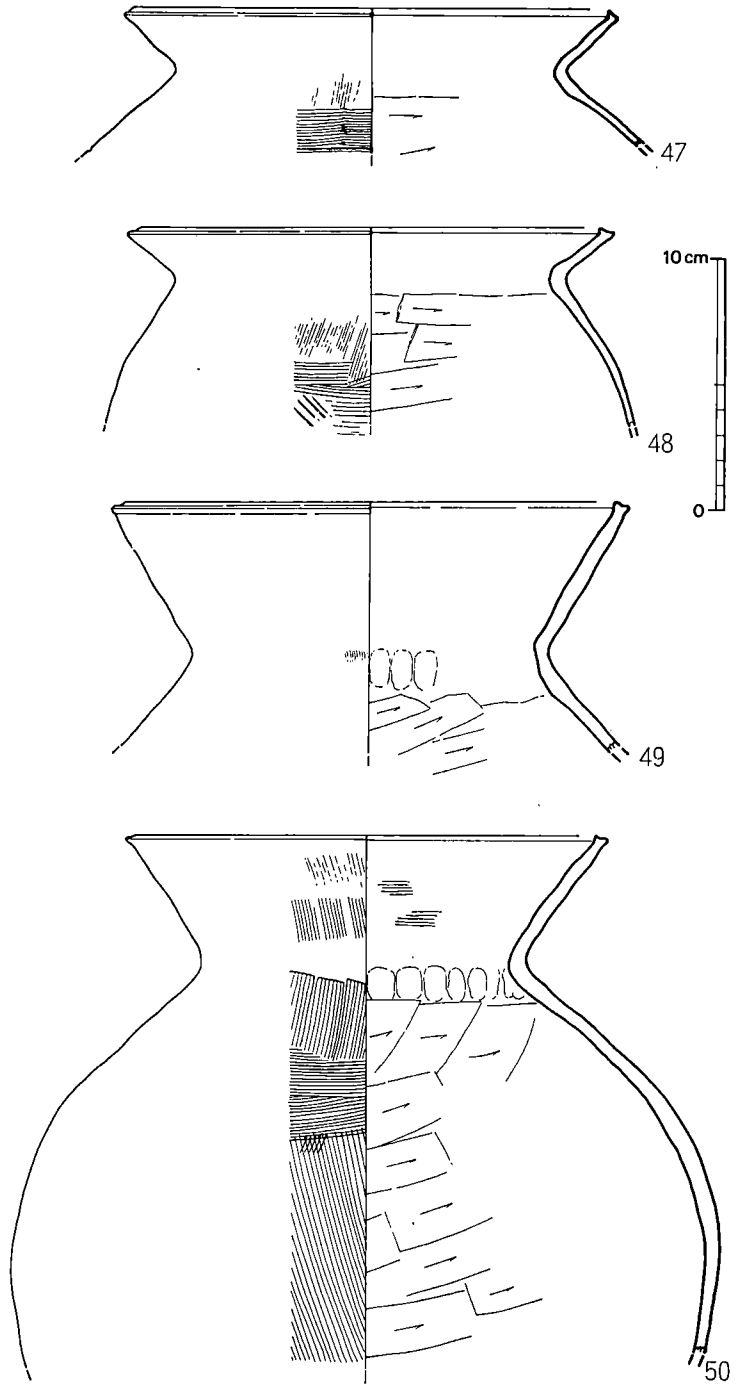
器種は既述の周溝墓と異なって割とバラエティに富み，埴，高坏，坏，甕，壺が出土している。図示できるのは後述する12個体である。

埴（40～41） 40は周溝北東隅で溝底から10cm程浮いて出土した。胴部を欠くが，口縁部は全体を伺うに十分で口縁部径12cmを測り，内外面はヘラミガキをされる。器面が荒れているので残りはよくない。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は器面の遺存度のよい部分から判断すると，光沢のある明茶色を呈し，器面は平滑であったようである。41は東溝南半部で溝底よりやや浮いて出土した。口唇部と底部を欠くが，口縁部径13cm強，器高18cm程に復原される。胴部は玉ネギ状を呈し，頸部は縮まって口縁部はやや内彎しながら大きく開く。口縁部は風化が進行しているが外面にわずかに刷毛目が残る。胴部内外面はともに刷毛目調整を行う。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

胴部外面の下半に、縦位に1条のヘラ描き沈線がはいる。胎土は白色砂粒を多く含み焼成良好である。本来は化粧土を施していたようで部分的に明赤茶色を呈し器面は平滑である。42は西溝の一段高くなった部分から出土した。極小片のため、径、傾きは不明である。器面が荒れ、調整も不明である。胎土は割と精良で焼成良好でくすんだ茶橙色を呈する。

坏(43) 南溝ほぼ中央の落ち込みで出土し、溝底にほぼ密着していた。ほぼ完形で口縁部径13.2cm, 器高4.4cmを測る。内外面とも貫入状の細かいヒビ割れが見られ、器面が少し荒れているが、底部外面はヘラケズリされていたようである。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好でくすんだ茶褐色



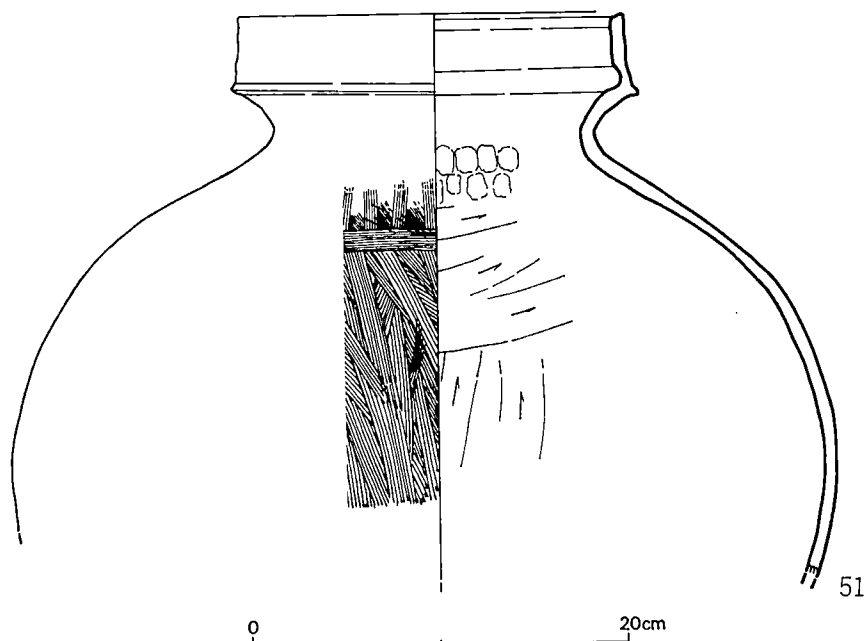
第41図 9号方形周溝墓出土土器実測図②(1/3)

III 立野遺跡A地区の調査

を呈し、底部付近に大きな黒斑がある。

高 坏 (44~46) 44は小片で全形は不明だが弥生土器と考えられる。45は西溝南半部の溝底上で検出した。便宜上高坏に含めて記述するが脚台付の鉢形土器になるかも知れない。脚はラップ状に開き裾部径9cm, 現存高5.5cmを測る。器面が荒れて調整は不明である。胎土は比較的精良で、焼成は不良なため軟弱でバインダー処理して取りあげた。明茶色を呈する。46は東溝中央で出土した、脚柱部の短い高坏になるだろう。脚裾部は大きく開き、裾部径19.6cmを測り、4つの円孔を配する。器面が荒れて、調整は不明である。胎土は精良であるが、検出時に軟弱であったのでバインダー処理して取り上げた。明淡茶灰色を呈するが、化粧土のためか赤味を帯びて、平滑な部分がある。

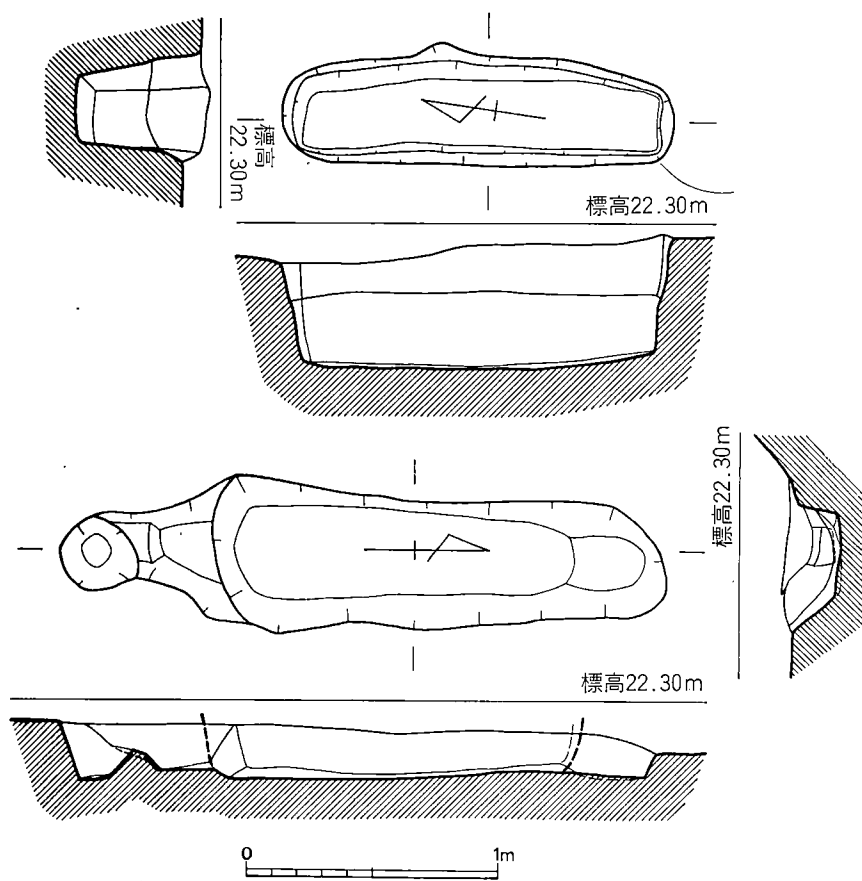
甕 (47~48) 45と共に溝底から出土した甕の小片で反転図である。復原口径19cm, 現存高5.3cmを測る。他に胴部、底部の互いに接合しない小片が20片程あり、その全ての内面に赤色顔料が付着し、赤色顔料を入れる容器であった可能性が強い。口縁部は外反し、直線的で端部は上方につまみ上げられている。器厚は薄い。器面が少し荒れており、内面のヘラケズリはわずかに観察される程度で、外面も横位刷毛目はよく残る。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成はふつう程度でくすんだ淡茶灰色を呈する。48も小片からの反転図である。復原した口縁部径18cm, 現存高7.8cm程を測る。胴部内面は横位ヘラケズリを行い、外面は縦位横位の刷毛目調整を行うが、横位刷毛目の下にタタキ目かと思われるものがあるが、器面が少し荒れているため不明である。ただし、刷毛目とするには、本土器の刷毛目調整痕と比べて荒すぎる。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成は不良でモロく淡茶灰色ないし、くすんだ淡茶灰褐色を呈する。



第42図 9号方形周溝墓出土土器③実測図 (1/4)

III 立野遺跡A地区の調査

壺 (49~51) 49, 50の広口壺は46と共に出土した。49は小片の反転図である。復原した口縁部径19.5cm, 現存高10cm程を測る。器面が荒れ, 外面は頸部に刷毛目がわずかに残る程度である。内面は頸部よりやや下位からヘラケズリを行う。胎土は多量の白色砂粒の中に金雲母片を含み, 焼成ふつう程度で淡茶灰色を呈する。50は口縁部径18.3cm, 現存高21.5cmを測る。口縁部内外面に刷毛目が残る, 頸部内面は指圧痕が一巡し, その下位はヘラケズリを行う。胴部は縦位刷毛目の上から横位刷毛目調整を行う。胎土に白色砂粒を多く含み, 焼成良好で, 外面は淡茶灰色, 内面は暗褐色を呈する。51は山陰系の二重口縁壺で, 口径18cm, 現存高30cmを測る。口縁部はやや内傾し, 擬口縁状の部分との接合部はつよいナデつけの為に厚みを減ずる。頸部内面は2段にわたって指圧痕が残る, それより下位の胴部はヘラケズリされる。胴部外面は縦, 斜位刷毛目の上から横位刷毛目調整を行う。胎土は白色砂粒を多く含み, 焼成良好で淡茶色を呈する。なお, この壺の大部分は周溝南隅から出土したが, これに接合する破片が1片だけ北隅から出土している。



第43図 9号方形周溝墓内随葬壺

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

随葬墓（図版28，第43図）

西溝南端部および東溝中央部溝底に各1基の木蓋土墳墓を検出した。

土墳墓1 主軸をS-9°-Eにおく木蓋土墳墓である。床面は南側が少し高くなっており、頭位は南側だと推定する。床面で主軸長1.41m、幅25cm前後を測り、深さは50cm程度である。土墳墓内の埋土は周溝底埋土と同じで、地山の黄色土粒・ブロックを主体とし、若干の暗褐色を含む土であった。よって、周溝掘削後、間もなく営まれたものと推測される。副葬品はない。

土墳墓2 主軸をほぼ真南北におく。南が幅広く、頭位は南側だと推測する。床面で主軸長1.35m、幅は南で36cm、北で27cmを測る。深さは現状で20cm程である。浅いことから、1号墓と違って溝底がやや埋まった時点で営まれたのではないかとも考えられ、本土墳墓上層で供献土器を検出していることから、その可能性は十分に考えられる。副葬品はない。

10号方形周溝墓（図版29，第45図）

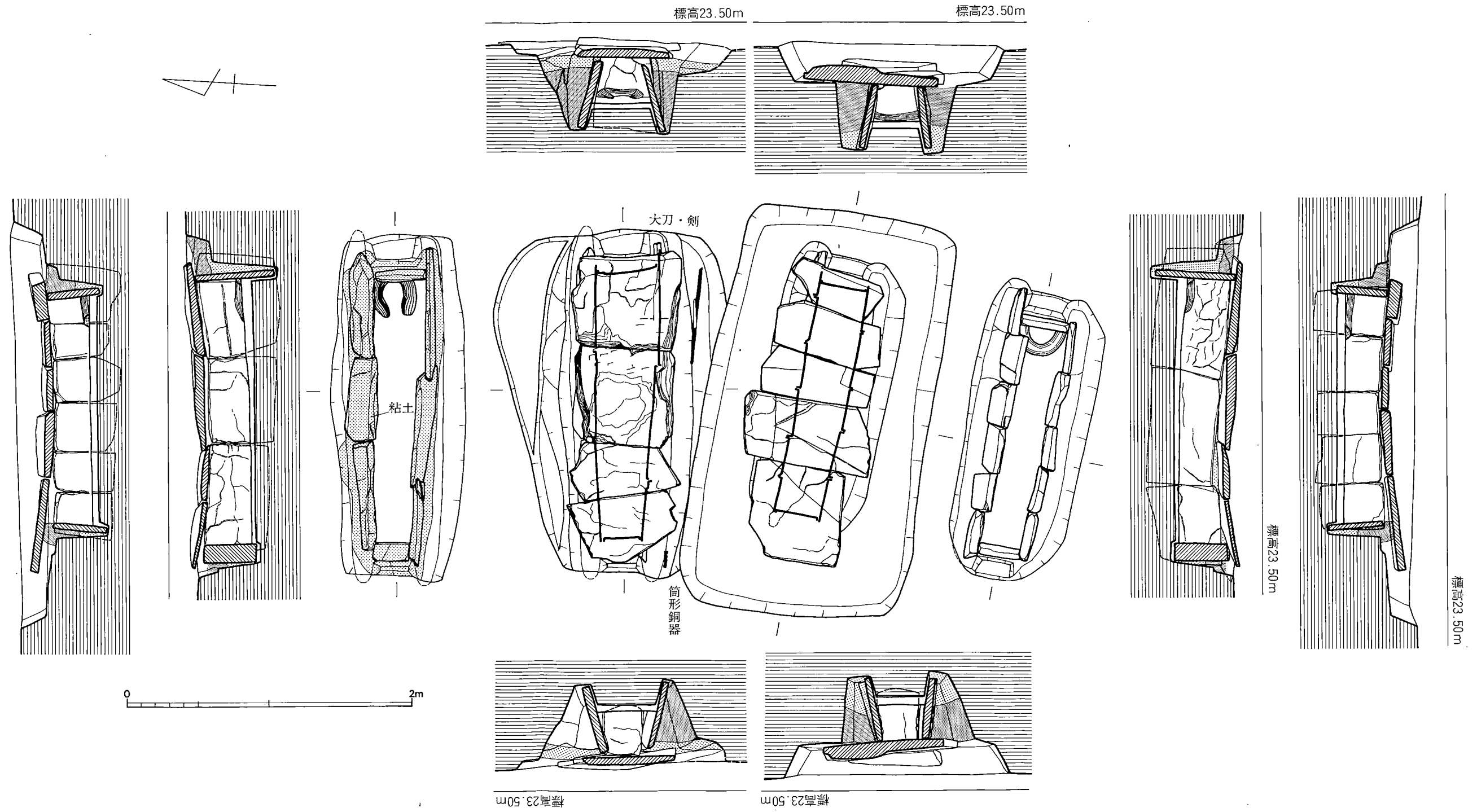
9号周溝墓のすぐ南に構築され、東側は11号周溝墓に切られる。また、西溝の外縁ラインは9号周溝墓のそれと一致し、両周溝墓は計画的に構築されたことが伺える。北溝外縁ラインは排水溝に破壊され、東南隅部は浅いが大きな攪乱があった。台状部の規模は東西9.5m前後、南北9mで東西にわずかに幅広となっている。幅1~1.5mの周溝が巡り、南溝中央で途切れて幅0.8m程の陸橋部を形成する。北溝は幅が狭く浅いが他の3溝は深く、東溝が80cm前後、南溝、西溝は50~60cmである。また、陸橋部の両側は一段深く掘り込まれた落ち込みが存在するが、埋葬遺構と判断できる積極的な根拠は持ち合わせていない。

内部主体（図版30・31，第44図）

台状部の中央よりやや北側に第1主体が、その南に第1主体の墓壇南辺を切って第2主体が存在する。第1主体が中央に存しないことは、第2主体が構築されることをあらかじめ予定していたためと考えられ、内部主体の計画的構築を示している。

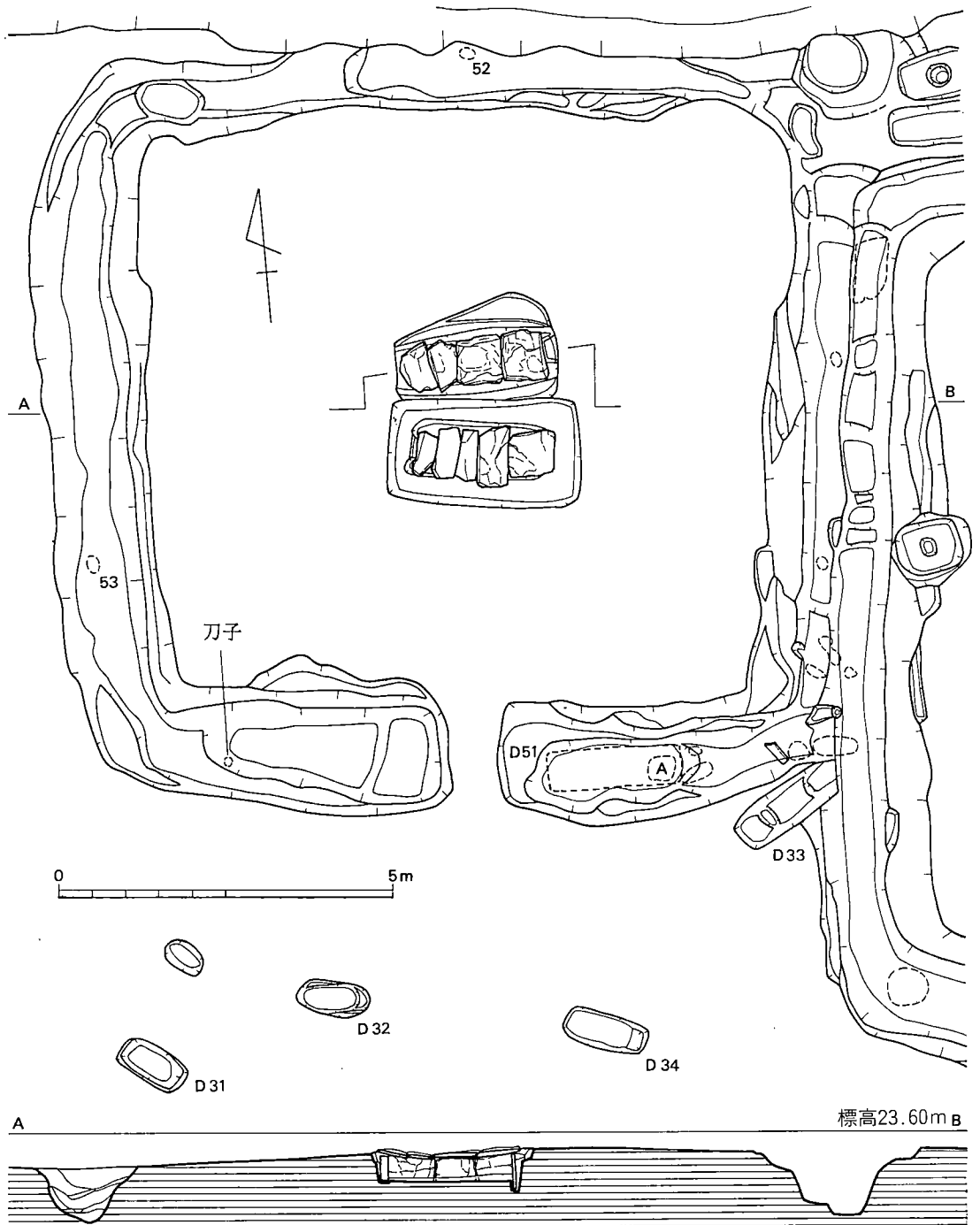
第1主体 二段掘りの墓壇内に安置された箱式石棺で主軸をN-86°-Eにおく。墓壇の規模は上端で主軸長2.42m、幅は1.35m程である。石棺棺材は柿原石を使用し、長側壁が小口壁を挟むように組み立てられる。頭位は東側で粘土枕を設置している。壁内寸法は床面で主軸長1.86m、幅35cm程だが足位側が狭い。床面から蓋石下面までは32cmで、側板が内傾しているため石棺の横断面は台形を呈する。墓壇と棺材との間の空間は下層に黄色粘質土をその上に白灰色粘土をつめている。棺内は全面に赤色顔料を塗布する。なお、閉棺後に筒形銅器、鎗、鉄刀を副葬している。

第2主体 主軸長2.9m、幅1.58mの長大な二段墓りの墓壇内に組まれた箱式石墓で、N-82°-Eに主軸をおく。掘方は第1主体よりも深く掘り込まれ、石棺床面は第1主体に比べて



第44图 10号方形周溝墓内部主体实测图 (1/30)

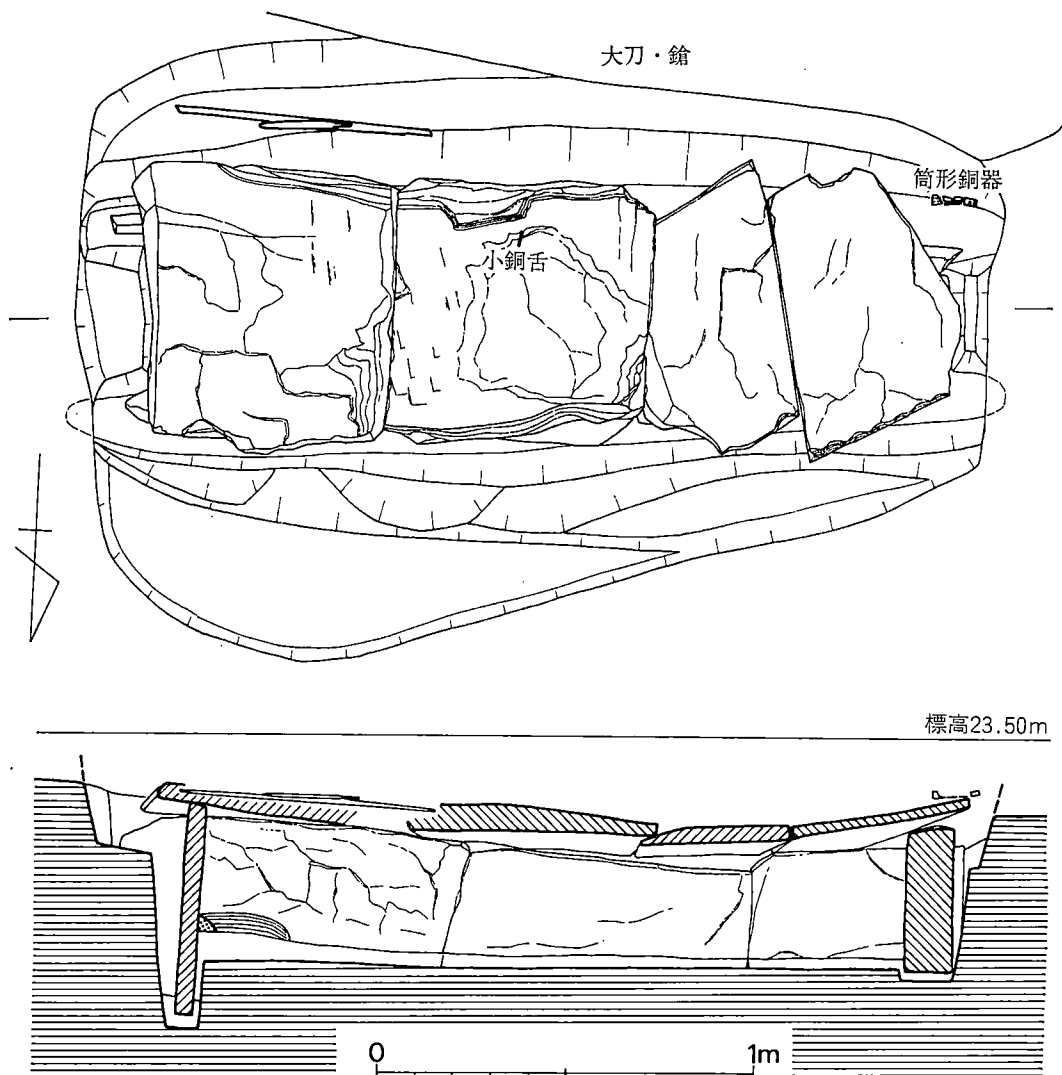
Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第45図 10号方形周溝墓実測図 (1/100)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

10cm程低い位置にある。頭位は東で粘土枕を設置する。棺内寸法は主軸長1.62m、幅35cmを側り、頭位と足位側の幅にあまり差はない。床面から蓋石下面までの高さは頭、足位部分で30cmを超え、中央で23cmを測り、中央部分の蓋石が低くなっている。棺内は全面に赤色顔料を塗布している。石棺壁体と墓壙との間の空間は第1主体と同様に黄色粘土質土と白灰色粘土をつめている。



第46図 10号方形周溝墓第1主体遺物出土状態実測図 (1/20)

出土遺物

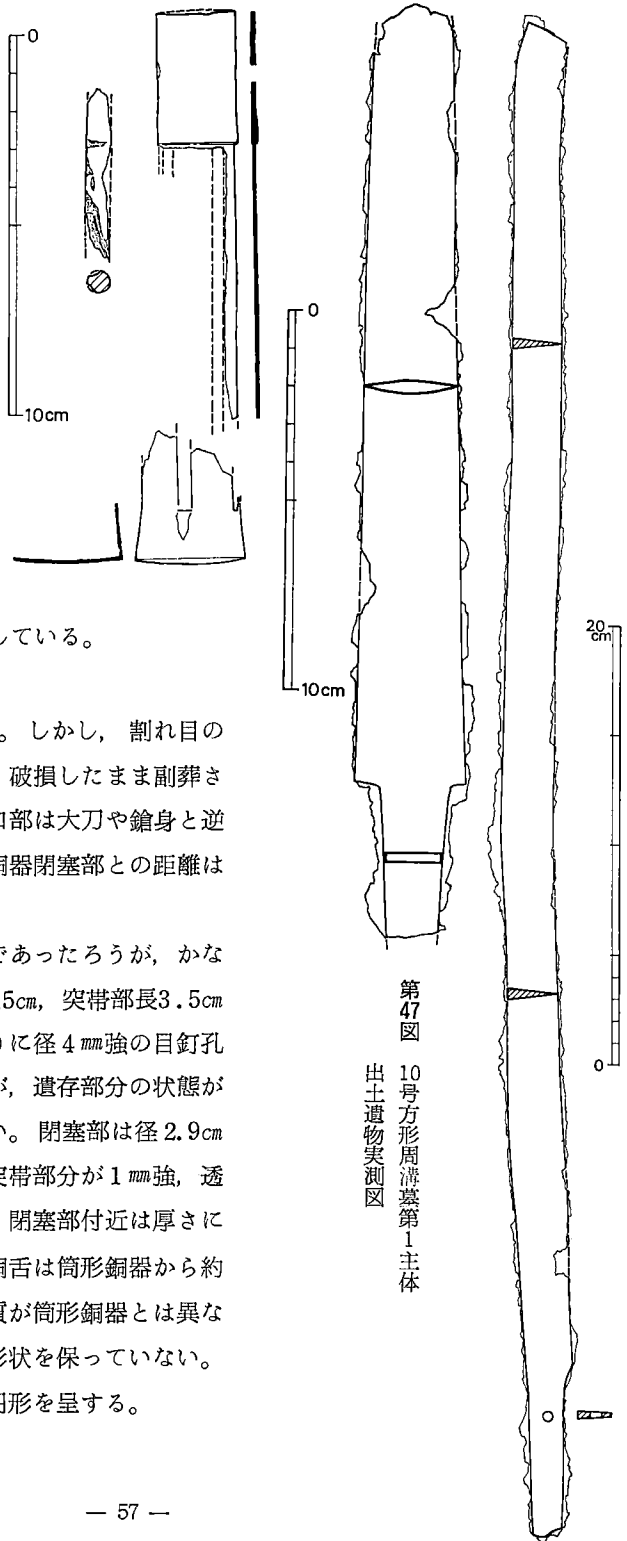
(図版32・33, 第45・46図)

第1 主体の 棺外 副葬品として、墓壙南辺側から大刀、鎗、筒形銅器が各1点出土している。周溝内の 供献土器の量は少なく、わずか2個体である。ただし、東接する11号周溝墓西溝に切られており、この部分から出土した土器のうち10号周溝墓に伴う可能性のあるものもあるが、とりあえず10号周溝墓に確実に伴うものだけを取りあげる。また、陸橋部西側で、溝底から15cm浮いて刀子片が1点出土している。

副葬品 (図版74, 第47図)

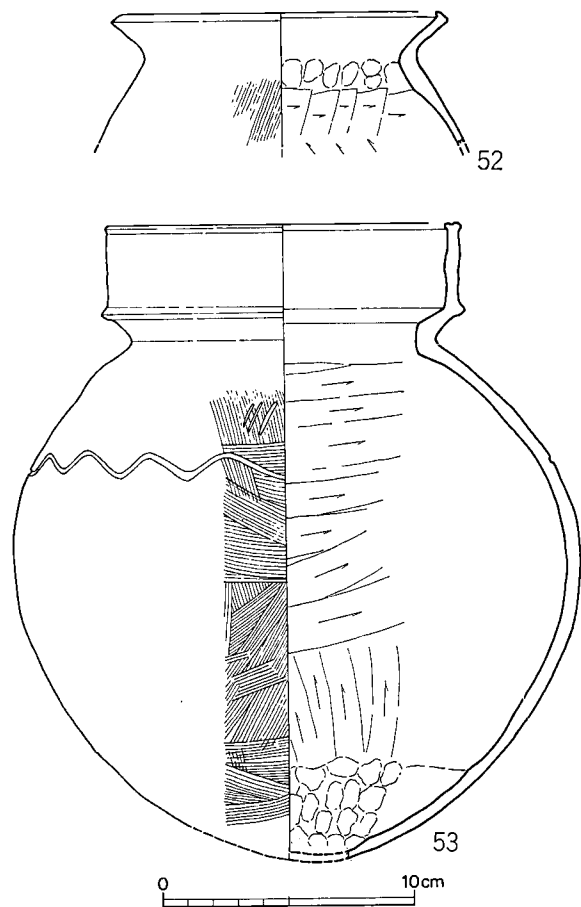
筒形銅器 検出時に破損していた。しかし、割れ目の大部分にすでに緑青をふいており、破損したまま副葬された可能性がある。筒形銅器の開口部は大刀や鎗身と逆方を向いており、鎗の茎尻と筒形銅器閉塞部との距離は155cmである。

筒形銅器は青銅製で良質のものであったろうが、かなり錆がふいている。開口端部径2.15cm、突帯部長3.5cmで、この中央位よりやや開口部寄りに径4mm強の目釘孔が一對ある。透しは4ヶ所にあるが、遺存部分の状態が悪く二段透しか否かは判断できない。閉塞部は径2.9cmでやや磨滅の痕跡がある。厚さは突帯部分が1mm強、透し孔を配した部分が0.6~0.7mmで、閉塞部付近は厚さに差があり、0.7~1mmである。小銅舌は筒形銅器から約110cm離れて東側で出土した。銅質が筒形銅器とは異なるようで、風化がはげしく本来の形状を保っていない。現状長4.6cmで断面は径6.5mm程の円形を呈する。



第47図
10号方形周溝墓第1主体
出土遺物実測図

III 立野遺跡A地区の調査



第48図 10号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)

茎の短い刀子で、同様例は 9号周溝墓からも出土している。平面観は全体にやや外反りである。

土師器 (図版63・64, 第48図)

壺 (52・53) 52は口径13cm, 現存高5.2cmを測る小型の壺である。口縁部は内彎せず, 端部は斜め上方につまみあげられる。口縁部内外面はヨコナデシ, 内面は頸部付近に指圧痕を残し, それより下位はヘラケズリを行う。外面は刷毛目がわずかに残る。胎土に白色砂粒を多く含み, 焼成は甘く淡茶灰色を呈する。内外面とも, 赤色顔料が付着した痕跡があり, 赤色顔料の容器であった可能性がある。53は底部の一部を欠くがほぼ完形品である。球胴で口縁部はほぼ直立し, 端部は中央が凹んでいる。口縁部径13cm, 器高25.3cmに復原される。口縁部内外面はヨコナデシ, 内面は頸部の一段下がった部分からヘラケズリを行い, 底部に指頭圧痕が残る。外面は刷毛目調整を行い, 肩からやや下がった部分に波形沈線を巡らし, その上位にヘラ

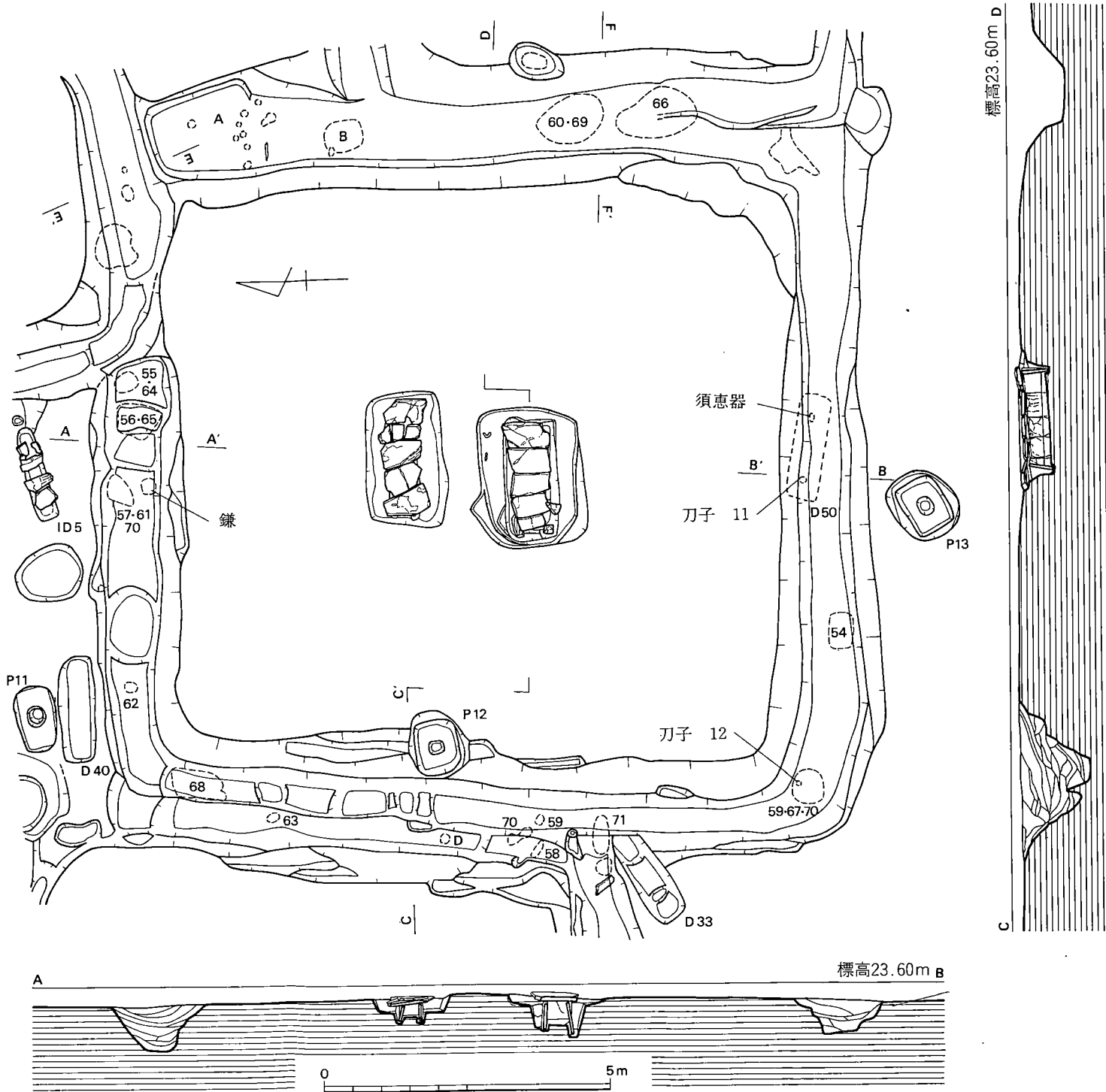
大刀 全長69cmを測る内反り気味の大刀である。身の長さは60cm, 幅は22~23mmであるが関付近はやや狭くなる。茎は短く鉄銹のため茎尻の形状に不明な部分がある。また, 目釘孔は関寄りに一つ存在する。切先にはふくらはなく先端が刃部側に少し届曲している。木質の銹着は全くなく, 抜き身のまま副葬されていたようである。

鎧身 切先と茎尻を欠き, 現存長24.5cm, 身の幅2.2cm~3cmを測る。刃部長は22cmを少し超える程度と推測され, 全長で30cmを超えることはなかろう。身の断面は凸レンズ状で鎧は通らず, 茎に目釘孔は確認できない。

周溝内出土遺物

鉄器 (図版72, 第76図)

刀子 (8) 現存長7cm, 身幅1.4cm, 茎長1.8cm, 同幅1cmを測る



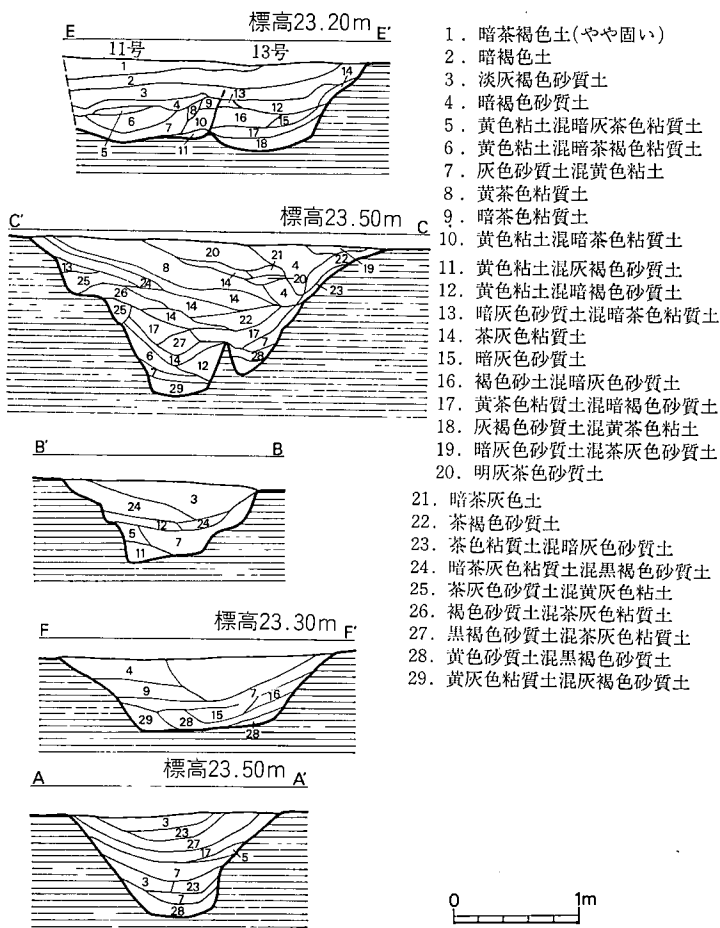
第49图 11号方形周溝墓実測图 (1/100)

Ⅲ・立野遺跡A地区の調査

により左下がりの短いへら描沈線を3本入れる。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成は不良で軟弱なのでバインダー処理してとりあげた。暗茶灰褐色を呈する。

11号方形周溝墓 (図版34, 第49図)

10号と14号周溝墓の間に構築され、10, 13, 14号周溝墓の周溝を切っている。周溝の各辺はほぼ東西・南北方向にのっている。台状部の規模は東西約10m, 南北約11mで南北にやや幅広い。周溝は北東隅で途切れて幅3m程の陸橋部を形成する。周溝幅は1.5~2mで、西溝は深さ約1.2mで最も深く、他の周溝は0.6~0.8mである。周溝底は東, 南溝はほぼ平坦だが西溝北半から北溝は段落ちが多く存在する。周溝埋土は下層に地山を主体とした褐色系統の土が、中層以上は暗褐色系統の層が推積している。供献土器は溝底から30cm前後浮いて暗褐色系統の土層から出土するが多い。



第50図 11号方形周溝墓土層図 (1/60)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

内部主体（図版34・35，第52・53図）

台状部のほぼ中央に東西に並列して構築された箱式石棺で両者に切り合い関係はないが（第1主体）が北棺（第2主体）に先行して埋置されている。その理由は、

1. 第1主体の墓壇北辺ラインが，台状部の東西中軸線とほぼ一致し，第2主体は中軸線より北に片寄った位置にあること。

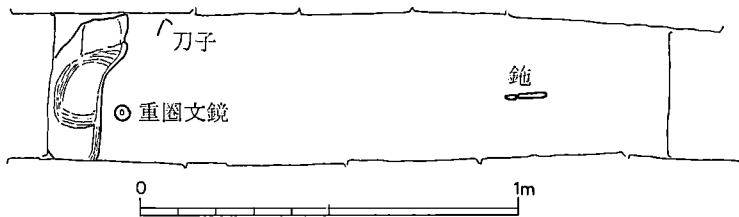
2. 第1主体は鏡や鉄器が副葬され，第2主体は副葬品を持たず，後者は前者に比して従属的な性格を持っている，と判断されること。

3. 検出時点での墓壇埋土は第1主体が黄色粘質土だけであるのに対して，第2主体のそれは暗褐色ブロックがまじっている。墓壇埋土の上記の相違による新旧関係はふたつの主体が切り合っている7号，10号においても認められること。

などの3点による。

第1主体 主軸長2.45m，幅1.7mを測る二段掘りの墓壇内に安置された箱式石棺で主軸方位はS-88°-Eを示す。頭位は東側で粘土枕を設置している。石棺は床面で主軸長1.67m，幅37cm，床面から蓋石下面までは27~30cmである。棺内は全面に赤色顔料を塗布している。側壁天場まで墓壇を埋め戻した時点で赤色顔料を塗布したようで，その面にこぼれ落ちた状態で赤色顔料を検出した。また棺内副葬品として床面上で鏡1，刀子1，鉄鉈1を検出した。

第2主体 主軸長2.35m，幅1.34mを測る二段掘りの墓壇内に営まれた箱式石棺である。主軸方位はS-88°-Eを示し，頭位は東側で粘土枕を設置する。石棺は床面で主軸長1.65m，幅は頭位側で35cm，足位側で29cmを測り，床面から蓋石下面までは27~30cmである。床面には若干の骨が遺存していた。棺内壁は全面に赤色顔料を塗布している。



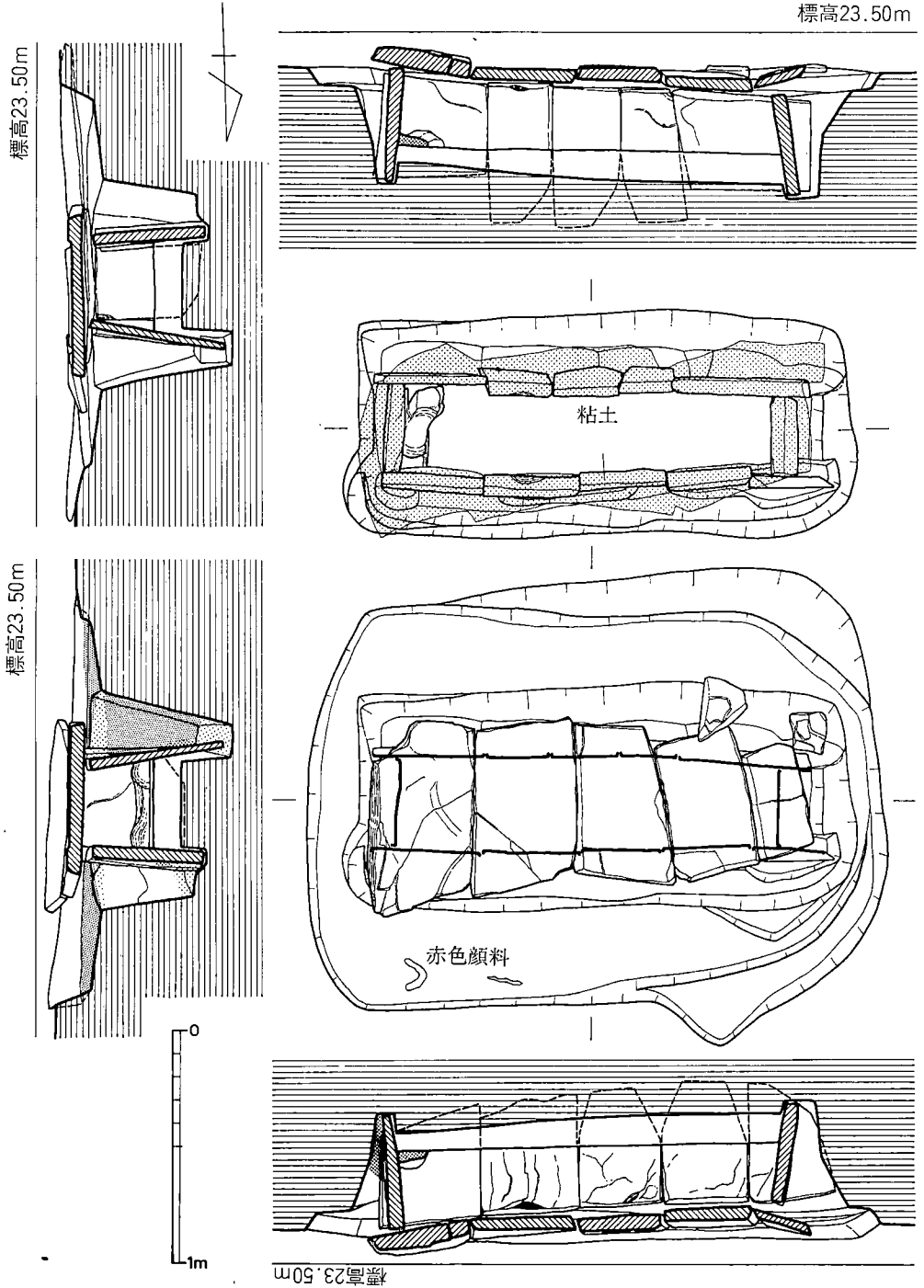
第51図 11号方形周溝墓遺物出土状態実測図（1/20）

出土遺物（図版35~38，第49・51図，付図7）

副葬品（図版35・74，第51図）

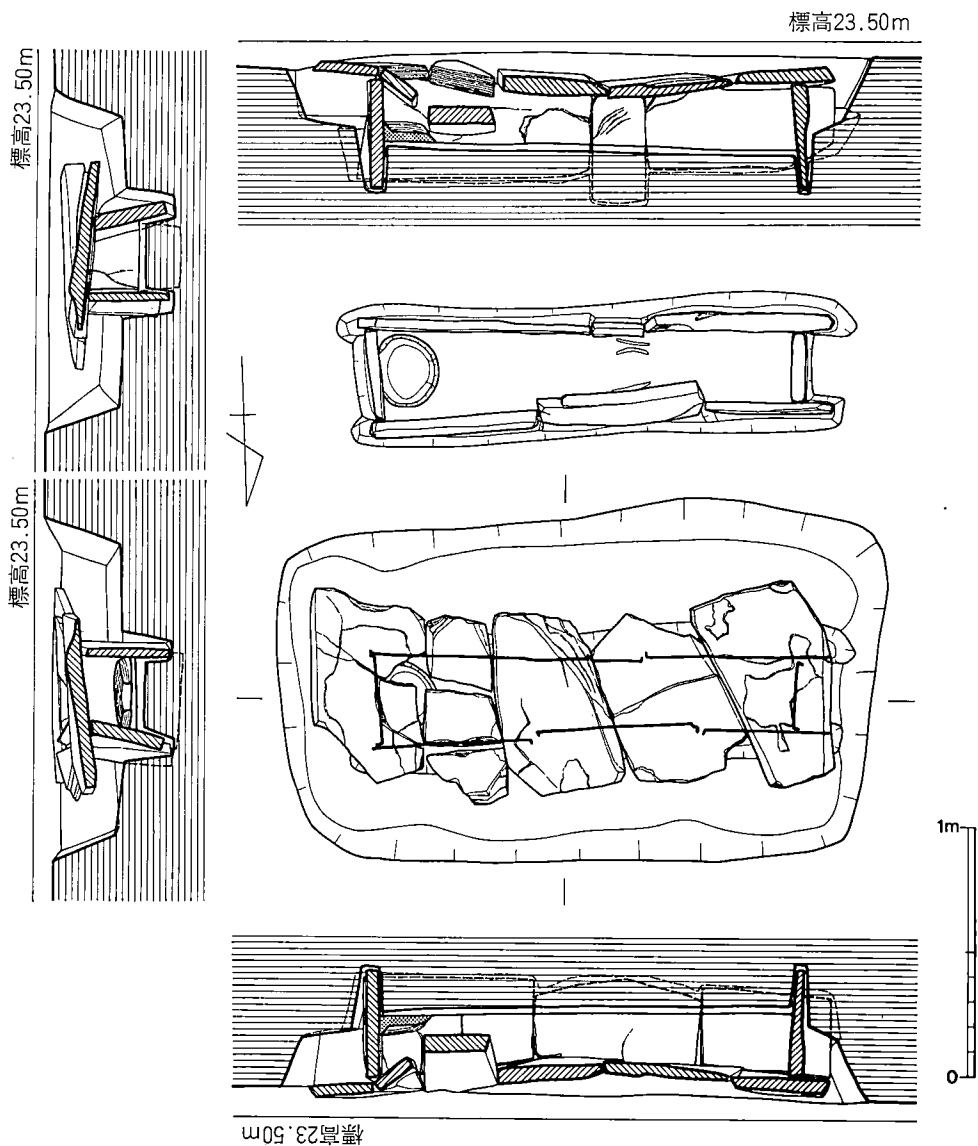
1号主体床面から鏡1面，刀子1本，鉄鉈1本が出土した。

III 立野遺跡A地区の調査



第52図 11号方形周溝墓第1主体実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査



第53図 11号方形周溝墓第2主体実測図(1/30)

重圈文鏡（卷首図版3・図版74，第54図） 石棺の解体と床面切断中に，粘土枕の崩壊した粘土の下の床面から鏡背を上に向けて出土した。直径5.35cmを測るが皮状の皮膜が鏡背と鈕の半分程に銹着し，錆がひどいため，正確な厚さは測りかねる。図は比較的錆の少ない部分をもとに計測した反転図に近いものである。それによれば，反りは1.5mm程で，厚さは内区で1mm，縁で1.5mm程である。縁は平縁で幅は6mm程である。径11.5mm程の鈕の周囲に圈線が三重に巡

III 立野遺跡A地区の調査

り、圏線と縁との間には楕歯文帯と三角文帯を配する。鏡質は良いが鑄上がり後の研磨はなされていない。全面に赤色顔料が付着している。

刀子 (図版72, 第76図-10)

南壁際の床面に検出した。身・茎とも関部付近を欠失する。身幅と茎幅の差は1mm程で、無関か、わずかな関がつく程度のものであろう。身の現存長7cm, 幅0.95cm, 茎の現存長2cm, 幅0.85cmで、本来の長さは12~13cmを超えることはなかろう。

鉞 (図版72, 第76図-11)

床面の中央よりやや足側側で検出した。完形品で全長9.9cm, 柄部幅1.3cm, 刀部長2.5cm (+), 同最大幅1.2cmを測る。刃部は約40°程の角度で反る。刃部断面は剣と同様に凸レンズ状を呈し、柄部断面は矩形である。

周溝内出土遺物 (図版36~38, 第49図)

鉄器と多量の土師器が出土した。鉄器は鎌1点と刀子2点で、そのうち南溝中央付近で出土した刀子は、溝内埋土中に営まれた土墳墓に伴うものと考えられる。土師器は20個体程出土したが図示できるのは18個体である。器種はバラエティに富むが甕、壺類が多く、高坏、器台・埴が見られる。

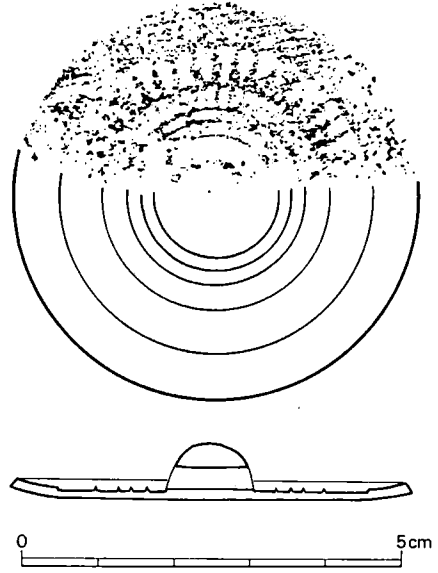
鉄器 (図版72, 第76図)

鎌 (13) 甕57の横で溝底から約35cm程浮いて出土した。完形品で全長14cm, 幅4cm, 背部厚さ3.5mmを測る。身の先端は背部から幅が狭くなって丸味を帯び、断面は凸レンズ状で両刃である。柄を着装するために一端を少し折り曲げている。

刀子 (12) 広口壺67のすぐ横で出土した。茎尻側を欠失するが現存長14.3cm, 身部長10cmを測る。関部付近から茎にかけては木柄が銹着しているので関の形状は定かではない。

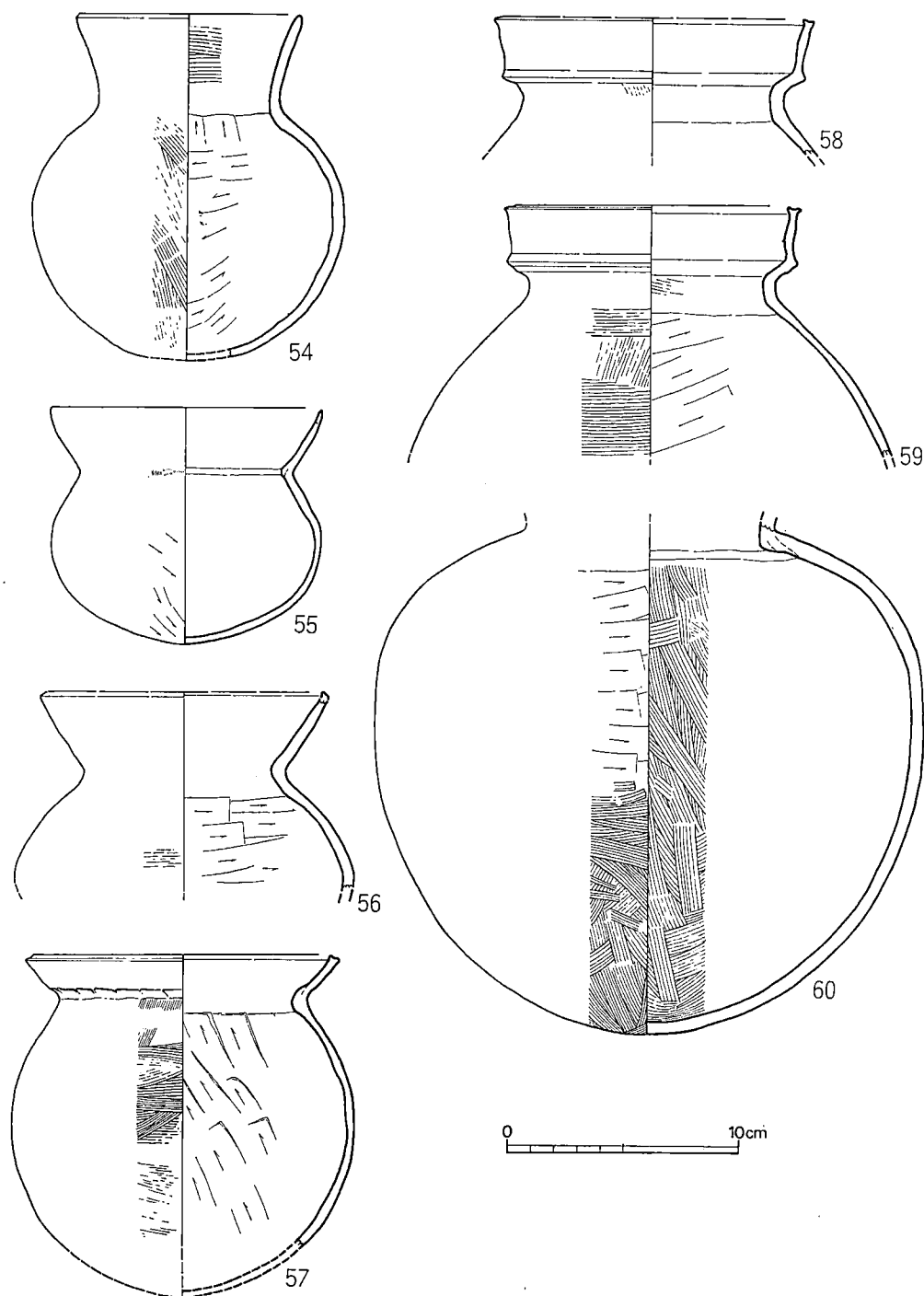
土師器 (図版64~66, 第54~59図)

器種はバラエティに富み、図示できたのは甕5個体、壺は4種8個体、埴2個体、器台および高坏3個体で、細片で図示できなかったが、他に壺66と同一器形の壺1個体 (第49図-A), 甕か壺の底部小片 (第49図-B) が出土しており、合計20個体程の供献土器が出土している。これらの土器は溝底から出土するものではなく、溝底から30cm前後浮いて暗褐色土系統の層の中に含まれるものがほとんどである。



第54図 重圏文鏡実測図 (実大)

III 立野遺跡A地区の調査



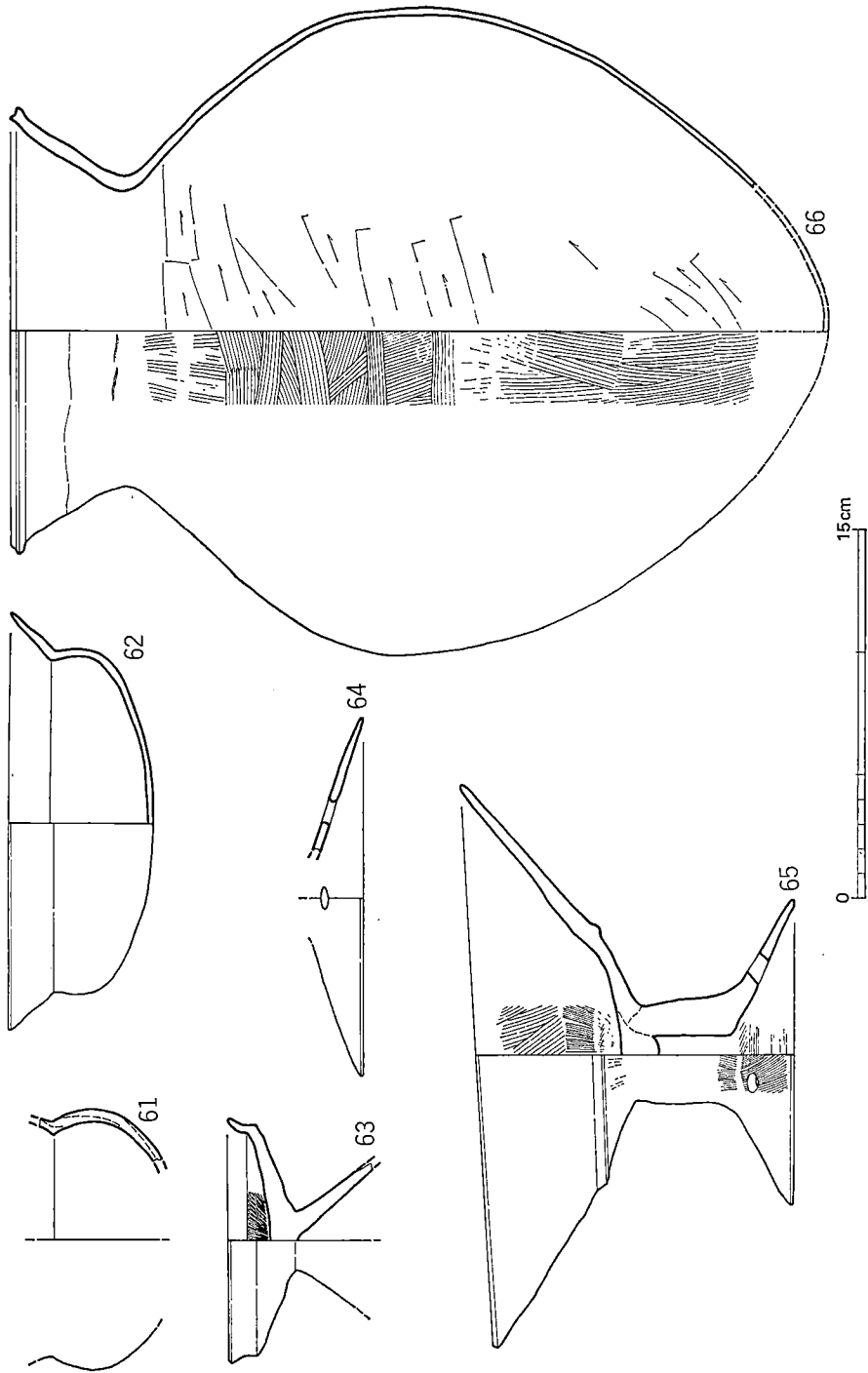
第55図 11号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)

III 立野遺跡A地区の調査

壺 (55~59) 55は口縁部径11.7cm, 器高10.2cmを測る略完形品である。口縁部は内彎し, 端部は丸くおさめる。胴部は偏球形で最大径はほぼ中位にあり, 頸部内面は面をつくる。器面がやや風化しているが, 頸部外面に刷毛目がわずかに見え, 胴部下半はヘラケズリ痕が残る。胴部上半はヘラナデをされたのか平滑である。胎土に白色砂粒を多く含み, 焼成良好で明赤茶色を呈する。56は図の状態完形であり口縁部径12cm, 現存高8.5cmを測る。器壁が軟弱なため, バインダー処理してとりあげた。胴部外面にわずかに横位刷毛目痕が残り, 内面は横位にヘラケズリを行っている。内壁面は点々と赤色顔料が付着し, 赤色顔料の容器であったと思われる。胎土に白色砂粒を多量に含み, 茶橙色を呈する。57は口縁部径13cmで, 器高14.8cm程に復原される。口縁部はやや内彎し, 端部は上方につまみ上げられる。頸部には整形時の圧痕が残る。胴部内面は荒いヘラケズリを行い, 外面は縦, 横位の刷毛目調整を行う。胎土に白色砂粒を多く含み, 焼成はあまく, 淡茶灰色を呈する。58・59は二重口縁の壺で, 59の破片は散乱して出土し, 口縁部~胴部の3片が58と共に出土し, 他は周溝南西隅で67・70の壺と共に出土した。58は極小片の反転図で口縁部径13cm程と推定される。口縁部はやや外反し, 端部は内側にやや肥厚する。頸部外面に縦位刷毛目がわずかにのこる。59は口縁部から胴部上半の4/10程を残す破片で反転図である。口縁部径11.8cm, 現存高10.7cm程に復原される。口縁部はやや外反し, 端部は肥厚する。口縁部内外面はヨコナデを行う。頸部内面は刷毛目残り, 胴部はヘラケズリを行う。胴部外面はまず縦位刷毛目調整を行った後, 横位の刷毛目調整を行っている。58・59とも白色砂粒を多く含み, 焼成良好で淡茶灰色を呈する。

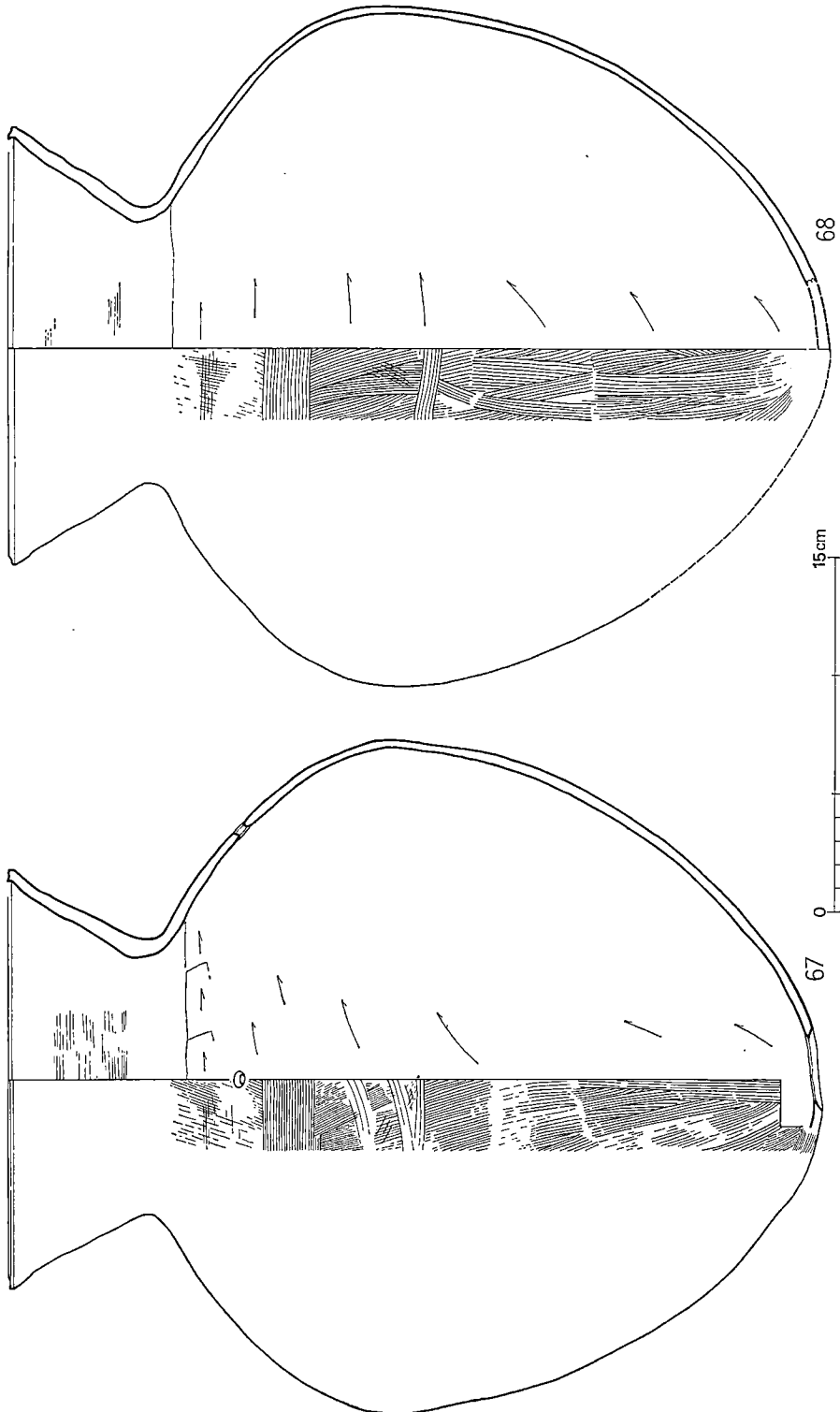
壺 (54・60・66~71) 54は略完形品で口縁部径9.5cm, 現存高14.8cmを測る。胴部は球形で外面は斜位刷毛目がのこり, 内面はヘラケズリを行う。口縁部は内面に横位刷毛目調整を施した後, 内外面をヨコナデによる最終調整を行う。胎土に白色砂粒を多量に含み, 焼成はあまく赤茶褐色を呈する。胴部下半に黒斑がある。60は口縁部を欠失するが, 現存高22cm, 胴部最大径23.8cmを測る壺である。胴肉は厚く, 内面は刷毛目調整を行い, 外面は上半部はヘラケズリ, 下半部は刷毛目調整を行う胎土に白色砂粒を多く含み, 焼成良好で茶橙色を呈するが, 胴部中位以下への煤の付着が著しい。66~68は広口壺で口縁部径は66・67が19cm, 68が18cmを測る。完形品の67は器高34.5cmを測り, 他の2個体も同程度であろう。ともに胴部は倒卵形で胴部最大径は胴部中位より上にあり, 底部はややとがり気味である。口縁部は大きく外反し, 端部はつまみ上げられる。67は焼成後に, 肩に径5mmの円孔をうがち, 底部を打ち欠いて仮器化している。ヘラケズリにより胴部の器肉は薄く仕上げられ, 厚さ2mmにみえない部分がある。外面はまず縦位刷毛目調整を行い, その後胴部中位上半に横位の刷毛目調整を行う。胎土は白色砂粒の他に金雲母片を含み, 焼成良好で淡茶灰色を基調とする。69は大形の二重口縁壺で, 口縁部の全周と胴部1/3を残す。口縁部径25.4cm, 現存高49cmを測る。器面が荒れて単位はつかめないが胴部内面はヘラケズリを行い, 外面は肩部を横位刷毛目, それ以下を斜位, 縦位刷毛目

III 立野遺跡A地区の調査



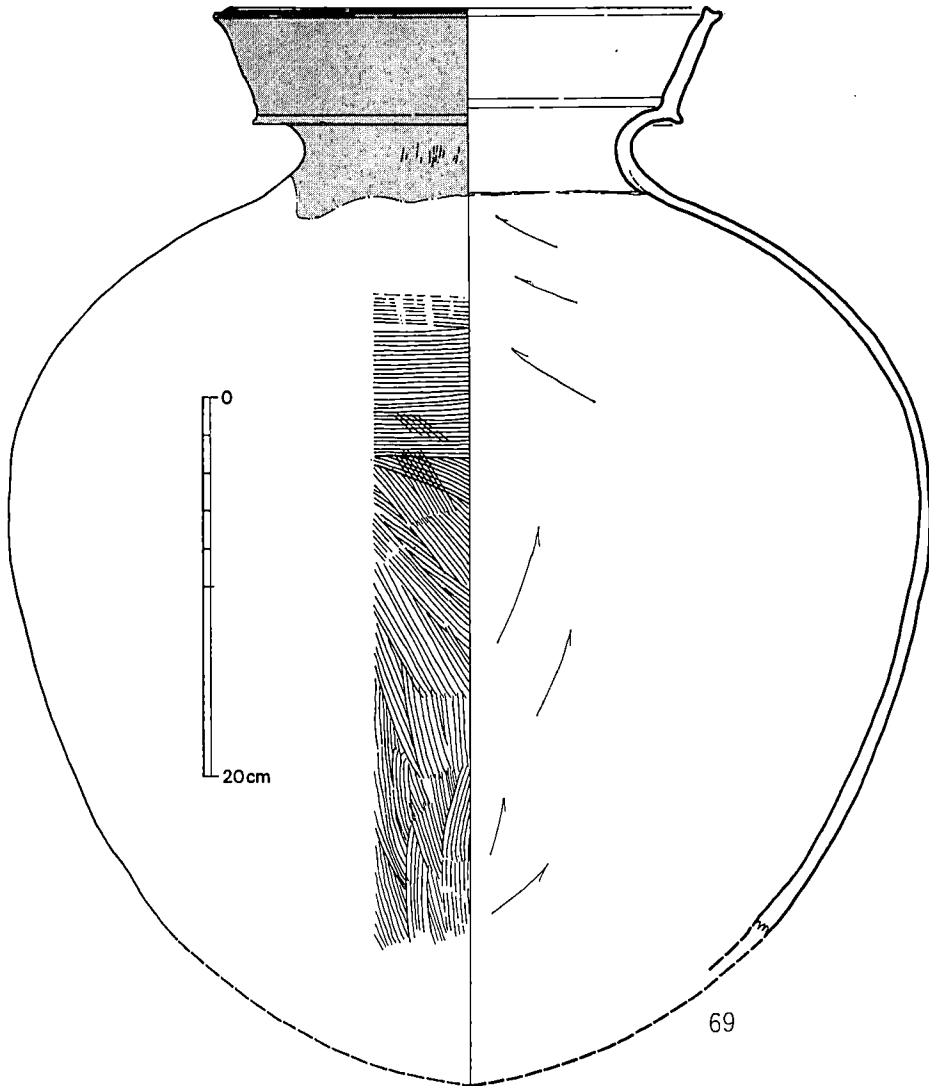
第56図 11号方形周溝墓出土土器実測図② (1/3)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第57図 11号方形周溝墓出土土器実測図③ (1/3)

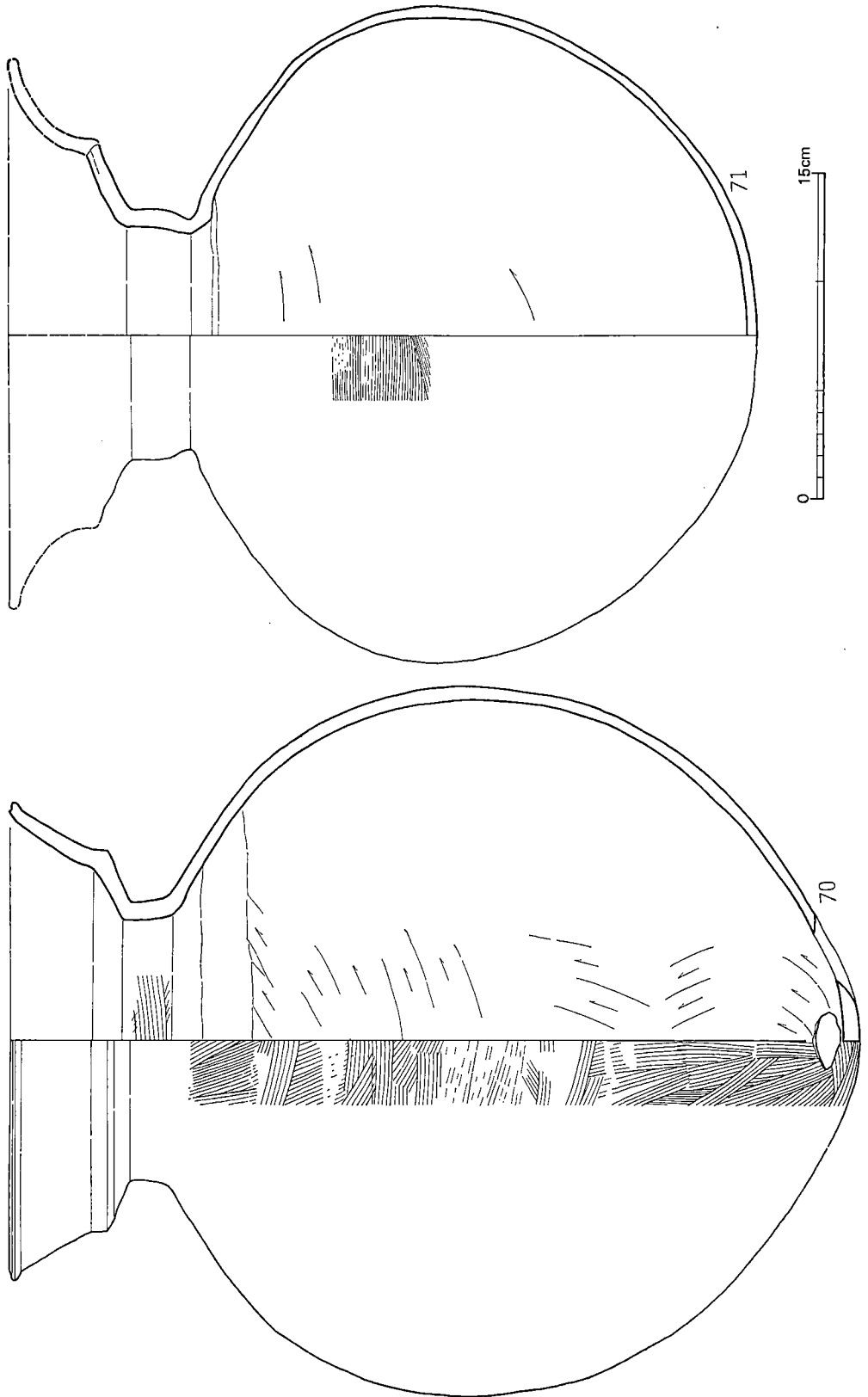
III 立野遺跡A地区の調査



第58図 11号方形周溝墓出土土器実測図④ (1/4)

調整を行う。頸部は外に大きく折り曲げ、直線的に外反する口縁部が続き、端部は上方につまみ上げている。頸部と口縁部の接合部外面は鋭い稜が一巡する。また、口縁部～頸部にかけて赤色顔料が付着しており、本来は赤色顔料をその部分に塗布していたものと思われる。胎土は割と緻密で白色砂粒を含み、焼成はあまりよくなく、検出時は軟弱だったのでバインダー処理してとり上げた。淡茶灰色を呈する。70は口縁 $\frac{1}{4}$ 、胴部 $\frac{2}{3}$ を残す二重口縁の壺であ。掲載図は反転図で、口縁部径22cm、器高39.3cmに復原される。胴部はほぼ球形で、底部は焼成後に擦孔

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



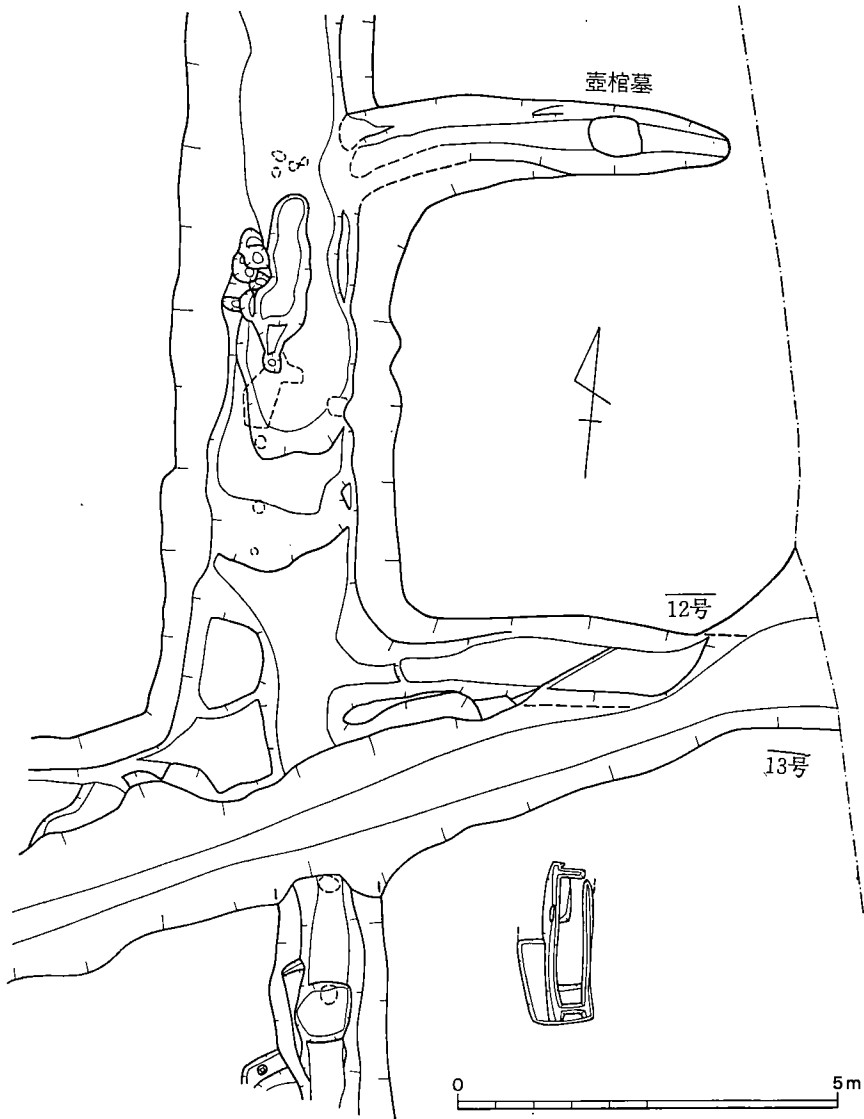
第59図 11号方形周溝墓出土土器実測図⑤ (1/3)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

している。内面はヘラケズリ、外面は縦位刷毛目の上から横位刷毛目調整を施す。頸部はやや内傾気味で内面は刷毛目調整を行う。口縁部は大きく外反し端部は少し上方につまみ上げているが風化してその痕跡が残る程度である。胎土は多量の白色砂粒とともに金雲母片を含み、焼成良好で淡茶灰色を呈する。胴部下半に大きな黒斑がある。71は70とタイプの異なる二重口縁壺で口縁部の反転部分を欠失する。胴部は球形で器面が荒れるが内面はヘラケズリ痕が、外面は横位刷毛目痕が残る。頸部は直立気味で内彎して口縁部に接続する。頸部と口縁部は器肉が厚いが、胴部はヘラケズリにより薄く仕上げている。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で茶橙色を呈する。

埴 (61・62) 61は極小片の反転図で径・傾きは不正確である。胎土は緻密で、焼成は良好である。62は遺存状態が悪いので反転復原した。口縁部径19cm、器高6cmを測る。器面が荒れているので調整痕は残らない。胎土は精良で、焼成良好である。明橙色を呈する。

器台・高坏 (63~65) 63はきわめてもろい土器で、検出時に写真撮影のため水洗しようとしたが、器壁が溶けるので、バインダー処理してとり上げた。反転図で口縁部径9.8cm、現存高6cmを測る。脚部に円形透し孔が存在するはずだが、遺存部分には見られない。台状部内底面は細かい暗文が施される。が、他の部分はバインダー処理時に土が付着しているので調整は不明である。胎土は微砂粒を含むがきわめて緻密で、赤茶橙色を呈する。64は脚裾部の反転図で円形透し孔が4ヶ所に配される。上部の形状は不明だが、あるいは中実かそれに近い脚柱部に塊状のものがつくかもしれない。65は口縁部径22.8cm、器高13.6cmを測る略完形の高坏である。脚に比して坏部は大きく、坏部口縁は大きく直線的にのび、坏部底部との境の外面に接合時のにぶい稜が一巡する。口縁部内面は荒い刷毛目調整を、接合部以下はきめの細い刷毛目調整を行う。脚柱部はややエンタシス状を呈して器肉が厚く脚部はラッパ状に開いて3ヶ所に円孔を配し、内外面は刷毛目調整を行う。また、坏部底部中央部は径4cm程の孔があいたまま脚柱部と接合し、後にその空間部に粘土を充している。

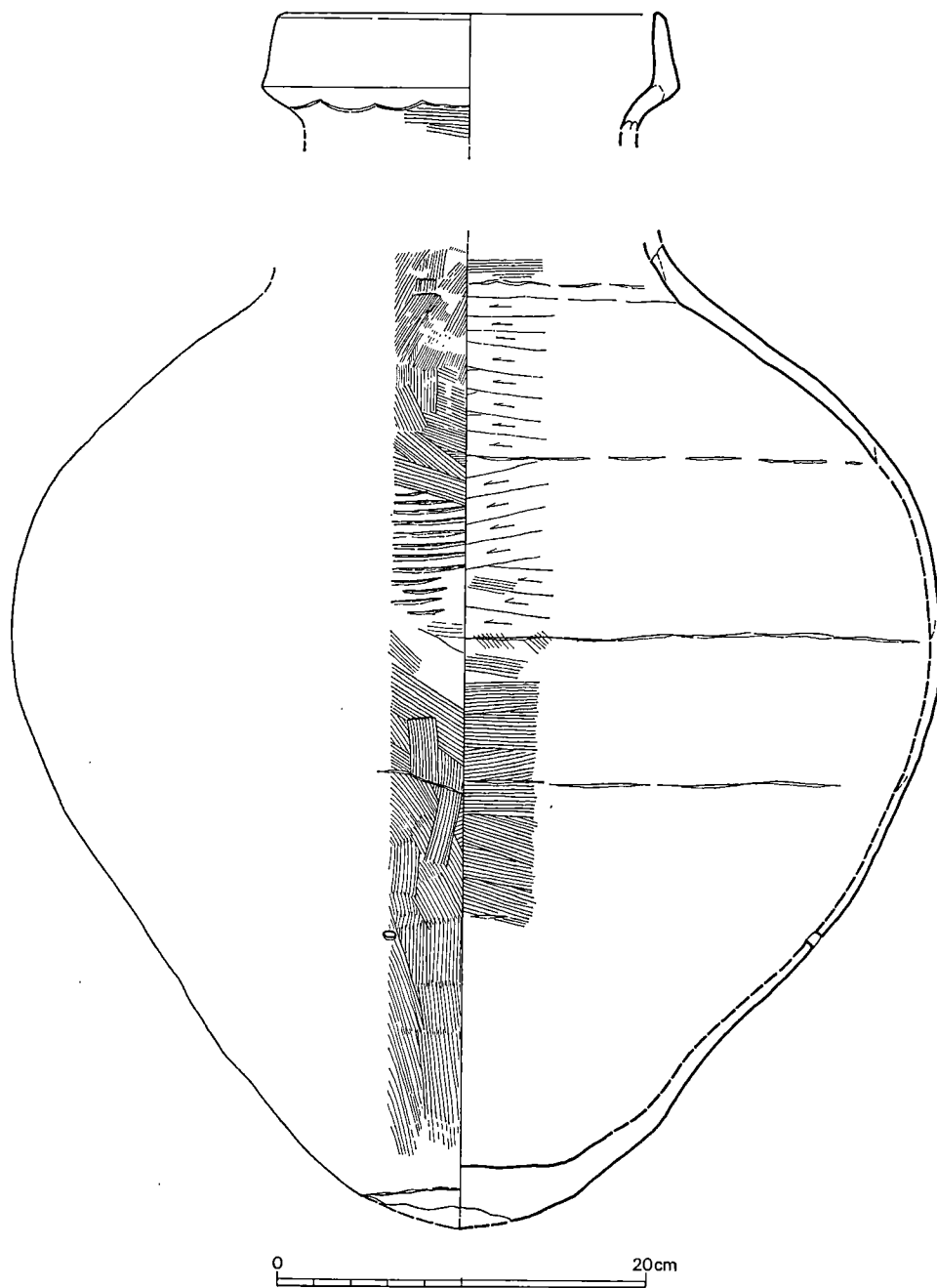


第60図 12号方形周溝墓実測図 (1/100)

12号方形周溝墓 (図版9・8, 第61図)

9号周溝墓の東に位置し、周溝が重複するが土層断面によれば、9号が12号の西溝を切っているようである。台状部の南北幅約6m、東西幅は4mまで確認できるが、溜池をつくった際の削平により東溝が存在せず不明である。その折に主体部も破壊されている。なお、北溝周溝底に壺棺墓1基を検出した。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



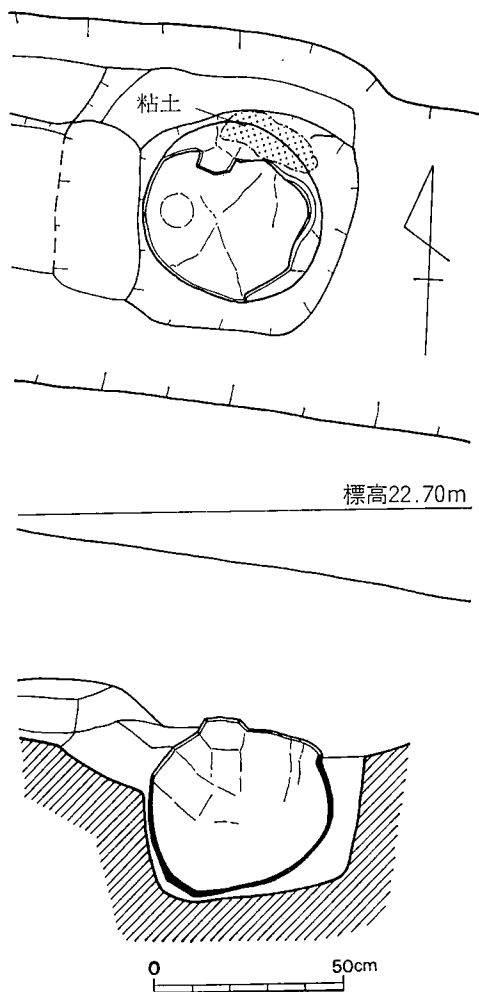
第61図 12号方形周溝墓壺棺実測図 (1/4)

III 立野遺跡A地区の調査

壺棺墓 (図版39・66, 第62図)

北溝底に営まれた壺棺墓で、本周溝墓構築時に埋置されたものである。口縁部は打ち欠かれており、壺棺からやや離れた東側溝底で、直接接合できないが、本棺の口縁部かと思われる口縁部小片が出土している。壺棺の主軸は周溝とほぼ平行で、 $N-87^{\circ}-E$ を示し棺がほぼ納まる程度の不正方形の墓壙内に設置している。墓壙の断面は短形を呈し深さは30cm前後で棺を納めた時に墓壙上端から10cm程棺体が出る。壺棺を墓壙に埋置し、墓壙内を埋め戻した後に、灰白色粘土を使って棺体を被覆していたようで、原状で保った粘土を墓壙上端とほぼ同じレベルで棺の肩～頸部を巻くような状態で検出した。棺埋置時の傾斜角度な水平位から55度前後を示す。

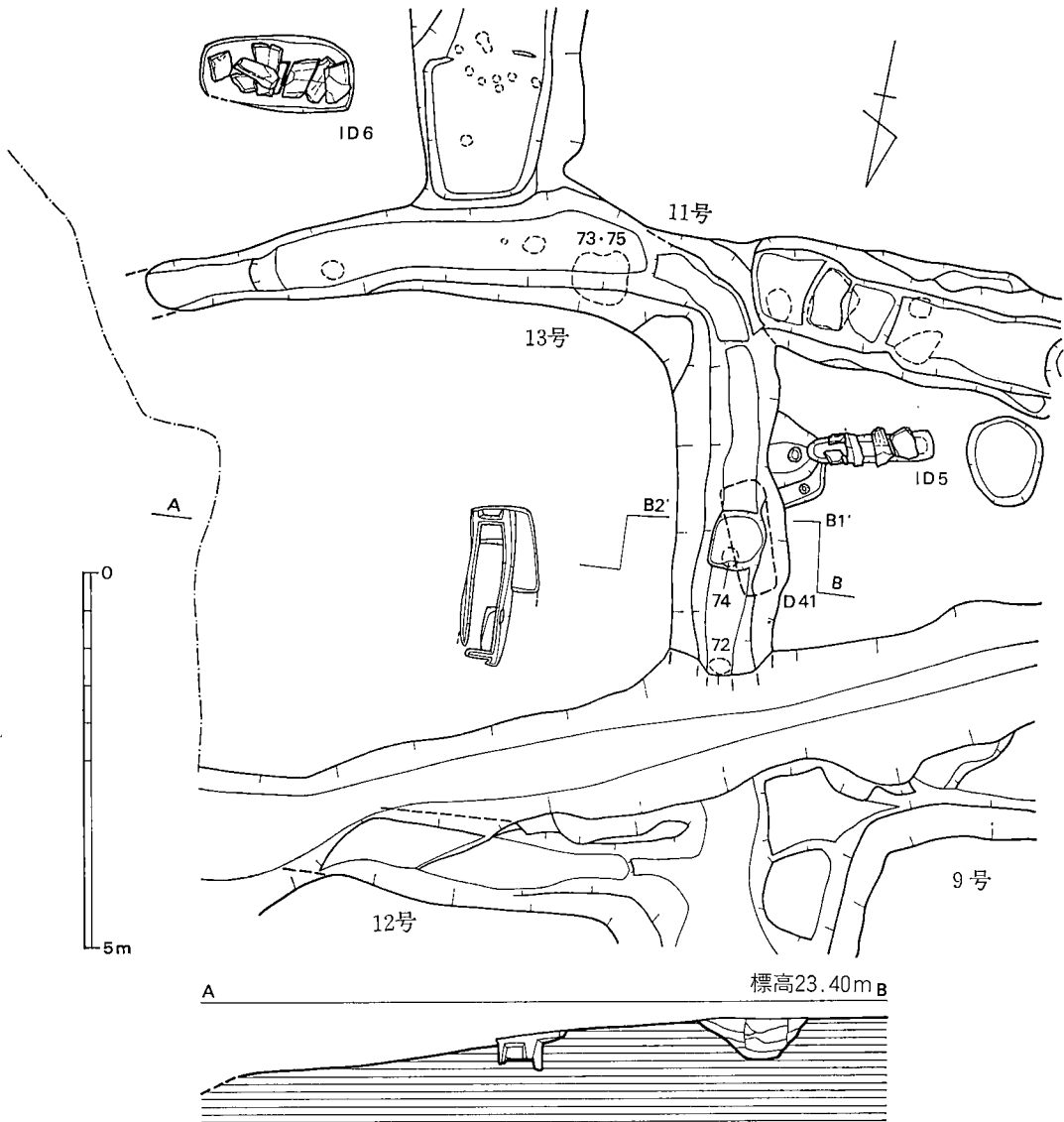
壺 (図版66, 第61図) 現存高53.5cm, 胴部最大径50.2cmを測り, 胴部は倒卵形を呈するが, 下半から底部にかけては西洋梨状を呈する。底部は打ち欠かれているが, 器肉が厚いためか, 擦孔するには至らない。また, 胴部下半に径8mm程の円孔を穿っている。胴部内面は粘土の継ぎ目が明瞭に残る。粘土帯の幅は3~4cm位と推定される。内面は頸部を横位刷毛目調整を行い, その下位から胴部中位まで細いヘラケズリを施し, 胴部下半は横位~斜位刷毛目調整を行い, 底部はナデている。外面は胴部中位やや上に水平位タタキ目残り, その上・下は斜・縦位の刷毛目調整を施している。胎土は砂粒を多く含み, 金雲母片をまじえる。焼成はふつうで赤褐色~黄褐色を呈し, 胴部中位から下半に径30cmの黒斑があり, これと対称位置の肩部にやや淡い黒斑がある。内面は黒色顔料が塗布され, 外面も塗布されたと見られる痕跡があるがはっきりとしない。全体に弥生土器に近い胎土, 焼成を示し, 周溝内から出土している他の土器と比して異質である。この土器からやや離れて東側周溝底に口縁部片を検出した。二重口縁で直接に接合しないが内面に黒色顔料を塗布し, 胎土・焼成がよく似ているので, 同一個体だと思われる。口縁の屈接部下位の外面には粘土の継ぎ目が見られ, 頸部に横位刷毛目調整



第62図 12号方形周溝墓壺棺墓実測図 (1/20)

調整を行い, その下位から胴部中位まで細いヘラケズリを施し, 胴部下半は横位~斜位刷毛目調整を行い, 底部はナデている。外面は胴部中位やや上に水平位タタキ目残り, その上・下は斜・縦位の刷毛目調整を施している。胎土は砂粒を多く含み, 金雲母片をまじえる。焼成はふつうで赤褐色~黄褐色を呈し, 胴部中位から下半に径30cmの黒斑があり, これと対称位置の肩部にやや淡い黒斑がある。内面は黒色顔料が塗布され, 外面も塗布されたと見られる痕跡があるがはっきりとしない。全体に弥生土器に近い胎土, 焼成を示し, 周溝内から出土している他の土器と比して異質である。この土器からやや離れて東側周溝底に口縁部片を検出した。二重口縁で直接に接合しないが内面に黒色顔料を塗布し, 胎土・焼成がよく似ているので, 同一個体だと思われる。口縁の屈接部下位の外面には粘土の継ぎ目が見られ, 頸部に横位刷毛目調整

III 立野遺跡A地区の調査



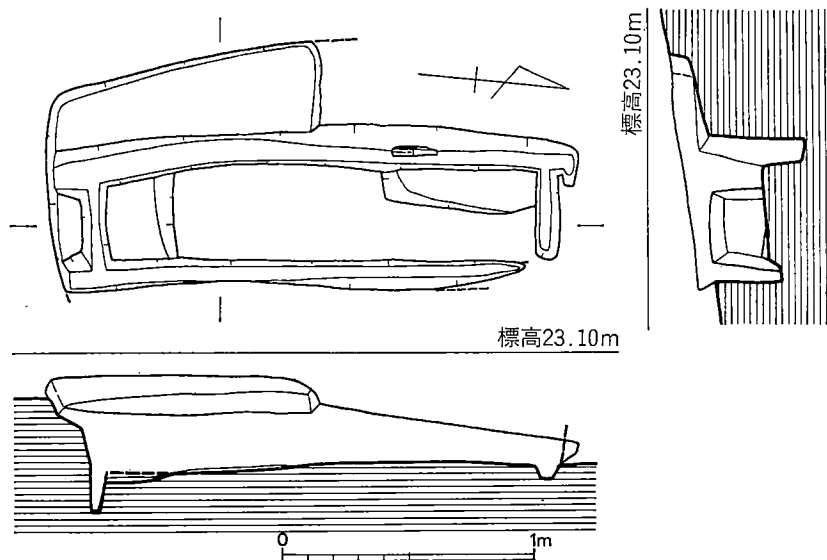
第63図 13号方形周溝墓実測図 (1/100)

痕が認められる。

13号方形周溝墓 (図版40, 第63図)

東部は溜池を、北部は排水溝を掘削する時に破壊され、その正確な規模はわからない。台状部の規模は12号周溝墓との関係で見ると、南北約7m、東西7m以上と推定される。また、南溝西半部は11号周溝墓によって少し切られ、ブリッジとなっている。

III 立野遺跡A地区の調査



第64図 13号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)

内部主体 (図版41, 第64図)

主軸をN-5°-Wにおく箱式石棺で棺材はほとんど抜き取られ、西側長側壁にその一部が遺存する。墓壇は二段掘りだが、溜池掘削時に破壊され、西側にその一部をとどめる。棺の規模は壁体を据える際の掘り方から判断して、主軸長1.75m、幅40cm前後と思われる。

出土遺物 (図版41, 第63図)

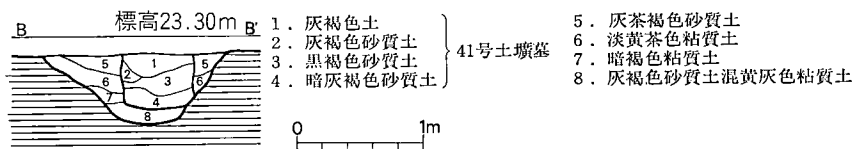
周溝埋土中から鉄器片1と、5個体分の土師器が出土している。器種は皿、高杯、甕、壺である。

鉄器 (図版73, 第76図)

刀子 (9) 断面は短形で平面形から刀子の茎かと思われる。茎尻は丸くおさめる。

土師器 (図版66, 第66図)

皿 (72) 西溝の溝底から15cm浮いて黒色土層の最下層から出土している。ほぼ完形品で口縁部径11.4cm、器高3.2cmを測る。内外面とも横位のヘラミガキを行うが、外面は風化して遺



第65図 13号周溝墓土層図 (1/60)

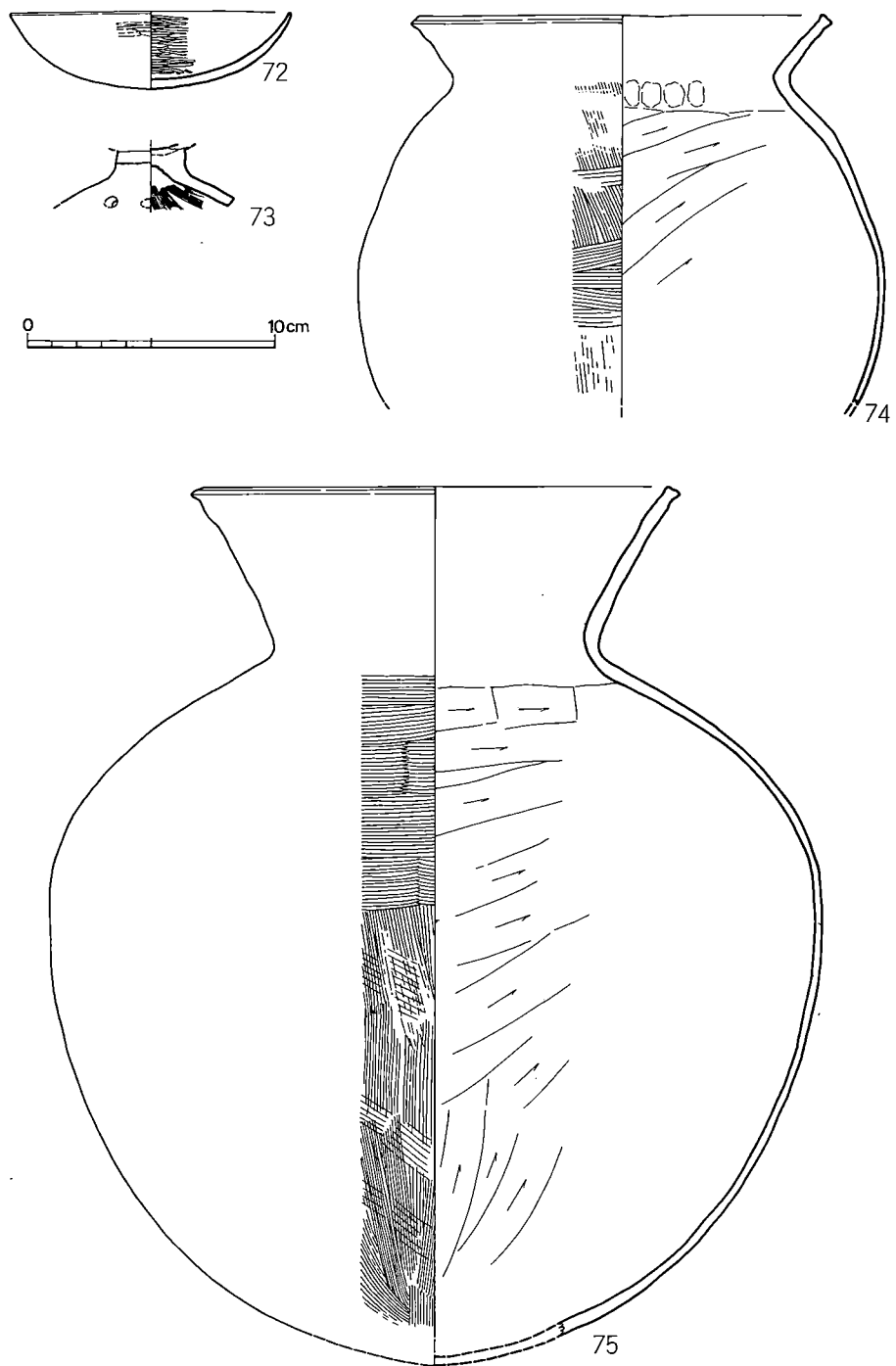
Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

存度が悪い。胎土は精良で砂粒が目立たず、焼成良好で明橙色を呈する。器面は光沢があり平滑である。

高 坏 (73) 75と共に南溝西側の周溝斜面で検出した。脚柱部から裾部にかけての破片で、3ヶ所に配された円形透し孔以下を欠失する。外面は赤色顔料を塗布していたようである。内面は刷毛目調整を行い、外面はヨコナデされる。胎土は精撰され、焼成良好で明橙色を呈する。

壺 (74) 溝底から15cm浮いて、溝底に推積した黄色砂質土の上へのり、黒色土がかぶった状態で出土した。胴部下半を欠く破片で反転図である。口縁部径16.4cm、現存高15cmに復原される。頸部内面には指圧痕が明瞭に残り、それ以下はヘラケズリを行う。外面は縦位刷毛目の上から横位刷毛目を施す。口縁の一部と胴部にはススが厚く付着する。胎土は多量の白色砂粒と金雲母片を含み、焼成良好である。ススの付着してない部分は明茶褐色を呈するが、全体に黒光りしている。

壺 (75) 南溝西側で高坏73と共に周溝斜面で検出した。図反転図で口縁部径18.7cm、器高35cm強に復原される広口壺である。胴部は器壁が薄く、内面はヘラケズリ、外面は胴部上半は縦位刷毛目の上から横位刷毛目調整を行い、中位以下は荒い右下がりの斜位刷毛目の上から縦位刷毛目調整を行う。胎土は多量の白色砂粒の他に金雲母片を含み、焼成良好で淡茶灰色を呈する。なお、胴部上半内面に赤色顔料が点々と付着しており、あるいは赤色顔料を入れる容器かとも思われる。また、同じ部分から、同様の壺肩部片と底部片が出土しており、底部片の外面に赤色顔料が付着している。

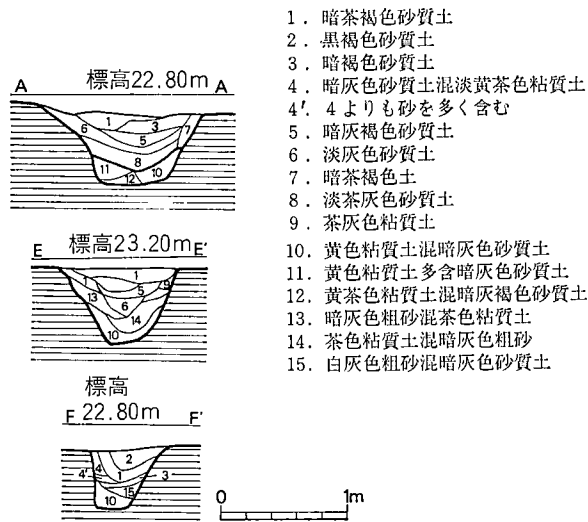


第66图 13号方形周沟墓出土土器实测图 (1/3)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

14号方形周溝墓 (図版42, 第68図)

11号周溝墓の東に位置し、西溝を11号周溝墓に切られる。溜池を掘った時に削平をうけ、台状部は西から東に傾斜し、北東隅周辺は破壊されている。台状部は、東辺9m前後、西辺7m南北辺8.5m程度と推定され、平面プランは台形を呈する。周溝の幅は1m前後で、南側中央付近で途切れて幅1.5mの陸橋部を形成する。周溝底溝はほぼ平坦だが、北溝に土壙状の段落ちが2つあり、あるいは随葬墓かとも考えられるが、そのように判断できる積極的な資料はない。また、陸橋部の西側に45号土壙墓が周溝の南東隅に46号土壙墓が掘られている。後者については土壙墓の存在を予測できずに周溝全体を掘り下げていったので、そのプランを確認できなかった。須恵器、鉄器がほぼ同一レベルで検出し、この部分の周溝内に土壙墓が営まれていたことが判明した。



第67図 14号方形周溝墓土層図 (1/60)

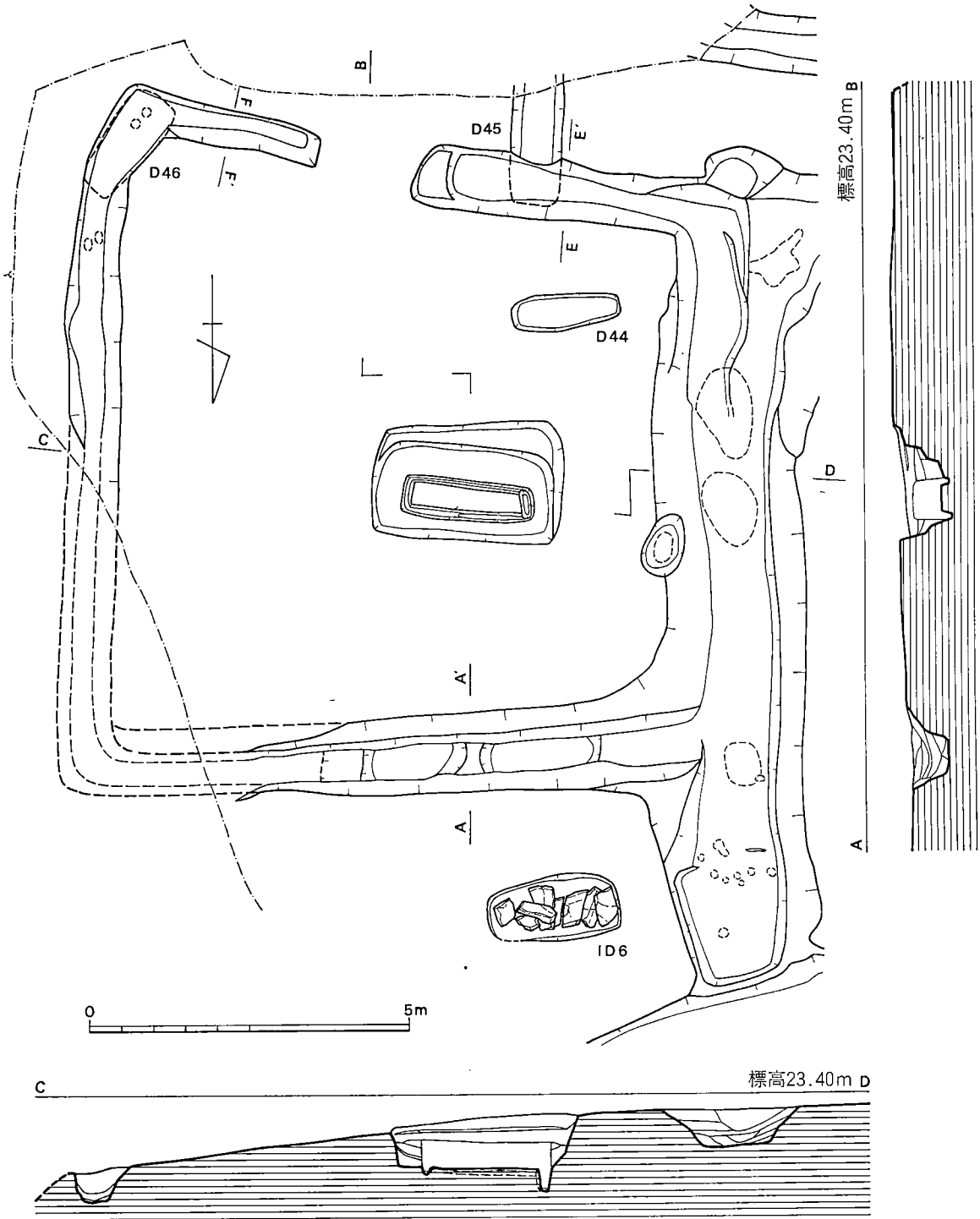
内部主体 (図版42, 第69図)

台状部の西に片寄った部分に営まれた箱式石棺で、主軸方位はS-84°-Eを示す。棺材はすべて抜き取られていたが、赤色顔料の付着した棺材片が攪乱土中にはいっており、箱式石棺がかつて存在したことが判明した。墓壙は二段掘りで、上端で主軸長2.95m、幅1.8mを測る。石棺はこの墓壙の中心より北側に片寄って構築される。棺内法はおよそ、1.8m幅40cm~45cm程であったと考えられる。攪乱土中から刀子片が出土している。

出土遺物 (第68図)

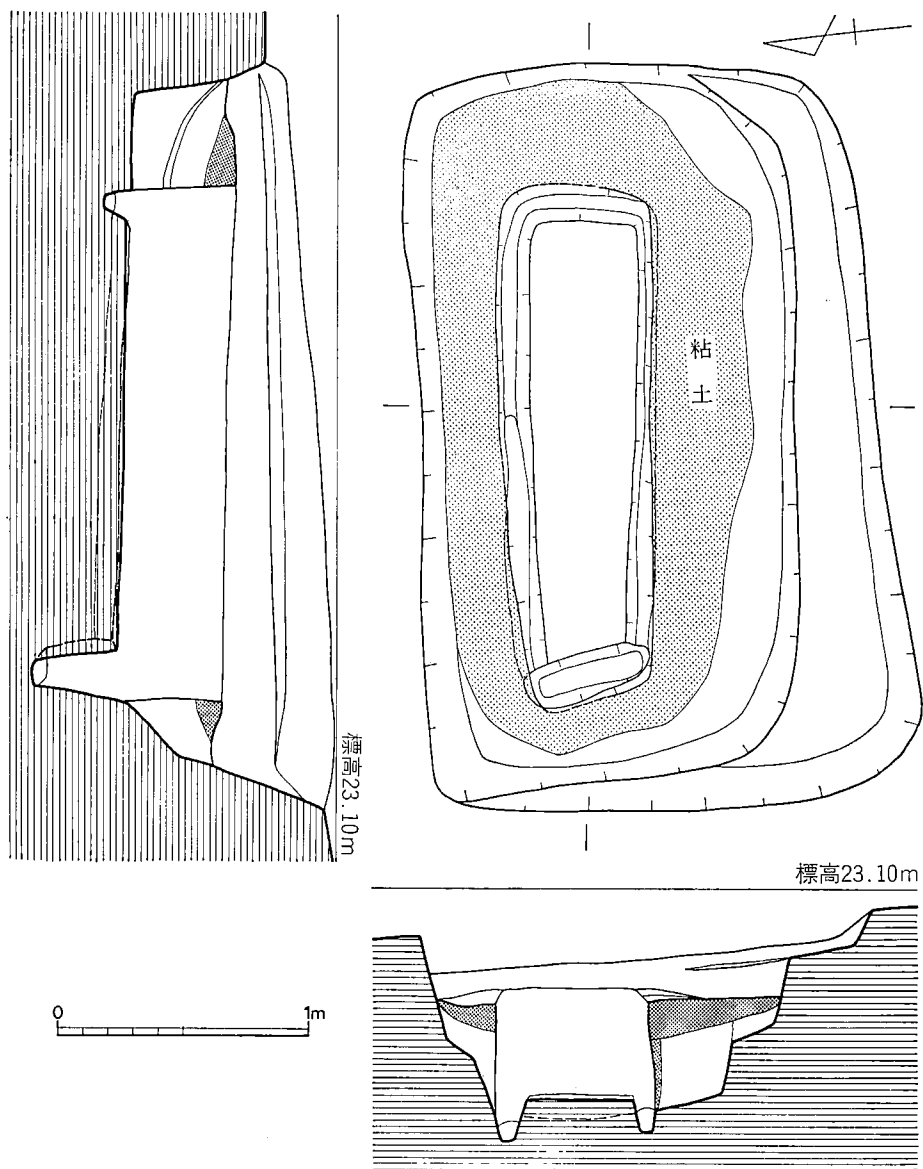
周溝南西隅埋土中から刀子1点、内部主体の副葬品として刀子片が出土している。なお、周溝東南隅の埋土中に土壙墓が営まれ、須恵器・刀子が出土しているが、これについては後述される。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第68図 14号方形周溝墓実測図 (1/100)

III 立野遺跡A地区の調査



第69図 14号方形周溝墓内部主体実測図 (1/30)

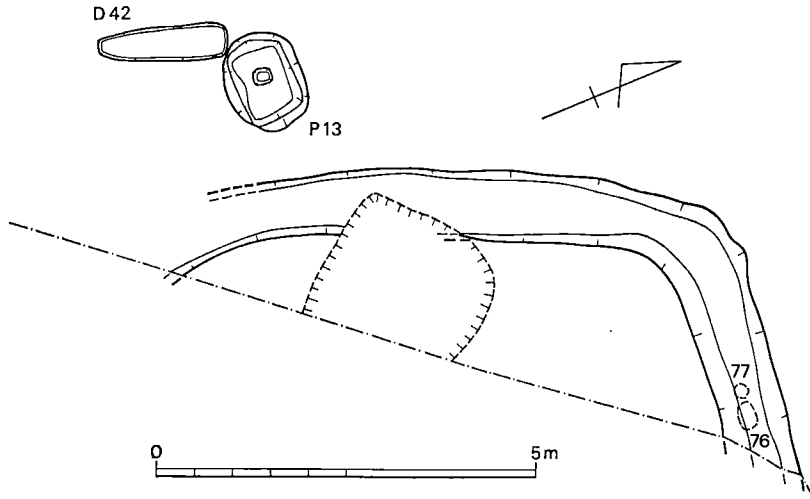
副葬品 (第76図)

刀子 (15) 棺内床面よりやや浮いて、北側長側壁に沿って出土した刀子片である。現存長3.3cm, 身幅・茎幅とも1cmを測り, 無関である。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

周溝内出土遺物（第76図）

刀子（16） 直接に接合しないが、身部片と茎片が出土している。身は現存長4.6cm、幅8mm程の細身のものである。茎片は身が一部残り、現存長5.6cmを測る。茎には細い糸が6～7回巻き一単位で、5単位が観取され、その上に木柄を装飾する。茎に糸を巻き、木柄を装着する例はほとんど報告されていないようである。



第70図 15号方形周溝墓実測図（1/100）

15号方形周溝墓（第70図）

11・14号周溝墓から約2m離れて南側に検出した。主体部を含め大半は調査区外にのび、詳細は不明である。

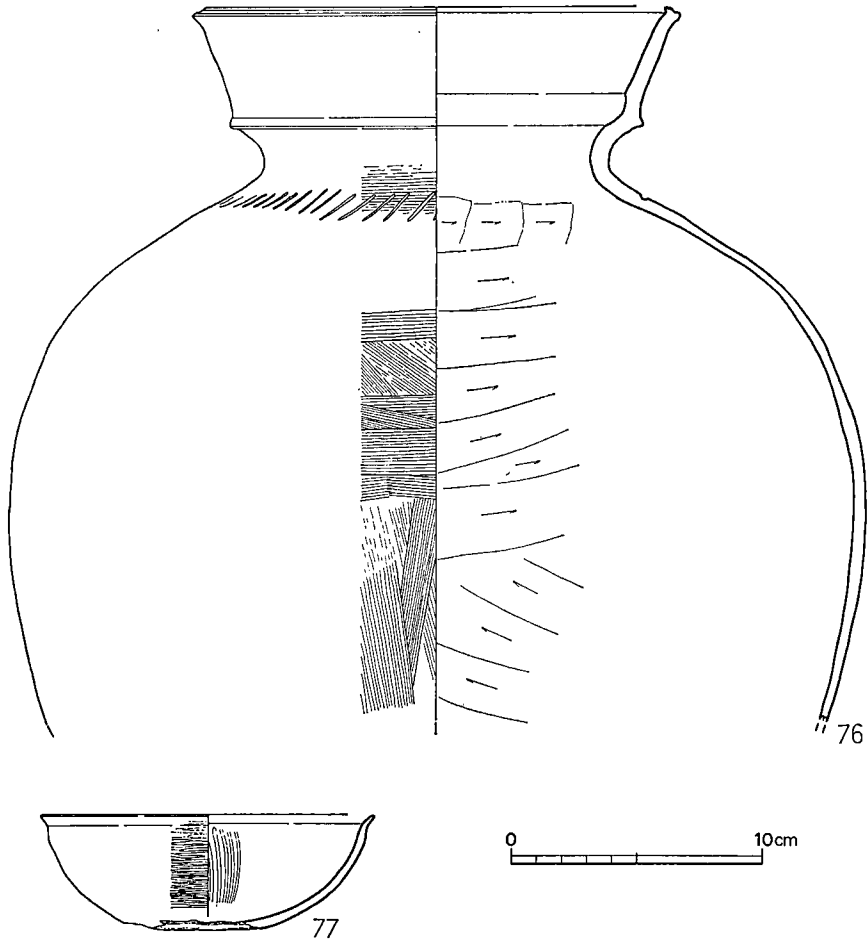
出土遺物（第70図）

北溝の溝底より5cm程浮いて2点の土器が出土した。

土師器（図版67、第71図）

壺（76） 反転図である。胴下半部を欠く二重口縁の壺で、復原口縁部径18cm、現存高23.4cmを測る。口縁部は直線的に外反して端部は斜め上方につまみ上げられている。胴部最大径は中位より上にあるようで最大径36cmを測る。口縁部内外面はヨコナデを行い、頸部を一段下がった内面は横位のヘラケズリを行い、それ以下も幅広のヘラケズリ痕が残る、器壁をうすく仕上げていく。下がりへのらによる沈線を一巡させ、胴部上位は横位刷毛目、それより下位は縦位斜位刷毛目調整を行う。胎土は白色砂粒を主体に金雲母片、茶色砂粒を含み、焼成はふつう程度で淡茶灰色を呈する。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第71図 16号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)

塊(77) 全体の $\frac{3}{4}$ 程度残り、口縁部径13.3cmを測り、器高は4.8cmに復原される。口縁部は外に折り曲げられ、端部は丸くおさめる。底部は、焼成後に内側から撈孔したように見受けられ径3cm前後の不定形な孔があく。口縁部内外面はヨコナデを行い、体部内面は縦位のヘラ描きの暗文で加飾、外面は横位の細かいヘラミがキを行う。胎土は精良で白色砂粒、金雲母片を含み、焼成良好である。器面の到落した部分は淡茶灰褐色を呈するが、残りの良い部分は化粧土のためか赤茶褐色を呈する。

16号方形周溝墓

4号周溝墓の南溝から西にのびる幅0.7~1m、深さ0.3m程の溝がある。当初、単なる溝だと考えたが、埋土の状況が隣接する4号周溝墓と同様であり、土師器(第21図-19)が出土したことから、方形周溝墓の周溝の一部だろうと考える。周溝は西溝の長さ2mが調査区内に存するだけで、詳細はわからない。上述の土師器は便宜上4号方形周溝墓の項で説明してある。

5 円墳

1号墳 (図版43, 付図2)

墳丘は削平されて全く遺存せず、周溝も東半部がかろうじて残り、円墳であると判断できた。古墳の規模は周溝を含めて12m前後であろう。周溝は申し分け程度に残るだけで、検出時の深さは5~10cm程度であった。

なお、主体部は痕跡すらなかった。この周辺は地山面もある程度削平されているようで、主体部床面は、封土中か、地山をやや掘り込む程度の位置にあったものと推測する。

2号墳 (図版43, 第72図)

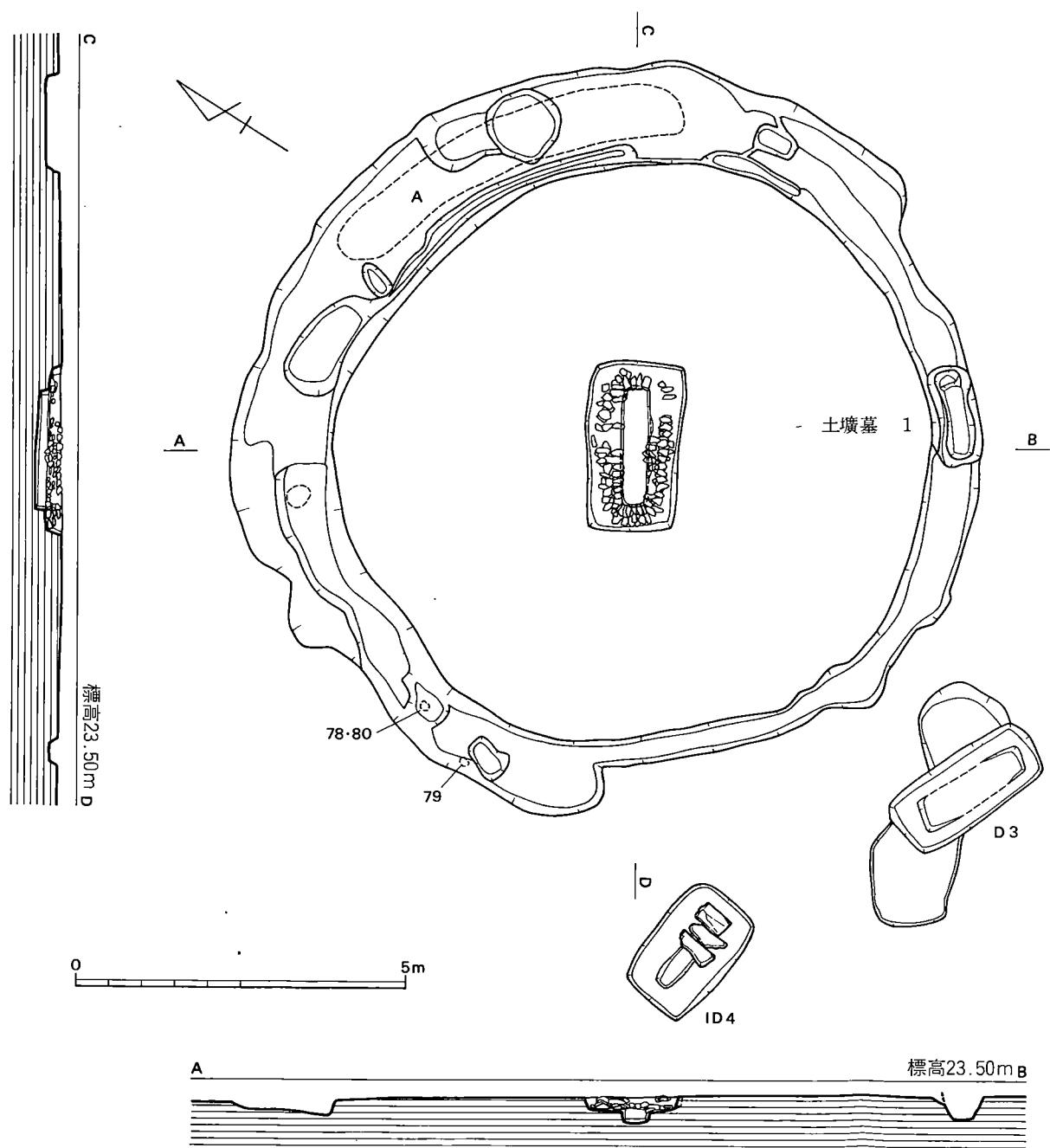
周溝を含めて直径11m前後の円墳で、墳丘盛土は全く遺存しない。周溝の幅は、南側は0.5~0.8mと狭く、北半部は1.3~1.8mと広い。2号墳周辺も地山がある程度削平されているため、深さは総じて浅く20cm前後である。周溝の広い部分に土器が供献される。周溝の狭い部分には随葬墓と思われる遺構(土壙墓1)がある。また、墳丘南に1.5m離れて4号石蓋土壙墓と3号土壙墓があり、これも2号墳に伴うものであろうと思われる。

内部主体 (図版44・45, 第73図)

墳丘のほぼ中央に構築された竪穴式石室で、主軸をN-57°-Eにおく。石室の破壊はひどく、天井石は遺存せず、壁体石積みは崩壊し、墓壙を検出した時点ではあたかも集石遺構のようであった。墓壙は、二段掘りの土壙墓状のものを掘り、深さ15~20cmの下段の土壙の周囲に河原石を小口積みする。よって石室は土壙墓に竪穴式石室をつけ足した状態を示す。石室の規模は床面で主軸長1.8m、幅は33~35cmを測り、頭位は幅が広く床面の高い東北側だと推定する。石室は壁体の最も残りの良い足位側小口壁で高さ35cmを測る。そのうち、石積みの部分は高さ20cmで3段目の石積みまで遺存している。壁体背後の控み積みは壁体と同じ石材を用い一列だけ巡らしており、控え積みは墓壙いっぱいには及ばない。壁面を構成する石材の小口部分は赤色顔料が付着するが、それは塗布されたものではなく、赤色顔料の付着状態から判断して石材の小口部分を赤色顔料のはいった容器の中に3cmほどつけてから石積みを行っていることがわかる。また、石室内に落ちこんだ石を排除する際に、赤色顔料の付着した20cm×30cm大の柿原石が存在し、本石室の天井石には柿原石が使用されていたようである。

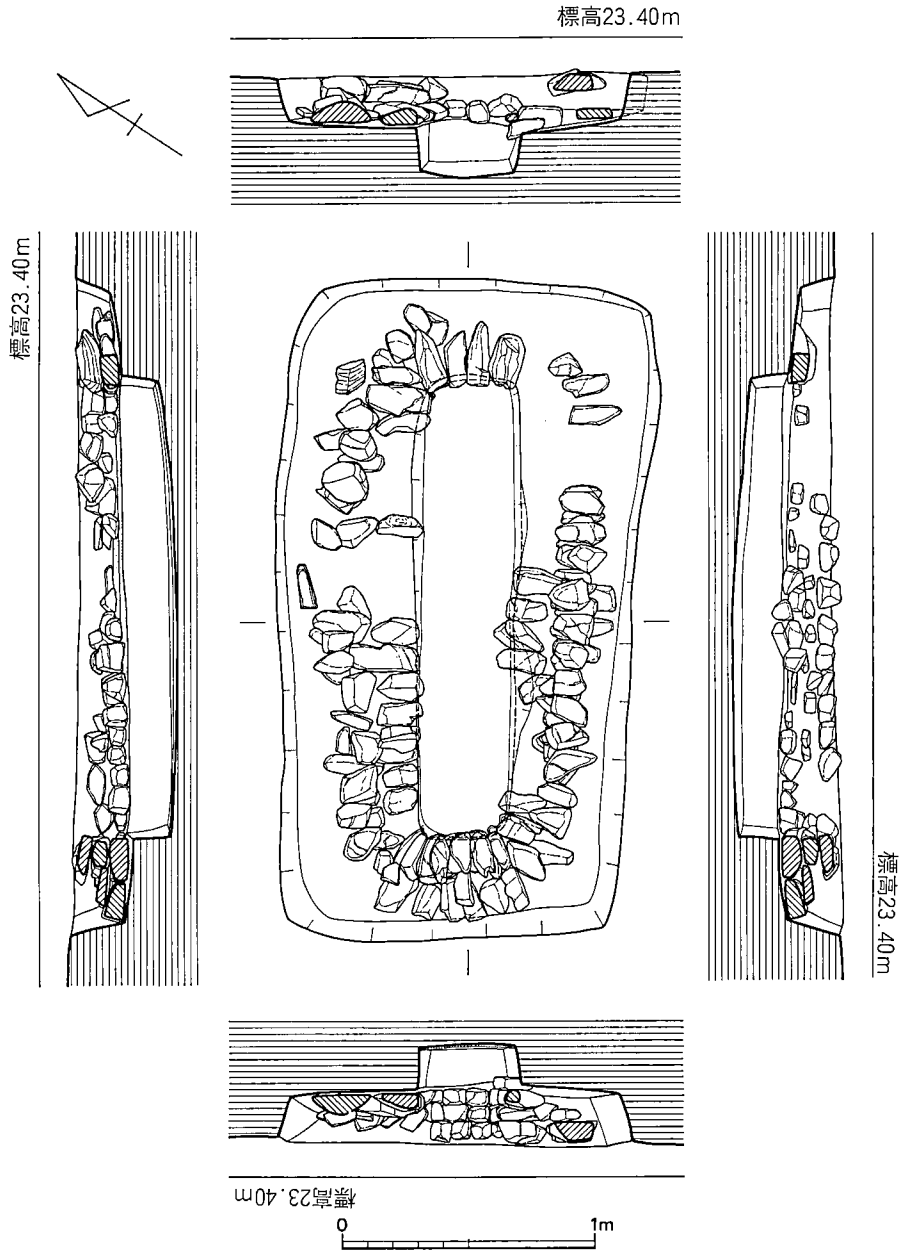
出土遺物 (図版46, 第72図)

周溝内から土器が出土したが、それは周溝幅の広い北半部に限られ、南半部からは1片も



第72图 2号墳実測図 (1/100)

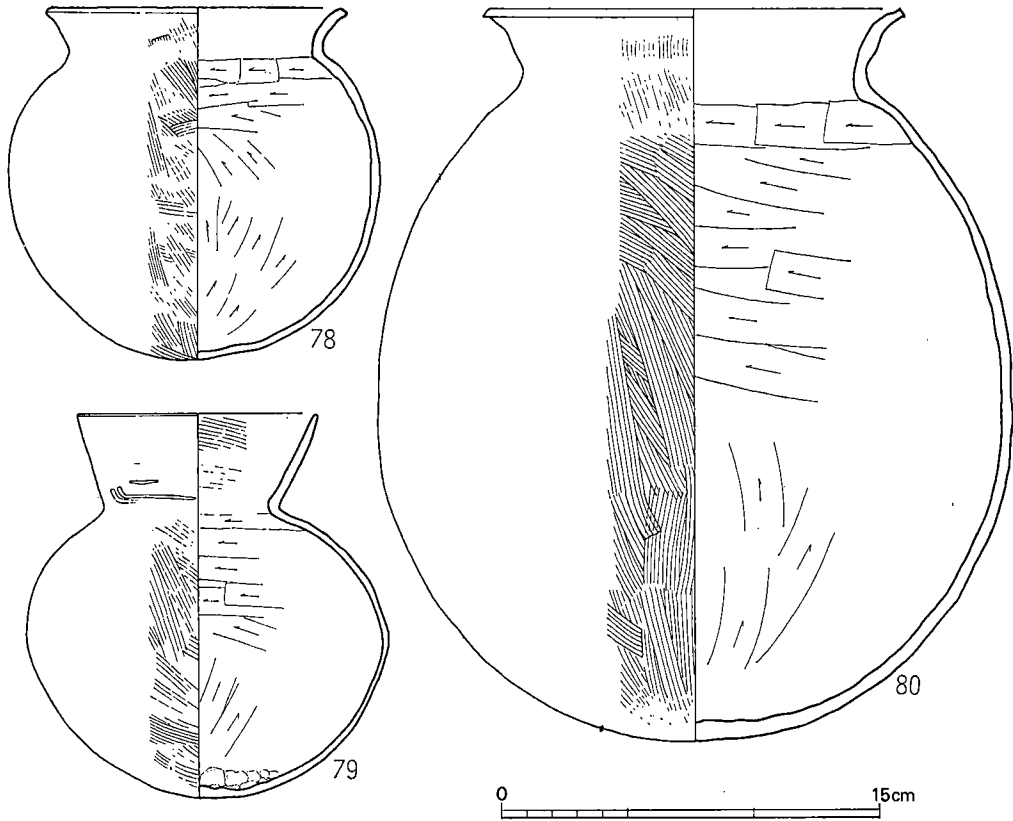
Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第73図 1号墳内部主体実測図 (1/30)

出土していない。土器はほぼ溝底で検出した。甕78は、甕80の中に納められ、内部に赤色顔料がはいっていたようで流入した土は真赤であった。Aと図示した範囲にあるいは陶質土器片かと思われる土器が出土したが紛失し、図示できない。

III 立野遺跡A地区の調査



第74図 2号墳出土土器実測図(1/3)

土師器(図版67図, 第74図)

甕(78・80) 78は口縁部径12cm, 器高13.9cmを測る完形品である。赤色顔料の容器として使われ, 甕80の中に納めて周溝底に供献されていた。胴部はほぼ球形で外反する口縁部が接続し, 端部は丸くおさめる。頸部直下から横位のヘラケズリを行い, 肩部以下は斜方向のヘラズリを行う。ヘラケズリにより器肉は薄い。外面は荒い刷毛目調整を行う。胎土は石英粒を多く含み, 焼成良好で淡茶灰色を呈するが, 胴部下半はススが全面に付着している。甕80は甕78の中に納めていたような出土状況を示すが, 口縁部径が甕78の胴部最大径より小さく, 打ち割って78を内部に納めたと推定する。口縁部 $\frac{1}{4}$, 胴部 $\frac{1}{3}$ を残し, 他の部分は古墳削平時に欠失したものだろう。口縁部径14.5cm, 器高28.3cmに復原される。胴部はやや長胴気味で, 胴部最大径は下半部にあり, 安定感のある土器である。口縁部は外反し, 先端付近を強く外に折り曲げ, 断部は平坦面をつくる。内面はヘラケズリされ, 外面は斜・縦位刷毛目調整を行う。胎土に大粒砂粒が目立ち, 焼成良好で器面がしっかりしている。明茶褐色を呈し, 胴部中位に大きな黒

III 立野遺跡A地区の調査

斑がある。

壺 (79) 口縁部径10cm, 器高15cmを測るほぼ完形の壺である。胴部は球形に近く, 外反する長い口縁部が接続する。頸部外面にはへら記号状のへら描き沈線がある。胴部内面はへらケズリを行い, 底部には指頭圧痕がのこる。外面は斜位刷毛目調整を施す。胎土は白色砂粒を多く含み, 焼成はふつう程度で明茶褐色を基調とし, 胴部中位に黒斑がある。

随葬墓

(第72・75図)

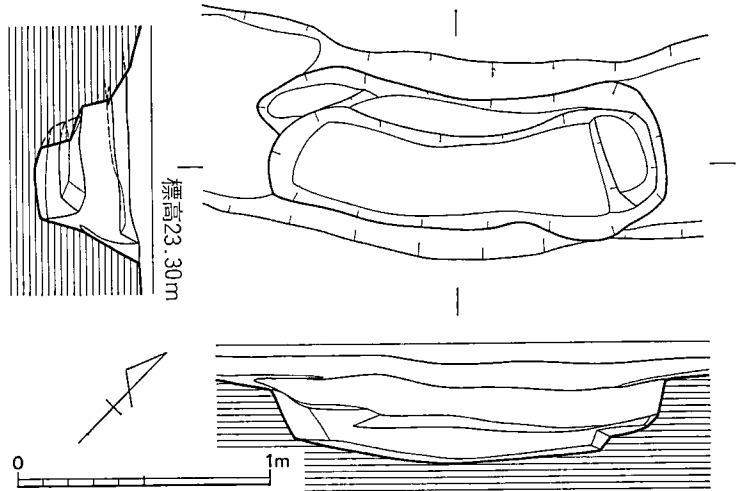
周溝外に土壙墓, 石蓋土壙墓各1基と周溝底に1基の土壙墓が存在する。周溝外のもはまとめて後述する。

土壙墓 1

(第75図)

周溝南部の狭い部分に周溝幅いっぱい掘られた土壙墓

で, おそらく木蓋をしていたと考えられる。主軸方位は $N-45^{\circ}-E$ で, 頭位は北東側だと推定され, 枕状に地山を掘り残している。床面で主軸長1.4m, 幅30~35cmを測る。

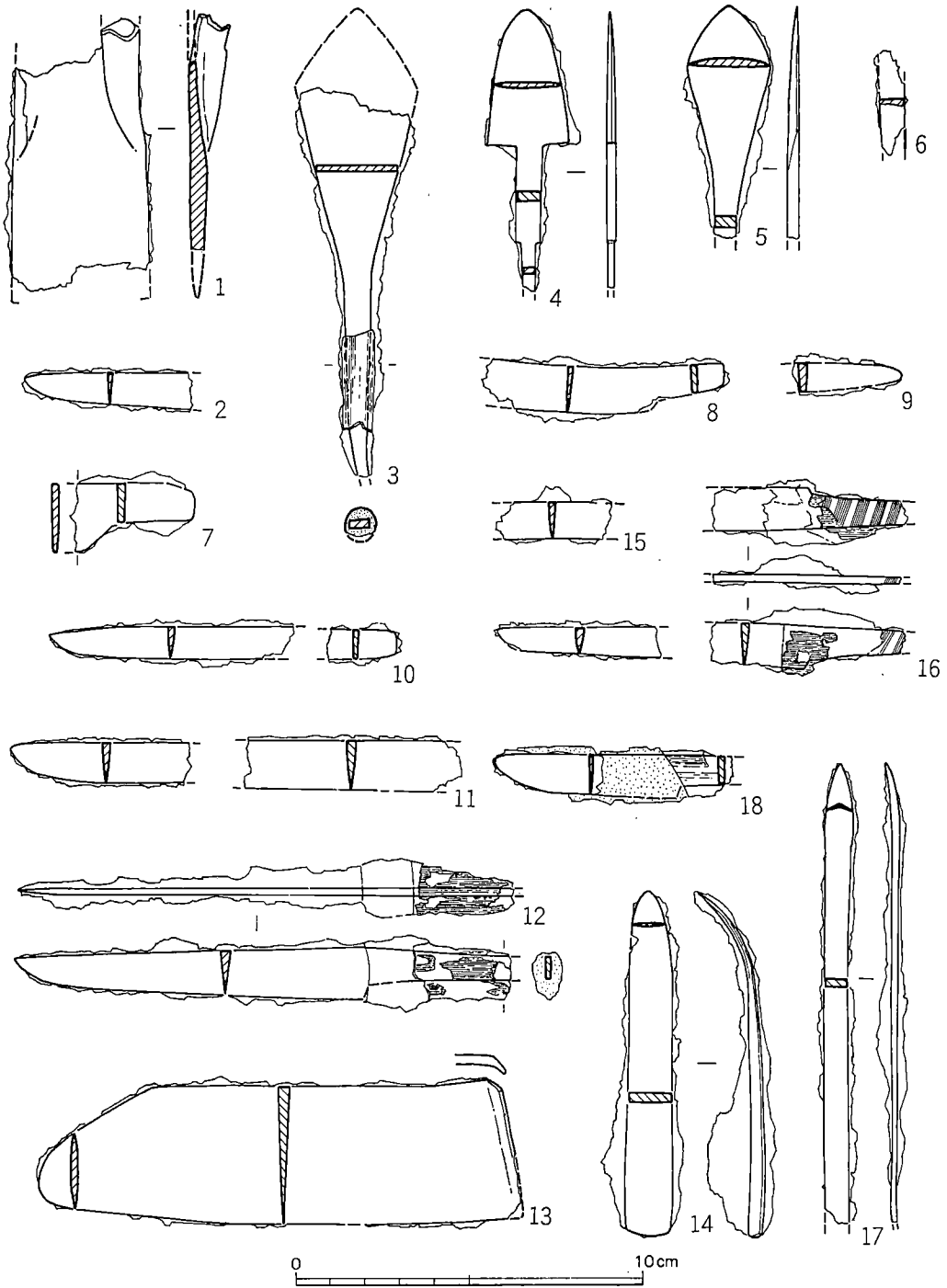


第75図 2号墳随葬墓実測図 (1/30)

3号墳 (図版46, 付図2)

2号墳の南に位置し, 周溝を含めて直径は20m程である。墳丘・内部主体はすべて削平され, 周溝も深さ5~10cm程しか残らず, 周溝が一巡するのか, あるいは南側の途切れた部分が陸橋部になるのかは判断できない。

III 立野遺跡A地区の調査



第76図 方形周溝墓・土壙墓・石蓋土壙墓出土鉄器実測図 (1/2)

6 随葬墓

方形周溝墓・円墳に伴って、その被葬者と何らかの関係にあったと思われる人の埋葬施設として、土壙墓と石蓋土壙墓が営まれている。それらのうち、周溝底に営まれたものは方形周溝墓や円墳に確実に伴うと判断できるので、各項で先述したが、周溝外に存在するものは確実性に欠けるので便宜上一項を設けて一括して記述する。周溝外の埋葬施設で随葬墓と考えるのは石蓋土壙墓6基、土壙墓2基の計8基である。このうち、西支群に石蓋土壙墓4基（1～4号）、土壙墓2基（1・2号）の計6基が、東支群に石蓋土壙墓2基（5・6号）が存在する。

西支群の随葬墓

1号石蓋土壙墓（図版47, 第77図）

4号周溝墓の西隅付近に位置し、周溝から約1m離れて営まれる。16号周溝墓と推定した周溝からも約1m離れた位置にあり、主軸方向は4号周溝墓西溝とほぼ合うので4号周溝墓に付随する可能性が強いが、後述する他の随葬墓が周溝に並行し営まれていることから16号周溝墓に伴う可能性も否定できない。

石蓋土壙墓は二段掘りの墓壙内に営まれ、主軸方位はN-18°-Eである。墓壙の規模は上端で主軸長2.46m、幅1.14mを測る。遺体埋葬部分は、北側小口部分と東壁側は石棺状に板石を立てており、頭位は北側だと思われる。内法は主軸長1.68m、幅は頭位側で33cm、足位側で25cm、床面から蓋石下面まで25～31cmを測る。石材には赤色顔料が塗布されていた。また、蓋石架構前に灰白色粘土を敷き、蓋石の上にも黄灰色粘土をおおっていた。黄灰色粘土被覆後に、鉄鉤の半折したものを重ねて副葬しているのを検出した。

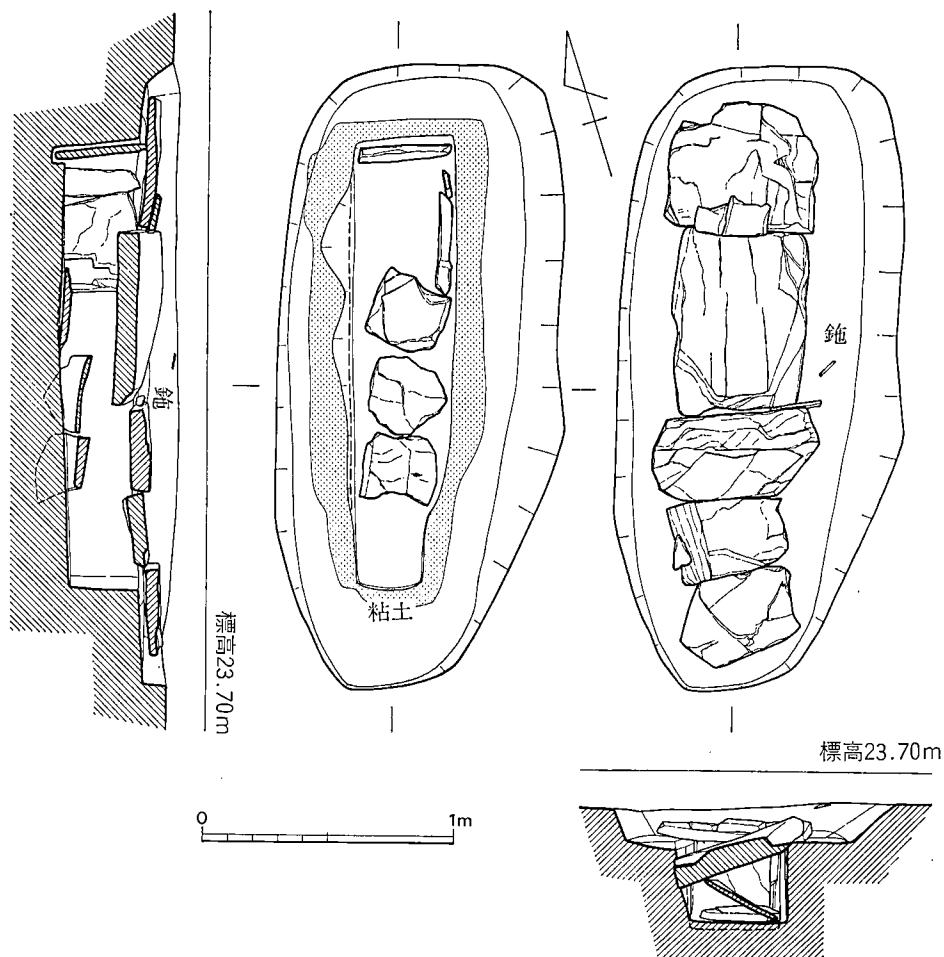
鉤（図版73, 第76図） 現存長17.3cm、刃部長2cm、茎幅0.7cm弱を測る。刃部断面は逆V字形を呈し、茎は短形を呈する。本質の銹着は見られず、木柄の装着された痕跡はない。

2号石蓋土壙墓（図版47, 第78図）

西を除く三方を2・3・5・6号周溝墓に囲まれ、結果的にあたかも周溝墓の内部主体の観を呈する。2号周溝墓に最も近く、2号周溝墓の内部主体や周溝の方向と本石蓋土壙墓主軸方位はほぼ平行であることから、2号周溝墓に伴うと推定する。

二段掘りの墓壙内に営まれ、石蓋は土圧に耐えきれず割れ落ちていた。主軸方位はS-65°-Eを示す。墓壙の規模は上端で、主軸長2.4m、幅1mの隅円長方形を呈する。遺構埋納部分の内法は、主軸長1.72m、幅33cm程で、南東側小口部に粘土枕を設置している。床面から蓋石下面までは35cm程で、内面は赤色顔料を塗布している。

III 立野遺跡A地区の調査



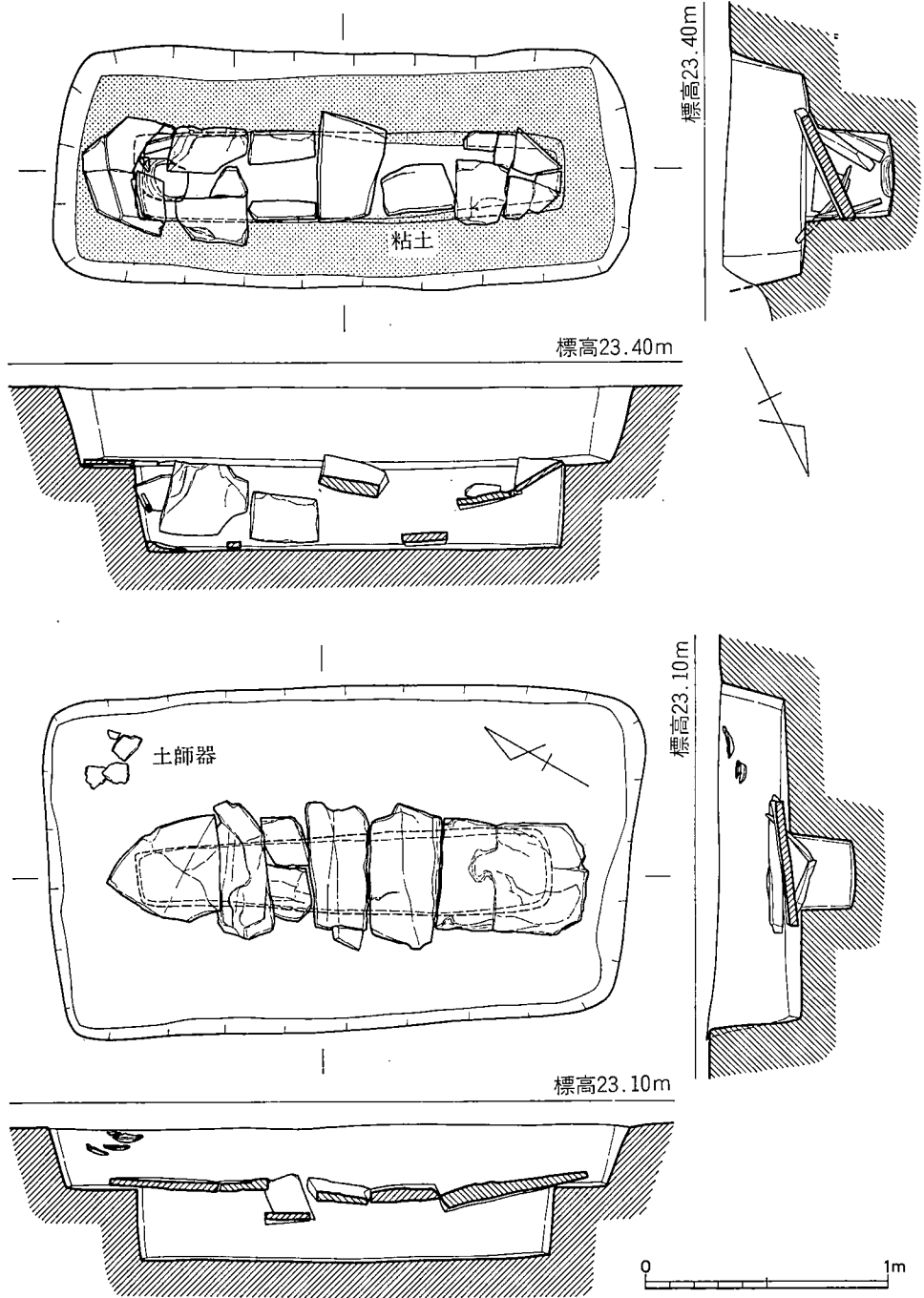
第77図 1号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

3号石蓋土墳墓 (図版48, 第78図)

2号土墳墓とともに6号周溝墓の北溝に沿って縦一列に並んで営まれている。6号周溝墓の内部主体と6m離れて横一列に並び、その関係性の深さを示唆している。

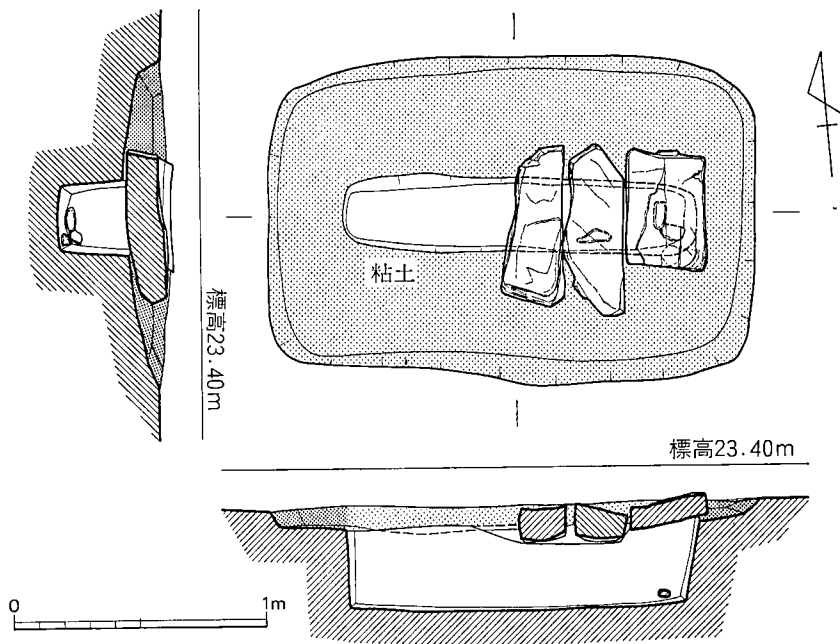
石蓋土墳墓は主軸方位をS-29°-Eにとり、頭位は南東側である。墓墳は二段掘りで、規模は主軸長7.4m、幅1.6mを測り、2号と比べて横広の隅円長方形を呈する。棺内寸法は主軸長1.73m、幅は頭位側が35cm、足位側が22cmである。床面から蓋石下面までは30cmで、蓋石架構前に粘土を敷いている。蓋石架構後、墓墳を20cm程埋め戻した段階で、北隅に甕形土器片を4片置いている。

III 立野遺跡A地区の調査



第78図 2・3号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第79図 4号石蓋土壙墓実測図(1/30)

壙(第30図-28) 布留系の甕形土器片である。内底面に指頭圧痕があり、その中央部近を底部の中央として図示した。器壁は薄く、指頭圧痕より上位の胴部内面はヘラケズリ痕がよく残る。外面はススが厚く付着し、その下に刷毛目がうすく見える。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色を基調とする。

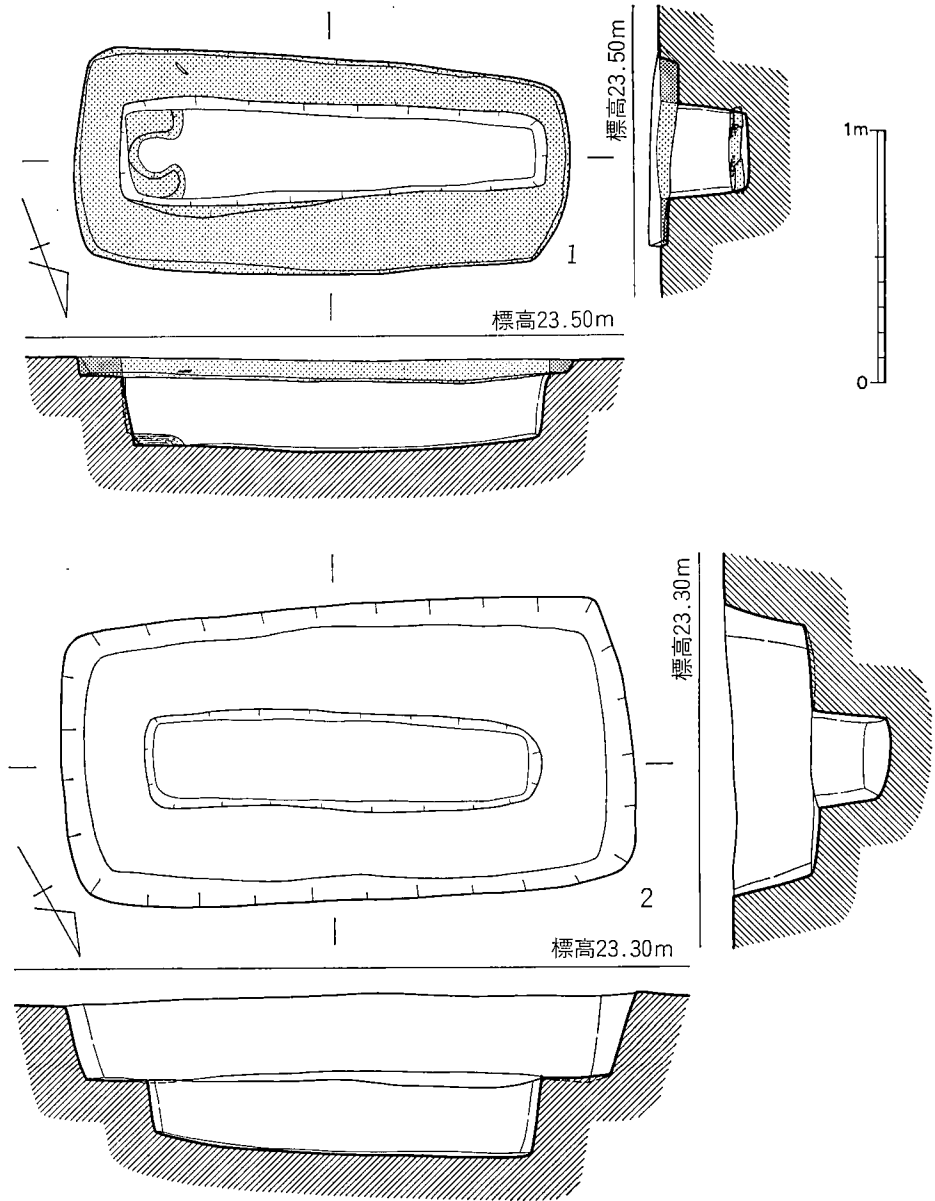
4号石蓋土壙墓(図版48, 第79図)

2号墳の南側に位置し、東に3号土壙墓が営まれている。2号墳への接近度合から、1・3号墳よりも2号墳との関係が深いと思われる。1～3号墳周辺の旧地形はかなり高かったと思われるが、かなり削平されており、本石蓋土壙墓も二段掘りの墓壙の上段は石蓋上面まで、しか遺存せず、石蓋も3石を残して持ち去られている。遺存する墓壙の規模は、主軸長1.9m、幅1.7mを測る。主軸方位はS-85°-Eで、東側床面に河原石が置かれ、あるいは枕かと推定され、頭位は東と推定する。棺内法は主軸長1.32m、幅25cm前後、床面から蓋石下面まで30cm強を測る。蓋石は黄色粘土で覆われていたようである。

1号土壙墓(第80図)

3号周溝墓の南溝東端部に営まれ、位置関係から4号よりも3号周溝墓との関係が深いと考

III 立野遺跡A地区の調査

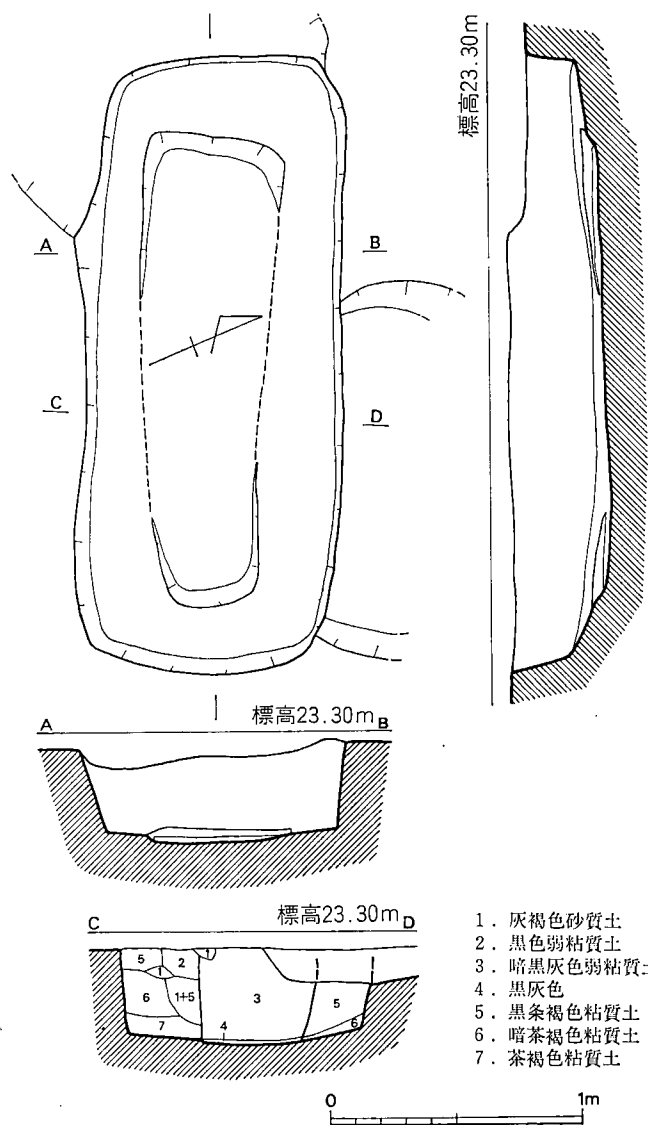


第80図 1・2号土墳墓実測図 (1/30)

える。二段掘りの木蓋土墳墓で、主軸を $S-70^{\circ}-E$ におく。規模は上端で主軸長 $1.97m$ 、幅 $0.85m$ を測る。南東側床面には粘土枕が設置され、内寸法は主軸長 $1.63m$ 、幅は頭位側が $35cm$ 、足位側が $20cm$ である。蓋をした後に黄色粘土で被覆していたようで、粘土が厚く遺存していた。刀子が棺外副葬され、上述の黄色粘土中に検出した。

III 立野遺跡A地区の調査

刀子（図版73，第76図—18） 茎の一部を欠失するが現存長7cm，身部長5.2cm，身幅1.2cmの小型品である。身の厚さは1.5mm程で薄い。身の関部側には黄色異物が錆着し，その範囲が関部付近で，木柄の錆着した部分をきれいに別れることから，革靴の鞆に納められていたと思われるが，詳細は不明である。



第81図 3号土墳墓実測図 (1/30)

2号土墳墓

(図版50，第80図)

6号周溝墓北溝に沿って営まれ，3号石蓋土墳墓と縦一直線に並んでいる。6号周溝墓の内部主体，3号石蓋土墳墓との配置状況から，3号石蓋土墳墓に後続するのではないかと推測され，6号周溝墓の被葬者との関係性は石蓋土墳墓の方が強かったのだろう。主軸方位をS-62°-Eにとり頭位は南東側だと推測する。墓墳の規模は上端で主軸長2.27m，幅1.17mを測る。木蓋であったと思われる，棺内法は主軸長1.5m，幅30cm前後。深さは30cm前後である。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

3号土墳墓（図版50，第81図）

2号墳南側に位置し，西に4号石蓋土墳墓が営まれている。土墳墓としたが，墓墳の土層断面図によれば，組合式木棺墓であったと思われる。墓墳は大きく攪乱され，また棺内埋土と裏込めの土との差は極めて似ており，平面観察でその区別をつけることはできなかった。墓墳は主軸長2.43m，幅1mを測り，床面に二段掘り状の若干の高底差がつくが，基本的には一段掘りである。主軸方位はN-68°-Wを示し，床面の状況から頭位は北西側かと思われる。木棺の組み合わせ方や規模については不明である。

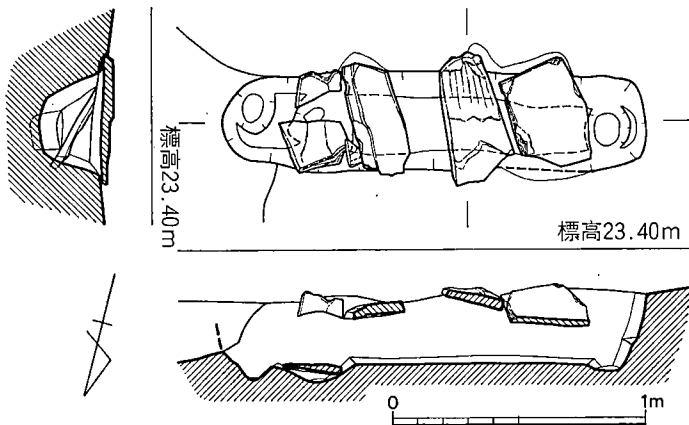
東支群の随葬墓

5・6号石蓋土墳墓の2基が存在し，先述したように，9号周溝墓溝底に2基の土墳墓が，12号周溝墓には壺棺墓が1基存在する。

5号石蓋土墳墓

（図版49，第82図）

9～11・13号周溝墓に囲まれ，11号周溝墓のブリッジのすぐ北側に営まれる。西支群の随葬墓が周溝に平行して営まれる傾向にあること，11号周溝墓のブリッジに近接して営まれることから11号周溝墓に付随すると推測する。頭位は東・西いずれか判断できないが，



第82図 5号石蓋土墳墓実測図（1/30）

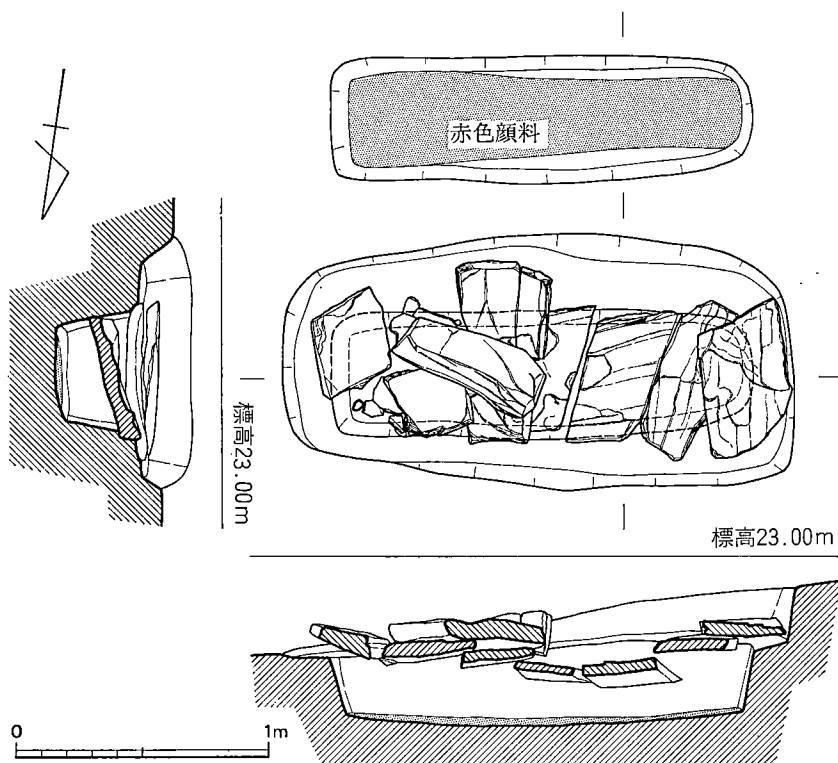
主軸を東一西におく方形周溝墓の内部主体の頭位はすべて東側であることから，本石蓋土墳墓の頭位は東側であろうと推測する。主軸方位はN-75°-Eにとる。攪乱を受け，4枚遺存する蓋石も原状を保たず割れて落ち込んでいる。床面で主軸長1.5m程，幅20cm前後である。

6号石蓋土墳墓（図版49，第83図）

東を除く三方を11・13・14号周溝墓に囲まれる。本石蓋土墳墓の真上に，根本の直径1m程を測る楠の大木が繁り，その根により蓋石がかなり原位置を移動していた。楠の根を取り除くのに丸3日を要した。配置状況や主軸方位が14号周溝墓の北溝および内部主体部にほぼ平行することから，14号周溝墓に付随すると推測する。

二段掘りの墓墳を有する石蓋土墳墓で，主軸方位はN-82°-Eを示し，床面に敷かれた赤色顔料の東西両小口部での幅の差と5号石蓋土墳墓と同じ理由で頭位は東だと推定する。床面

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第83図 6号石蓋土壙墓実測図(1/30)

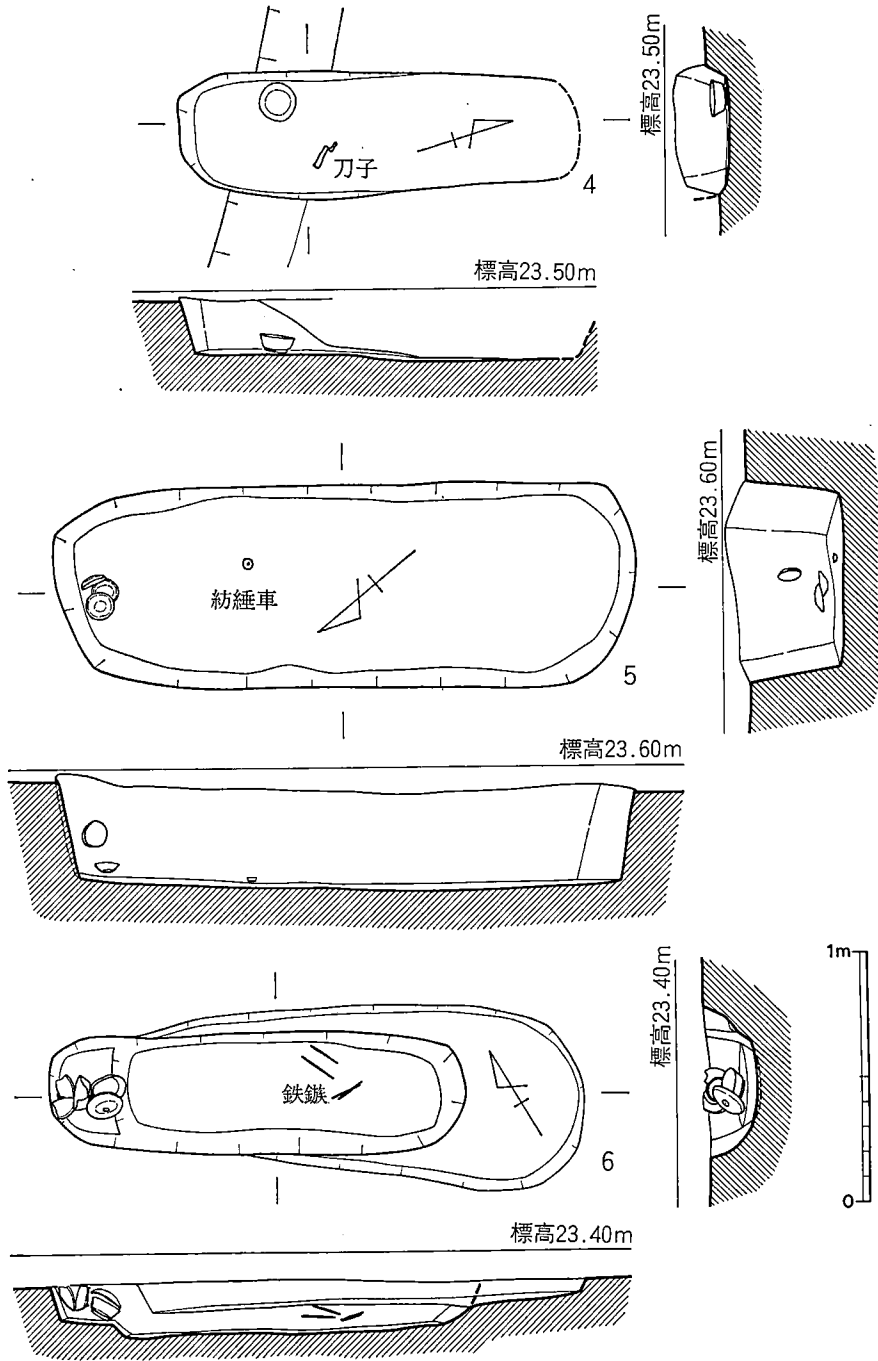
に敷かれた赤色顔料の厚さは本来1cmに満たなかったと思われるが、流入土のうち床面から厚さ3cm位までの範囲は赤色を呈する。棺内法は主軸長1.55m、幅35cm~33cmを測る。墓壙上段は東側がかなり削平されているが、主軸長2.04m、幅1m程である。副葬品などの出土品はない。(児玉)

7 土壙墓 (図版4・5・8・9, 付図2)

A地区においては、7~8世紀代の土壙墓53基を確認した。その中には、古墳時代前期の周溝墓・古墳の周溝埋土中に築かれていて埋土の判別が困難なためプランを全く把みきれず、ただ該期の土器が出土したことからその存在を知りえたもの(50~53号)も含んでいる。土器を有しない土壙墓の存在をも考えれば、発掘区内において更に数基の土壙墓が存したことも想定される。

土壙墓の分布は周溝墓群と同様大きくは東西2群に分けられ、両群ともに大半は周溝墓の周辺部に検出されている。個々の周溝内部の“墓域”に存するのは2基(12号・44号)しかなく、このことは周溝墓のほとんどが“墳丘”を有していたことを示唆している。特に3号墳の

III 立野遺跡A地区の調査



第84図 4・6号土墳墓実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

周辺には該期土壙墓群がとりまくように営まれている様相が顕著である。12号・44号の2基については“墳丘”流出後の造墓をみてよいだろう。

ところで、これら土壙墓群の造営者たちが“墳丘”を視覚的に認識していたにしても、果たして“墳丘”の周辺部のみで造墓したのか、あるいは“墳丘”中にも切り込んで営まれていたのかはいずれとも断じ難い。

この53基の土壙墓群は周溝墓群等との切合いは認められるものの、相互に切合った姿は見られない。個々の土壙墓についての詳細は第7表を参照されたい。

4号土壙墓5号土壙墓 D4 (図版51, 第84図)

時期不明のM3と重複し、それを切って営まれている。頭位は幅がやや広く床面レベルの若干高くなっている南側であろう。土器が南小口部から30cm程の床面上で正立して、また鉄刀子がそれより20cm程離れた床面上にて検出された。

出土遺物

須恵器 (図版68, 第85図)

壺(1) 身の完形品である。口径15cm, 高台径10.1cm, 器高5.3cmを測る。底部は内外ともなで、その他の体部は回転などを施す。小砂粒を多く含む。通常の焼き上がりの須恵器らしき灰色の発色ではないが、軟質ではない。淡茶灰色を呈する。高台内側にワラ状の圧痕を見る。

鉄器 (図版73, 第94図)

刀子(26) 現存長12.5cmを測り、茎が長めである。関は背の方のみに認められる。茎部分に若干の木質の付着を見る。

5号土壙墓 D5 (第84図)

略東西に主軸を有し、長さも幅も他に比して大きな土壙墓である。頭位は床面レベルの高くなっている東側であろう。須恵器は東小口部に接するようにして出土したが、坏蓋・身の1セット分が4cm程、もう1個の坏蓋と平瓶とが15cm程、いずれも床面より浮いた状態であった。また紡錘車が東小口部より60cm程の所にて、床面から僅かに浮いて出土した。紡錘車は副葬とも思えるが、土器は棺上に置かれていたものが落下した状態と考えた方が妥当であろう。

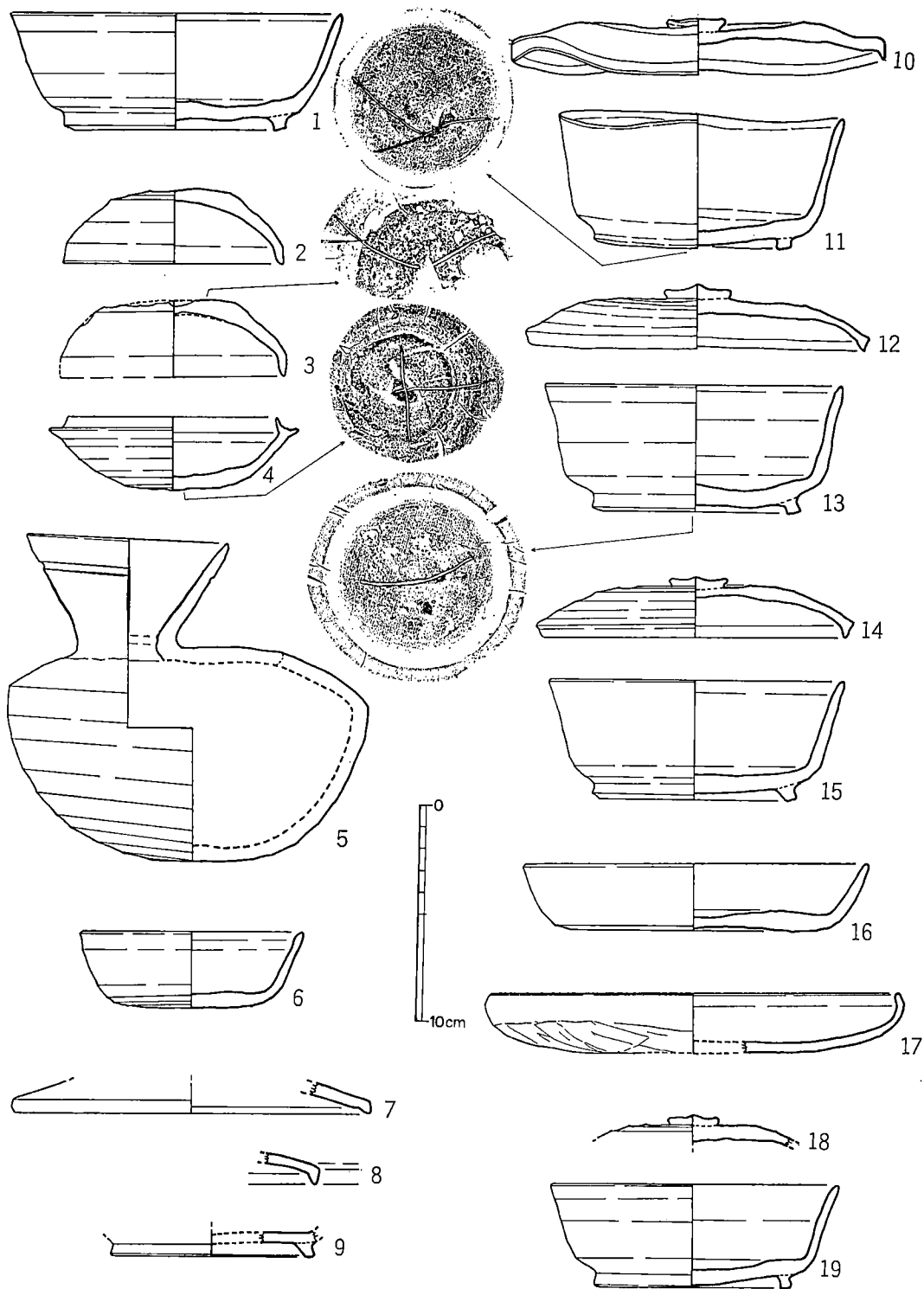
なお、平瓶については図面作成前に盗難に遭ったが、約半年後に調査用テント内に返却されてきた。

出土遺物

須恵器 (図版68, 第85図)

坏(2~4) 2は完形の蓋であり、4の身とセットになる。口径10.1cm, 器高3.3cm。天

III 立野遺跡A地区の調査



第85図 土墳墓出土土器実測図① (1/3)

III 立野遺跡A地区の調査

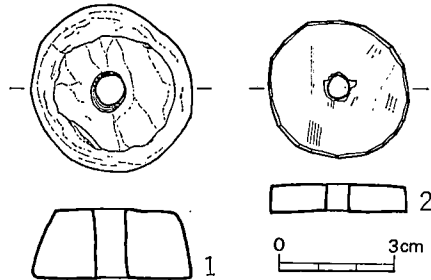
井部はヘラ切離しの後部分的に粗いヘラ削り、その他は回転なでであるが、天井部内面はその上をさらになでている。砂粒を多く含む。焼成は良好。外面が暗灰色、内面が紫灰色を呈する。3の蓋はほぼ完形に近いが口縁部のみを半分程欠失し、天井部は内外ともに剝落部分が多い。口径10.3cm、器高3.5cm。天井部にヘラ記号を有する。胎土・焼成は2と同様で、色調は暗灰色～青灰色を呈す。

4の身は完形品である。口径9.6cm、受部径11.5cm、器高3.3cmを測る。内底面がなで、底部部がヘラおこしのままで、そこに十字形のヘラ記号を施す。体部は内外とも回転なで。砂粒多いが焼成は良好。青灰色を呈し、外面の一部が灰をかぶる。

平瓶(5) 完形品。口縁は楕円形気味となり、7.5～9cmを測る。胴部最大径16.5cm、器高14.5cm。口縁下1.5cmに沈線を一条巡らす。肩部の屈折は鈍角ながらも稜線のみをみる。口頸部内外と外面胴部上半まで回転なで、底部周辺は回転ヘラ削りを施す。砂粒を多く含み、焼成は良好。口縁内外と肩部までが灰を被っているためやや黄味を帯びるが、大半は暗紫灰色を呈する。

紡錘車(図版74, 第86図-1)

滑石製である。下面径4.2cm、上面径3.2cm、高さ1.9cm。一部に煤が付着している。



第86図 紡錘車実測図(1/2)

6号土壙墓 D6 (図版51, 第84図)

2号石蓋土壙墓を切って営まれている。変則的な二段掘りとなるが、果たして当初からこのような形状であったのか否かは定かでない。北西小口部は枕状に一段高く削り出され、そこにやや浮いて須恵器壙の蓋・身2セットが存した。頭位はこちら側とみてよいだろう。また、中央やや東寄りで鉄鏃4本が出土した。土器は棺上からの落下とみてよいが、鉄鏃については不明である。

出土遺物

須恵器(図版68, 第85図)

壙(10～13) 10の蓋は歪みが著しい製品で、口径17.1cm、撮径・器高ともに2.6cmを測る。天井部に貼りつけた撮は偏平な釘状を呈する。口縁部は緩やかにカーブする天井部からほぼ直角に曲がって鳥嘴状となる。口縁付近の天井部は割と分厚い。天井部の上面が回転ヘラ削り、内面はなで、その他は回転なでにて調整す。砂粒を多く含み、焼成は良好。灰を被って暗灰色を呈する。11の身とセットをなす。12の蓋は10に比して撮と口縁部の形状に若干の違いを

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

みる。口径15.4cm, 撮径3cm, 器高2.9cm。調整は10と全く同様。撮中心から半径6.5cm程の天井部外面に重ね焼きの痕跡がみられ、塚か坏の身の口縁上に逆さに置いて焼成されたことがわかる。焼成がややあまい感じを受け、くすんだ灰色を呈する。胎土は10と同じ。13とセット。

11の身は完形であるが歪みが著しい。11.8~14.2cmの口径で、高台径は9cm前後、器高6cm程を測る。底部内外がなで、その他は回転なでを施す。砂粒を多く含む。焼成良。灰を被り暗灰色~灰青色を呈す。底部にヘラ記号が刻される。13の身は口縁の一部を欠失するのみでほぼ完形に近い。口径13.6cm, 高台径9.5cm, 器高5.7cm。胎土・焼成・色調ともに11と同じ。底部にヘラ記号を持つが、ヘラ先によるものか別の原体か不明。また高台の一箇所に切込みを入れているが意識的なものかどうかわからない。

鉄器 (図版73, 第94図)

鉄鏃 (19~22) 完形品はなく、いずれも切損している。身の残る3・4は両丸造となる。3の現存長14cm。

7号土壙墓 D7 (第87図)

6・7号周溝墓間の南端にあり、各々の周溝を切って営まれている。この周辺は相当の攪乱を受けていた。頭位は定かでないが、西方向と考えたい。この7号土壙墓とほぼ同一レベルで、1mも離れていない所(6号同溝墓の南隅)から鉄鏃の茎片が出土している。これは本来土壙墓に伴っていた可能性が高いのでここで触れる。

出土遺物

鉄器 (図版72, 第94図)

鉄鏃 (23) 現存長10cmの茎の破片である。形態等は不明。

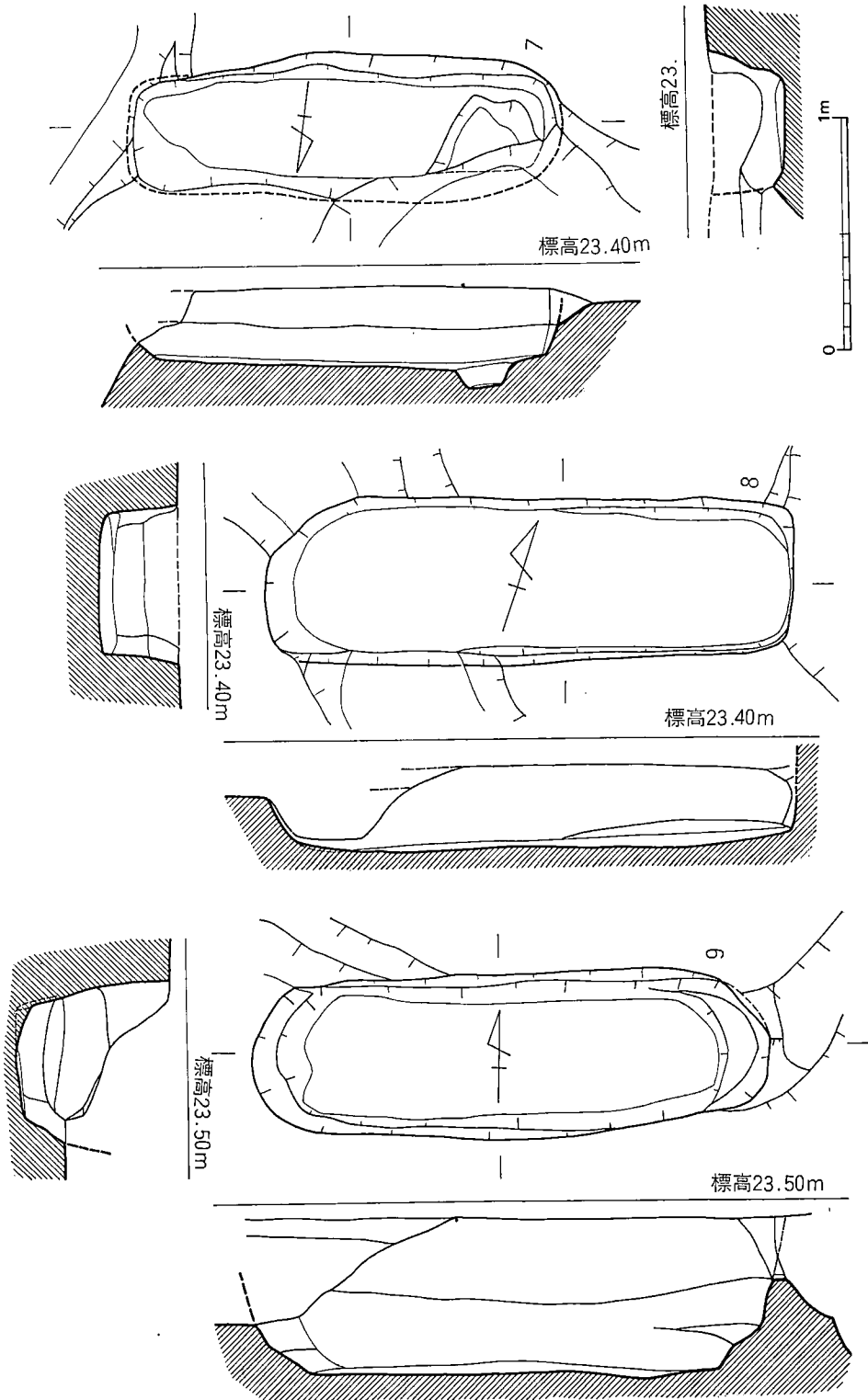
8号土壙墓 D8 (第87図)

3・7号同溝墓の各コーナー間にあり、双方の同溝を切っている。またM4によって西側上半部が切られる。主軸は略東西にとり、頭位は幅のやや広い西側と考える。出土遺物なし。

9号土壙墓 D9 (第87図)

7号周溝墓南側コーナー部分の周溝内側肩部に、周溝を切って存する。頭位は幅のやや広い西側であろう。東西両小口部とも若干の段がつく。最深部で68cmを測る深いものであるが、周辺が攪乱されていることもあって南半は欠失部分が多い。この土壙墓の外で、東小口部に近い所から鉄鏃1点が出土している。本来この土壙墓に伴っていた可能性が高いのでここで説明する。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第87図 7～9号土甕実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

出土遺物

鉄 器 (図版73, 第94図)

鉄 鏃 (24) 茎のごく一部と筥被部分しか残存しない。現存長7.2cm。

10号土壙墓 D10 (第88図)

7号周溝墓南側コーナーの周溝外肩部を僅かに切って営まれている。9号土壙墓の1m程南側である。東小口部が僅かに段を持つのは壁面の崩壊によるものであろう。頭位は幅のやや広い西側と考える。出土遺物はない。

11号土壙墓 D11 (第88図)

7・8号周溝墓間にあり、7号周溝墓の同溝を切って営まれた小型の土壙墓である。頭位は床面レベルが高くなっている北東側であろう。この北東小口壁は若干内傾している。埋土中から須恵器坏身が出土した。

出土遺物

須恵器 (図版68, 第85図)

坏 (6) やや丸味がかった平底をなすもので、完形に近い。口径10.2cm, 器高3.6cm。底部付近は割と分厚い。底部の内面はなで、外面が回転ヘラ削り、その他は回転なで調整する。微砂粒を多く含み、焼成良好。内外ともくすんだ灰色を呈す。なお、焼成時に底部にひびが入っている。

12号土壙墓 D12 (第88図)

8号周溝墓の内側に築かれ、西小口部のごく一部が周溝内側肩部を切っている。頭位は小口幅の広い北東側であろう。この北東小口部はその断面が袋状となっている。出土遺物なし。

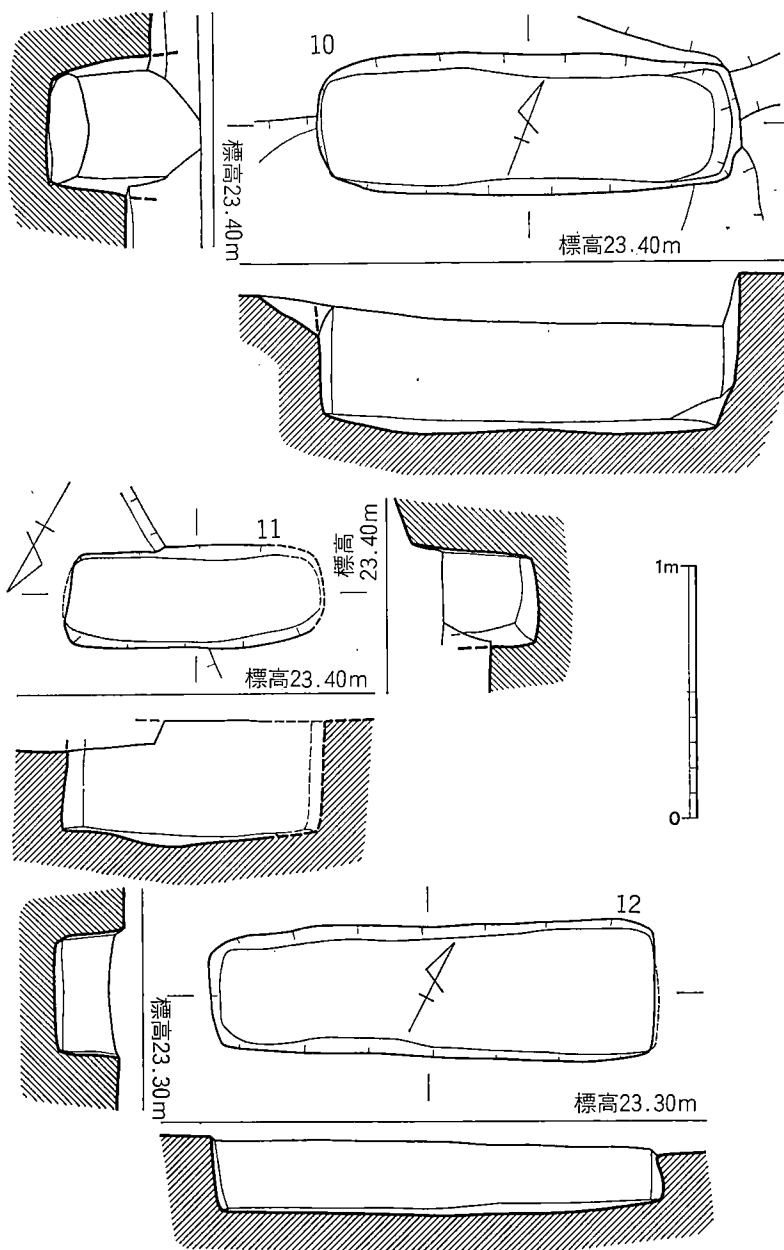
13号土壙墓 D13 (第89図)

1号墳の2m程東隣に存す。北東側の半分は近代の溝により削平されており当初の規模を知りえないが、全長2mを越すものではなかろう。出土遺物はない。

14号土壙墓 D14 (図版53, 第89図)

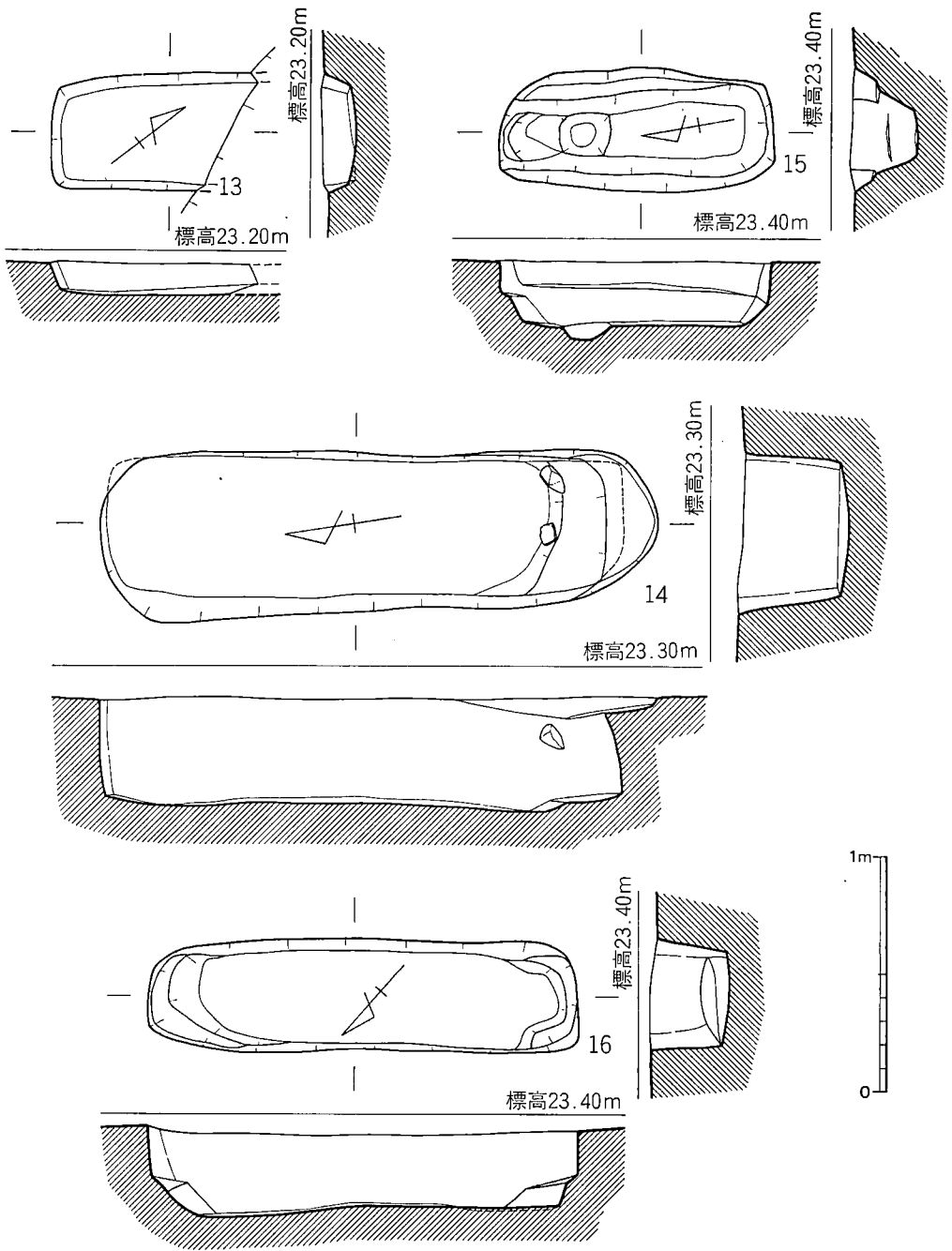
16・18号墳間に位置し、主軸をほぼ南北にとる。南小口部のみが遺構検出面より5cm程低く二段となっているが、蓋材のための段かどうかはわからない。この小口部の断面は若干の袋状

III 立野遺跡A地区の調査



第88図 10~12号土墳墓実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査



第89図 13~16号土墳墓実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

となる。さらに、この南小口部床面は25cm程の長さにわたって約5cm高く削り出されており、枕としたものであろう。床面自体は中央付近がやや盛り上がった形状を呈する。枕とした南小口部の床面より30cm程浮いた埋土中に、拳大の礫2個が存した。また埋土中に須恵器甕の破片が存したが図示にたえない。

15号土壙墓 D15 (第89図)

略南北に主軸をもつ小型の土壙墓である。床面主軸長は1mに満たない。頭位ははっきりしないが、幅の広い南側としておく。両小口部・側壁部ともに若干の段を有している。北小口部から30cm程の床面に浅いピットがあるものの用途は不明。埋土中から須恵器片が出土している。

出土遺物

須恵器 (第87図)

壙(7~9) 7・8の蓋は口縁の形状が、7は断面三角形、8は鳥嘴状となり違いをみる。7は復原口径16.5cm。砂粒多く胎土は粗質・焼成あまく灰黄白色を呈す。8は胎土良で焼成はややあまいが灰色をなす。いずれも横なでの調整をみる。また、内面の口縁端部より1cm強の所に、身とともに焼成した如き痕跡が認められる。

9の身は復原で高台径9.4cm。なでと横なでの調整をみる。砂粒多く焼成はふつう。灰色を呈す。

16号土壙墓 D16 (第89図)

両小口部ともに不自然な段を有するが、頭位と思しき南西小口部はあたかも頭を置く部分を意識したかのようにU字形の段となっている。床面は若干の凹凸が見られるが、全体としては中央付近が盛り上がった形状を呈する。出土遺物はない。

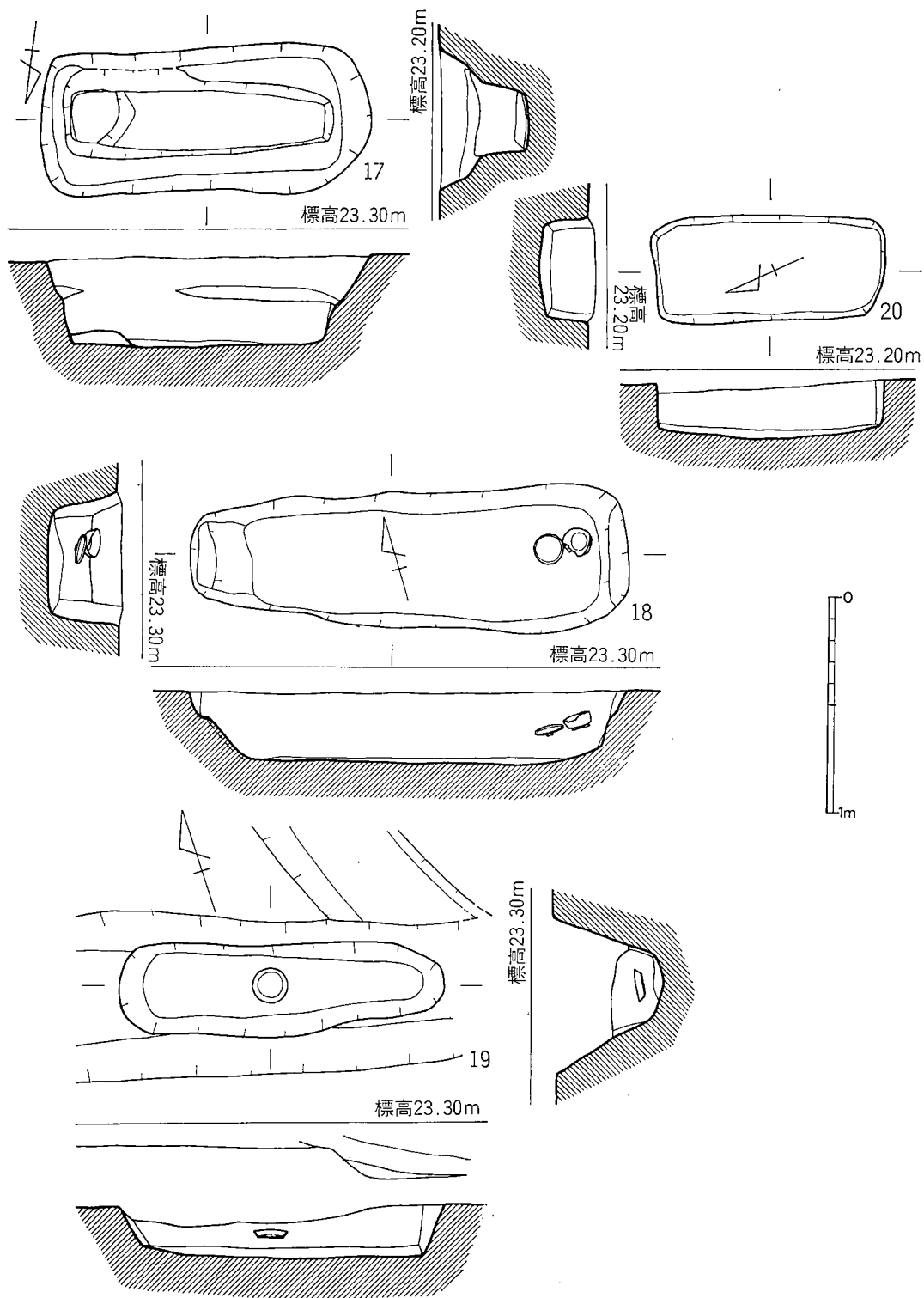
17号土壙墓 D17 (第90図)

16号土壙墓の東側1m程の所にある。緩やかな段をもつ二段掘りとなるが、規模は小さく小人用と思われる。東側が頭位で、茶褐色粘質土を使った枕が5cm程の厚さに貼りつけてある。出土遺物はなかった。

18号土壙墓 D18 (図版53, 第90図)

東西両小口部ともに若干の段を有するもので、頭位は小口幅が広く床面レベルが少し高くなっている東側であろう。東小口部に近い所から須恵器碗蓋・身が床面より10cm強浮いて出土した。その碗蓋は逆さに、身はやや斜めながらも正立に近い状態であり、棺上に置かれていた

III 立野遺跡A地区の調査



第90図 17~20号土墳墓実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査

ものが落下したと考えられる。

出土遺物

須恵器（図版68，第85図）

壺（14・15） 14の蓋は完形品である。口径13.8cm，器高2.8cm，口縁は鳥嘴状を呈す。撮は釘状のものを貼りつける。天井部外面は右回りの回転ヘラ削り，内面はなで，口縁周辺と撮部分は回転なでを施す。砂粒を多く含み，焼成は良好。灰を被ってくすんだ灰色を呈する。口縁端部から1cm程の外面に重ね焼きの痕跡が認められる。

身である15は口縁を一部欠失するもののほぼ完形である。口径13.6cm，高台径9.4cm，器高5.4cm。高台部分はその中央が僅かに窪んでいる。また高台内側の底部は粘土巻上げの痕跡が明瞭である。底部の内外がなで，その他は回転なで。微砂粒を含むも胎土は良質。焼成がややあまい。淡茶灰色を呈す。

19号土壙墓 D19（第90図）

上半部を近代の溝2条によって削平されているが残存状態はふつうといえる。床面レベルは西小口部が緩傾斜で高くなっており，小口幅の広さからみても頭位はこちら側であろう。ほぼ中央付近にて，床面より10cm程浮いて土師器坏が出土した。棺上から落下したものであろう。

出土遺物

土師器（図版69，第85図）

坏（16） 口縁部を少し欠くのみで完形に近い。口径15.8cm，器高3cm。底部は中央が薄くなって僅かに上げ底となる。口縁周辺が回転なで，底部内面はなで，外面が回転ヘラ削りを施す。砂粒多く，焼成は良。茶橙色を呈し，口縁から底部近くに黒色の異物が付着している。また，底部内面にはワラ様の植物質の原体による擦過痕が6～7本ある。

20号土壙墓 D20（第90図）

長さ1m強の小型の土壙墓である。床面は中央付近が僅かに窪む。出土遺物はない。

21号土壙墓 D21（第91図）

20号土壙墓の東1m程の所に，それと直交する方向で営まれている。東小口部付近は近代の溝によって上半を削平されるが，全形を知るに支障はない。この東小口部は両側壁に伸びる格好で段がつく。一見して西小口部が広いようがあるが，削り出しの段，土器の存在からみて頭位は東側としておきたい。土師器皿が東小口部の段上に，北側壁に接する如くして出土した。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

出土遺物

土師器（図版69, 第85図）

皿（17） 約 $\frac{1}{3}$ の破片である。復原で口径18.6cm, 器高2.8cm。口縁下で内彎する。底部内面はなで、外面は手持ちのヘラ削り、口縁内外は横なでを施す。砂粒を含むが器表面にはあまり目立たない。焼成は良好。外面はやや赤味を帯びた明茶色、内面は黄灰褐色を呈す。

22号土壙墓 D22（図版53, 第91図）

21号土壙墓とほぼ同じ方向に主軸をもつ。東小口部は二段となるが、ここが枕とは考えにくい。小口幅は東側より狭いものの床面レベルは西側の方が高くなっているため、頭位はむしろこの方向としておきたい。西小口壁より50cm程の所で、床面より10cm弱浮いて須恵器壙が出土した。棺上からの落下であろう。また埋土中に壙蓋の破片があった。

出土遺物

須恵器（図版69, 第85図）

壙（18・19） 18は蓋の小片である。割と小さな撮をもつ。撮周辺が回転なで、天井部外面は回転ヘラ削り、内面はなでを施す。砂粒多く、焼成良好。外面が暗灰～黒灰色、内面がやや青みがかかった灰色を呈する。灰を被っている。

19の身は完形で口径13.2cm, 高台径9cm, 器高4.6cmを測る。高台は細みのものを貼りつけている。底部内外がなで、他は回転なでにて調整する。砂粒多し。焼成良好。くすんだ灰色を呈する。内面は灰を被っている。

23号土壙墓 D23（図版54, 第91図）

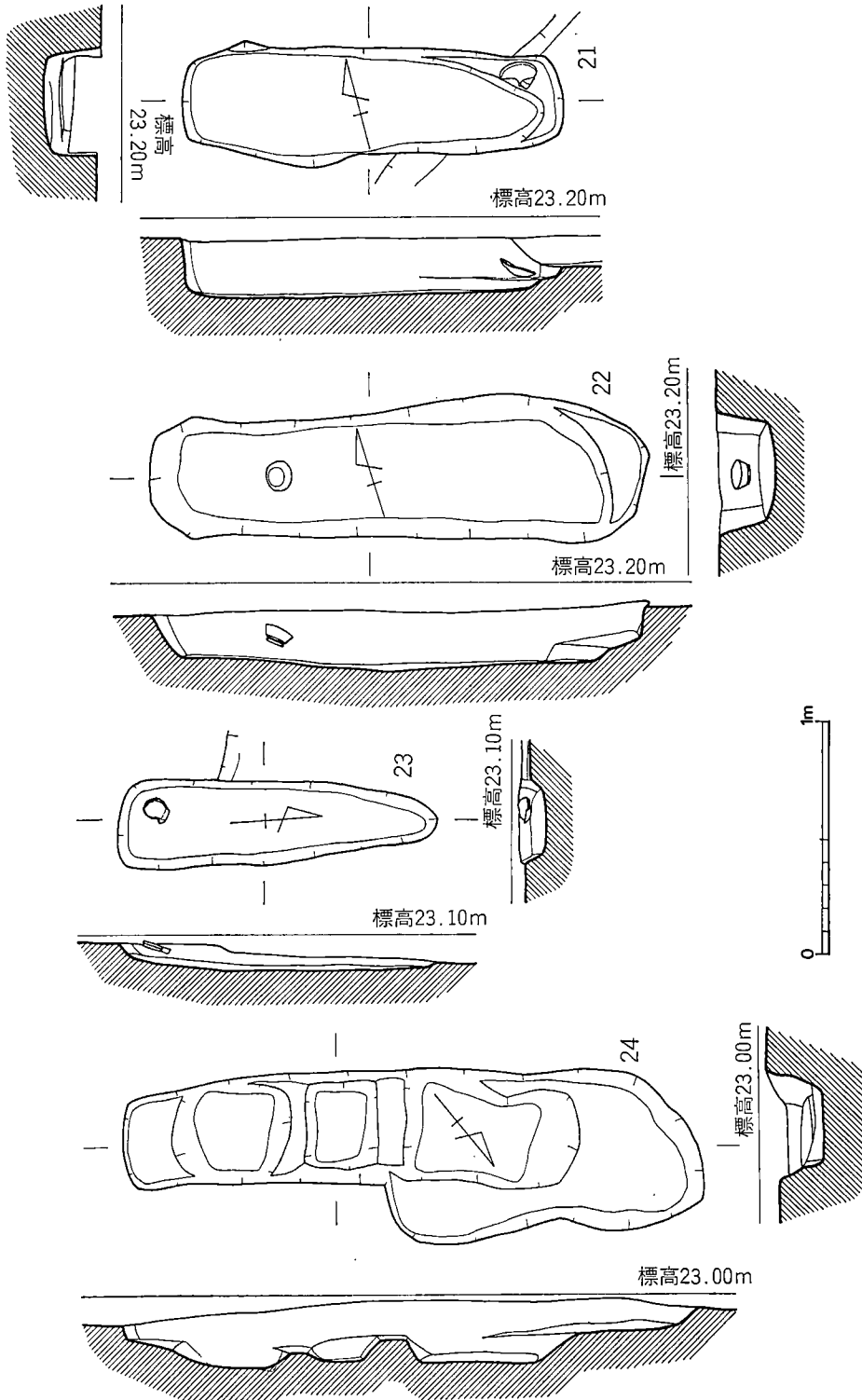
削平が著しく、最も深い所で12cmしかない。南小口部幅が広く、かつ床面レベルも僅かに高くなっているため頭位はこちらであろう。南小口壁寄りに、床面から約5cm浮いて須恵器壙が出土した。棺上から落下したものと思われる。

出土遺物

須恵器（図版69, 第92図）

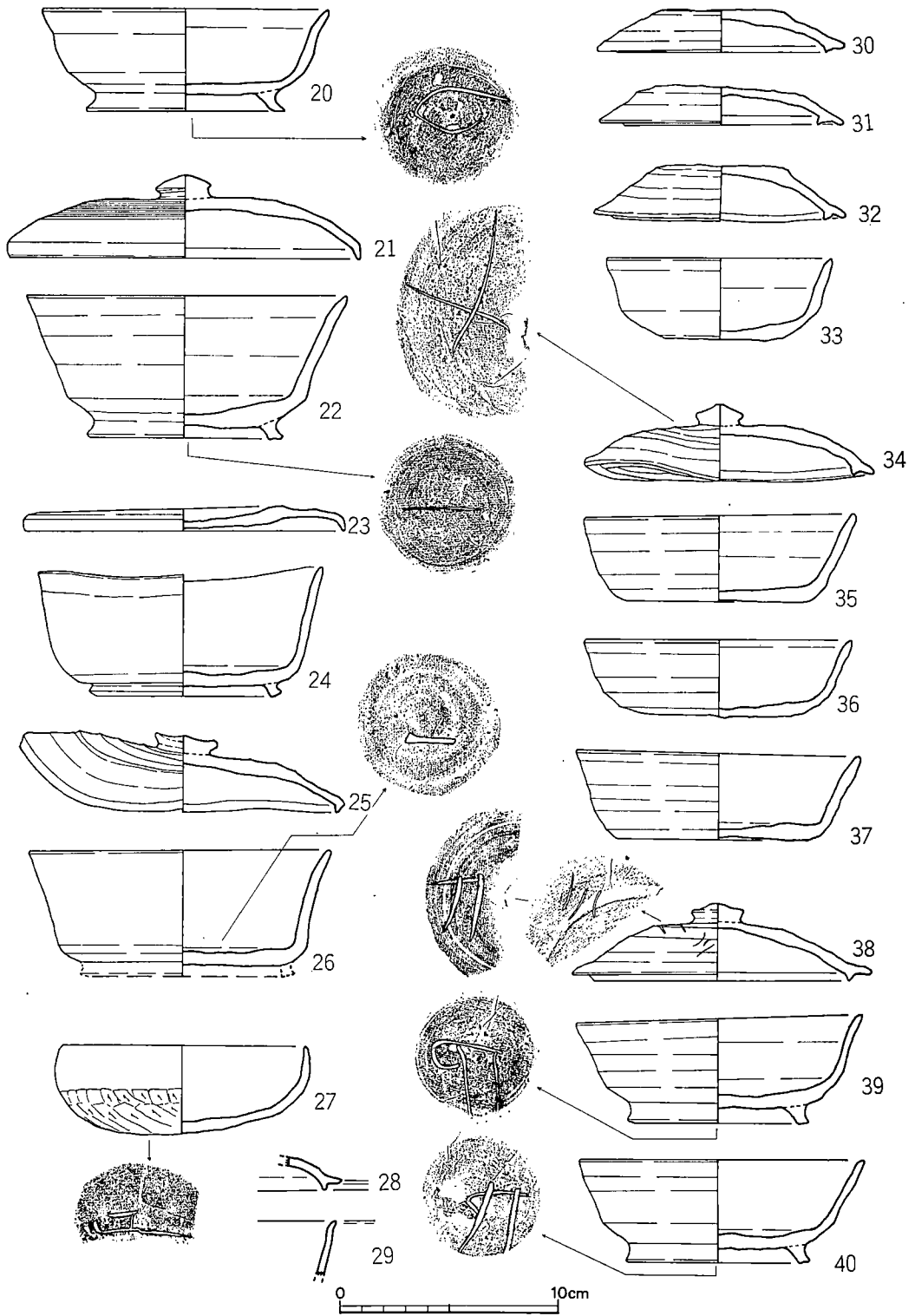
壙（20） 復原で口径13.2cm, 高台径9.1cm, 器高4.6cmを測る身である。高台は高く外側へ踏ん張った形状を呈し、丸みをもちながら立上った体部は口縁下で外反する。底部内外がなで、その他は回転なでを施す。胎土精良、焼成堅緻。くすんだ暗灰色を呈する。底部高台内側にヘラ記号を見るが、ワラ様のもので施したものらしい。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



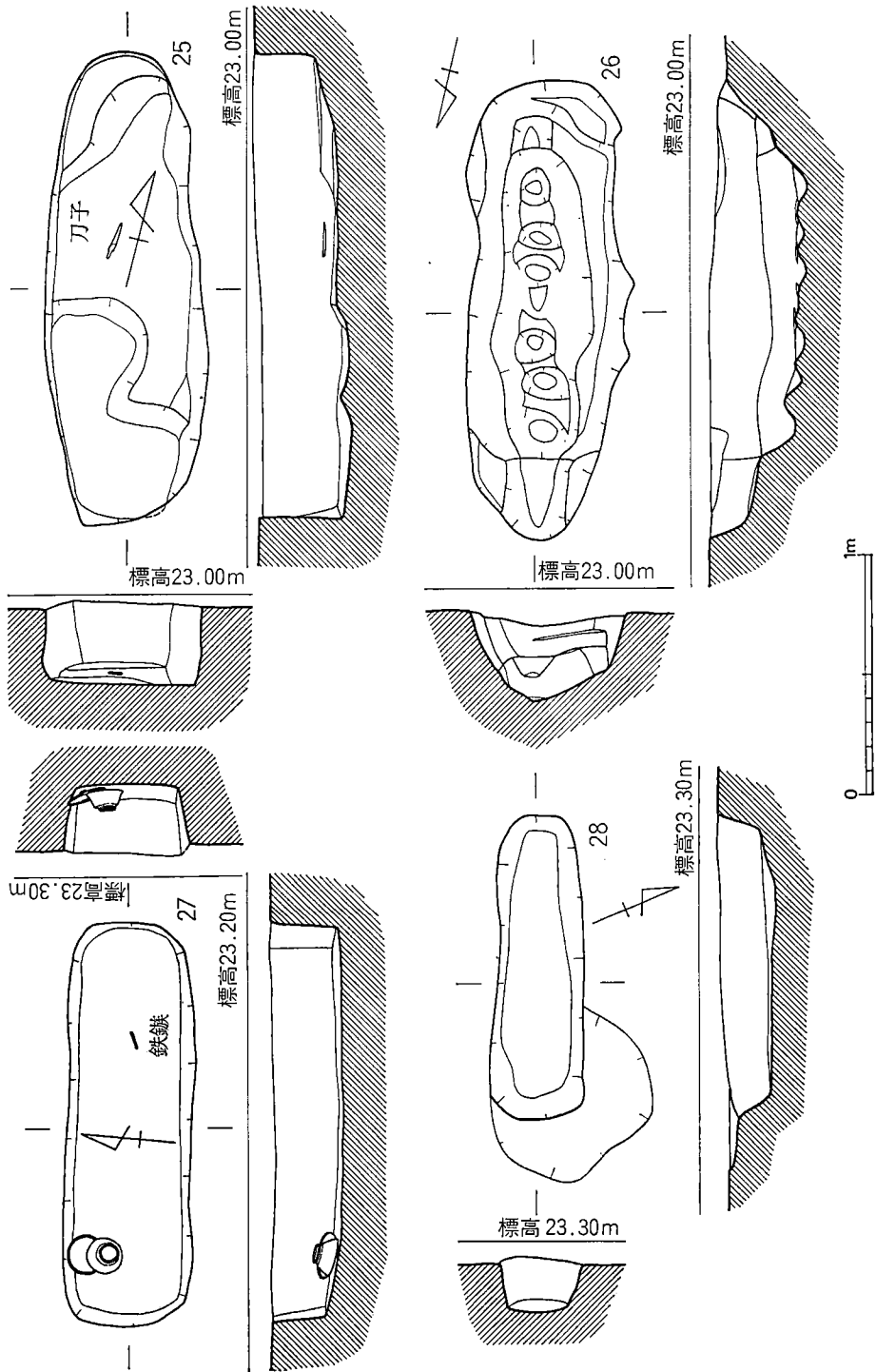
第91図 21~24号土城墓実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第92図 土城墓出土土器実測図② (1/3)

III 立野遺跡A地区の調査



第98図 25~28号土藏墓表測図 (1/30)

24号土壙墓 D24 (第91図)

頭位は北西側と思われる、そこは別の掘込みと重複している。中央付近に二つの突起があり、視覚上はピット3個が連結した様相であるが、本来の床面は突起の上面レベルであろう。そうするならば床面下に掘込みが存することとなるが、その意義については不明である。出土遺物なし。

25号土壙墓 D25 (図版54, 第93図)

若干胴膨らみの形状を呈している。北小口部は一段高い部分があり、反対の南側は一段低くなっていて、全体に不整な感じを受ける。頭位は北側とみてよかろう。中央やや北寄りにて、床面から5cm程浮いて鉄刀子が鋒を北に向けて出土した。

出土遺物

鉄器 (図版73, 第94図)

刀子 (27) 全長16.7cmを測る完形品である。柄の木質が関付近と茎尻付近に残存し、殊に関の所は断面卵形を呈して残りがよい。刃部長は全長の約半分で8cm前後となろう。

26号土壙墓 D26 (第93図)

凹凸の著しい形状を呈し、深くなった床面は6個のピットが接続した様相となる。本来の床面がこの凹凸著しい最下段の部分なのか、あるいは深さ20cm程の所であったのか判然としないが、いまは後者を考えておきたい。とすれば24号土壙墓と同じく、この土壙墓を掘削した段階の床面下層の遺構が存することになる。頭位は不明とせざるをえないが北側であろうか。

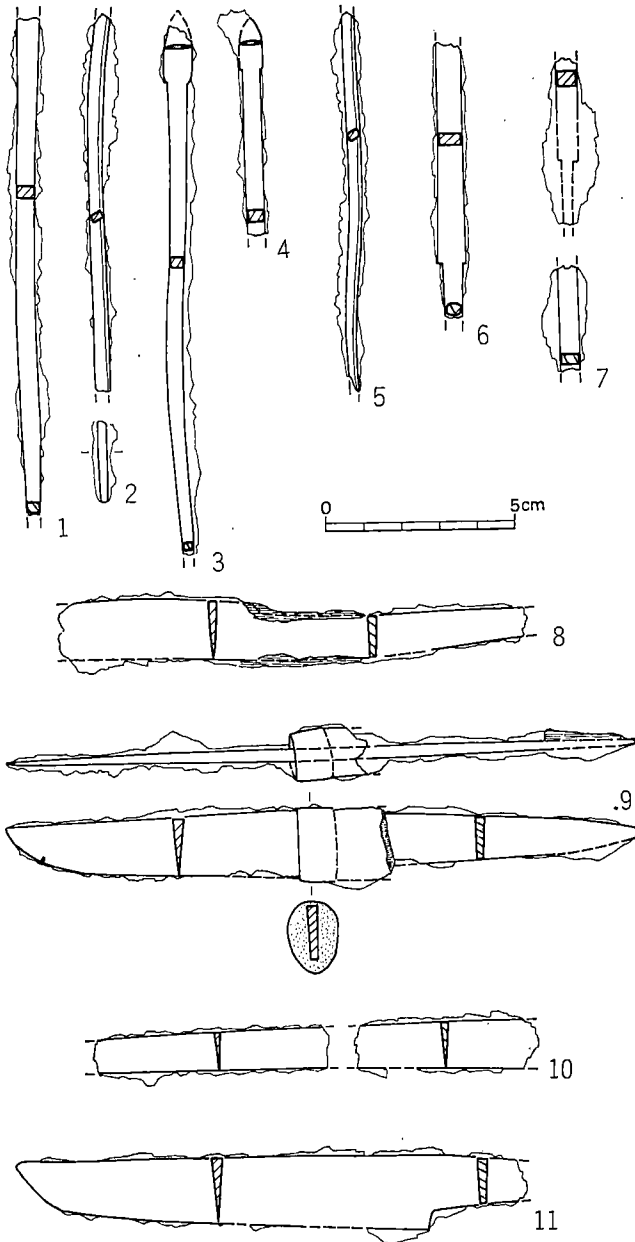
27号土壙墓 D27 (図版54, 第93図)

深さを除いて本来の形状を呈していると思われる、整美なつくりである。床面レベルは西側が高くなっており、小口幅からみても頭位はこの方向であろう。西小口部の床面上に、北壁に接して須恵器碗蓋・身が逆さの状態出土した。また、東小口部から50cm弱の所の床面に鉄鏃の茎部分が主軸方向に沿って存した。

出土遺物

須恵器 (図版69, 第92図)

碗 (21・22) 21は完形の蓋である。口径16cm, 器高3.7cm。やや扁平気味の宝珠形撮をもつ。口縁部は鈍角に折れ曲がり、あまりシャープさを感じない。天井部外面は右回りのカキ



第94図 土壙墓出土鉄器実測図 (1/2)

目、内面はなで口縁付近は回転なでを施す。胎土は砂粒を多く含んでいて粗い。焼成は良好。外面は灰を被って黒灰色、内面は青味がかかった灰色を呈す。

22の身も完形品である。口径14.6cm、高台径9cm、器高6.4cmを測る。高台は外側へ踏ん張った格好で、その畳付部分は僅かに窪んでいる。体部は高台部分から直線的に外へ開いてまもなく明瞭に屈折し、そこから緩やかに口縁部へと開く。底部内外はなで、体部の屈折部以下は回転ヘラ削り、その他は回転なでを施す。砂粒多く含み、焼成は良好。くすんだ灰茶色を呈する。底部の高台内側に植物質繊維による擦過痕を見る。

鉄器 (図版73, 第93図)

鉄 鏃 (25) 茎部分が2本あり、同一個体か否かは不明。

双方とも銹化著しく、詳細は不明である。

28号土壙墓

D28 (図版55, 第93図)

本遺跡の土壙墓群を大きく東西二群に分けたうちの、西群の東端に位置する。東小口部付近の上部は若干の攪乱を受ける。頭位は小口幅の広い東側である

う。西小口部のやや中央寄り床面が若干窪んだ形状を呈する。出土遺物はなかった。

29号土壙墓 D29 (第95図)

北東側の一部が新しい溝によって削平されて全体の規模を知りえないが、いくら大きくとも全長2mを越すものではないだろう。頭位は削平された北東側と思われる。出土遺物なし。

30号土壙墓 D30 (第95図)

隅角の丸くなった小型の土壙墓である。削平が著しく深さは10cm強しかない。頭位は判然としないが、やや幅の広い北側としておく。出土遺物なし。

31号土壙墓 D31 (図版56, 第95図)

小型の土壙墓である。両小口壁はともに床面から緩傾斜の段をもってから立ち上がっている。頭位は北西側であろう。

32号土壙墓 D32 (第95図)

東小口部は若干の段を有するが、枕とするには小さすぎる。しかし、小口幅からすれば東側を頭位とできよう。出土遺物なし。

33号土壙墓 D33 (図版55, 第95図)

10号周溝墓の南東コーナーに一部が重複し、半分以上が11号周溝墓の周溝にのっている。埋土の変化が明瞭に把握できなかつたため北東部分は不明とせざるをえないが、全長2m前後の大きさであろう。床面にピットがあるのは24・26号土壙墓と同様のものと思われる。頭位は不明ながらも一応南西側としておく。

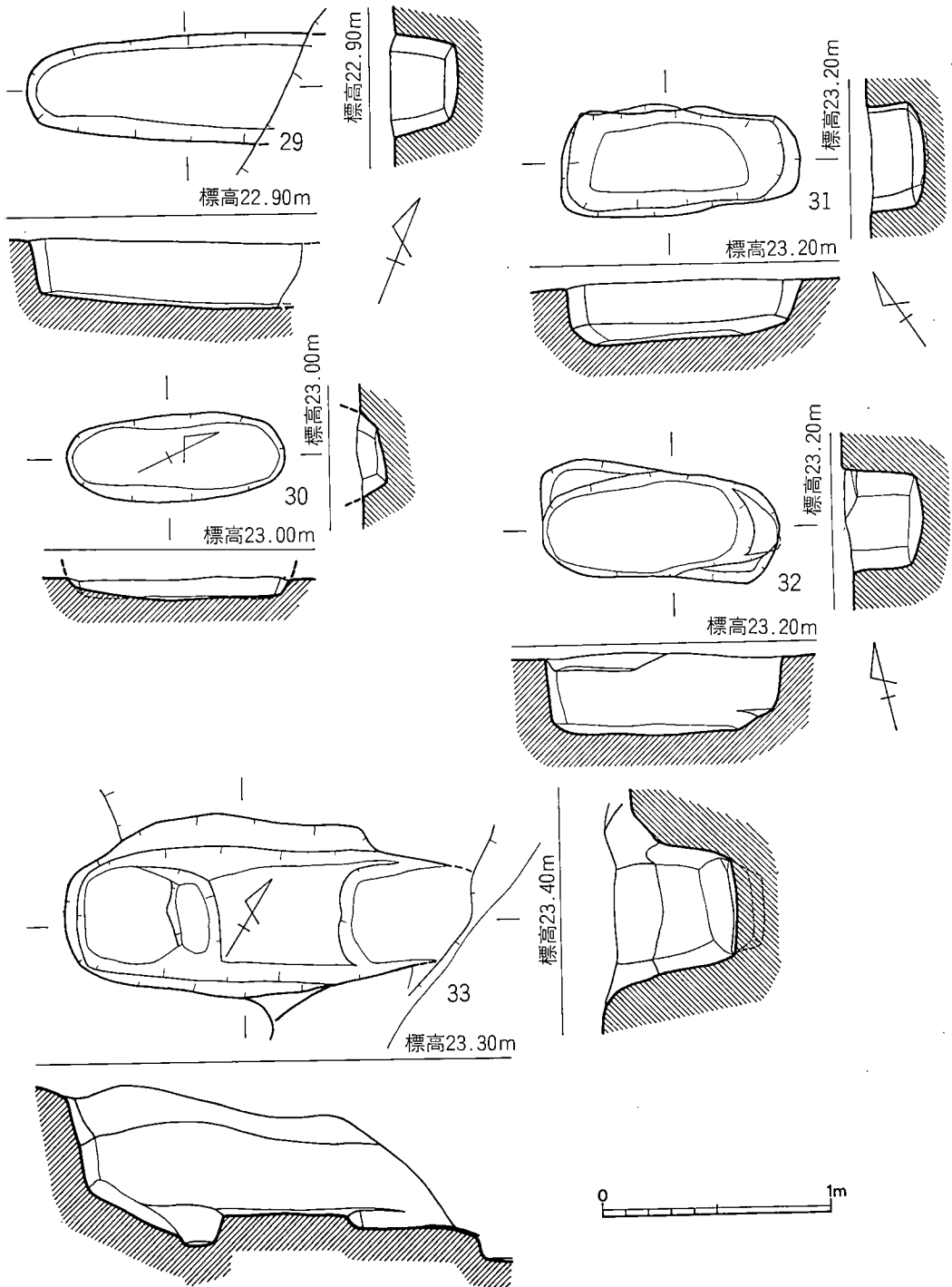
34号土壙墓 D34 (第96図)

床面は南東側がやや低くなってから緩傾斜で立ち上がって小口壁に至るものである。頭位は小口幅のやや広い南東側と思われる。出土遺物はなかった。

35号土壙墓 D35 (第96図)

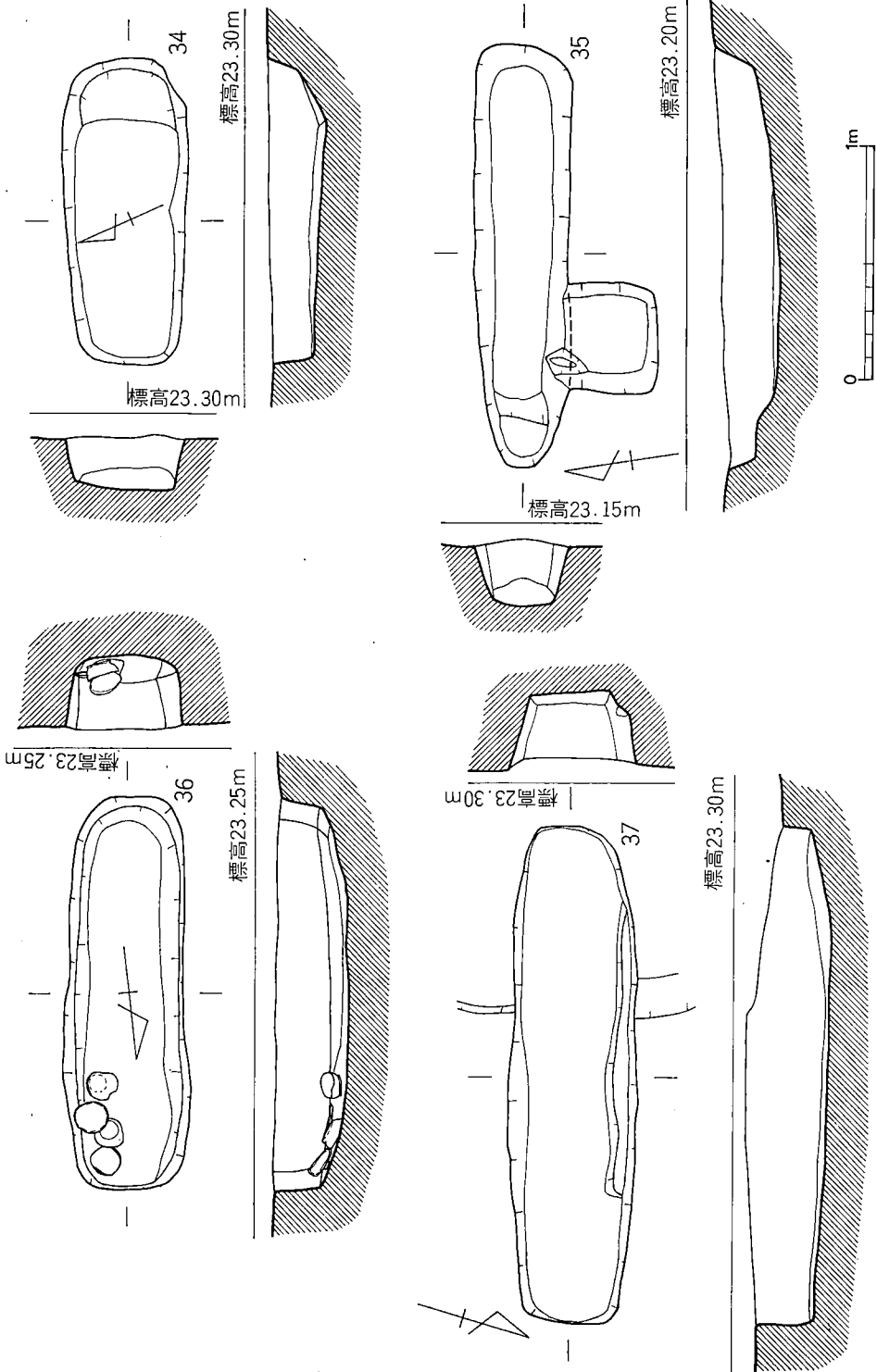
やや細みの土壙墓で、西小口部付近を近代の土壙に切られている。西小口部は床面から8cm程の段がつくが、この段上のレベルは東小口部床面のレベルと同一である。頭位は東側とみてよい。埋土中より須恵器の破片が出土した。

III 立野遺跡A地区の調査



第95図 29～33号土墳実測図 (1/30)

III 立野遺跡A地区の調査



第96図 34~37号土坑墓実測図 (1/30)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

出土遺物

須恵器 (図版69, 第92図)

壙 (28・29) 蓋と身の破片で、いずれも径を知りえない小片である。28の蓋はかえりを持つ。29の身は口縁端部が僅かに外反している。いずれも砂粒を多く含み、焼成は29がややあまい。

36号土壙墓 D36 (図版56, 第96図)

10号周溝墓の陸橋部正面南方にある。舟底状と称するには誇張が過ぎるものの、中央付近がやや低くなった床面となる。北小口部がやや幅広く、頭位とされよう。その小口部東側壁寄りの床面にて須恵器壙蓋・身2セットが出土した。また、埋土中に須恵器平瓶片1、甕片1が存したが、これらは図示にたえない。

出土遺物

須恵器 (図版69, 第92図)

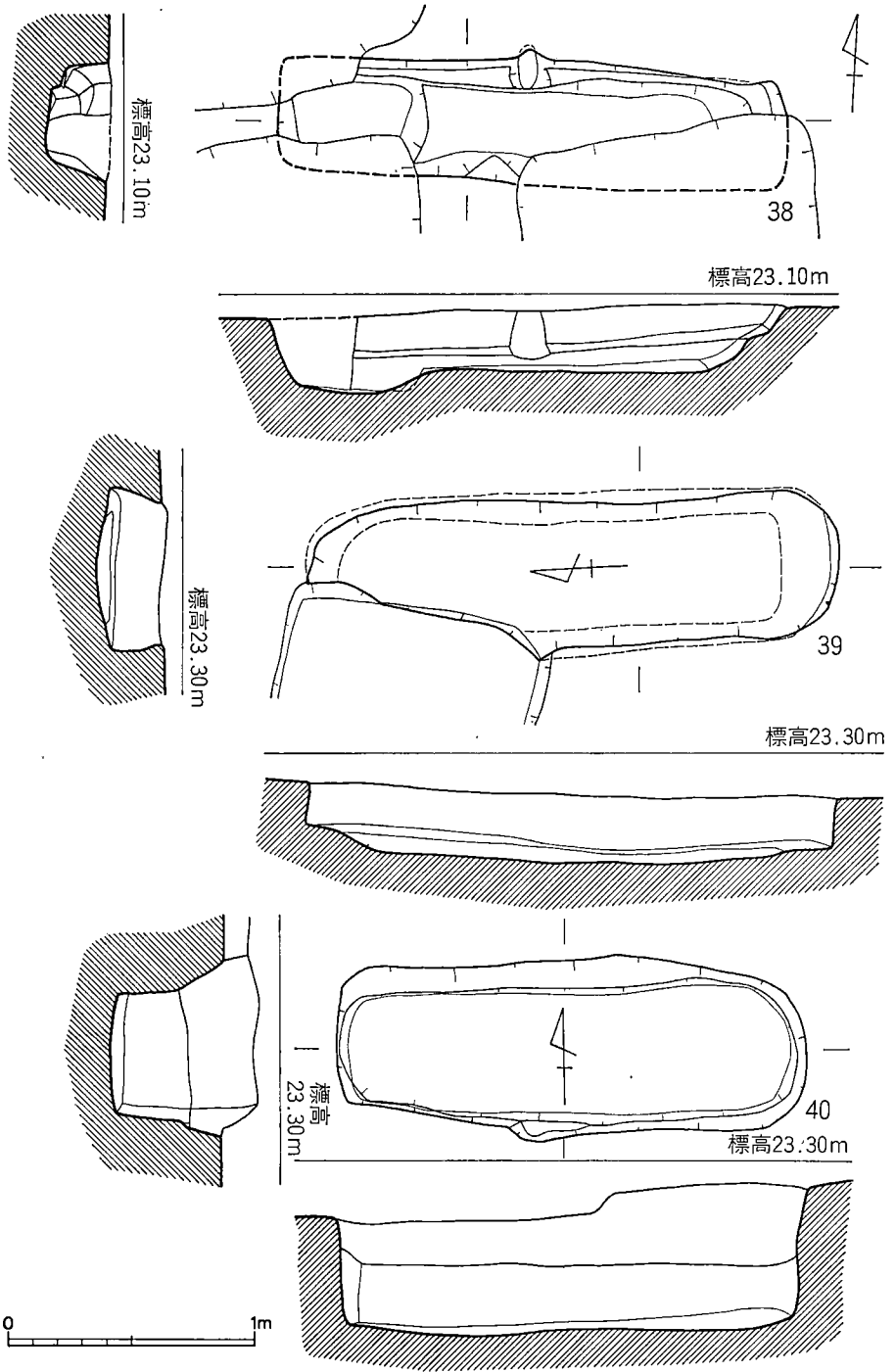
壙 (23~26) 23・25の蓋はいずれも完形品である。23はきわめて扁平なもので、天井部の中心付近は地を這う程に低平となる。口径14.7cm, 器高1.1cm。細みのつくりで口縁は鳥嘴状を呈す。撮みはもたない。天井部上面は粘土巻上げの状態そのまま未調整、内面はなで、口縁周辺は回転なでを施す。砂粒多く、焼成は良好。紫灰色を呈し、灰を被って一部が黒変する。24とセットをなす。25は歪みが著しい。口径15cm, 器高3.4cm。天井部は右回りの回転ヘラ削り、その内面はなで、口縁付近は回転なでである。口縁端部から1.5cm程の外面に重ね焼きの痕跡が認められる。胎土・焼成・色調ともに23に同じ。26とセットをなす。

身の24と26のうち24は略完形。かなり歪んでいる。口径13cm, 高台径8.8cm, 器高5.4cm。体部は回転なで、底部内面はなで、高台内部の底面は未調整。26は高台が剝離しており、その他は完形。口径13.8cm, 現存高5.2cm。高台径は9.8cm程になろう。体部はやや内湾気味に外反している。底部は内外ともなで、他は回転なでである。底部内面にヘラ記号といえるかどうかかわからないが、長さ2cm強の一字形の窪みがある。24・26ともに胎土・焼成・色調は23・25の蓋と同様である。

37号土壙墓 D37 (第96図)

西小口部上位はごく最近の攪乱を受けているが大勢に影響はない。北側壁は1.2m程の長さで僅かな段がつく。頭位は判然としないが一応東側としておく。出土遺物はない。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第97図 38~40号土墳墓実測図 (1/30)

38号土壙墓 D38 (第97図)

3個の近時の土壙に切られて約半分を欠失するものの何とか原形は復しうる。西小口部床面は10cm程低く窪み、反対の東小口壁は段をもって立ち上がる。北側壁中央にピットがあるのは何であるか不明。頭位は床面がやや高くなっていく東側としておく。出土遺物なし。

39号土壙墓 D39 (図版57, 第97図)

北小口部の西側を近時の土壙に切られるが全形は復しうる。床面は周壁に沿って主軸長1.8m、幅0.43m前後の部分が僅かな段をもって窪んでいるものの、ここに木棺等を設置した痕跡は認められなかった。横断面で見ると両側壁はかなり内傾し袋状を呈している。頭位は定かでないが南側としておく。出土遺物はない。

40号土壙墓 D40 (第97図)

11号土壙の南に、それと接するが如くに営まれている。床面レベルは東側がごく僅かに高くなっていて、小口幅も広いのでこちらが頭位であろう。出土遺物はない。

41号土壙墓 D41

13号周溝墓の西側周溝上にあり、埋土の相違が明確でなかったため、全形を詳しく知りえない。主軸は略南北にとる。出土遺物はない。

42号土壙墓 D42 (図版57, 第98図)

13号土壙の南隣りにある。周壁は割と直に立上る。床面は凹凸著しいが図上では復原している。出土遺物なし。

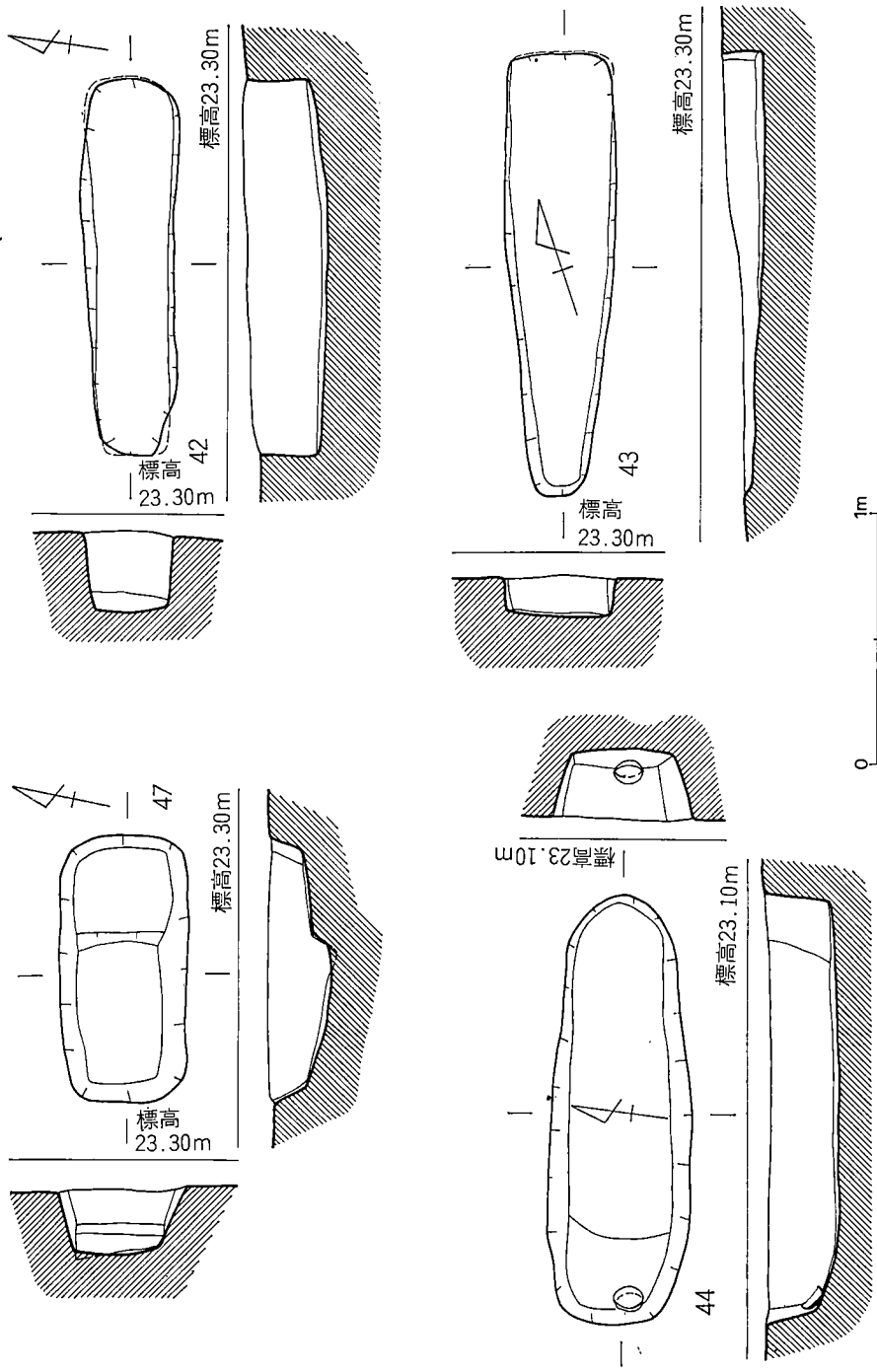
43号土壙墓 D43 (第98図)

14号土壙の南西にあって、それと接するが如くである。床面レベルは南側が高いけれども頭位は小口幅の広い北側であろう。出土遺物はない。

44号土壙墓 D44 (図版57, 第98図)

14号周溝墓主体部の南西に存する。床面は東小口部の方が緩傾斜で高くなっている。その小口部下端に接して土師器塊が出土した。頭位はこの東側としてよかろう。

III 立野遺跡A地区の調査



第98図 42~44・47号土坑基実測図 (1/30)

出土遺物

土師器（図版69，第92図）

埴（27） 完形品である。口径11.2cm，器高4cm。口縁部は内湾気味である。口縁下2cm程までは内外とも横なで，それ以下は外面がヘラ削り，内面がなでを施す。微砂粒含むが胎土は精良。焼成良好。明るい茶橙色を呈す。部分的に赤茶色の薄い皮膜が見られるので，あるいは化粧土をかけていたものか。

45号土壙墓 D45

14号周溝墓南側ブリッジの西方にある。北半は14号周溝墓の周溝を切るが，埋土の相違が明確に把握られず不明とせざるをえない。また南半部分も攪乱されていて明瞭にしえない。全長は2～2.5m程度であろう。遺物はなかった。

46号土壙墓 D46

14号周溝墓の南東コーナー部にある。埋土の相違が把握られなかったため形状の詳細を知りえないが，全長は2mを前後する程度と思われる。南西側から須恵器杯蓋3・身1が，北東側から鉄刀子1が出土している。

出土遺物

須恵器（図版69・70，第92図）

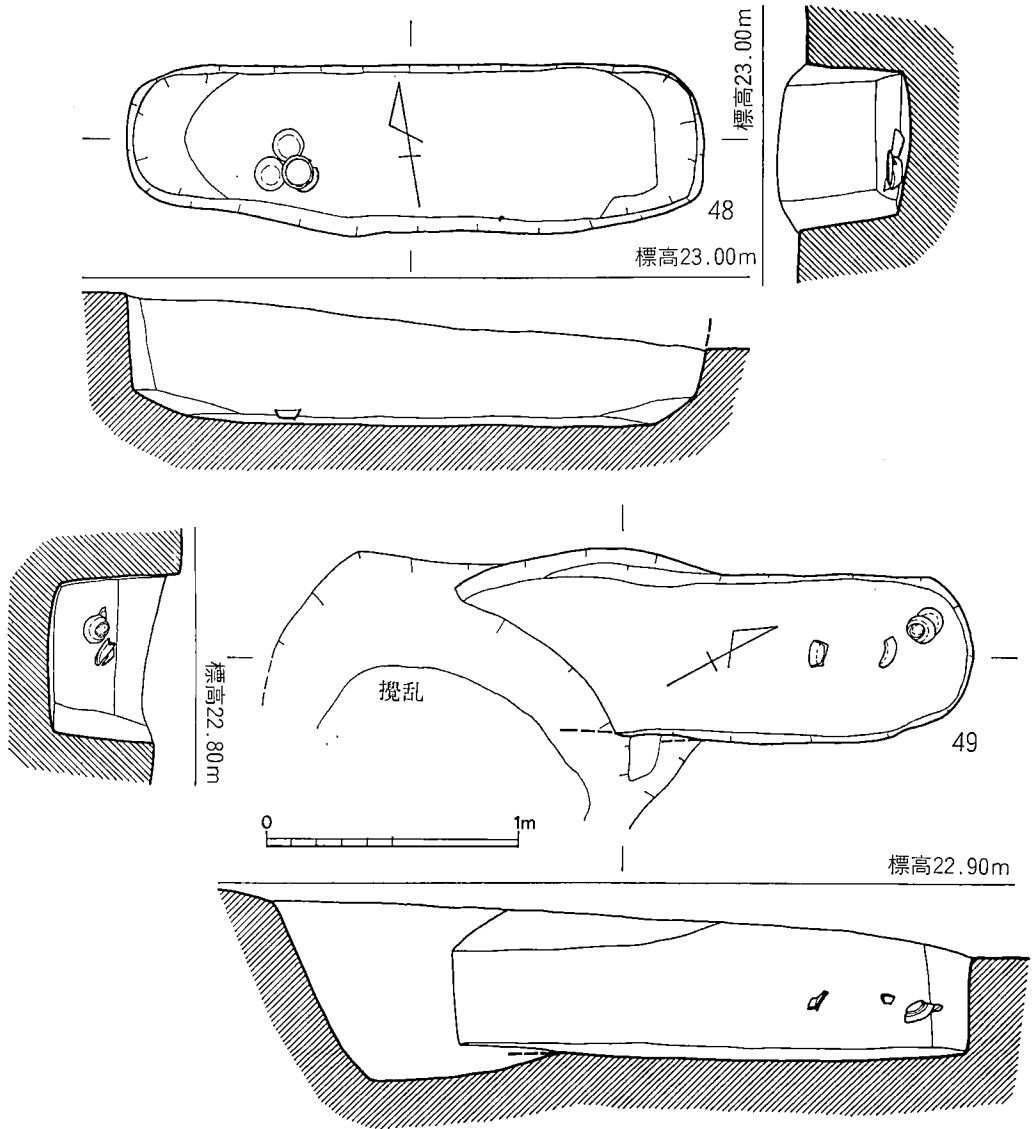
杯（33～34） 蓋は3点ともに小型のもので，身受けのかえりを持ち，天井部に平坦面を有する類である。30は口径11.3cm，器高1.9cm。天井部上面は無調整で，内面はなで，その他は回転なでを施す。口縁部を½程欠失するが完形に近い。31は口径11.1cm，器高1.8cm。天井部上面は左回りの粗いヘラ削りで，そこにワラ様のものによる擦過痕を見る。同内面はなで，その他は回転なで。完形である。32はやや歪みを持つがほぼ完形に近い。口径11.6cm，器高2.5cm。調整は30と同じである。3点ともに小砂粒を多く含み，くすんだ灰色を呈する。焼成は31のみややあまいが，他は良好である。

33の身は口唇部を½程欠くがほぼ完形である。口径10.3cm，器高3.7cm。底部外面は粗いヘラ削りを施し，ほぼ平底状となり，そこにワラ様のものによる擦過痕を見る。同内面はなで，体部は回転なで。砂粒多いが焼成は良好。青灰色を呈する。

鉄器（第94図）

刀子（28） 二折した破片で，最大幅1.3cmを測る。薄く細身のつくりである。

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査



第99図 48・49号土壙墓実測図 (1/30)

47号土壙墓 D47 (第98図)

9号周溝墓の西方にある小型の土壙墓である。床面東側が一段高くなっており、頭位としてよかろう。出土遺物はない。

48号土壙墓 D48 (図版59, 第99図)

床面は両小口部ともに傾斜をもっており、それから壁が立ち上がる。床面レベルは西側が若干ながら高くなっているため、こちらが頭位であろう。西小口部下端より60cm程の所に、床面にはほぼ接する状態で須恵器坏蓋1、身3が出土した。身3個は全て正立に近い状態である。

出土遺物

須恵器 (図版70, 第92図)

坏 (34~37) 蓋の34は完形であるが歪みが著しい。身受けのかえりと、やや扁平な宝珠状撮を持つ。口径13.3cm, 器高3.4cm。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はなで、口縁周辺は回転なでを施す。砂粒を多量に含むも焼成良好。くすんだ灰青色を呈する。天井部外面にヘラ記号あり。

身は3点ある。35は口径12.5cm, 器高3.9cm。底部は平底状となり、粘土紐の巻上げ痕が明瞭である。そこにワラ様のものによる擦痕を見る。底部内面はなで、体部は回転なでを施す。微砂粒を多く含む中に黒色粒子を混ざる。焼成は良好。青灰色を呈する。36は完形品である。口径12.2cm, 器高3.5cm。底部内面は回転ヘラ削りであるが全面には及んでいない。同内面はなで、体部は回転なで。胎土は良質ながらも焼成があまり半須恵質と称すべき程である。褐色気味の灰色を呈する。37は口縁部の1/3を欠失する。口径13cm, 器高3.9cm。粘土紐巻上げ痕が明瞭である。胎土中に砂粒を多く含み、焼成・色調は36に同じ。

49号土壙墓 D49 (図版58, 第99図)

南小口部の方を新しい土壙によって削平されているが、およその全形は知りうる。頭位は明瞭でないけれども北側としておく。その北小口部寄りの埋土中から(床面より20cm程浮く)須恵器坏蓋1・身2が出土した。棺上に置かれていたものが落下したのであろう。

出土遺物

須恵器 (図版70, 第92図)

坏 (38~40) 38は蓋であり、身受けのかえりと撮を有する完形品である。撮は宝珠形というよりも釘状に近い。口径13.7cm, 器高3.5cm。天井部外面は右回りの回転ヘラ削りで、撮周辺は回転なで、同内面がなで、口縁周辺は回転なでを施す。砂粒多く。焼成はややあまい。発色が十分でなく茶灰色を呈する。天井部外面にヘラ記号を有す。

身は2点ともにほぼ同形同大の製品である。39は口径13.1cm, 高台径8.2cm, 器高4.8cmを測る完形品。40は口径13cm, 高台径8.3cm, 器高4.6cmを測り、二折していたものが接合して完形

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

となる。これの高台壘付部分は僅かに窪む。2点とも胎土・焼成・色調ともに38と同様で、高台内部にこれまた同じヘラ記号を有する。

50号土壘墓 D50

11号周溝墓の南側周溝上に存したもので、プラン等は不明である。主軸は略東西方向にとっていたものであろう。須恵器壘と鉄刀子が出土している。

出土遺物

須恵器（図版70，第92図）

壘（46） 半欠品で、復原で口径14.2cm，高台径10.2cm，器高5.8cmを測る。底部は内外ともなで，体部は回転なでを施す。砂粒を多く含み，焼成は良。灰色を呈する。

鉄器（図版72，第94図）

刀子（29） 茎の一部を欠失する。現存長13.5cm。身長11cm。銹化著しい。

51号土壘墓 D51

10号周溝墓の南側陸橋部東方周溝上に存したものである。主軸はほぼ東西方向にとっていたであろう。須恵器壘蓋2・身2を出土した。

出土遺物

須恵器（図版70，第92図）

壘（43～45） 蓋のうち，43は全体の1/7～1/8の破片である。復原で口径15.7cm，器高2cm。撮は欠失する。天井部外面は左回りの回転ヘラ削り，内面はなで，口縁付近は回転なでを施す。砂粒多く，焼成は良好，暗灰色を呈する。44は完形に復しえたものである。口径15.4cm，器高2.6cm。全体に分厚い。調整は43に同じ。焼成があまりのを除けば胎土・色調も43に同じ。

身は法量・つくりの全く同様のものが2個体あり，そのうち1点のみ図示する。45は高台の壘付部分を欠失する。口径14.3cm，復原高台径10cm，器高6cm。底部内外はなで，体部は回転なでを施す。砂粒多く，焼成は軟質，くすんだ淡灰色を呈する。

52号土壘墓 D52

1号墳の南側周溝上に存した。主軸は略東西であったらう。須恵器壘が出土している。

III 立野遺跡A地区の調査

出土遺物

須恵器（図版70，第92図）

碗（47） 口唇部と体部半分を欠く。復原で口径12.4cm，高台径10.1cm，器高4.3cm。高台は外端部が外方へ跳ね上がる。底部内外はなで，体部は回転なで。砂粒多く，焼成はあまい。灰色を呈する。

53号土壙墓 D53

7号周溝墓の東側コーナー付近に存したものである。主軸は略南北に有していたであろう。須恵器の破片2点が出土している。

出土遺物

須恵器（図版70，第92図）

碗（41・42） 41は底部を欠き，42は体部上半を欠く。41が復原口径14.8cm，器高5.8cm。42が復原高台径9.9cm。2点ともに砂粒多く，焼成ややあまい。くすんだ灰色を呈している。

その他の遺構と遺物（付図2）

周溝墓・古墳群，土壙墓群と重複して，あるいは単独に，発掘区内を縦横に走る溝状の遺溝がある。これらの溝が掘削された時期を限定することは難しいが，ただ発掘区中央付近を中心に近時の掘削にかかるものが幾つかある。それらについては全掘していないので割愛する。

ここでは，西側の周溝墓群に重複している溝4条（M1～M4）についてと，その溝出土の遺物およびその他の遺物について触れる。

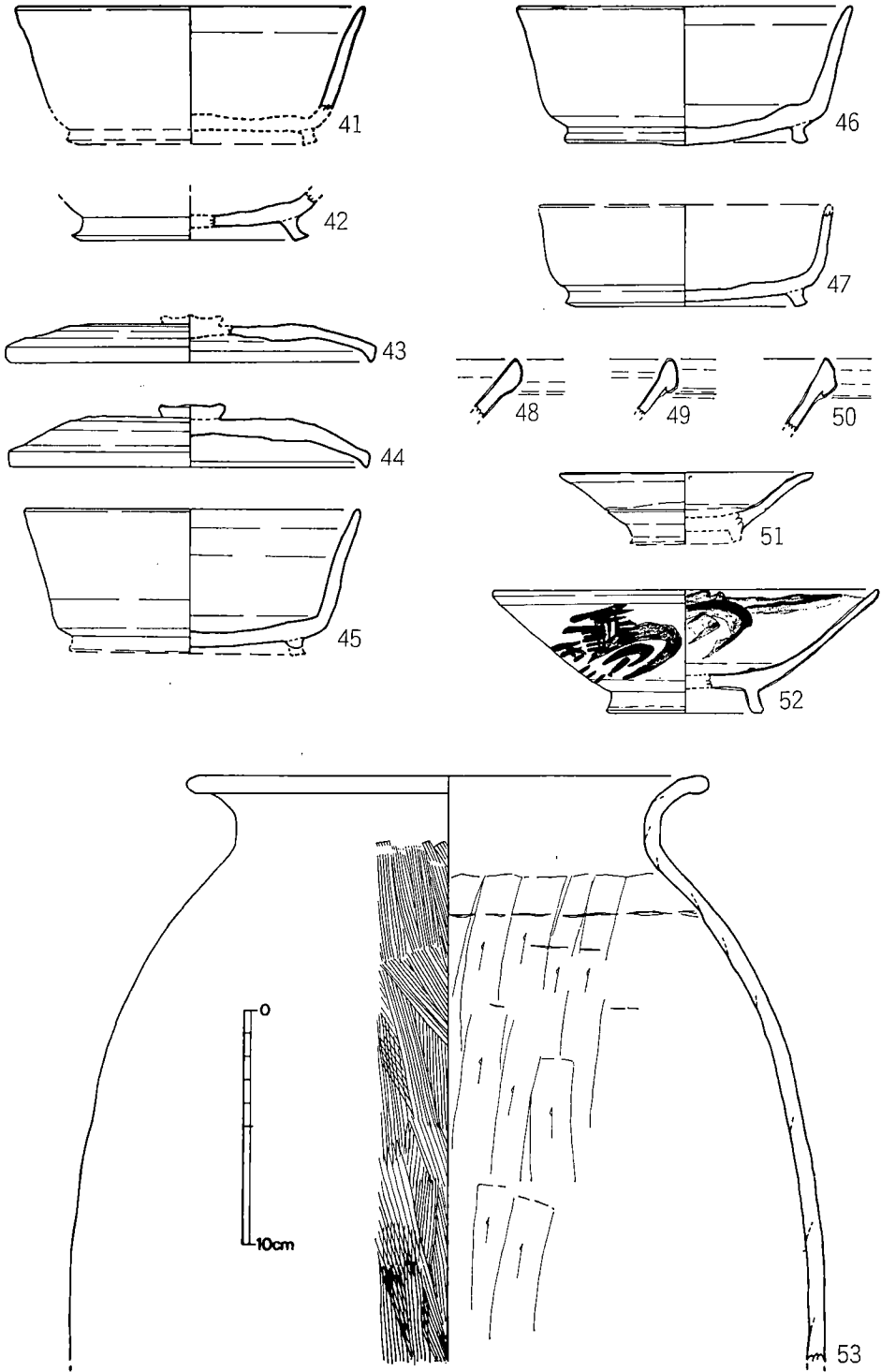
M1 1・3・4号周溝墓とM3を切っている。発掘区西端部付近でL字形に直角に折れ曲がっているのは意味ありげに思えるものの，今のところは性格不明とせざるをえない。深さは20～40cmを測り，溝底レベルはまちまちである。土師器の甕（第100図53）と白磁碗の口縁片（第100図48）が出土している。

M2 発掘区西端部に近い所で一部しか検出していないが，部分的な方向の共通性等からみてもM1と関連のある遺構のように思える。10～20cmの深さしかない。紡錘車が1点出土した（第88図-2）。

M3 1号周溝墓を切り，M1・4号土壙墓に切られる。深さは30cmを越えない。遺物は出土していない。

M4 3・4号周溝墓と8号土壙墓を切って営まれている。40～50cmの深さを測り，南東側の方がやや低くなっている。染付磁器の破片が1点出土した（図版71，第100図-52）。

III 立野遺跡A地区の調査



第100図 土墳墓, その他の遺構出土土器実測図③ (1/3)

Ⅲ 立野遺跡A地区の調査

その他に9号周溝墓の東側周溝中から白磁の破片が出土している（図版71，第100図—49～51）。何らかの遺構が周溝と重複して存した可能性もあるが，明確にしえない。

出土遺物（図版71，第100図）

土師器（53） M1の，ほぼ直角にL字形に折れ曲がった所から5m程の地点で出土した。口径22.2cm。肩部はあまり張ることなく，頸部は直立気味に短く立上ってから口縁部が如意形に外反する。2～5cmの粘土帯を積上げて成形している。胴部外面は縦位の刷毛目，内面は下から上へのヘラ削りを施す。口縁周辺は横なで。7世紀後半代のものか。

白磁（48～51） 48はM1の出土。1号周溝墓の東方，2号土壇の付近から出土した。玉縁の碗であるが，粘土折返しの様子ははっきり伺えない。胎土は白色で，やや灰色がかかった白色釉がかかっている。49～51は9号周溝墓東側周溝からの出土。49・50は玉縁の折返しが明瞭である。黄灰色気味の釉調であるが，49の外面は口縁下2cm以下で露胎となる。形態は48と同様の碗となる。51は小皿で，約1/2の破片を復原した。口径10.6cm，器高3.0cm程となる。口縁は外側が僅かに膨らんで段を持つ。口縁下2cm程に沈線が1条巡り，そのやや上位から底部にかけては露胎となる。砂粒も殆んど含まず良質の胎土である。焼成はふつう。釉調は淡緑灰色を呈し，青磁の発色に近い。

以上の白磁は，いずれも中国の江南地方の産になるもので，48～50が11世紀後半以降，51が12世紀中葉～後半に属するものである（註4）。

染付磁器（52） M4からの出土。やや高い高台を持った碗である。高台畳付・外端部は露胎で，他はやや濁った感じの白色釉を基調とし，内外に濃淡を使い分けたコバルト色の染付が施される。外面は松と波をあしらっているらしい。内面は雲らしき意匠が口縁を中心にあしらわれ，見込み部分にも施文が見えるものの破片のために内容を知りえない。見込みには焼台の目跡が見られる。この磁器がいつ頃の，どの窯で生産されたものであるか，いま判じうる知識も資料も持ちあわせていないが，肥前有田の系譜を引くものであることは確かであろう。

紡錘車（第88図—2） 径3.5cm前後，厚さ0.75cm，孔径0.6cm程の扁平円形のもので，滑石製である。M2からの出土。 （伊崎）

- 註 1 佐々木隆彦「下原遺跡出土土壇群の用途について」（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—2—）1983 福岡県教育委員会
2 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—1—1982 福岡県教育委員会
3 同上
4 九州歴史資料館調査課森田勉氏の御教示による。

IV 立野遺跡D地区の調査

1 調査の経過

当地区は昭和56年7月6日から、E地区と併行して調査を開始した。4月30日から遺構検出を開始した宮原遺跡A地区は梅雨の豪雨のため調査区は満水でプールのような状態が続き、やむなく、立野遺跡へ移動したわけである。よって、両遺跡は併行して調査を行い、本格的に立野遺跡の調査を開始したのは9月1日からである。当地区の現況は畑地で地表面に土師器片の散布が見られ、集落遺構の存在を予測していたが、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物2棟（註1）の他に墳丘を欠失した円墳6基、土壙墓、基等が姿を現した。遺構の一部は用地内の農道下へのびるが、周辺の畑はまだ耕作中でもあり、調査は断念せざるを得なかった。

農道を狭んで南側のE地区（註2）は住居跡2軒、掘立柱建物6軒を検出し、これを併行してD地区の3・4号墳から遺構検出を開始した。封土は全く削平されており、周溝埋土の排土作業と棺材を抜き取られた内部主体の検出作業は比較的楽ではあり、発掘作業自体は順調に進み、5・6号の遺構検出後、1・2号墳の調査に移った。特に1号墳は、墳丘中心付近の本来あるべき所に内部主体が検出されず、さらに北へ用地境界線ぎりぎりまで拡張して調査を行ったが内部主体は検出できず、内部主体の大半は盛土中に存在し、削平時にそのすべてが破壊されたと判断した。1・2号墳周辺の土壙、土壙墓の13の遺構図作成と、本地区の全体図を作成した後、全景写真を撮影し、12月8日にすべての調査を終了した。

E・D地区の調査は主に石山勲、新原正典が担当し、1・2号墳および5～10号土壙墓の調査を児玉が引き継いだ。遺構の実測にあたっては、栗原和彦係長の来援があり、調査補助員高田一弘・武田光正・日高正幸等に負うところが多い。（児玉）

2 遺構の配列（付図3）

本調査区は集落遺構と埋葬遺構とからなり、南東部側に集落遺構が、北西部側に埋葬遺構が存在する。集落遺構については、南接するE地区の遺構と時期的にも一体となるもので、これについては昭和58年3月に『九州横断自動車道関係埋土蔵文化財調査報告』第2集として報告したのでそれに依らるたい。

今回報告する遺構は円墳6基、土壙墓13基、土壙7基である。これらは大別して三時期にわかれる。まず円墳構築に先だつて土壙（P2・4～7）が営まれ、A地区のこの種遺構と同様に5～7m間隔で一直線に並ぶ。各土壙の形状や埋土に共通性が認められ、A地区のそれと同

IV 立野遺跡D地区の調査

様に数基でグループをなすことに意義があり、この種遺構の性格の一端を暗示しているようである。

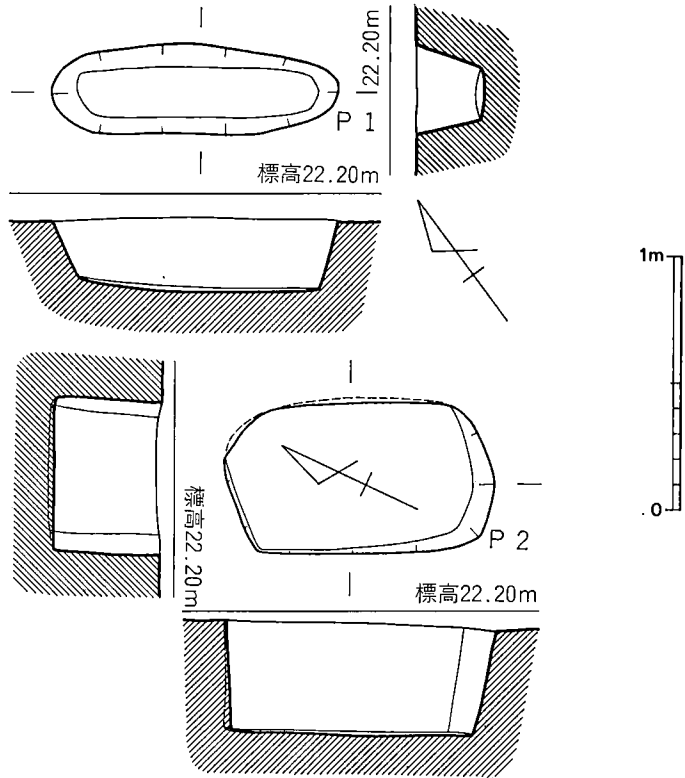
上述の土壙が廃絶されてかなりの期間をおいて円墳が構築されはじめる。時期を明確に判断し得る土器の出土はないが、A地区の方形周溝墓の箱式石棺と比べて、横幅、長さとも大型化し、床面に小石を敷くといった新しい要素が加わっている。またA地区1号墳のように竪穴式石室は存在せず、内部主体は伝統的な箱式石棺で統一され、A地区1号墳よりも古い様相を示している。さて、円墳6基は、5～8m程の間隔を保って配置され、A地区の方形周溝墓群ほどではないが、割合に整然と並んでいる。大型の1号墳を盟主として別格に考えれば、2・5・6号墳、3・4号墳と東西方向に配置されているように見受けられ、内部主体の主軸方向がほぼ東西方向を示すことも一致する。このような状況は時期的に先行するA地区の方形周溝墓群でも見る事ができた。A地区の方形周溝墓と本地区円墳の間に墳墓形式と時期差が存在するが、両者の内部主体の共通性と上述の内部主体の主軸方位の問題とから、構築順序は別にして円墳群は東西方向を意識して構築されたであろうと推測する。また、6号墳の西側5mに二段掘りの土壙墓(13号土壙墓)が存在する。他の土壙墓(1号～12号)とは異質なものであり、円墳群と同時期のものだと考えられる。また、円墳群は先述したように5～8m程の間隔を保ち、本土壙墓も6号墳との間に5mの距離を保っていることから、円墳群の配置の在り方と類似しており、本土壙墓から最も近い6号墳との関係を考えたいと思う。

7世紀代に至って、土壙墓が営まれはじめる。土壙墓の出土遺物の中には奈良時代にまで降るものがあり、立野遺跡内で調査した住居跡は6世紀末から7世紀のもので奈良時代に降るものは1軒もなく、用地外でのこの時期の集落遺構の存在を示している。土壙墓は調査区の西半部にだけ営まれ、3号墳西側の1～3号土壙墓、2号墳西側の4～7号土壙墓、1号墳西側の8号土壙墓、2号墳と3号墳の間の9～12号土壙墓の4グループに分かれる。各グループの土壙墓に主軸方位の統一性は認められない。古墳内への侵入は見られず、奈良時代には墳丘が存在したことを物語っている。また、集落遺構は、D地区西側の試掘調査では検出されておらず、公団用地の南側の台地縁辺部に展開すると考えられ、土壙墓の上記の配置状況は、景観的には古墳の墳丘の影に隠れて見えないものが多くなる。立野遺跡の中心を占める6・7世紀代の集落遺構と埋葬遺構との間に併行関係はなく、7軒の竪穴住居と8棟の掘立柱建物がかかなり接近して営まれてはいるが、D地区西半部は墓地として土地の使い方の面で一定の規制があったであろうことを示唆している。(児玉)

3 土 壙

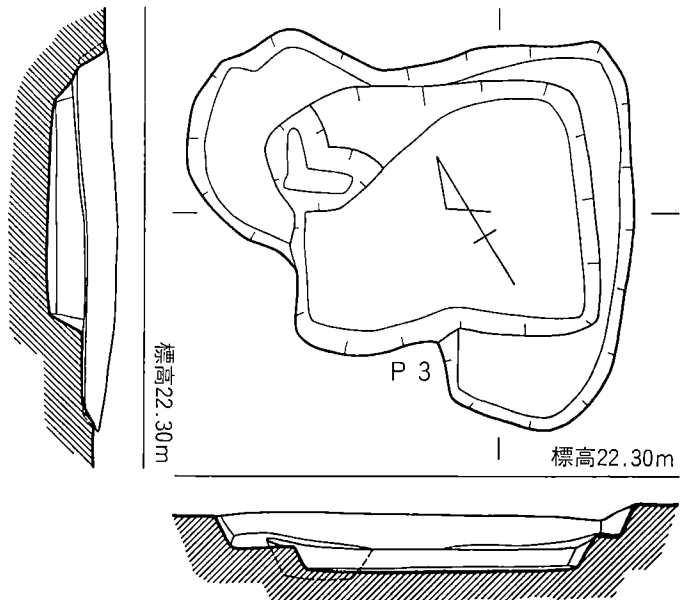
1 号土壙

P1 (図版88, 第101図)
 西南部隅にて検出し、
 平面形態が長楕円形を呈
 する土壙である。規模は
 長軸 113cm・短軸 37cm・
 深さ30cmを計る。壁面は
 急傾斜をなしやや丸味を
 持つ床面に続く。規模・
 形態はA区P1~14, D
 区P2, 4~7とは異な
 り、本土壙の性格は土壙
 墓の可能性を有する。遺
 物は全く出土していな
 い。



2 号土壙

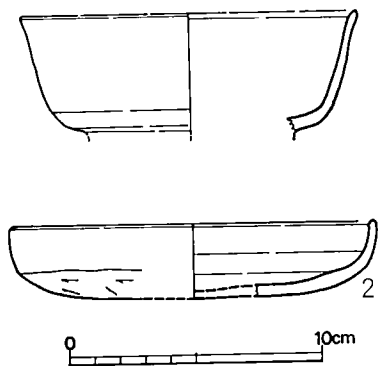
P2 (図版88, 第101図)
 西南隅でP-1, D-
 2に隣接している。上端
 の平面形態は隅円長方形
 を呈す。壁面は急傾斜な
 いしオーバハング気味に
 掘られて水平な床に続
 く。床面上に小穴は検出
 していない。遺物は全く
 出土しなかった。



第101図 1~3号土壙実測図 (1/30)

3号土壙 P3 (第101図)

P2より北東7mの地点で検出した不整形な土壙である。当初は単独の土壙と考えられたが、方形の土壙と隅円長方形の土壙墓の切り合った遺構とも考えられる。土壙墓と考えられるのは南東部で規模は長軸152cm・短軸70cm・深さ15cmと推定される。本土壙出土の土器はこの遺構に伴う可能性がある。方形の土壙の規模は長軸120cm・短軸102cm・深さ23cmを計り、北西部隅は攪乱されたのであろう。本土壙の性格は不明。



第102図 3号土壙出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (第102図)

土師器 (2) 皿で口径14.5cm・器高2.9cmを計る。内面はヨコナデ、口縁部内外面ともつまみ上げのヨコナデ調整で外面底部付近は横・斜方向のヘラケズリ、外面底部は擦過が認められる。色調は灰白色を呈し、胎土は細かい砂粒が若干含まれている。

須恵器 (1) 高台付坏身である。小片だが口径13.4cmと推定される。回転ナデ調整を行っており、色調はくすんだネズミ色を呈している。

土壙の時期は8C前半頃であろう。

4号土壙 P4 (第103図)

P2より北東10mの地点に営まれ、上端の平面形態は隅円長方形を呈する土壙である。壁面は垂直で北西壁のみオーバハング気味に掘られている。床面は水平に近く小穴は検出していない。遺物は出土していない。

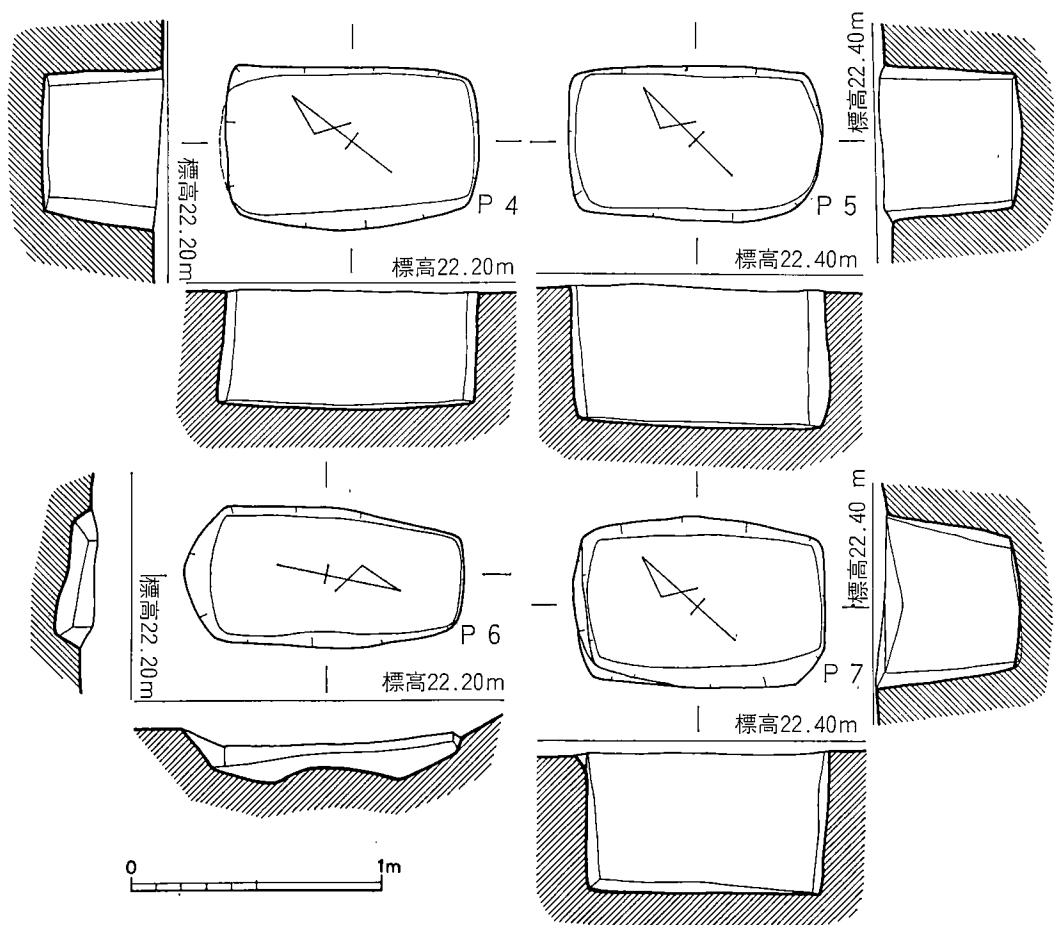
5号土壙 P5 (第103図)

P4より北東12mの地点で5号土壙墓に隣接した土壙である。壁面は垂直に掘られ略水平な床に続く、床面に小穴は無い。埋土の堆積状況は黒色土が充填しており、遺物は全く出土していない。

6号土壙 P6 (第103図)

1号墳の周溝底面より検出した土壙で、大部分が削平され旧態を止めていない。上端平面形態は隅円長方形、壁面は垂直に掘られていたと推定される。床面はやや丸味を持ち中央部が高くなっている。堆積状況は黒色土で充填されていた。遺物は全く出土していない。

IV 立野遺跡D地区の調査



第103図 4～7号土坑実測図 (1/30)

7号土坑 P7 (第103図)

P5より北東へ10m, P6より西南へ4mの地点で検出した。壁面は一部分崩れたものと考えられるが略垂直に掘られている。床面は略水平で小穴は検出していない。堆積状況は黒色土が充填しており、遺物は全く出土していない。(武田)

円墳

1号墳

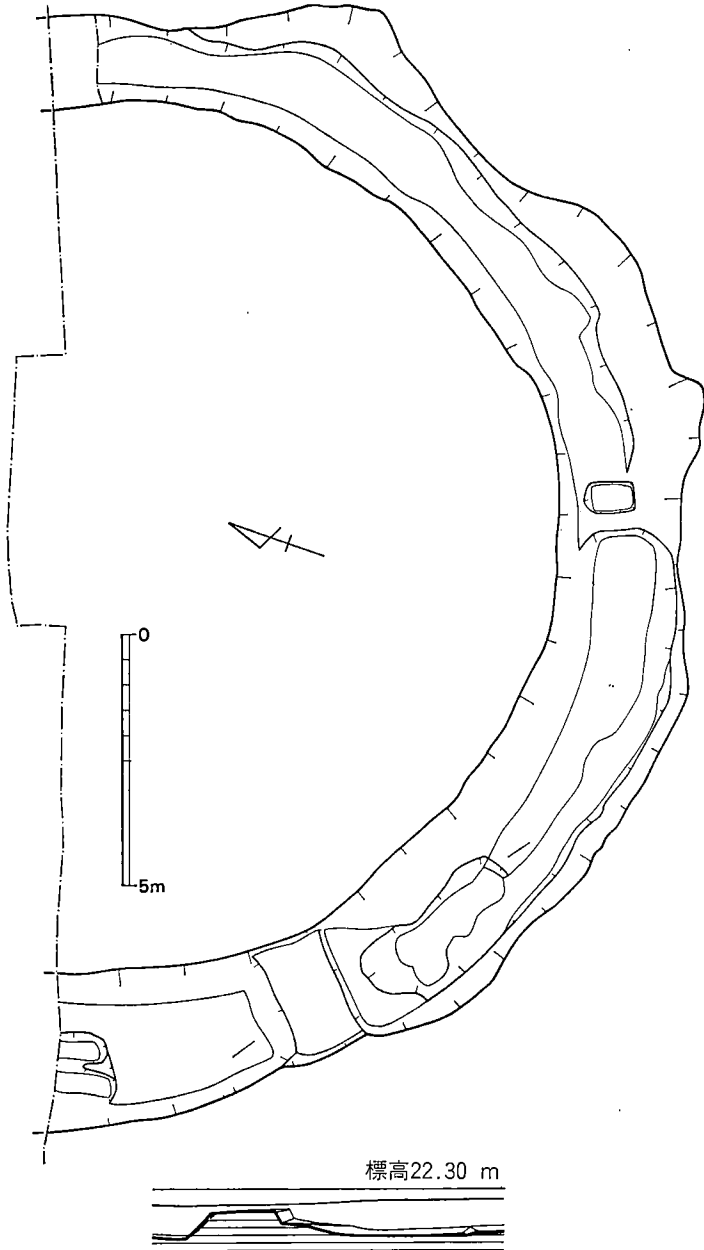
(図版77, 第104図)

本調査区最大の円墳で北側半分は用地外に存在する。周溝を含めて、直径約22mに復原され、南西側に周溝を掘り残して陸橋部を形成する。周溝は陸橋部付近では幅広かつ深く掘られている。内部主体は遺存せず、墳丘盛り土内に設置されていたようである。

2号墳

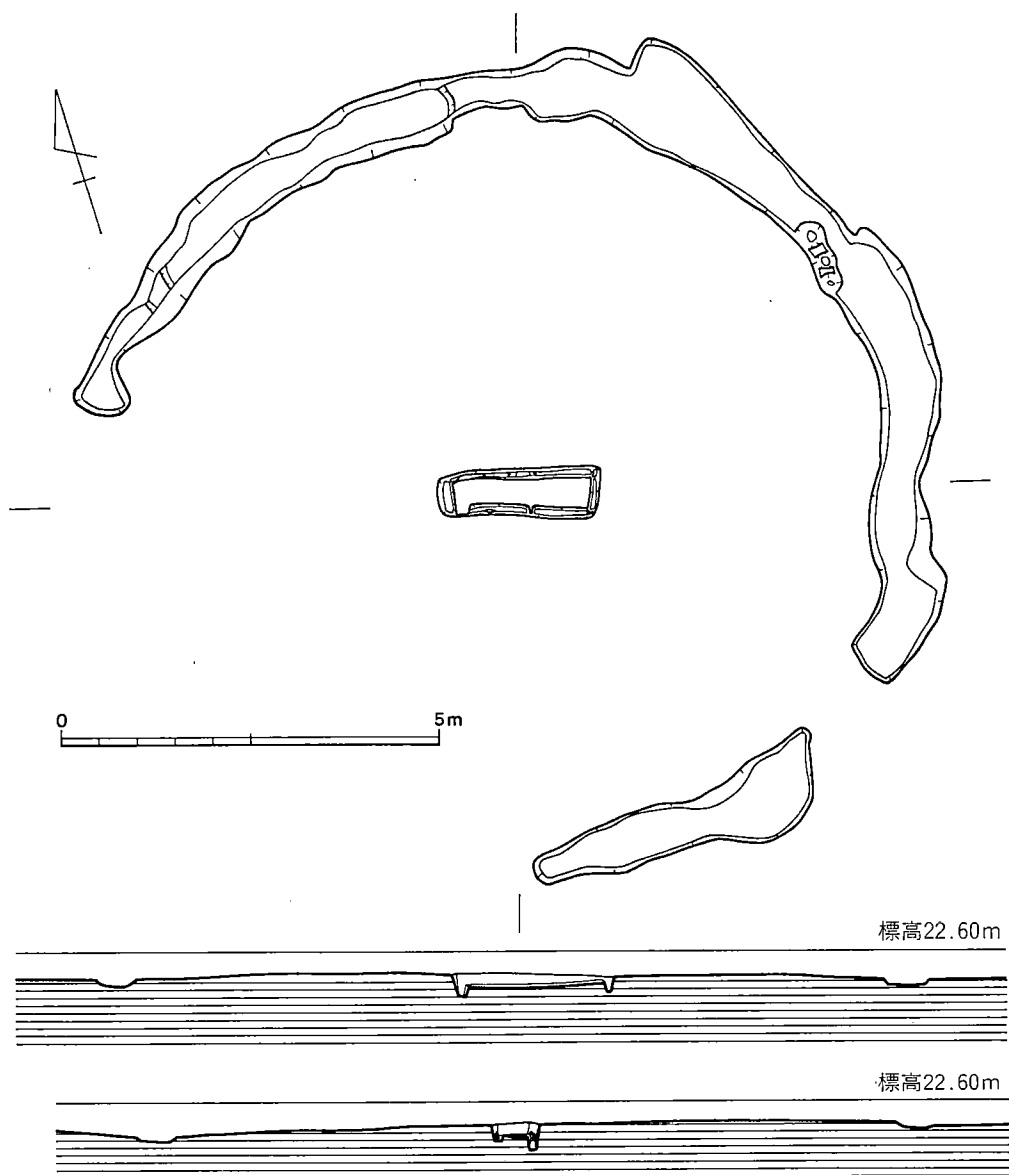
(図版78, 第105図)

1号墳のすぐ南に構築された円墳で、削平されて西側周溝の大半が遺存しないが、周溝を含めて直径11m前後に復原される。南東側の周溝は一部途切れているが、これがブリッジに相当するのか、あるいは浅く掘られていた周溝が、削平されてしまったのかは不明である。



第104図 1号墳実測図 (1/150)

IV 立野遺跡D地区の調査

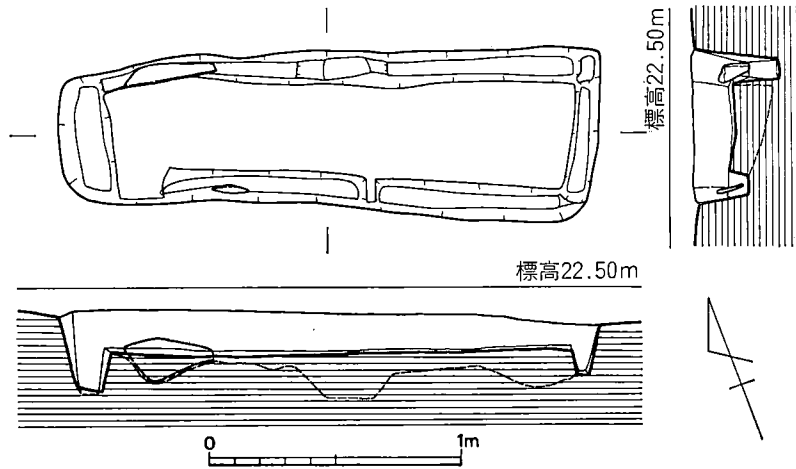


第105図 2号墳実測図 (1/100)

内部主体 (図版78, 第106図)

墳丘中央部に営まれた箱式石棺で、主軸をS-75°-Eにおく。棺材はほとんど抜き取られているが、掘り方から判断して小口幅の広い東側が頭位であろう。石棺の内法寸法は主軸長1.9m、幅0.45~0.55m程と推定する。北側壁に遺存する棺材片の内面には赤色顔料を塗布していた。

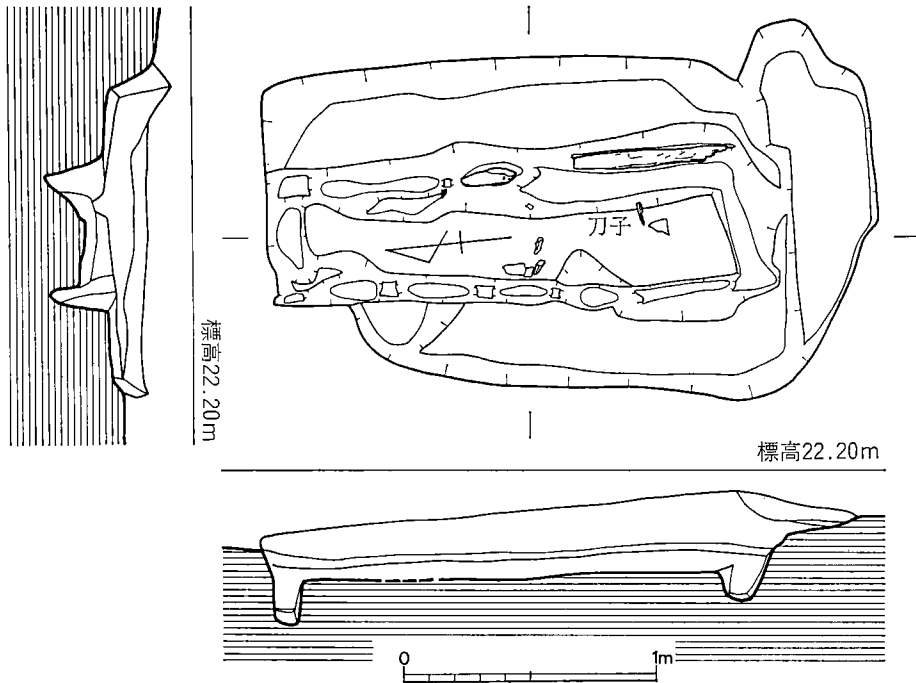
IV 立野遺跡D地区の調査



第106図 2号墳内部主体実測図 (1/30)

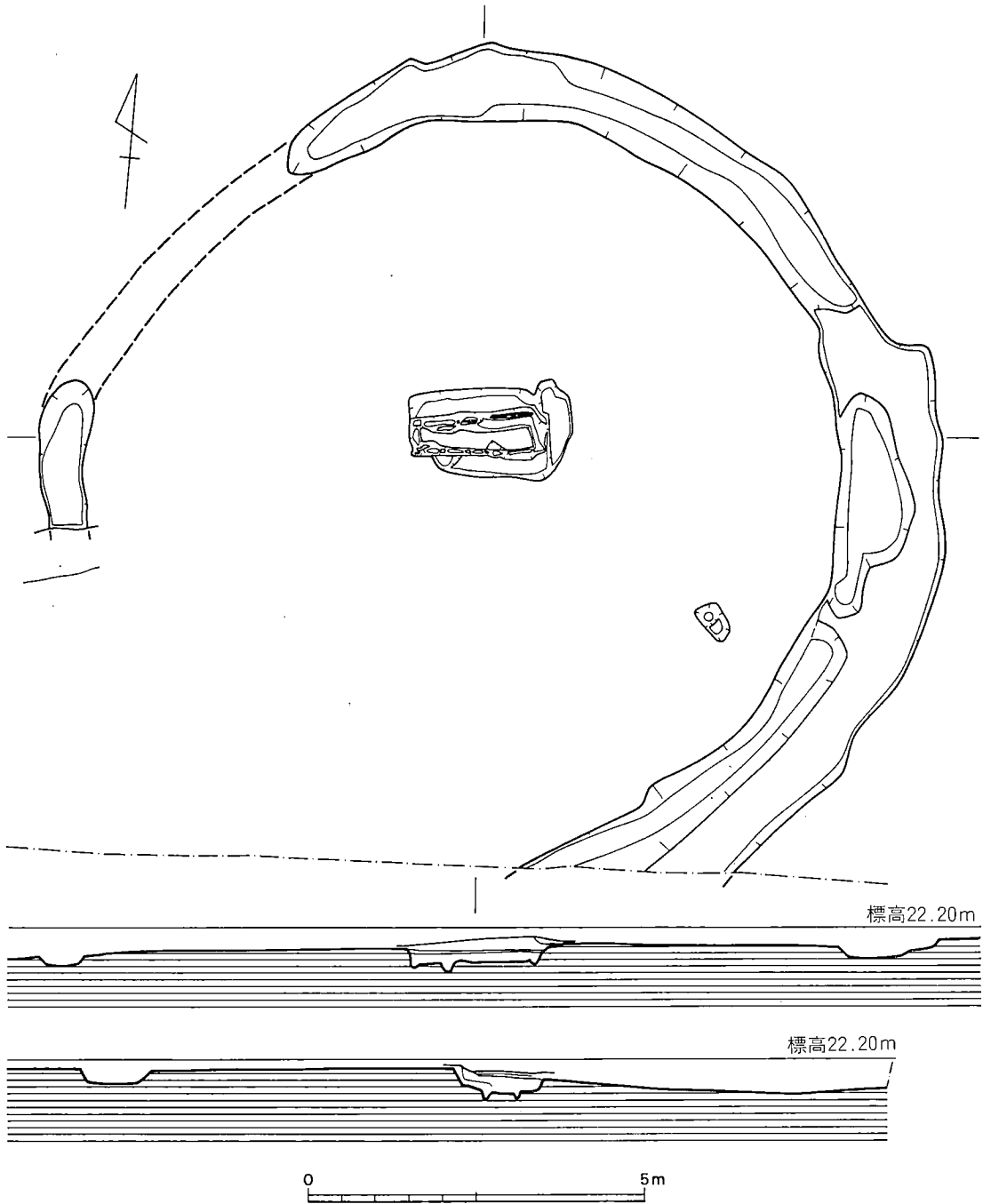
3号墳 (図版79, 第108図)

2号墳のすぐ南に構築された円墳で、南端部が農道の下にあり、まだ使用中の農道であったため掘れなかった。周溝の西半部は削平および攪乱を受け、ほとんど遺存しないが、周溝を含めて直径13~13.5m程に復原される。



第107図 3号墳内部主体実測図 (1/30)

IV 立野遺跡D地区の調査



第108図 3号墳実測図 (1/100)

IV 立野遺跡D地区の調査

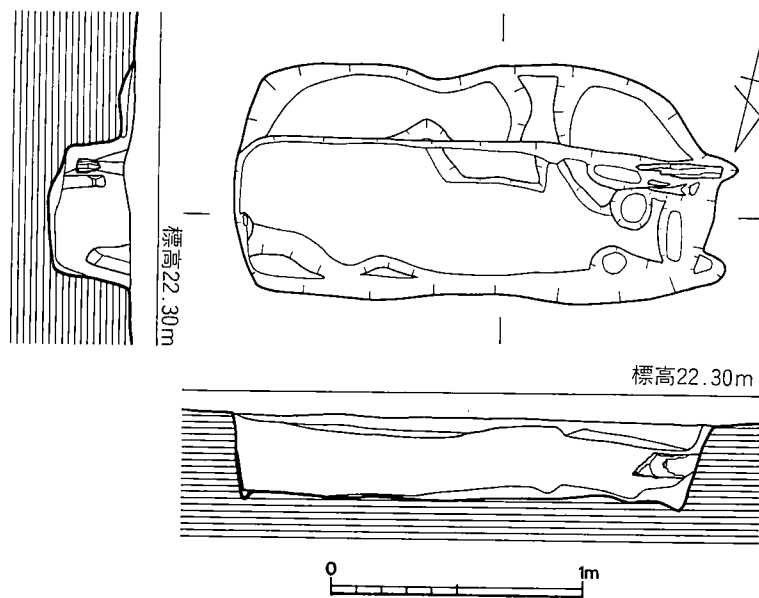
内部主体（図版79，第107図）

墳丘の中央よりやや北に寄った所に営まれた箱式石棺で，棺材はすべて抜きとられていた。墓壙は二段掘りで，規模は上端で主軸長 $2.1m$ ，幅 $1.32m$ を測る。主軸方位は $N-89^{\circ}-E$ を示し，小口幅の広い東側が頭位だと思われる。床面には当初 $0.2\sim 1cm$ 大の砂利が敷かれていたようで，床面東半部にその一部が遺存し，赤色顔料が付着している。棺内法寸法は，棺内を据る掘り方から主軸長 $1.75m$ ，幅 $0.4m$ 前後と推定する。床面から刀子1点を検出した。

刀子（図版 ，第115図） 現在長 $10.5cm$ を測る蕨手形の刀子である。鉄鏝がひどく柄の部分の状況は不明な部分が多い。身は関から $2cm$ まで遺存し，幅 $0.8cm$ を測る。

4号墳（図版80，第110図）

3号墳のすぐ東に構築された円墳で南半部は後世の溝等により攪乱されている。周溝を含めて直径は $11.5m$ 前後を測る。南端部で周溝が途切れるが，陸橋部になるか否かは削平がはげしいため不明である。



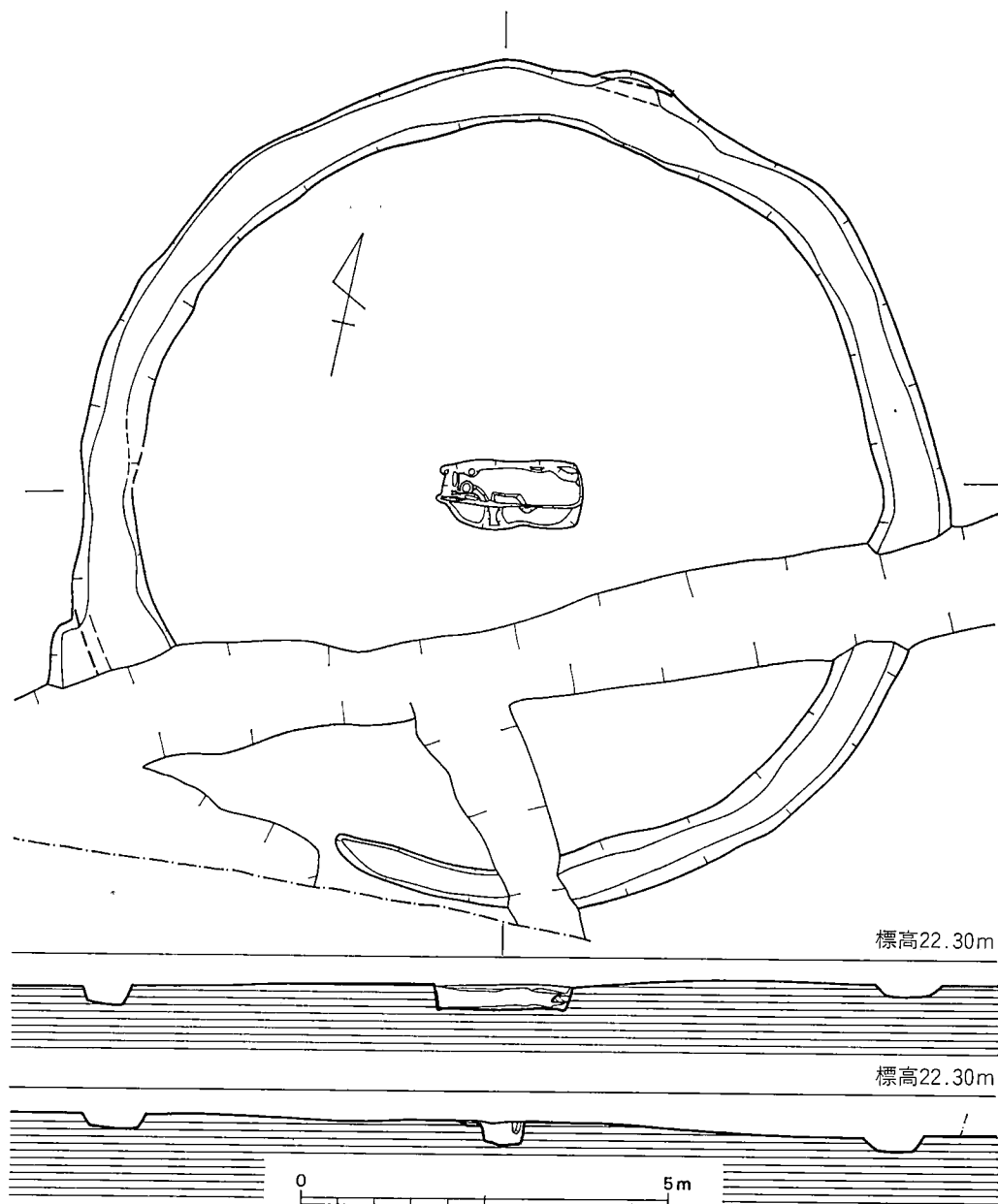
第109図 4号墳内部主体実測図（1/30）

内部主体（図版80，第109図）

墳丘の中央部付近に営まれた箱式石棺で，棺材のほとんどは抜き取られていた。墓壙は二段掘りであったと思われるが，北側は削平されており，一段目の墓壙は残っていない。頭位は他

IV 立野遺跡D地区の調査

の側よりは東側だと推測される。棺内は石材を抜きとる際に床面まで攪乱を受け、遺存状況は悪い。石棺の内法寸法は、主軸長1.6m、幅0.4m程度であろう。

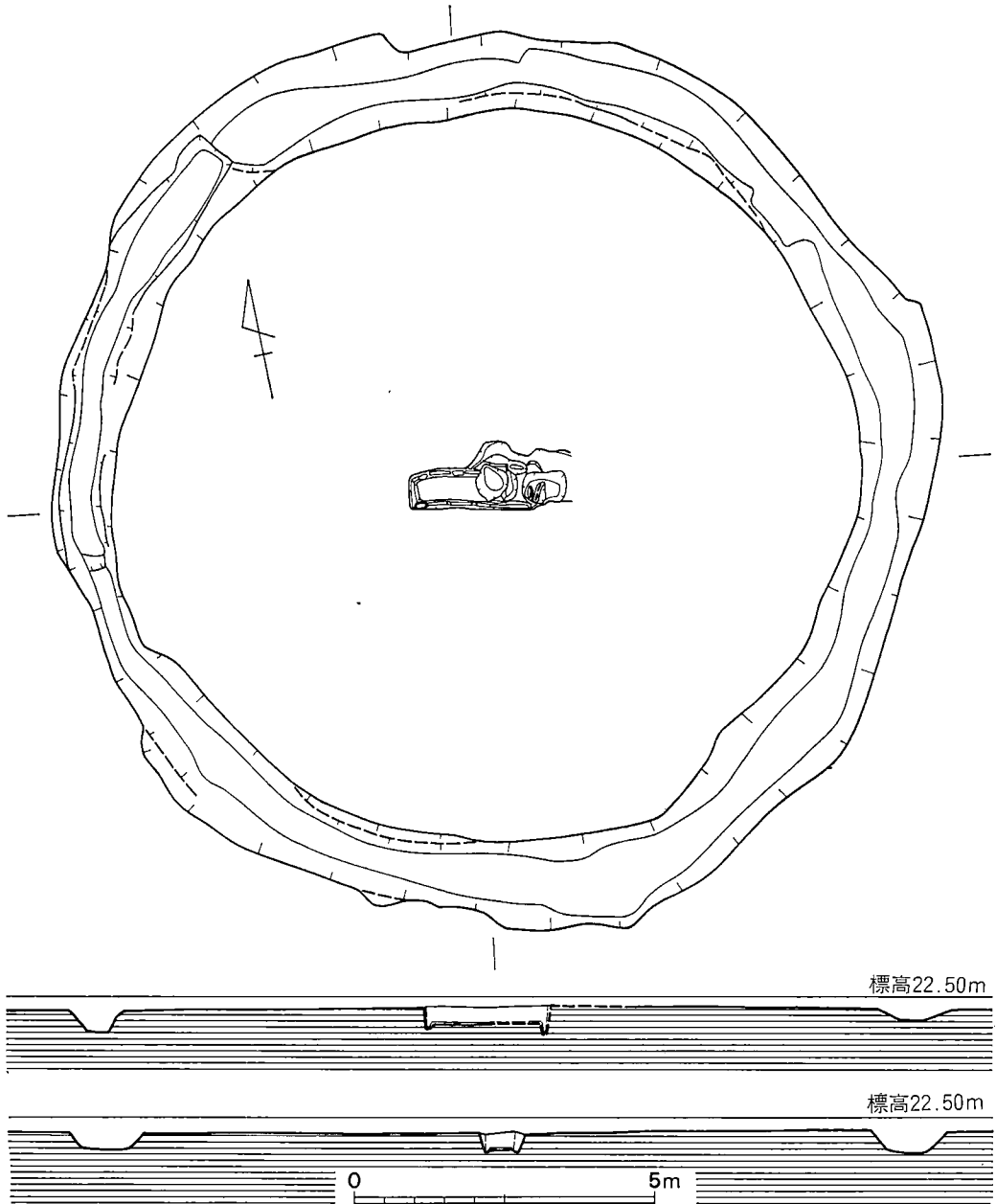


第110図 4号墳実測図 (1/100)

IV 立野遺跡D地区の調査

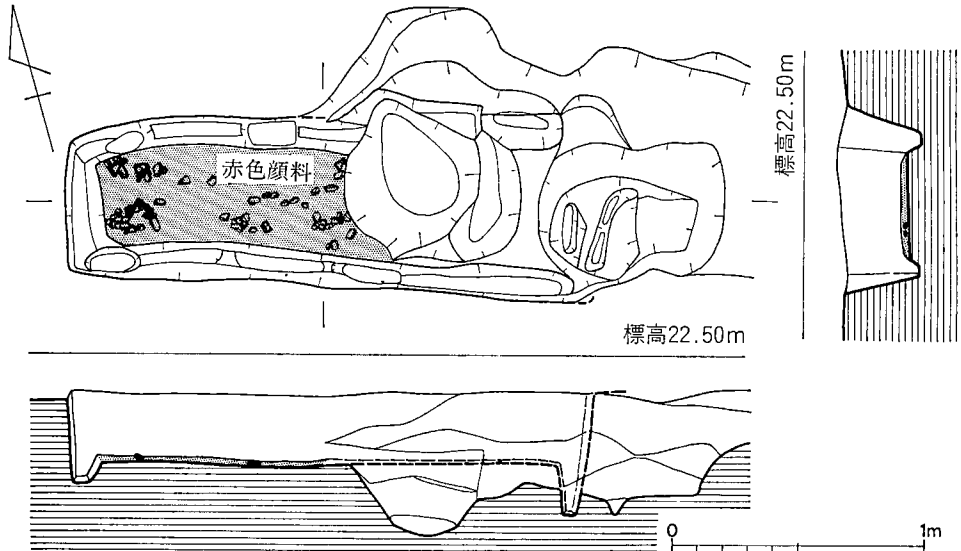
5号墳 (図版8I, 第111図)

2号墳と6号墳の間に位置する円墳で、周溝を含めて直径15m前後を測る。周溝は一巡し、陸橋部状の施設はない。



第111図 5号墳実測図 (1/120)

IV 立野遺跡D地区の調査



第112図 5号墳内部主体実測図(1/30)

内部主体 (図版81, 第112図)

墳丘のほぼ中央に営まれた箱式石棺で主軸を $S-82^{\circ}-E$ におく。棺材はすべて抜きとられ、木根や後世の掘り込み等による攪乱がはげしく東半部は床面が全く残らない。東、西小口壁の幅から判断して頭位は東側であろうと推測する。棺底には5cm大の小石を敷いていたようで、その一部が遺存し、赤色顔料が付着していた。よってこの箱式石棺の内面は赤色顔料が塗布されていたと考えられる。石棺の内法寸法は、棺材を据える掘り方から判断して主軸長1.8m、幅0.45~0.55m程度と推測する。

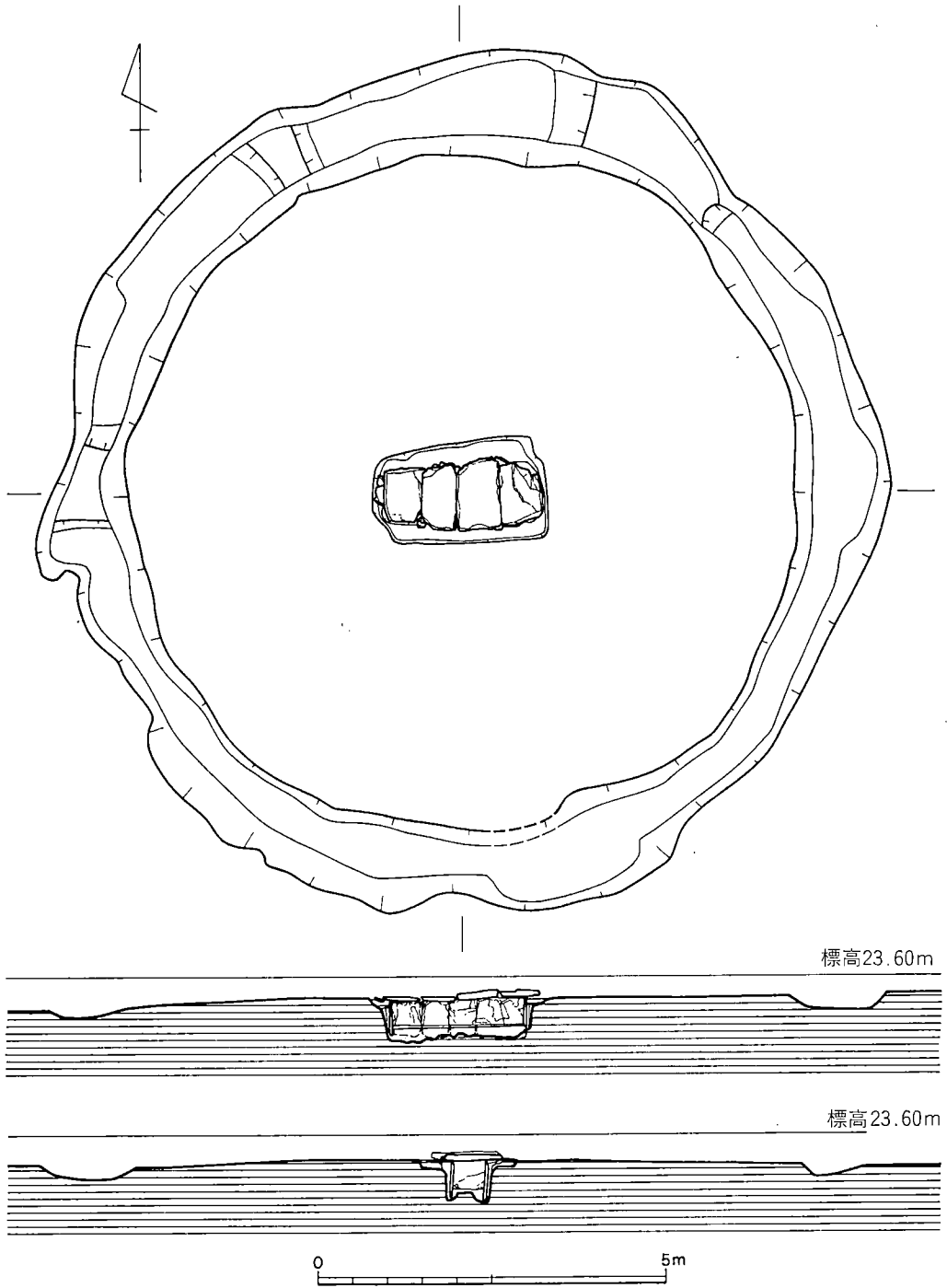
6号墳 (図版82, 第113図)

本古墳群中、最も東に位置する円墳で、周溝を含めて直径12m前後を測る。北、北西、西の3ヶ所に陸橋部状の遺構があり、周溝底より10cm前後高くなっている。

内部主体 (図版82, 第114図)

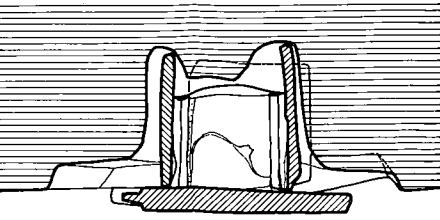
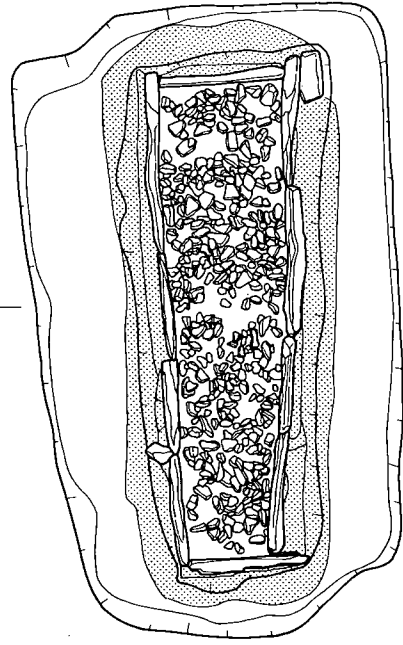
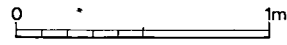
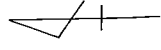
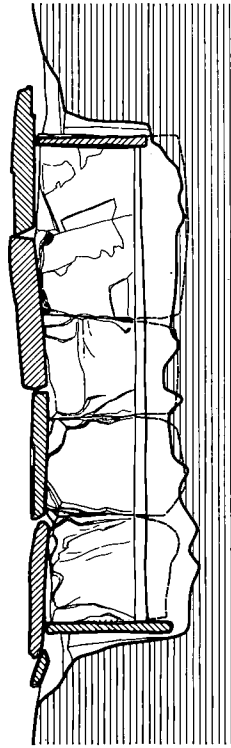
墳丘のほぼ中央に営まれた箱式石棺で、主軸を真東西におく。墓壇は二段掘りで、上端で主軸長2.51m、幅1.4mを測る。石棺の内法寸法は床面で主軸長1.88m、幅は東側小口部で51cm、同西側で35cmを測る。東側小口壁から18cm離れた床面上で、径20cmの不整円形状に赤色顔料を検出した。この部分に頭が位置するように埋葬されたと考えられ、頭位は東側だと考える。棺底には5cm大程の小石を敷きつめ、棺材の隣接する部分には粘土で目張りをする。石棺はの頭

IV 立野遺跡D地区の調査

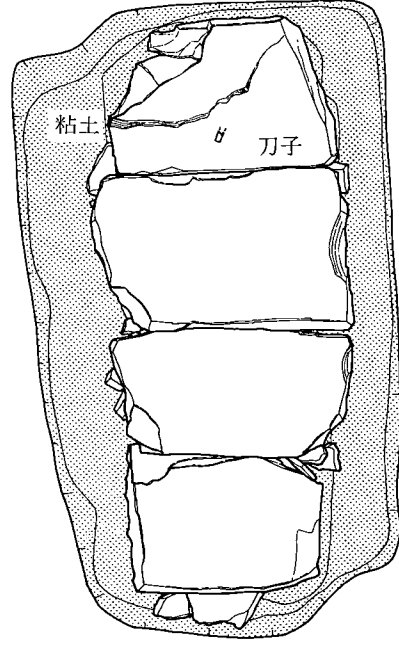


第113図 6号墳実測図 (1/100)

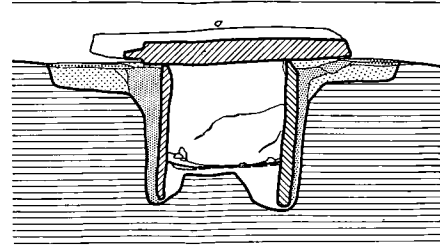
標高22.60m



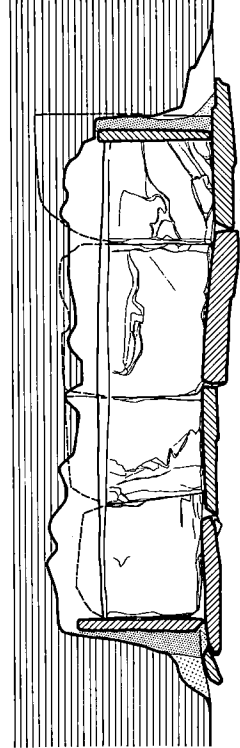
標高22.60m



標高22.60m



標高22.60m



第114图 6号墳内部主体实测图

IV 立野遺跡D地区の調査

位側小口壁で狭むようにし、足位側は小口の石材で側壁をとめるように組んでいる、蓋石架構に先だって黄色粘土を敷きつめ、蓋石架構後さらに同じ粘土で全体を被覆している。被葬者のほぼ頭の真上に相当する部分で蓋石との間3cmの黄白色粘土をかんで刀子を検出した。

刀子(図版90, 第115図) 茎と木柄だけを検出した。木柄は中空長径で1.8cm, 短形1cm程を測る。遺存部分には鉄鏃がみられる。茎は現在長2cmで厚さは1.5mm前後である。

随葬墓

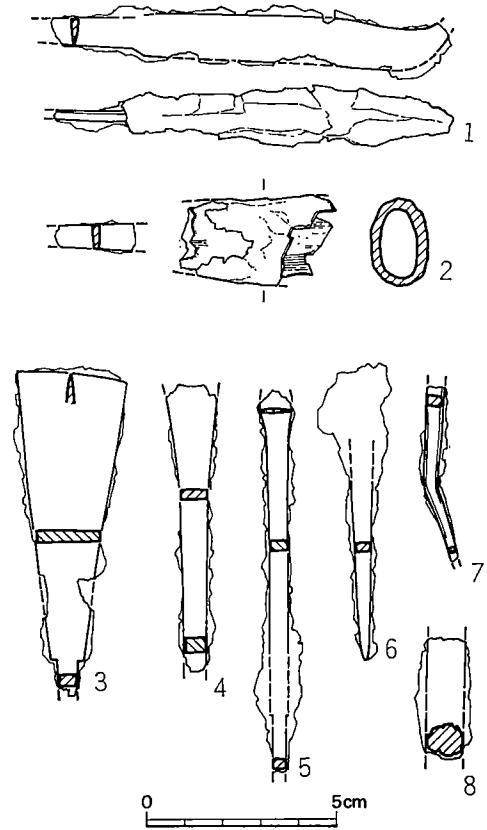
D地区で随葬墓と考えられるのは13号土壙墓1基である。A地区では石蓋土壙墓6基, 土壙墓3基, 周溝内の壺棺墓1基, 同土壙墓3基の計13基を検出し, うち11基が方形周溝墓に伴うものであった。また, A地区で3基の円墳を検出し, 2号墳だけが, 石蓋土壙墓, 土壙墓計2基を伴った。D地区では6基の円墳を検出しながら随葬墓であろうと推定されるものが1基にとどまったのは, 方形周溝墓の時代から円墳の時代への墓制の変質と無関係ではなさそうである。

13号土壙墓(図版83, 第116図)

6号墳の西約5mに営まれた土壙墓で, 最も近い6号墳の随葬墓であろうと考える。

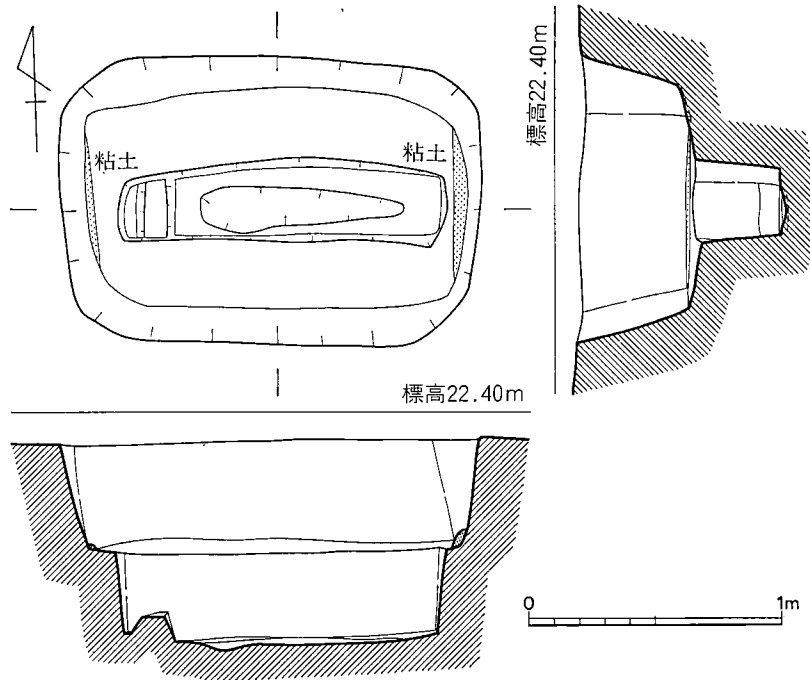
二段掘りの土壙墓で, 一段目の墓壙は上端で主軸長1.65m, 幅1.15m, 深さ0.45mを測る。二段目の遺体埋葬部は床面で主軸長1.25m, 幅・深さとも約0.3mを測る。大小口壁側に地山を掘り残して枕状のものを作る。また, 一段目の東・西小口の墓壙底には白色粘土が带状に検出され, 板材により蓋をされていたのではないかと思われる。副葬品は検出されていない。

(児玉)



第115図 D地区出土鉄器実測図(1/2)

IV 立野遺跡D地区の調査



第116図 13号土壙墓実測図 (1/30)

土壙墓

立野D地区では7～8世紀代に属するであろう土壙墓を12基確認した。これらも立野A地区と同様、古墳群をとりまくような配置で検出されている。造墓の時期を考慮せずに占地のみで見れば、1～3号、4～7号、8号、9～12号の4つのグループに分けられる。

土器等の出土を見たのは5基であり、これらは2号墳の周辺に集中している。個々の土壙墓の詳細は第7表を参照されたい。

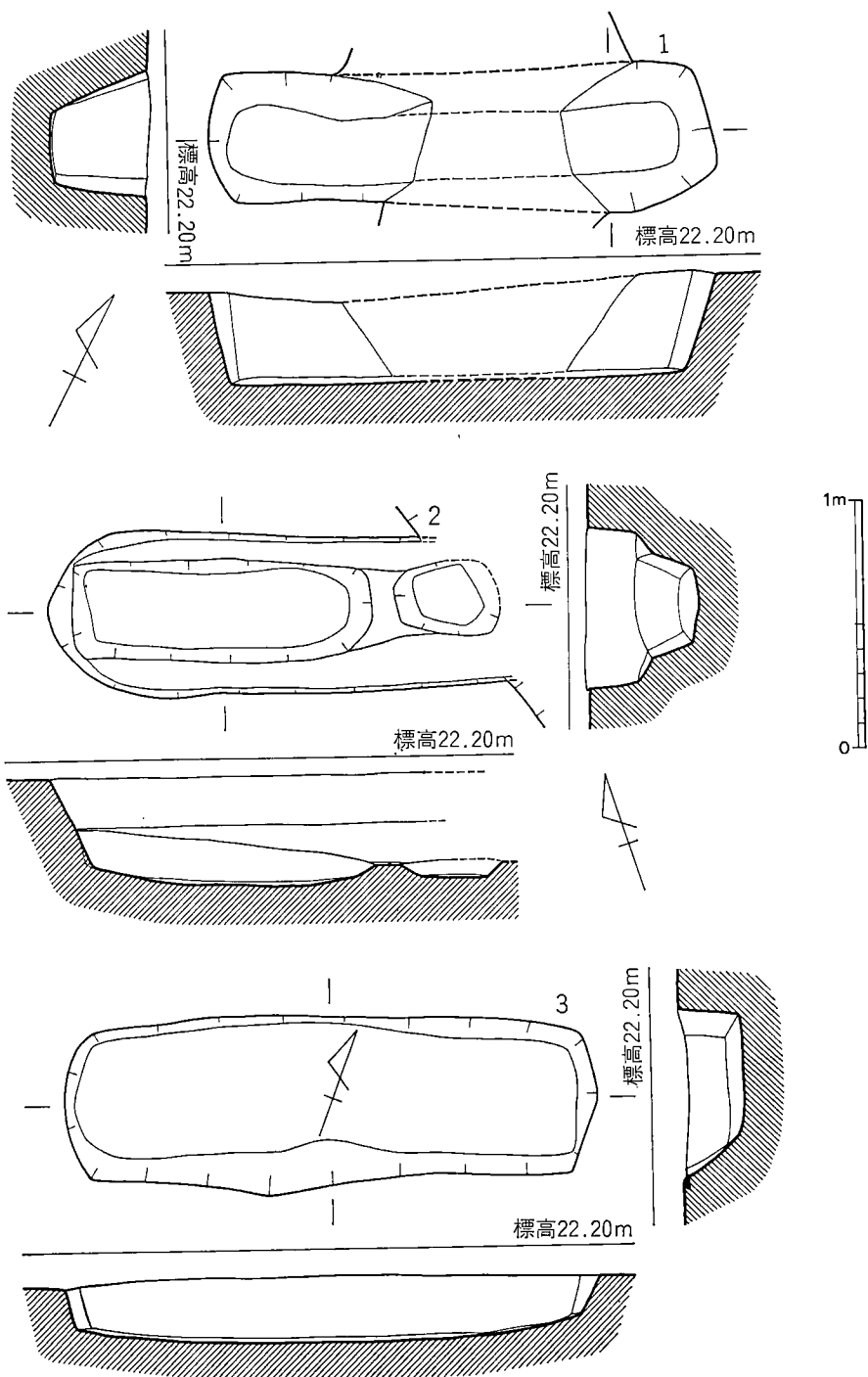
1号土壙墓 D1 (図版83, 第117図)

ほぼ中央を略南北に走る溝に切られるが、全形を知るに支障はない。頭位は明確でないけれども東側としておく。出土遺物はない。

2号土壙墓 D2 (第117図)

これも東小口部を溝に切られている。現存長は2m弱であるが、最大が2.5mを越すことはない。床面東側で高まりがあって、それを境に2個のピットが存する格好となるが、との意味は不明である。出土遺物はない。

IV 立野遺跡D地区の調査



第117図 1～3号土墳基実測図 (1/30)

3号土壙墓 D3 (図版84, 第117図)

2号土壙墓の東隣に存す。北側壁に比べて南側壁は立上りが緩やかである。床面の縦断面は中央がやや低くなった形状を呈する。頭位は明確でないけれども床面がやや高くなっている東側であろうか。出土遺物なし。

4号土壙墓 D4 (図版85, 第118図)

3号墳のすぐ北側にある。床面が両小口部ともに一段低くなっているが、その意味するところは判らない。また、床面下部に更なる落込みがあつて、中央付近は一段低くなり、両小口部においては各々2個のピットが存した。これの意味するところも不明である。埋土中に須恵器壙が倒立の状態で割れて出土した。頭位は西側であろうか。

出土遺物

須恵器 (図版89, 第119図)

壙(1) 口縁部を一部欠失するもののほぼ完形に復しえた。口径12.8cm, 高台径9.1cm, 器高4.2cm。全体にずんぐりした形状である。底部内外はなで、体部は回転なでを施す。高台内底面は粘土巻上げの様子がよくわかる。砂粒多く、焼成は良好。暗灰色を呈す。

5号土壙墓 D5 (図版85, 第118図)

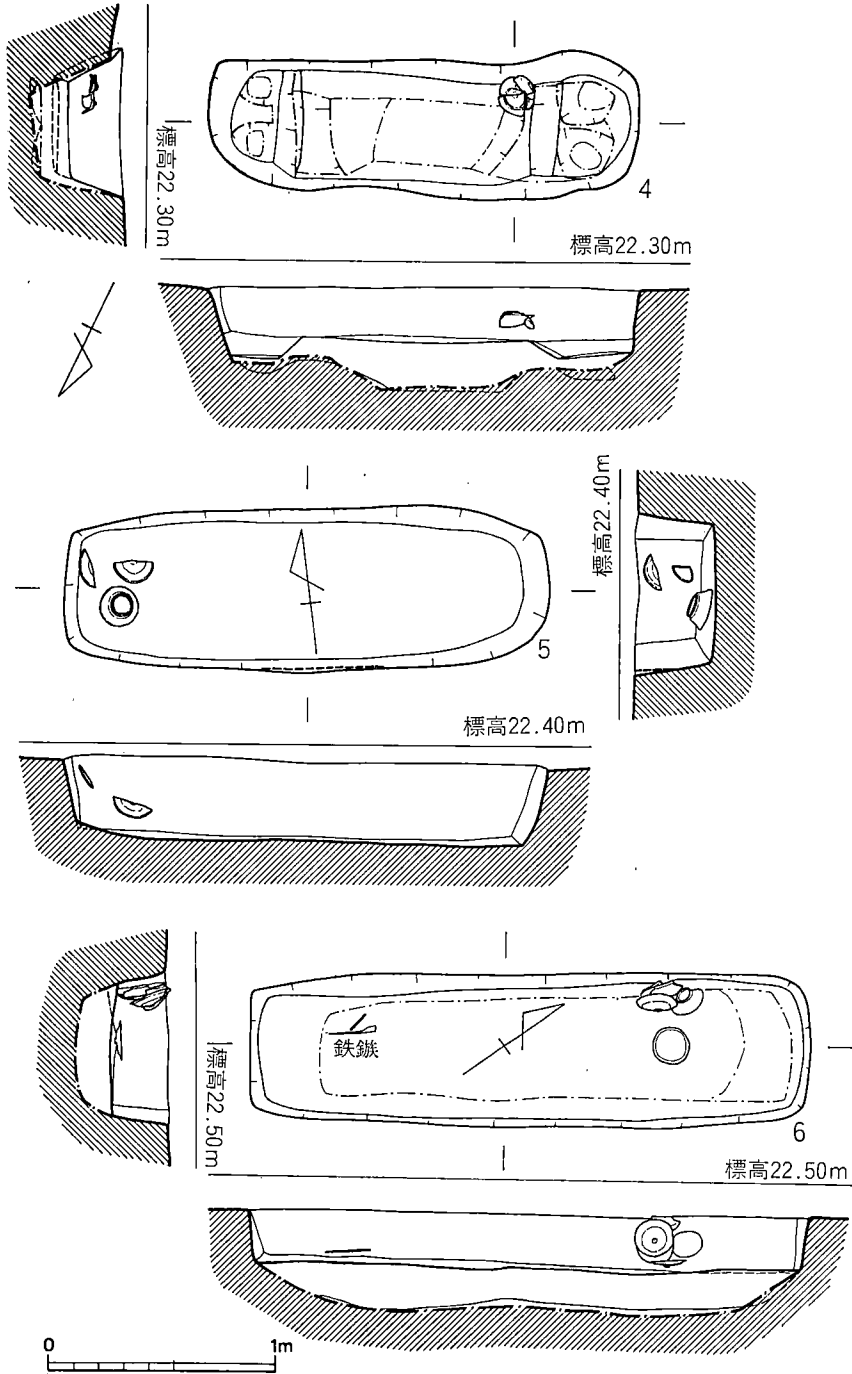
5号土壙と接するが如くである。東小口部の埋土中に須恵器壙の蓋・身1セットが存した。身は倒立で床面に接する程であるが、蓋は二折してかなり上位にあつた。棺上から落下したものとみてよからう。この東小口部は床面もやや高くなっており頭位と考えられる。

出土遺物

須恵器 (図版89, 第119図)

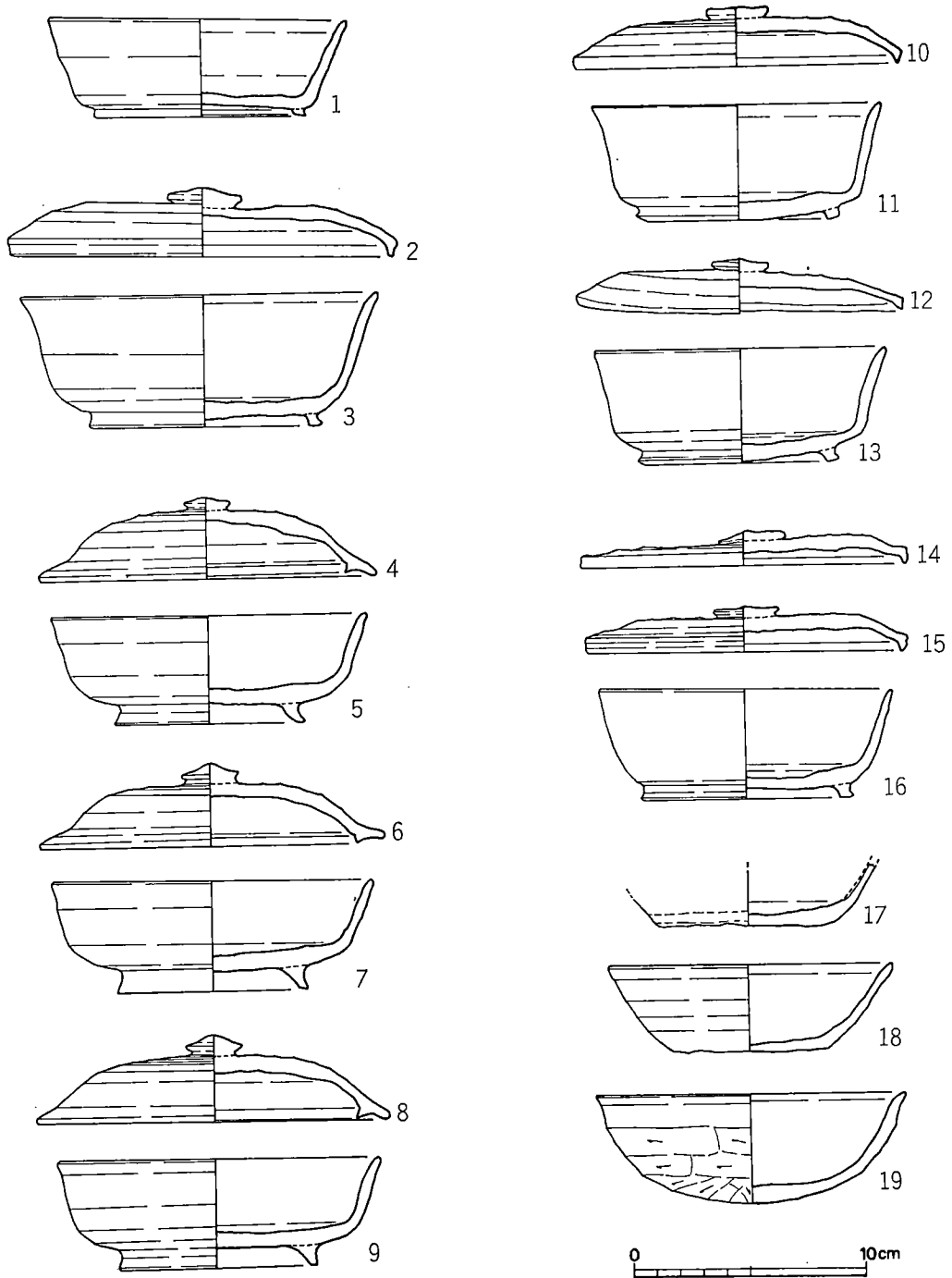
壙(2・3) 蓋と身のセットである。2の蓋は接合して完形となった。口径16.2cm, 器高2.9cm。撮は扁平で中央がやや盛上る。口縁外側は沈線にはならないがやや窪んでいる。その断面は鳥嘴状というも家鴨の頭部を想起させる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はなで、口縁周辺は回転なでにて調整する。3は完形の身である。口径15.2cm, 高台径9.8cm, 器高5.7cm。底部からやや丸みをもって立上った体部は口縁部に至ってやや外反する。高台外端部は僅かに跳上げている。底部は内外ともなで、その他は回転なで。2・3ともに砂粒が多く、焼成は良好。くすんだ灰色を呈している。

IV 立野遺跡D地区の調査



第118図 4～6号土墳墓実測図 (1/30)

IV 立野遺跡D地区の調査



第119図 土壙墓および周溝出土土器実測図 (1/3)

IV 立野遺跡D地区の調査

6号土壙墓 D6 (図版86, 第118図)

上面をカットされて深さはないが、形状整然とした土壙墓である。これも4号土壙墓と同様に床面下部が低くなっている。北東小口部寄りの埋土中に須恵器・甕の蓋と身3セットが存した。また、反対側小口部寄りの所からは床面よりやや浮いて鉄鏃が出土した。頭位は北東側か。

出土遺物

須恵器 (図版89, 第119図)

壙(4~9) ほぼ相似た形態の蓋と身が3セットある。蓋(4・6・8)は3点ともに撮を有し、身受けのかえりを持つ完形品である。4は口径14.3cm, 器高3.5cm。6は口径14.6cm, 器高3.6cm。8は口径15cm, 器高3.7cm。いずれも天井部外面は右回りの回転ヘラ削り、内面はなで、撮と口縁の周辺は回転なでを施す。砂粒が多く、焼成はきわめてあまく、くすんだ灰色を呈するものも共通している。また、天井部外面にワラ様のもので施したヘラ記号らしき沈線を3点ともに見る。身(5・7・9)は7が完形で、9がほぼ完形に近く、5は $\frac{1}{3}$ しか残っていない。3点ともに高台は外へ踏ん張って高く、口縁はやや外反気味の形状をとる。5が口径13.4cm, 高台径8.1cm, 器高4.6cm。7は口径13.6cm, 高台径8.1cm, 器高4.8cm。9が口径13.7cm, 高台径8.4cm, 器高4.7cmを測る。3点とも底部内外がなで、体部は回転なでを施す。砂粒多く含み、焼成は半須恵質と言える程に軟質である。濁灰色を呈す。

鉄器 (図版90, 第115図)

鉄鏃(3~8) 8は断面が丸くなるのであるいは鏃ではないかも知れない。3は圭頭形で身長7.6cm, 5は両丸造で現存長10.1cm。4は圭頭形となろうか。

7号土壙墓 D7 (図版86・87, 第120図)

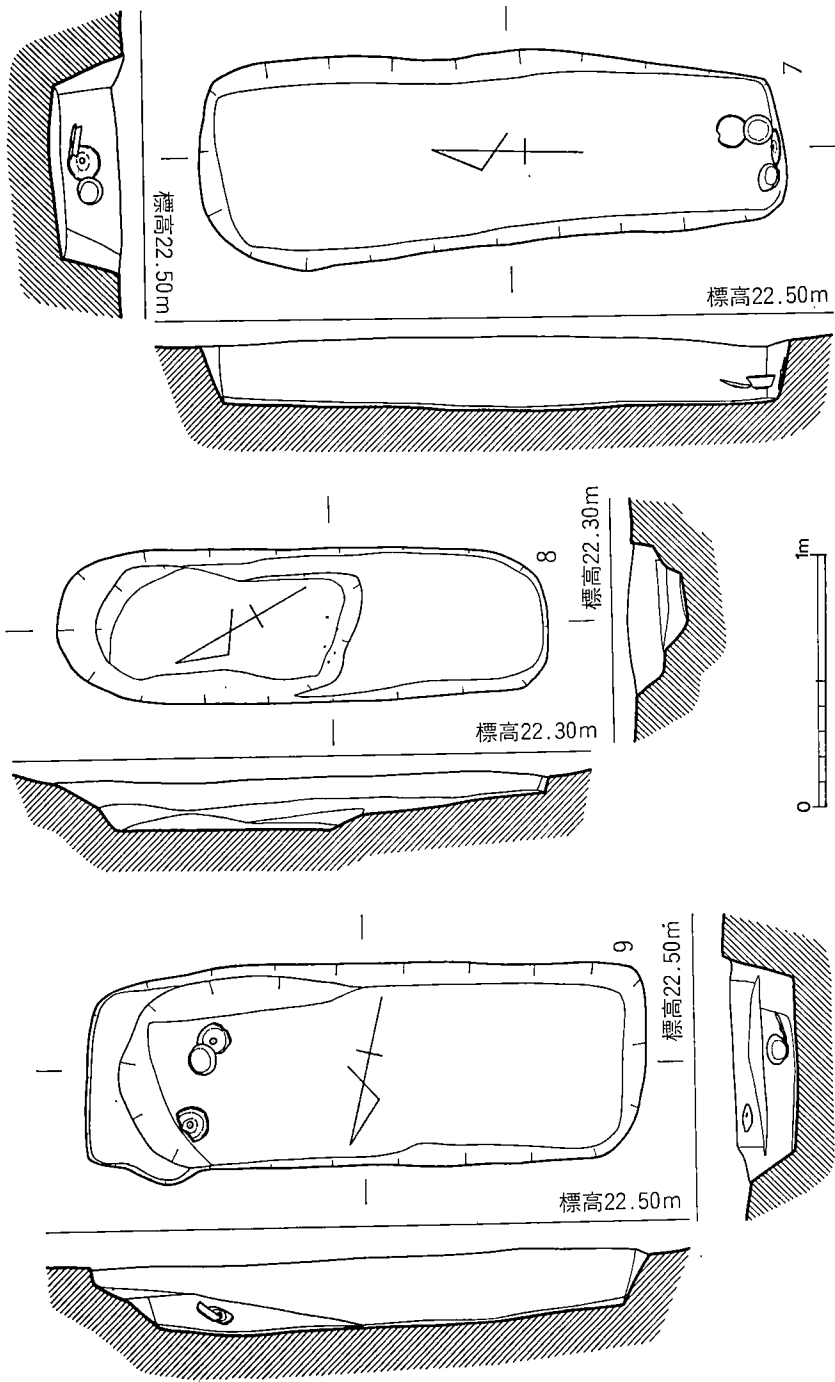
このD地区で最も大型のものである。南小口部の埋土中に須恵器壙2セットが存した。棺上から落下したものと考えられる。頭位は床面がやや高くなって幅の広い北側であろう。

出土遺物

須恵器 (図版89, 第119図)

壙(10~13) 蓋と身の2セットがある。蓋(10・12)は略同形同大である。口縁は断面三角形に近い。10が口径13.7cm, 器高2.6cm, 12が口径13.9cm, 器高2.3cm, 天井部外面は回転ヘラ削り、内面はなで、撮と口縁の周辺が回転なでを施す。身(11・13)は2個ともに全く同じつくりといてよい。口径12.4cm, 器高4.9cmは同じであり、高台径は11が8.7cmと13より0.2cm長いだけである。底部は内外ともなで、体部は回転なでを施す。蓋・身とも砂粒が多く、焼成は良好。紫色がかかった灰色を呈している。

IV 立野遺跡D地区の調査



第120図 7～9号土墳墓実測図 (1/30)

8号土壙墓 D8 (図版87, 第120図)

発掘区の西北端に存した。床面の北半分は一段低くなっている。頭位は南側であろう。

9号土壙墓 D9 (図版87, 第120図)

幅の広い土壙墓であり、東小口部は段をもっている。東小口部寄りの埋土中で須恵器が3点出土した。そのうちの1点の蓋はかなり高い位置にある。棺上から落下したものと考えてよからう。頭位は床面レベルは低くなっているものの東側としておく。

出土遺物

須恵器 (図版89, 第115図)

塊(14~16) 蓋(14・15)は全体に扁平の度合いが強い。14は口径14cm, 器高1.5cm。撮の一部がかなりへしゃげている。約 $\frac{1}{2}$ の破片。15は口径13.6cm, 器高1.9cm。約 $\frac{1}{2}$ の破片である。口縁外側は沈線状の窪みが一周する。2個ともに天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はなで, 撮と口縁の周辺は回転なでを施す。身(16)は高台がかなり外側に貼りつけてあり, 高台と体部との段が少ない。口径12.6cm, 高台径9.1cm, 器高4.7cm。底部は内外ともなで, 体部は回転なで。完形であり, 15の蓋とセットになる。3点ともに砂粒を多く含み, 焼成は良好。暗紫灰色を呈す。

10号土壙墓 D10 (第121図)

9号土壙墓の東にある。南東側の小口部が広がっているが, 床面レベルは逆の西北側が高い。頭位は南東側としておこう。出土遺物はない。

11号土壙墓 D11 (第121図)

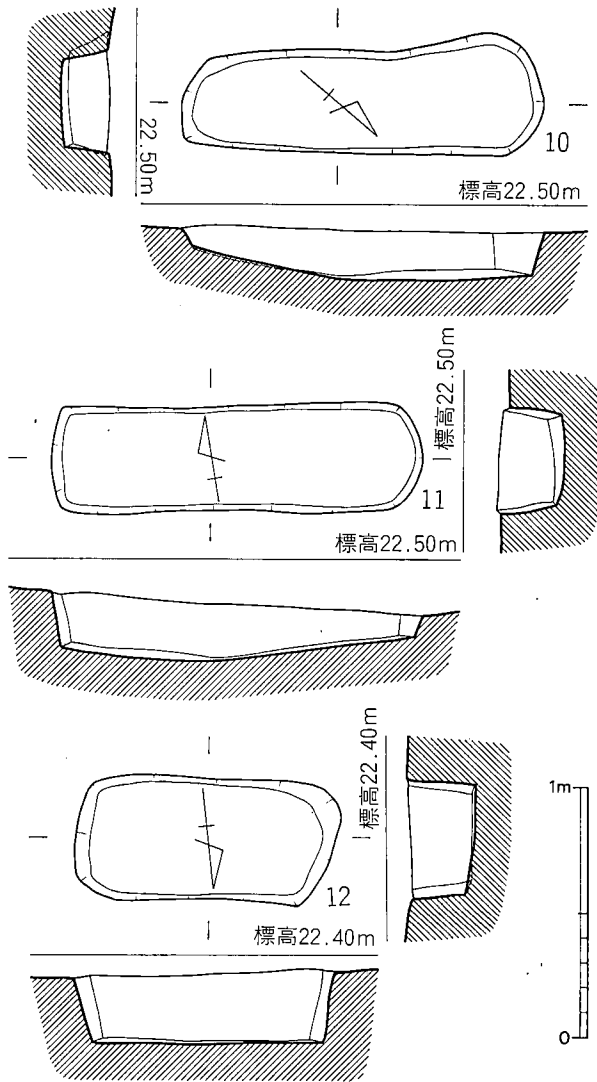
10号土壙墓と似た形状である。頭位は西側としておこう。出土遺物なし。

12号土壙墓 D12 (第121図)

小型のもので, 土壙墓でない可能性もある。頭位は特定しがたいが東側としておこう。

最後に, 1号墳の周溝から出土した土師器について触れておく(第115図17~19)。17・18の類は破片がまだ数個体分存する。

IV 立野遺跡D地区の調査



第121図 10~12号土壙墓実測図 (1/30)

坏 (17・18) 平底をなす。18は口径12.2cm, 底径6.7cm, 器高3.7cm。底部外面は粘土紐巻上げ痕が明瞭である。内底部はなで, 体部は横なでを施す。17も同様の調整を見る。これらは古墳に伴うものとは考えられず, 平安期に至って古墳の同溝上に営まれた遺構に伴っておったものであろう。

壺 (19) 丸底で口縁部が僅かに外反するものである。復原で口径13.3cm, 器高4.7cm。底体部外面は不定方向に手持ちヘラ削り, 内面はなで, 口縁部周辺は横なでを施す。砂粒多く, 焼成は良好。茶褐色を呈し, 外底面に黒斑を見る。この壺は17・18と違って1号墳に伴う可能性がある。(伊崎)

IV 立野遺跡D地区の調査

第4表 土 墳 計 測 表

項目 番号	軸		上 端		床			小 穴		長軸方位	深 さ (上端~床) (cm)	小穴 底面 積(%)	型式	備 考
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	面積 (m^2)	平面形態	長軸 (cm)	短軸 (cm)	面積 (m^2)	平面形態	位置					
1	93+ α	76	0.63	隅円長方形	72	55	0.39	隅円長方形	26	33	12.8	A 1	1号円溝より古い	
2	108	78	0.76	"	87	56	0.45	"	18	38	6.4	A 1		
3	104	71	0.67	"	92	56	0.49	"	20	37	5.7	A 1		
4	119+ α	83+ α	0.85+ α	不整形	105	89	0.69	隅円長方形	25	42	7.5	A 1?	7号円溝より古い	
5	113+ α	120	1.26	円形	90	70	0.61	隅円長方形	44	111	11.5	C 1		
6	149	93	1.28	隅円長方形	132	68	0.84	"	—	—	—	A ₀		
7	162	125	1.65	長楕円形	87	53	0.43	"	—	—	—	C ₀		
8	174	161	2.21	円形	96	58	0.52	"	21	43	7.1	C 1		
9	127	123	1.07	不整形	88	71	0.58	"	32	39	15.2	A 1		
10	113+ α	108	0.97	長楕円形	87	60	0.55	外罫意味の 隅円長方形	27	48	14.7	B 1	9号円溝より古い	
11	102	68	0.67	隅円長方形	97	61	0.6	"	29	47	10.3	B 1		
12	123+ α	105	1.06	長楕円形	82	61	0.46	隅円長方形	40	114	11.7	C 1	11号円溝より古い	
13	123	115	1.16	円形	93	61	0.56	"	32	49	12.5	C 1		
14	128	103	1.10	長楕円形	94	60	0.51	外罫意味の 隅円長方形	46	96	8.6	B 1		
平均	124+ α	102	1.10		93	62.8	0.59		25.3	42.2	83.1		10.3	

(A区)

項目 番号	上 端		床		長軸方位	深 さ (上端~床) (cm)	型式	備 考	
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	面積 (m^2)	平面形態					
1	106	60	0.57	隅円長方形	97	60	0.51	A ₀	
2	106	60	0.57	隅円長方形	97	60	0.51	A ₀	
3	106	60	0.57	隅円長方形	97	60	0.51	A ₀	
4	100	64	0.59	隅円長方形	101	54	0.51	A ₀	
5	100	60	0.56	"	96	51	0.48	A ₀	
6	111	56	0.53	"	98	45	0.42	A ₀	5号墳より古い
7	101	67	0.61	"	94	52	0.45	A ₀	
平均	103.6	61.4	0.572		97.2	52.4	0.474		

(D区)

注 A 類——平面形態が隅円長方形をなし壁面が垂直か急傾斜をなしている土墳。
B 類——A 類と略同してであるが、床面で長軸上の両端の幅が中央部の幅より広い土墳。
C 類——平面形態が円形か長楕円形をなし、二段掘り方を持つ土墳。
0 類——床面に小穴を持たない土墳。
1 類——床面に小穴を持つ土墳。

IV 立野遺跡D地区の調査

第5表 方形周溝墓計測表

	周溝の規模と型式(m)				面積(m ²)		内部主体					副葬品
	東辺	南辺	西辺	北辺	型式	出土遺物	台状部	占有面積	内部主体	主軸方位	丹彩	
1	11.6	12.7	10.8	12.0	C	土師器	90	132	箱式石棺	N-18°-E	○	(鉄斧)
2	7.2	7.5	7.7	7.6	C		38	52	箱式石棺	S-69°-E	○	刀子
3	9.5	9.8	10.0	10.5	C	土師器	71	107	1 箱式石棺 2 箱式石棺	S-61°-E S-45°-E	○ ○	
4	2.4+α	6.7+α	11.6	11.7	C	土師器	(88)	(104)	箱式石棺	S-67°-E	○	
5	8.9	2.3+α	不明	1.5+α	不明	土師器	19(+)	8(+)	不明	不明	?	
6	14.4	12.7	14.2	14.5	B	土師器	117	191	箱式石棺	S-59°-E	○	
7	11.2	12.4	11.2	12.1	A	土師器	85	142	1 箱式石棺 2 箱式石棺	S-63°-E S-59°-E	○ ○	
8	不明	不明	11.3+α	7.0+α	A	土師器	18(+)	40(+)	不明	不明	?	
9	17.8+α	19.1	10.3+α	8.1+α	A	土師器, 鉄器	(193)	(379)	不明	不明	?	
10	10.4+α	11.2+α	11.5	12.0+α	A	土師器	81	138	1 箱式石棺 2 箱式石棺	N-86°-E S-82°-E	○ ○	筒形銅器, 刀, 鉞
11	13.4	13.4	13.4	13.0	C	土師器, 鉄器	105	187	1 箱式石棺 2 箱式石棺	S-88°-E S-88°-E	○ ○	重圈文鏡, 刀子, 鉞
12	不明	5.8+α	7.9	5.8+α	不明		26(+)	53(+)	不明	不明	?	
13	不明	8.7+α	9.8	5.3+α	不明	土師器	43(+)	75(+)	箱式石棺	N-5°-W	○	
14	6.7+α	10.5	9.4	8.0+α	A	土師器	(71)	(109)	箱式石棺	S-84°-E	○	刀子
15	不明	不明	7.8+α	4.2+α	不明	土師器	10(+)	19(+)	不明	不明	?	
16					不明	土師器			不明	不明	?	

● 面積は1/100に縮尺した図面から計測した。()は推定面積を示す。

● 周溝の型式は□…A, □…B, □…Cとした。

IV 立野遺跡D地区の調査

第6表 円墳計測表

A地区	墳丘規模				埋葬施設		
	最大径	最小径	全面積	盛土部面積	内部主体	主軸方位	副葬品
1	12.5m	?	(152m ²)	(76m ²)	?	?	?
2	11.5m	11.3m	104m ²	62m ²	竪穴式石室	N-57°-E	?
3	19.5m	19m	(300m ²)	(177m ²)	?	?	?

D地区	墳丘規模				埋葬施設		
	最大径	最小径	全面積	盛土部面積	内部主体	主軸方位	埋葬品
1	22.1m	?	(395m ²)	(229m ²)	?	?	?
2	11.7m	10.8m	99m ²	76m ²	箱式石棺	S-75°-E	?
3	13.5m	13m	135m ²	97m ²	箱式石棺	N-89°-E	刀子
4	11.8m	11.4m	107m ²	81m ²	箱式石棺	N-78°-E	?
5	15.3m	14.4m	172m ²	118m ²	箱式石棺	S-82°-E	?
6	12.3m	11.7m	113m ²	73m ²	箱式石棺	N-90°-E	刀子

注：() で示した面積は推定復原面積を示す。

第7表 土壙墓計測表

A地区

No.	主軸方位	推定頭位	上面		床面			深さ	出土遺物	備考	旧番号
			主軸長	最大幅	主軸長	頭位幅	足位幅				
1	S-70°-E	東	197	87	142	35	19	36	鉄刀子1	粘土目張り 粘土枕	2
2	S-61.5°-E	南東	228	118	149	30	24	65		二段掘り 床面は若干の凹凸あり	19
3	N-70°-W	西	244	102	172	51	32	39		二段掘り	22
4	S-16°-W	南	158	50	152	42	39	22	須恵器残身1 鉄刀子1	M3を切る	3(4A)
5	N-40°-E	北東	229	81	216	62	53	46	須恵器残身2,身1 半瓶1, 紡錘車1	土器は棺上からの落下か	1
6	N-61°-W	北西	212	74	206	34	27	21	須恵器残身2,身2 鉄鍬4	S2を切る 土器は棺上からの落下か	4(4B)
7	S-83°-W	西	188	63	173	34	(30)	35	(鉄鍬1)	T6・7の周溝を切る	41
8	S-72°-W	西	228	72	215	61	52	35		T3・7の周溝を切る	40
9	S-87.5°-W	西	224	71	179	51	42	68	(鉄鍬1)	T7の周溝を切る	39
10	S-71°-W	西	168	56	156	43	40	71		T7の周溝を切る	38
11	N-59.5°-E	北東	102	42	98	30	25	49	須恵器残身1	T7・8の中間にあり	37
12	N-63°-E	北東	176	56	173	50	36	30		T8の周溝を切る	36
13	S-36°-W	(南西)	87+	49	82+	37		15			23
14	S-9°-W	南	237	71	219	58	53	48	須恵器片	頭位が傾り出して高い 埋土中に石2個	24
15	S-15°-W	南	116	53	93	21	15	27	須恵器片	足位側にビット	25
16	S-50.5°-W	南西	182	47	151	40	38	35			26
17	N-83°-E	東	152	69	117	23	16	41		貼りつけの枕あり	28
18	S-75°-E	東	202	68	161	48	38	33	須恵器残身1,身1	土器は棺上からの落下か	27
19	N-72°-W	西	150	42	130	30	17	51	土師器残身1	土器は棺上からの落下か	44b
20	N-25°-E	北	105	49	102	41	40	26			33
21	S-76°-E	東	162	51	155	34	34	25	土師器皿1	頭位は二段となる 土器は棺上からの落下か	34
22	N-74°-W	西	210	61	178	33	43	24	須恵器残身1,身1	頭位側は二段となる 土器は棺上からの落下か	35
23	S-4°-W	南	136	39	127	30	19	12	須恵器残身1	土器は棺上からの落下か	32
24	N-50°-W	北西	199	53	172	37	33	26		床面にビット3個	31

IV 立野遺跡D地区の調査

No.	主軸方位	推定 頭位	上 面		床 面			深 さ	出 土 遺 物	備 考	旧番号
			主軸長	最大幅	主軸長	頭位幅	足位幅				
25	N-13.5°-W	北	196	66	176	40	44	37	鉄刀子1	床面は平坦でない	30
26	N-13° -W	(北?)	191	66	171	30	33	37		床面にビット6個	29
27	S-85.5°-W	西	167	54	160	44	40	30	須恵器碗蓋1,身1 鉄鍔1	頭位がやや高くなる 土器・鉄器とも床面	43
28	S-67° --E	南東	127	39	111	29	15	23		足位部が若干高くなる	44 a
29	N-67.5°-E	北東	123+	48	117+		22	29		新しい溝に切られる	46
30	N-24.5°-E	北	96	37	91	26	18	11			45
31	N-55.5°-W	北西	104	46	95	26	25	26			18
32	S-77° -E	東	104	49	83	34	27	35		頭位に段あり	16
33	S-58.5°-W	南西	177+	80	168+	42	40	57		床面にビットあり T10-11の周溝内にある	21
34	S-67.5°-E	南東	130	54	123	44	33	25		頭位に段がつく	17
35	N-82° -E	東	181	41	166	27	21	28	須恵器碗蓋1	近世の土壌に切られる	13
36	N- 6° -E	北	169	54	163	39	38	31	須恵器碗蓋2,身2		9
37	N-74° -E	東	213	55	211	36	30	34		北側に段がつく	12
38	N-87° -E	東	206	51	192	(30)	(26)	27		近世の土壌3基に切られる	15
39	N- 4° -E	(南)	215	58	212	61	41+	28		近世の土壌に切られる	14
40	S-88° --E	東	191	71	180	51	42	58			20
41	S-19° -E	(南)	160	58						部分的にしかわからない T13周溝内にあり	
42	N-82.5°-E	東	151	39	151	35	26	33		床面は凹凸が著しい	10
43	N-19.5°-E	北	177	45	173	40	15	17			11
44	N-83° -E	東	173	57	164	41	35	28	土師器碗1	頭位側が高くなる	5
45	N- 5° --E		117+	80						部分的にしかわからない T14の南にあり	
46	N-43° --E	(南西)	160+						須恵器坏蓋3,身1 鉄刀子1	T14の周溝内にあり	
47	N-79.5°-E	東	107	52	95	37	28	26		頭位が一段高くなる	42
48	N-79° -W	西	230	66	208	50	58	52	須恵器坏蓋1,身3	頭位・足位とも高まりが ある	6
49	N-28° -E	北	206	77	203	61	60	55	須恵器碗蓋1,身2	土器は棺上からの落下か	8
50									須恵器碗身1 鉄刀子1	T11の周溝内にあり	
51									須恵器碗蓋2,身1	T10の周溝内にあり	
52									須恵器碗身1	1号墳周溝内にあり	
53									須恵器碗身2	T7の周溝内にあり	

D地区

No.	主軸方位	推定 頭位	上 面		床 面			深 さ	出 土 遺 物	備 考	旧番号
			主軸長	最大幅	主軸長	頭位幅	足位幅				
1	N-63° -E	東	204	60	184	27	31	41		溝に切られる	4
2	S-72° -E	不明(西)	190+	68	162+	(30)	(30)	45		二段掘り風になる	3
3	S-69.5°-E	東	217	74	205	47	46	27			2
4	S-64° --W	西	170	54	158	39	42	22	須恵器碗身1	土器は棺上からの落下か 東西とも一段低くなり、 床面下がさらにくぼむ	1
5	S-82.5°-E	東	192	63	176	47	33	33	須恵器碗蓋1,身1	土器は棺上からの落下か	9
6	N-36.5°-E	北東	222	63	215	51	42	22	須恵器碗蓋3,身3 鉄鍔4	土器は棺上からの落下か 床面下が18cm程くぼむ	8
7	N- 2° --W	北	231	83	220	60	50	30	須恵器碗蓋2,身2	土器は棺上からの落下か	7
8	S-29.5°-W	南	193	60	171	45	44	15		北側半分がくぼむ	6
9	N-77° -E	東	222	81	210	73	69	27	須恵器碗蓋2,身1	土器は棺上からの落下か 東側が一段高くなる	10
10	S-40.5°-E	南東	142	48	134	40	24	20			D5
11	N-81° -W	西	146	42	139	36	35	26			D6
12	N-84° -E	(東)	103	49	92	42	39	26			D7
13	N-88.5°-W	西	166	112	125	23	22	42		小口部外側に粘土あり 枕を削り出す	5

註：Tは方形周溝墓、Mは溝を示す。

ま と め

昭和56年度から同58年度にかけて発掘調査を実施した立野遺跡では、多くの集落遺構のほか、古墳時代前期から奈良時代の埋葬遺構を検出した。集落遺構の主体はC地区に存在し、昭和59年度に報告する予定であるが、一部（B・D・E地区）については昭和57年度に報告した（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—2—）。今回は主に埋葬遺構についての報告で、A・D地区に集中し、また、性格・所属時期に不明な部分を残す土壙もこの地区に多く見られる。以下、土壙・方形周溝墓・円墳・土壙墓について、若干の考察を加え、まとめにかえたい。（児玉）

(1) 土壙群について

今回報告する19基の土壙群（2基は別途な遺構と考えられる）について土壙の性格及び土壙群の用途を追求してみたい。当遺跡と隣接する宮原遺跡ではこの外に十数基を検出しているので総括的まとめは後日に期したい。

はじめに この種の土壙は貯蔵穴、土壙墓、落とし穴及び方形堅穴など様々に報告されており、その性格を解明するまでには至っていない。なお九州横断自動車道に関連する調査で下原遺跡（註1）において22基検出され、落とし穴として報告されている。この結論を考慮し他の遺跡との比較検討を行なって、少しでも当時の人達の生活環境を探究してみたい。

群構成 この種の土壙は単独で検出される例（註2）は少なく、2～3基またはそれ以上で群をなすことが多いとの指摘（註3）がなされている。当遺跡においても形態や長軸方位が、ほぼ同じ等高線に位置することや配置関係などで大きく4つの群に分けられる。

I群……A区のP1～P5。（P4の長軸方位はかならずしも正確ではなく、他の4基は長軸方位が略同じであること・等間隔に配置しているので5基またはそれ以上で群構成していると考えられる。）

II群……A区のP6～P8。

III群……A区のP9～P14。（南北とも用地外に伸展する可能性を残し、三種類の型式で成立しているので細分化するか否かは不明である。）

IV群……D区のP2とP4～P7。

以上に大別したが、この主旨はこの種の土壙が自然地形に大きく影響（周溝墓など後世の遺構により地形が多少変化したとしても）されていることである。I・IIIとIV群は長軸方位と等高線が略直交し、II群のみ長軸方位と等高線が平行な窪地に位置している。このことは霧ヶ丘遺跡（註4）で指摘された「けもの道」との関係で長軸方位と等高線が直交か平行になるように

ま と め

配置した結果ではなかろうか。なお、県内の調査例で門田遺跡辻田地区（註5）・干潟遺跡（註6）や下原遺跡（註7）は若干の違いはあるものの群構成をなしている。

土壌の形態 第4表で型式と記載していることであり、形態の変化に時期差があるのかを考えてみたい。Ⅰ群ではA₁類が主体でP5のみC₁類であり、用地外にのびる可能性を有し群構成も再考に値するかもしれぬ。Ⅱ群は特異であり三種類で成立しており、各々個別で存したとは考え難い。Ⅲ群はA₁、B₁とC₁で構成されており、2基程度で小支群をなすとも考えられる。Ⅳ群はA₀類のみで構成されている。以上各群とも異なった様相をしており、土壌の時期が不明ではあるが群としての変遷は考えられるかもしれない。けれども霧ヶ丘遺跡にて指摘された「形態の変化は時期差を示す」ことは、当遺跡においてはⅡ群が成立しており（Ⅲ群は確定するまでには至らないが）考え難いことである。なお型式化した中でC類は他の遺跡ではあまり検出していないタイプである。

小 穴 小穴を有する土壌は19基中12基にも及び六割強となる。本文でも述べたが小穴内に柱痕や杭痕は検出されてはいないし、掘削した直後埋め戻された様相を呈している。これらは土壌の性格を考える上で多大な問題を孕んでいるのではなかろうか。ここで類例を分析して小穴とは如何なる機能を有しているかを考えてみたい。霧ヶ丘遺跡では棒痕が確認されており、二宮遺跡（註8）では柱痕が確認されている。他の遺跡（註9）において棒が開口部まで達するとの報告例もある。県内における出土例では門田遺跡辻田地区（註10）が杭痕と考えられる遺構が報告されているし、現在調査中の柿原古墳群のF地区（註11）には2ないし4本の杭痕が検出されている。その他に類例は多くあると想えるが小穴内に痕跡を残す遺跡名を連記した。一方小穴内及び土壌内床面に何ら痕跡を残していない遺構も多く報告されている。この点について論及すると、土壌内床面に何ら施設を施さないのか、小穴内にあらゆる条件で痕跡が確認されなかったのか又は何ら存在しなかったと考えられる。小穴内に何ら存在しないことは（4C以前の人々の推り知れない精神的遺影の産物ではなかろうか）土壌の性格を決定する根拠にもなり得るし、以後類例を再検討しながら注意しなければならない問題点でもある。逆に小穴内に何らかが存在した場合において、霧ヶ丘遺跡や青木遺跡（註12）で指摘された「落し穴」の説が妥当と考えられる。

時 期 関東地方では縄文時代早～前期の時期が多く与えられている。西日本では総数238基を出土した青木遺跡（註13）が縄文時代後・晩期の時期が与えられている。県内について述べると、門田遺跡辻田地区は弥生時代前期末の土器片が出土し、下原遺跡では弥生時代中期前葉以前の時期が与えられている。隣接する佐賀県では干塔山遺跡（註14、土壌墓と報告されているが形態が類似しているので本遺跡の検出例と同じ性格を有する土壌として勝手乍らも取り上げた。）では弥生時代後期の土器が出土しており、六本黒木遺跡（註15）は縄文時代前期の土器が出土している。僅かな例を記しただけだが縄文時代早期～弥生時代後期までの時期にこ

ま と め

の種の土壌は存在していたのである。このことは長い歳月を経ても共通する性格の遺構であることを表象しているのではなからうか。また出土遺物が皆無に等しいのも土壌の性格並びに土壌群の機能について考える一つの手懸りではなからうか。最後ではあるが、宮原遺跡D地区の土壌より縄文時代前期頃（註16）と推定される石鏃が唯一出土していることを付け加える。今回報告した土壌の時期は古墳時代（布留式古段階）以前であるが正確に時期決定するまでには至らない。

おわりに 当遺跡では土壌に併行する時期の他の遺構が調査区内には存在しなかったので土壌の性格及び使用用途を考える上で大きな障害となった。またこの種の土壌は自ら性格を不明確にする要因を内包しているとも考えられるし、幾多の説が唱えられている。けれども自然環境・当時の人々の生活環境や土壌自体の有する問題を考え、また再検討して後日に備えておきたい。何ら問題点は解決されなかったけれども、これをもって今回は終りとしたい。（武田）

(2) 方形周溝墓と円墳

A地区では方形周溝墓16基（東支群7基，西支群9基），円墳3基，随葬墓として標記の墓域外に石蓋土壌墓6基，土壌墓3基を検出した。D地区では円墳6基のほか随葬墓として土壌墓1基を検出した。方形周溝墓，円墳は封土をすべて欠失しており，規模については平面的な側面からしかわからない。供献土器は在地のものは見受けられず，器形的に中国，近畿地方のものが主体を占める。また，10号方形周溝墓第1主体棺外副葬品の筒形銅器は，方形周溝墓からの出土例としては初例で，筒形銅器の存在（あるいは配布）にみる政治的側面を考える時，極めて注目される出土品である。さらに，16基の方形周溝墓は整然と配置され，西支群では墓道の存在も考えられ，また，供献土器にみる型式差はあまりなく，極めて短期間に構築されたようである。これらについて，若干の検討を加え，その性格と所属時期について考えてみたい。

規模（第122図） 一辺の長さや直径ではなく，面積で規模を示した。それは，規模の差がより大きく出ること，また，個人の墓域の規模を示すには面積の方がふさわしいと考えたからである。また，以下の記述においては調査区内で全容を検出した遺構の面積と，調査区外にのびる遺構の推定面積と同様に扱う。

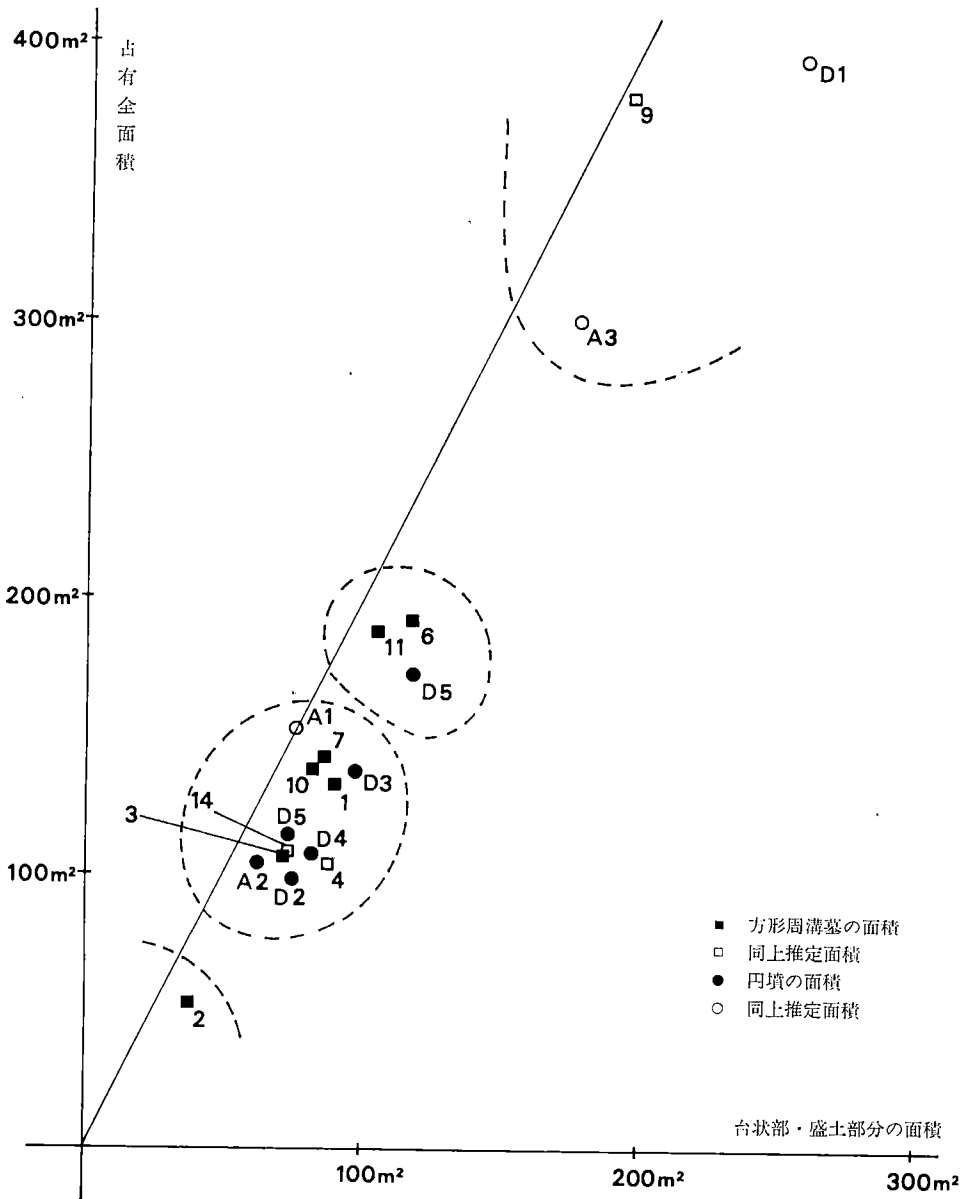
方形周溝墓10基，円墳9基について，1/100の図（1/20の原図から作成した第2原図）をもとにプランメーターで計測した面積が第122図のグラフである。グラフ中の1本の斜線は，

占有全面積：台状部面積＝2：1（すなわち，周溝面積：台状部面積＝1：1）

であることを示している。

図で，まず目につくことは，占有全面積に対する周溝面積の示す割合が，意外と大きいということ，大型，中型・小型の方形周溝墓と円墳の占有全面積には以下のように，それぞれ大き

ま と め



第122図 方形周溝墓・円墳の面積
(円墳の場合数字の頭のアルファベットは地区名を示す)

な差が認められないことである。

それらを、各支群ごとの数字上の規模に表現された序列を考慮して整理すると

大型……300m²前後～400m² (9号周溝墓, A地区3号墳, D地区1号墳)

中型……150m²～200m²未満 (6・11号周溝墓, A地区1号墳, D地区5号墳)

ま と め

小型……100㎡前後～150㎡前後（1～4・7・10・14号周溝墓，A地区2号墳，D地区2～4・6号墳）

特小型……50㎡前後（2号周溝墓）

である。また，グラフに示してないが，5・8・12・13・15号周溝墓も小型に含まれそうである。

これらを各支群別に整理すると，

	大 型	中 型	小 型	特小型
方形周溝墓東支群	9号 (379㎡)	11号 (187㎡)	10・12～15号	
方形周溝墓西支群		6号 (191㎡)	1・3～5・7・8号	2号 (52㎡)
A地区円墳群	3号 (296㎡)	1号	2号	
D地区円墳群	1号 (395㎡)	5号 (172㎡)	2～4・6号	

となる。上記のことから次のことが言えよう。

- 1 各支群で3段階の規模の差が認められ，西支群の方形周溝墓は中→小→特小という規模の差を示すが，他の3支群では大→中→小という差を示す。
- 2 各支群においては必ず他を圧して大型（西支群方形周溝墓では中型）のものが1基だけ存在する。その大型に続く中型のものも各支群において，複数の存在はなく，ただ1基である（西支群方形周溝墓を除く）。
- 3 各支群内において，規模の上で明確なヒエラルキーが存在し，また，東・西支群の方形周溝墓の関係は，東支群が西支群に優越しているように思われる。それは，西支群の副葬遺物が質・量とも乏しいのに対して，東支群では筒形銅器や鏡をもつことから首肯されよう。

以上のように，本遺跡では各支群の方形周溝墓と円墳に3段階の規模の差があることが判明した。しかし，各支群の盟主級の墳墓の構築順位については必ずしも明確にはしがたい。

内部主体 方形周溝墓で内部主体の確認されたものはすべて箱式石棺である。円墳は，D地区では方形周溝墓と同様に箱式石棺を採用するが，A地区では，削平の著しい1・3号墳は不明であるが，2号墳では川原石を小口積みした竪穴式石室を採用している。

各支群において内部主体は統一され，A地区円墳群を群いて箱式石棺を採用している。箱式石棺は弥生時代以降，集団墓の埋葬施設のひとつとして採用され，その在り方には地域性がかかり存在する。ここでは，その地域性を分析するゆとりがないので，本遺跡内の箱式石棺の推移を中心に検討してみよう。

方形周溝墓に採用された箱式石棺は，おおむね主軸長1.8m前後，幅0.3～0.4m程で，深さも幅とほぼ同程度である。内面は赤色顔料が塗布され，粘土枕をもつものが多い。1号では板石を敷いて床面を形成するが，他ではそのような手法は見られない。周溝墓の箱式石棺の規模等は，集団墓の大型箱式石棺墓程度の大きさで，両者の相違は，墓窟の形式と規模にあり，ま

ま と め

た周溝墓では、石棺の裏込めを入念に行い、埋土にも特に良質の粘土を使用する傾向にある点に求められる。

円墳に採用された箱式石棺は、方形周溝墓のそれよりも規模がひとまわり大型化する。主軸長2m前後、幅0.5~0.6m近いものまで存在する。また、床に玉砂利を敷いており、弥生時代以来の伝統的な箱式石棺には求められない床面処理を施している。それは、A地区2号墳の竪穴式石室の床面に玉砂利を敷いた形跡があることから考えて、竪穴式石室の床面処理の手法を箱式石棺に導入した結果であろうと推測する。また、石棺内法の大型化は、竪穴式石室の室内空間規模への志向を思わせるものがある。上記の2つの要素からD地区円墳群の箱式石棺は、方形周溝墓の箱式石棺と比較して、竪穴式石室により近づいた様相を呈すると考えられる。(註17)

また、A・D両地区とも、内部主体の確認された円墳で複数の内部主体を有するものは1基も存在しない。それに対し、方形周溝墓においては、複数の内部主体を持つものが5基存在する(東支群2基、西支群3基)。それも、1基の周溝墓につき2基までで、3基以上の内部主体を有するものはない。それは、円墳においてはもとより、周溝墓に埋葬さるべき階層がかなり限定されたものであったろうことを示している。

次に、内部主体が2基存在する場合、それらの間には新旧関係があり、最初に構築された第1主体の墓壇埋土は、地山の粘質土だけを使用しているのに対して、後続して構築された墓壇埋土は、地山の粘質土の中に表土の暗~黒色土がブロック状に混入している。それは2基の主体が切り合っている7号・10号周溝墓で確認しており、切り合い関係を持たない11号周溝墓の内部主体も墓壇の埋土でおおよそ新旧関係を知ることができた。このことは、第1主体構築に先行して、方形周溝墓の台状部の表土が残らない程度の地山整形作業を行っていたか、墓壇掘削時に排出した土のうち、表土の部分と表土下の黄色粘質土や灰白色粘土を分けておいて、後者だけで墓壇を埋めもどしたであろうと思われる。第2主体構築に際しては、当然表土から掘り込んだ墓壇掘削時の排土を、区分けする配慮がなされなかったと思われる。このため、切り合い関係を持たない2基の内部主体の新旧関係を判断する一つの材料になり得たのである。

方形周溝墓の構築順序 東西両支群の方形周溝墓の構築順序は、

- 1 周溝どうしの切り合い(土層断面図に依る。)
- 2 出土土器(現段階の編年観に依る。)
- 3 周溝の掘られ方(先行する周溝墓を意識した周溝の掘り方——後述)
- 4 周溝墓の配列状況

など、4つの要素を判断材料に使えそうである。

東支群から検討する。周溝どうしの切り合いでは、11号周溝墓が10・13・14号を切り、9号周溝墓が12号を、12号周溝墓が13号を切る。15号周溝墓は切り合い関係がない。

出土土器は、13号周溝墓の広口壺75に新しい様相を、9号周溝墓の甕形土器47・48、10号周

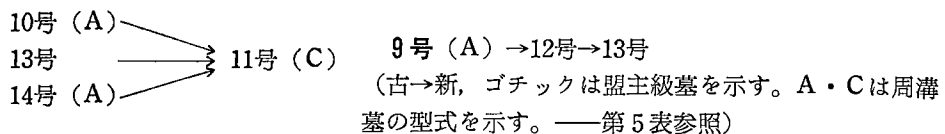
ま と め

溝墓の二重口縁壺53, 11号周溝墓出土土器群に古い様相を認めることが可能だが、周溝どうしの切り合い関係と土器の新旧関係は必ずしも整合しない。それは、土器供献行為の実体を検討しなければ解決できないが、出土土器の新・旧関係が必ずしも方形周溝墓の新・旧関係に対応しているわけではないことは、周溝の切り合い関係を示す土層断面図からも了解されよう。また、出土土器を総体的にみても、その時期幅はごくわずかのようで、ごく短期間のうちに方形周溝墓が構築されたようであり、その新旧関係は累世的な関係ではなく、単に作業工程上のものを示しているにすぎないと思われる。

次に周溝の掘られ方であるが、東支群では周溝どうしの切り合いが15号周溝墓をのぞいて一般的であり、西支群のように、隣接する周溝墓との間に墓道状の細長い空地を掘り残すようなことはない。よって、この要素は東支群においえば構築順序の判断材料とはなり得ない。

最後に、方形周溝墓の配列状況であるが、11・14号周溝墓の南溝は、ほぼ東西一直線上に並び、また11号の東溝と14号の西溝はほぼ南北に配置されるようであるが、11号の東溝が14号の西溝のほぼ全体を掘り広げている。よって両者の親近性はかなり高いと想定される。また、11号は10号に後続し、東支群では、後述する西支群とは異なって、東一西方向（横方向）を意識して方形周溝墓を配置した状況がうかがえる。さらにいうならば、10・14号周溝墓の空間に11号が構築されており、その構築順序とともに、後続して構築される周溝墓の予定地をあらかじめ空けておいたと推測され、それも東西方向を意識しているようである。東支群における東西方向の意識は、内部主体の主軸方位が、東西方向が基調的であるのに対応する。

以上のことから、東支群の方形周溝墓の構築順序は、



と推定する。10・13・14号周溝墓出土土器群のうち、10号周溝墓出土のものが古い様相を呈するが、9号出土土器群との新旧関係はほとんどないと思われる。また、各周溝墓の出土土器群の示す時期幅はごくわずかなようで、上記の構築順序は方形周溝墓を構築するうえでの作業工程上の新旧関係を示しているにすぎないと推測され、あえて大胆に言えば、被葬者の墓域と規模はあらかじめ決定されていたと考えてもよからう。

西支群での、周溝の切り合い関係は、1号と3号が2号を、3号が4号を切っている。

次に、出土土器は東支群と同様にほとんど時期差を示すものではないが、8号周溝墓出土の土器は他と比べてやや新しい様相を呈している。

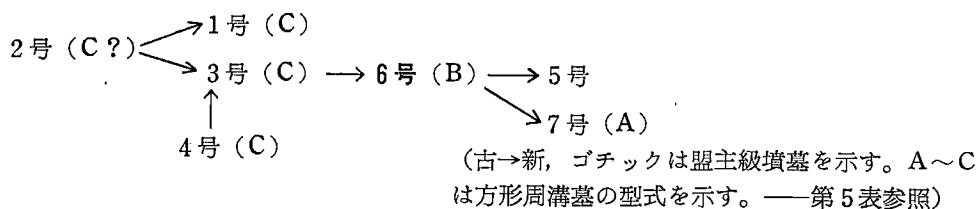
周溝の掘られ方は、先行して存在する方形周溝墓を意識して掘ったと見られる例がいくつか存在する。(付図2参照) それは事実説明の項で先述したように、6号周溝墓に最も顕著に見

ま と め

ることができる。すなわち、6号周溝墓の南溝は南隣りの3号周溝墓の北溝と平行して掘られているが、3号周溝墓の北溝を意識し、それを切らないように中央部分を細くし、周溝の外縁のラインは内彎している。さらに東溝も東隣りの7号周溝墓を意識しているとみられ、両者が併行している部分の6号周溝墓の東溝は狭く、それより東側の部分は幅広くなる。6号周溝墓ほど顕著ではないが、これに類する状況は5号周溝墓の東溝、7号周溝墓の南溝においても看取される。

周溝墓の配列状況は、東支群では先述したように東—西（横）方向を意識しているのではないかと考えたが、西支群では2～4号周溝墓の構築順序に示されるように、北西—南東（北—南、縦方向）を意識しているように見受けられる。すなわち、2・4号周溝墓の空間に3号が後続して構築されており、東支群での10・11・14号周溝墓の構築順序のあり方と酷似している。ただ、横方向か縦方向かの差があるだけである。この縦方向の意識は5～8号周溝墓にも言えることであり、遺構番号と構築順序は整合しないが、周溝の掘られ方とも勘案すれば2～4号に続いて5～8号が構築されていると推定される。西支群においても東支群と同様に、その構築順序とともに、後続して構築される周溝墓の予定地をあらかじめ空けておいたと推測され、それは南北方向（正確には北西—南東方向）を意識しているようである。西支群における南北方向の意識は、内部主体の主軸方位が南北方向が基調的であるともほぼ対応する。

以上のことから、西支群の方形周溝墓の構築順序は、



と推定する。各周溝墓の出土土器群の示す時期幅はごくわずかなようで、上記の構築順序は単に方形周溝墓構築の作業工程上の構築順序を示しているにすぎないと推測され、東支群と同様に、被葬者の墓域と規模はあらかじめ決定されていたであろうと考える。

構築順序の東・西支群の間の相違は、以上のことから次の様に要約されよう。

- 1 東支群では、9・10号周溝墓の先後関係が明確ではないが、西支群では最大の6号周溝墓の構築順序は後の方であり、必ずしも各支群の盟主級墳墓が第1番目に構築されたわけではない。
- 2 しかし、東支群の9号周溝墓は同支群では最古の部類にはいる10号周溝墓を意識したかのように、両者の西溝はほぼ一直線上に並んでおり、両者の計画的な配列と親近性を考慮してもあながち不当ではあるまい。11・12・13号周溝墓よりも9号周溝墓が古いと推定されることも考慮して、9号周溝墓は10号周溝墓との先

ま と め

後関係は不詳ながらも東支群では初期段階に構築されたと考える。よって、西支群よりも東支群では盟主級墳墓の構築が先行するようである。

- 3 西支群では、盟主級墳墓の構築が遅れるが、2・4号周溝墓の構築順序が不明ながらも、特小・小型のものから構築されはじめたようである。

土器 16基の方形周溝墓の周溝埋土中から100個体近い土器が出土している。図示できたのは77個体である。器種は甕・壺・埴・坏・高坏・器台（鼓形器台を含む）等があり、おのおのバラエティに富んでいる。そのうち、甕・壺が量的に多く、高坏は小片を含めて6個体で、高坏が少ないことが一つの特徴となっている。また、在地系と土器と思われるものは9号周溝墓の高坏44の1個体で、他は器形的には中国・近畿地方に出自を求められるものである。少なくとも福岡県下の方形周溝墓からの出土土器は、弥生土器に系譜的に連なる在地系土器の出土は少なく、その大半は中国・近畿地方からの外来土器かそれに近いものである。立野遺跡の出土土器も、上記の大きな流れに沿ったものである。

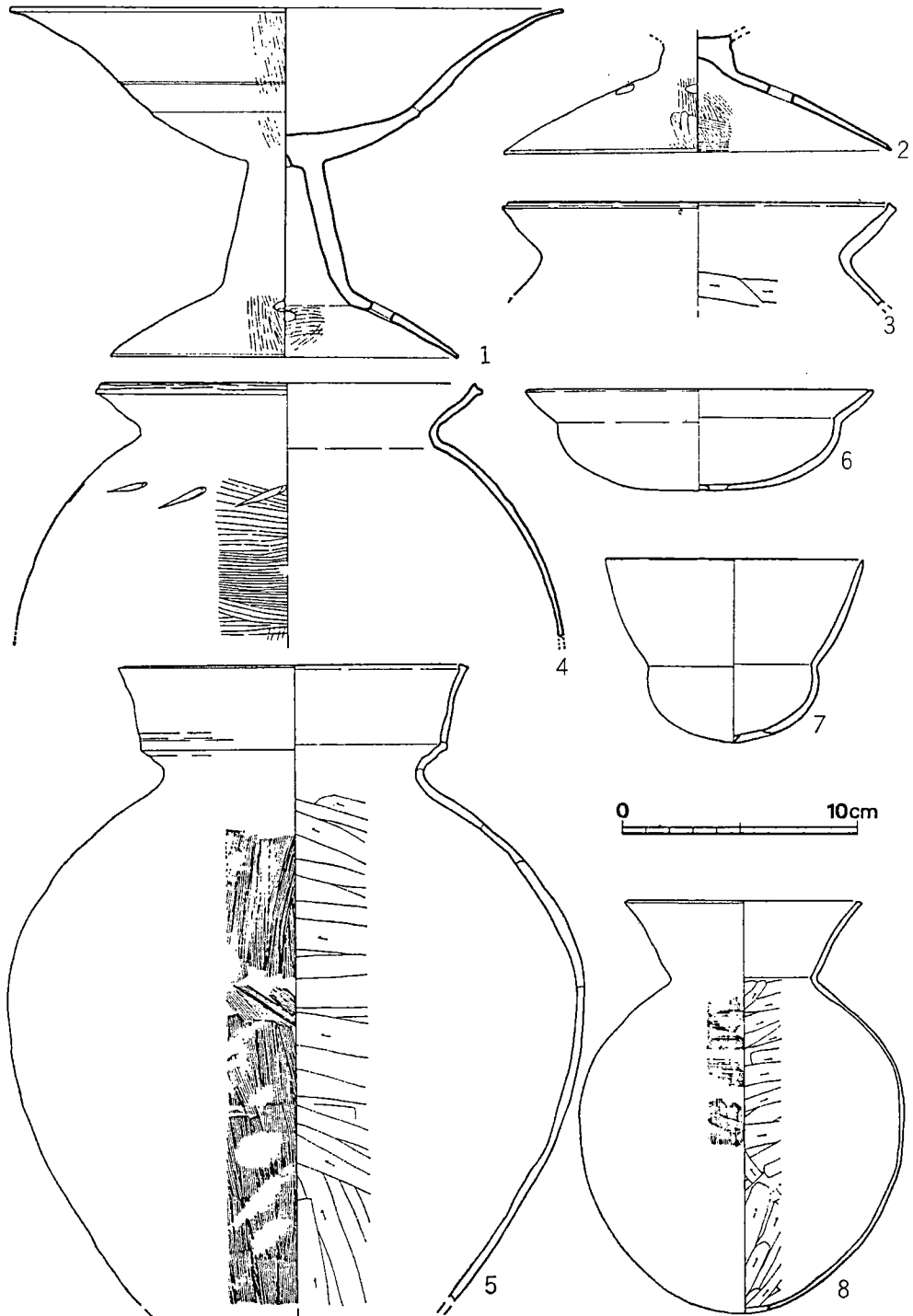
次に、出土土器量の多い方形周溝墓は、1・3・9・11号で、その出土位置と土器との関係を示したのが付図4～7である。この図から考えられることは、

- 1 西支群の1・3号周溝墓では、南溝への供献土器量は少なく、他の3溝、とりわけ北溝（東隣りの周溝墓と隣接する関係にある周溝）への供献土器量が多い。また、周溝隅部への土器供献は、1号を除いて顕著ではない。
- 2 東支群の9・11号周溝墓では、9号は北溝を掘っていないが、北溝からの土器出土は全くなく、11号周溝墓は、南溝から土器は出土していない。西支群と同様に、意識的にか、東・西・南・北の周溝のうち、どれか一つの周溝への土器供献量は極めて少ない。
- 3 器種別にみて、その出土位置（供献位置）は、陸橋部と内部主体の軸方向・頭位等の三要素との関係はあまり強くないようである。しかし、9号を除いて、1・3・11号周溝墓では頭位側周溝には二重口縁壺を供献している。
- 4 土器の出自（外来土器と私考するものの産地、あるいは、器形的に系譜を追える土器形式の成立地）による、土器供献位置の規制は認められない。

ことなどである。

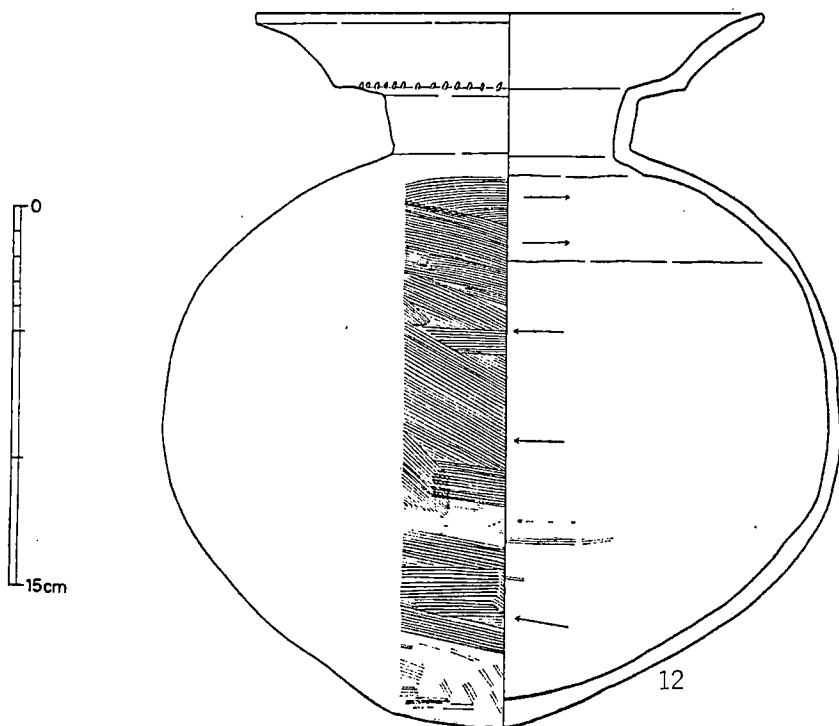
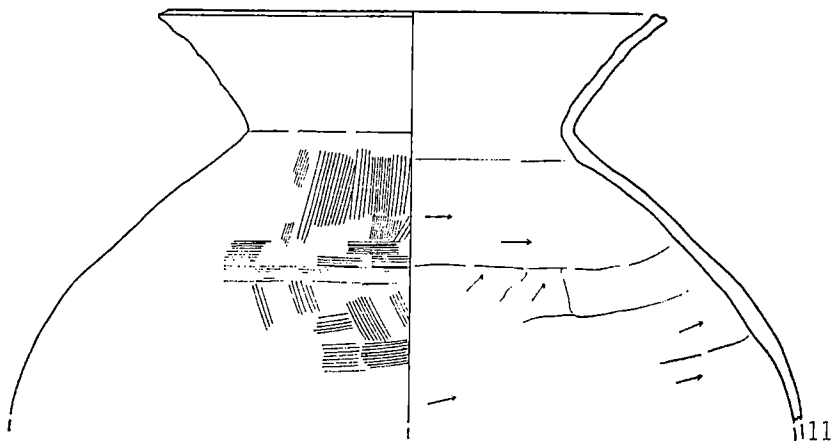
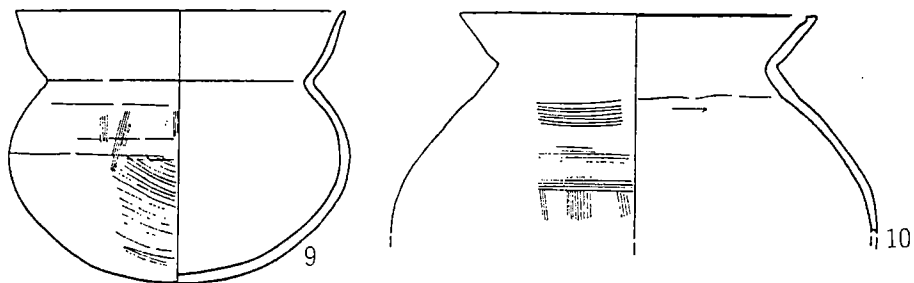
さて筆者は古式土師器について独自の編年観を持ち合わせていないので、当遺跡近在の神蔵古墳（註18）・大願寺遺跡（註19）・上々浦遺跡溝8（註20）・池ノ上1号墳（註21）等の出土土器（第123～125図）と比較することによって、立野遺跡方形周溝墓群の所属時期を検討してみたい。上記遺跡・遺構の概要は各報告書を参照して頂くとして省略する。

立野遺跡近辺で、庄内型甕のタタキ目に類似したタタキ目を持つ甕形土器の出土例は上々浦遺跡溝8上層出土の甕13に見られ、型式的に後続するものとして、神蔵古墳北西くびれ部出土



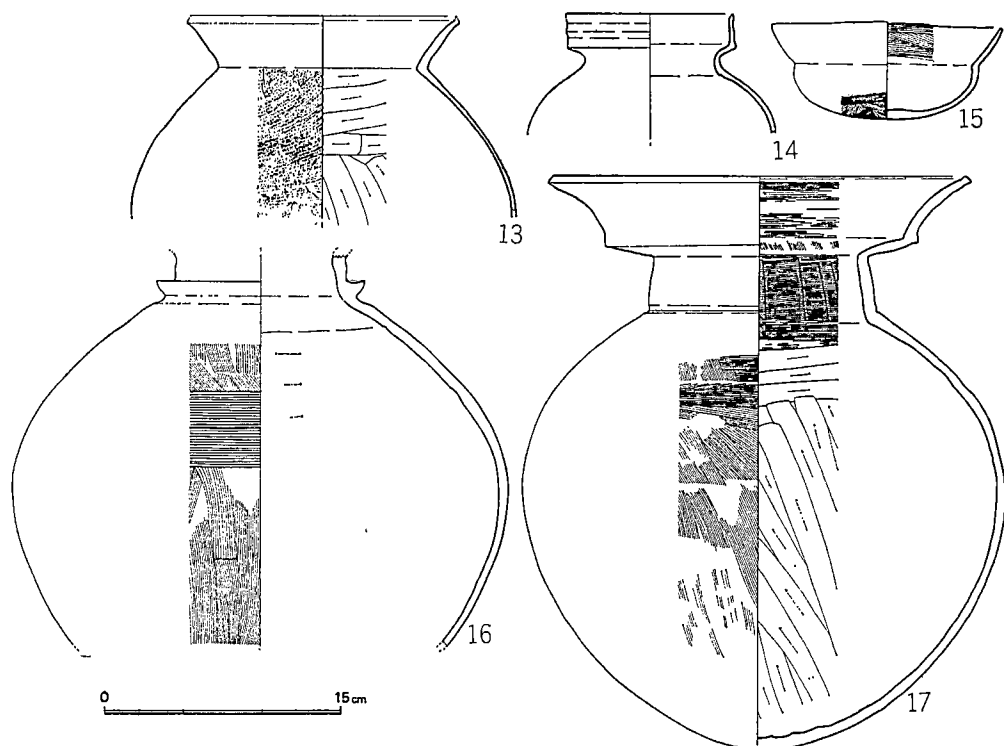
第123図 神藏古墳・池ノ上墳墓群出土土器（1～4—木下原図，5～8—橋口原図）

せ と め



第124図 大願寺遺跡出土土器 (柳田原図)

ま と め



第125図 上々浦遺跡出土土器（佐々木原図）

の甕3・4、大願寺遺跡出土の甕10をあげることができよう。3・4・10は口縁部の内彎が見られず、口縁端部はつまみ出され、体部内面は頸部から一段下がった部分以下をヘラケズリし、同外面は肩部を横位刷毛目調整している。立野遺跡で3・4・10の甕に共通する特徴を持つ甕は、4号周溝墓の20・21、9号周溝墓の47・48に見られ、48にはタタキ目と思われるものが残っている。立野遺跡出土のこの種甕形土器では口唇部を上方につまみ上げ、口縁部は直線的に外反し、器肉を薄く仕上げた47が、より古い様相を呈する。

次に立野遺跡で割と量的に多く出土しているのに広口壺がある。大願寺方形周溝墓出土例は、口縁部が大きく外反し、端部を斜め上方につまみあげる。立野遺跡出土例は11と比べて口縁部の外反度は弱く立ち気味な点は異なるが、口唇部の特徴は同じである。11は体部中位以下を欠失して全形を知り得ないので立野例と比較できないが、肩はナデ肩気味で器肉はヘラケズリで薄く仕上げる点は9号周溝墓出土例66～68と共通する。両遺跡出土例はほぼ同時か、極めて近い時期のものであろう。なお、池ノ上1号墳供献土器の広口壺8は、上記66～68と比べて底部が丸味を持って体部は楕円形を呈し、倒卵形の体部を持つ9号周溝墓出土例より新しい様相を呈する。

ま と め

本遺跡では二重口縁の壺・甕がかなり出土している。そのうち、3号周溝墓の壺13は頸部に突帯を有し、そのプロポーシヨンは上々溝遺跡の壺16と酷似する。他の二重口縁壺については、大願寺遺跡の壺12のように口縁端部外面が直立気味で面を有し、口縁部の屈曲部外面を刻み目で加飾するようなものはなく、より後出的であり、上々溝遺跡壺17に共通する要素が多い。また、山陰系の二重口縁壺・甕および鼓型器台は藤田憲司氏のいわれる(註22)、山陰・岡山北部IV期より、同V期により近いように見うけられる。

以上のことから、1・4・9・10・11号周溝墓出土土器群の古い様相を持つものは、神蔵古墳北西くびれ部出土土器群・大願寺方形周溝墓出土土器群とほぼ同時期かやや降るかも知れない頃のものであろうと思う。また、8・13号周溝墓出土の土器は池ノ上1～3号墳供献土器群とほぼ同時期であろう。よって、立野遺跡の周溝墓群は、布留式最古段階併行期(庄内最新段階の土器が混在する場合もある)から、やや降った頃までの比較的短い期間に構築されたものと考えられる。

最後に、13号周溝墓を切った11号周溝墓の出土土器が8号よりも古い様相を呈することは、土器の供献行為の実体とも関連し、周溝墓構築から埋葬行為の終焉までと、さらに、その後の「まつり」の存在をも推測させる資料である。このことはまた、各周溝墓出土土器群を一括資料として認定することへの危険性をも示唆し、埋葬主体が複数あって、埋葬時期が異なる場合は特に上記の危険性は強まる。しかし、本遺跡の場合、時期の異なる複数の埋葬施設を有する周溝墓の出土土器相互に型式差を認めることができなかつた。が、各周溝墓出土土器群を厳密な意味での一括資料とは考えていない。

筒形銅器 10号周溝墓の棺外副葬品として筒形銅器・小銅舌各1点が出土している(第46・47図—56・57頁)。ともに破損して原形を保たないが、筒形銅器は厚さが突帯部分で1mm強、透しを配した部分で0.6~0.7mmで、既応の出土例と比べて極めて薄いものである。本体の大部分を欠失し、二段透しか否か判断できないが、現在までの出土例のうち、やや異形の京都府妙見山古墳出土例(註23)を除いて、そのほとんどが二段透しであり、立野例も二段透しの可能性が強いと思う。破片資料のため原形を知り得ず、山田良三氏の形式分類(註24)にあてはめるのに困難であるが、中間有帯式ではなく第三類に含まれるか、と推定する。

用途については、共判出土品や出土状態を重視しなければならない。本例は、大刀・鎗身を伴っており、特にほぼ同一レベルで出土した鎗身茎尻との距離は155cmである。しかし、筒形銅器開口部は鎗身と反対の方向にあり、両者は木柄を介して装着された状態で副葬されたわけではない。また、小銅舌が筒形銅器から約110cm離れて出土し、両者が密接不可分なものならばこの事実は重要であり、鎗の茎に木質の銹着が認められないことも筒形銅器を石突的なものと想定した場合、鎗身・筒形銅器・小銅舌の三者が別個に出土した事実は、先述のように木柄からとりはずして副葬したことを裏づける。しかし、別の用途や、被葬者の生前の用い方が本

ま と め

来の用途（石突に限定するわけではない。）とは別個のものであった場合は、あるいは筒形銅器を所有することに意義があり、権威の裏づけとして用いたかも知れない。その場合、被葬者の出自（本貫地――在地の人間か否か）が問題となるが、今はそこまでたちいる余祐はない。いずれにせよ、筒形銅器の本来の用途は、山田氏の指摘のように石突的なものと考えられる。

まとめ 以上のことから立野遺跡の方形周溝墓の性格等について簡単にまとめてみよう。

- 1 東・西支群とも方形周溝墓の規模に3段階の差が認められた。東支群では大型の9号周溝墓の内部主体が遺存しないので不明だが、中型の11号周溝墓は多量の供献土器の他に鏡・鉈・刀子が副葬品として存在し、それにつぐ10号周溝墓は筒形銅器・鉄製武器を有している。このような状況は西支群ではみられず、東支群では周溝墓の規模の差と対応した副葬品の差が存した可能性がある。
- 2 周溝墓は極めて短期間のうちに構築され、その規模と構築場所はあらかじめ決められていたようである。さらに、内部主体が箱式石棺で統一されていることは、上記のことと相俟って、方形周溝墓の構築に際し、相当な規制の存在を推測させる。その規制の実体については、神蔵古墳や大願寺遺跡等を含めて検討しなければならない。今回は余裕がないのでその点には触れない。
- 3 内部主体の箱式石棺は弥生時代以来の伝統的なものであるが、非九州的な方形周溝墓という墓制と外来系土器の大量の導入は、その背後の政治・社会的状況や、人間集団の移動をも考慮しなければならない。立野遺跡の方形周溝墓群の短期間での成立は、本遺跡東方3.5kmの神蔵古墳の成立と極めて密接な関係にあるだろうと推測される。また、政治的には、立野遺跡の被葬者集団は神蔵古墳の下部系列に連なると考える。
- 4 東・西両支群の相互関係は、大型周溝墓が東支群に存在するが西支群にはないこと、副葬品の質・量とも東支群が西支群を圧倒していることから、東支群を形成した集団は西支群より優越していただろうと考えられる。

立野遺跡の内包する問題点については、まだ検討を要する問題点が山積している。たとえば、墓道ノ土器供献行為の実体、土器の産地と配列状況等の細かな分析、さらに、方形周溝墓成立の背景等多岐にわたるが、それは、今後、機会を見て考えることにしたい。（児玉）

(3) 飛鳥・奈良時代の土壙墓

立野遺跡A・D両地区において検出した、7世紀～8世紀の土壙墓群について、以下に若干のまとめを行う。

以下に述べることは、検出した土壙墓群の現象面が主であり、最も肝要であるはずの社会的

ま と め

背景・位置づけ等については一部の問題提起にとどまっている。この点については、宮原遺跡の集落（註25）の報告を終えた後に、再度考察を及ぼしたいと念じている。

I 土壙墓の営まれた全時期を通観して

(1) 総 数

土器等を出土したものについては別段問題としないが、それ以外で、特に不整な形状を呈するものは土壙墓であったか否かを再吟味する必要も残されている。また、プランが把握しなかつたけれども土器の出土をもって土壙墓ありとした箇所が幾つかある。これらを全て含めて、A地区で53基、D地区で12基、合計65基を本文中に説明した。発掘区内のこの数については、上記のことを斟酌すれば、本文中での把握と関係なく多少の増減はありうるものとしておかねばなるまい。

なお、A・D両地区の間の中間のC地区にて1基+ α （1984年度報告予定）、立野A地区の東方に存する宮原遺跡において10数基（平安時代に属する木棺墓を含む）を検出していることを付記する。

(2) 立地と群構成

A地区は標高22.4～23.6m、D地区は標高21.9～22.4mの所に土壙墓が営まれている。

A地区では中央の谷状の部分を通じて、大きく東西二群に分かれる。この両群内にて小群を設定することは、不可能ではないが恣意的になりすぎるきらいもあって、難しい。東西両群ともに、古墳時代周溝墓群と同様に更に南東方向へ拡がりを見せるものと思われる。

D地区においては、周溝墓群の間に大きくは一群として存するが、その中で四小群を見る。拡がりとしては西方および西北方へと伸びるであろう。

(3) 形 態

プラン 大半が隅角の円くなった平面プランを呈しており、各コーナーがほぼ直角になるような箱形の長方形プランは見ない。

長 さ 床面の主軸長は83～220cmの範囲にあり、50cm単位で区切れれば次のようになる。

200cm以上のもの	A地区 8基	D地区 4基
150～200cm	” 22基	” 5基
100～150cm	” 10基	” 3基
100cm以下のもの	” 6基	” 1基

床面主軸長が150cmを越すならば、およそ成人の伸展葬が可能とすると、それが全体の66%を占めている。そして逆に幼児用とされるべき小型のものが少ない。

床面の形状 一般的に床面は平坦面を有するはずであるが、そうでないものがまま存した。

ま と め

A地区の15・24～26・33号等は床面にピットがある。D地区4・6号は床面下に掘込みを持ち下部構造を呈することとなるが、その意味については不明である。

枕として小高く削り残したと思われるものは割合に多く存する。

主軸方位 一見してわかるように、分布状態と同様、主軸の方向もまちまちと言ってよい。ただ、全体から見れば北東―南西方向のいづこかに主軸を置くものが多いという傾向は伺い知れる。それは推定の頭位方向にも帰納できることである。また、時期的な変遷過程の中で主軸の方向に変化がよみとれるかということ、それも難しいと言わざるをえない。土器の出土していない土壙墓の時期を、主軸方位のあり方によって推定することも不可能である。

(4) 遺物の出土状態

副葬品あるいは供献品（内容物を主とする）として、土器・鉄器等を出土したものが、A地区で25基、D地区で5基を数えた。

まず、紡錘車がA地区5号土壙墓1基のみから出土した。これはほぼ床面上に存した。

鉄器は鍬と刀子しか見ない。鍬は5基（A地区7・9号を含める）、刀子が4基から出土している。これらは床面より僅かに浮いた状態で出土しており、遺体とともに棺内にあったものと見られる。鍬はもとより、刀子もあるいは武器としても使用可能であるが、それらが被葬者の体に刺さっていたものか副葬されていたものか、出土状態でもってしては判じえなかった。

土器については、床面に正立の状態、つまり遺体の傍らに整然と置かれていたそのままに出土したものは見ない。大半が床面より浮いて倒位や傾いた状態であり、床面に接するが如きであっても正立ではない。これらは埋葬された遺体の上か、または土壙上の蓋の上に置かれていて落下したものと考えられるが、それを厳然と区別することは難しい（註26）。ただ、出土状態から見るに、土器そのものを副葬していたとするよりは、器たる土器に恐らくは食物を入れて供献した結果としての現象と把握するのが妥当のように思われる。坏か碗のうち蓋のみの出土例はなく（蓋の個体数が多い例はあるとしても）、必ず身が伴っている。つまり、葬送儀礼上の観念では、土器そのものよりも盛られた内容物に意味があったと思われるのである。しかし、そうではあっても器と内容物とは一体であり、これらの土器を被葬者の生前の銘々器（註27）であったとすることもよしとされはしまいか（註28）。

II 土壙墓の時期

A・D両地区の総数65基は単一の時期に営まれたものではなく、7世紀初頭頃～8世紀中頃という時期幅をもっている。その時期を知りうるのは土器を出土した土壙墓のみなのであるが、他の多くもほぼこの期間内のいづこかに属するとみてよい。土器を有する土壙墓は、その土器により大幅5つの小期に分けられる。

ま と め

- I. 7世紀初頭——A地区5号
- II. 7世紀中葉——A地区11・25・46号
- III. 7世紀後半～末——A地区21・23・27・48・49号, D地区6号
- IV. 8世紀初頭～前半——A地区4・6・15・18・22・26・44・50・51・52・53号,
D地区4・5・7号
- V. 8世紀中葉——A地区19号, D地区9号

上記の土器の年代観は従来の土器編年に拠っており、小田富士雄氏編年(註29)のIV～VII期、田崎博之氏が試みられた干潟I～IV期(註30)、森田勉氏が呈示されている大宰府A～C期(註31)の中におさまるものである。その中で、小田氏のVI～VII期、干潟II～III期、大宰府A～B・1期、つまり7世紀後半～8世紀前半が当遺跡では最も多くを占めている。時あたかも、大宰府成立期(I期)以降にあたる。

III 集落との関係および問題点

立野A・D地区の周辺には集落が広がっており、立野B・C・E地区、宮原A～D地区が調査されている。これらは殆んど7～8世紀代の竪穴住居跡、掘立柱建物であり、その総数は軽く300を越すものと思われる。

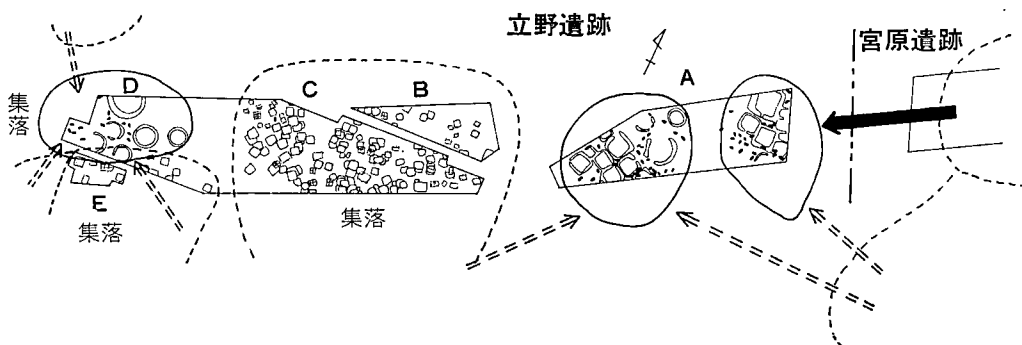
立野B・E地区とD地区の集落部分は既に報告(註32)されており、6世紀後半～7世紀初頭を中心とする集落である。同C地区は整理途中であるが、同様に6世紀後半～7世紀初頭を前後する時期の集落で、その中に8世紀代の土壙墓1基+αが存した。弥生終末期の遺構も、多くはないが検出されている。ここは遺構の重複が著しい。

宮原A～D地区は調査は終了しているものの未整理の段階なので詳しく述べられないが、7～8世紀を中心とする時期の集落であり、かなりの数の住居跡・建物が存する。遺構の重複はきわめて著しいものがある。遺物として注目すべきものに墨書土器・円面硯・青銅製帯金具等がある。この宮原A～D地区の集落の一部は、今次報告の立野A・D地区土壙墓群と時期的に併存するところがある。しかし、相互の関係を詳しく把えるには、宮原遺跡の遺構・遺物が未整理であることと、加えて立野・宮原両遺跡の路線外への拡がりをも今一步明確にしえない点から、不確定要素が多すぎると言わねばならない。あえて現時点での見通しを模式化するならば、第126図の如くに想定しておきたい。

ところで、土壙墓に埋葬された人々は生前にどのような階層にあったのだろうか。土壙墓の被葬者相互にも階層差があったのだろうか。

この点については、先の模式図に示したように、土壙墓営造者たちが宮原遺跡の住人であったとすると、この宮原集落を明確に位置づける必要がある。律令制下で大宰府の管轄下にあったであろう宮原集落が単なる農村の一集落であったのかどうか。そしてその集落内での家族形

ま と め



第126図 立野・宮原遺跡の集落と基地の関係想定図

態は如何様であったか、墨書土器、円面硯等の知識階級の存在を彷彿させる遺物がある点をどう捉えるか。等々の問題に一定の解答を得たうえでないと、立野遺跡の土壙墓群の位置づけは難しい。

さらには、群集墳としての後期古墳には往々にして7～8世紀代までの追葬が見られるが、それと当遺跡にみるような土壙墓への埋葬とはどのような背景の相異があるのか。遺跡の立地の問題だけでは済まされないものを含んでいるように思える。

また、仏教思想の広まりとともに8世紀以降に火葬墓が増してくるが、当遺跡ではそれを見ない。そして続く平安期までも土壙墓(木棺墓)を営んでいる。甘木市池の上・古寺両遺跡(註33)では8世紀中頃には火葬墓が営まれているが、それは被葬者階層の違いに帰結されるのだろうか。

以上の問題と、更にはこれらから派生する問題が多々あらうと思われる。大宰府近辺のこの種の問題はすでに中間研志氏がその考えを披瀝されており(註34)啓発される点が多かった。しかし、甘木・朝倉地方においては大宰府近辺とはやや異なったあり方も出てこようかと考える。そうした点も含めて、後日に期すこととしたい。(伊崎)

註

- 1 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—2— 1983
- 2 福岡県教育委員会『二大・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』—II— 1982
- 3 石川和男「土壙群についての考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 1973
- 4 註3と今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 1973
- 5 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』—第7集— 1978
- 6 福岡県教育委員会『干潟遺跡』—I—1980 土壙墓と報告されているか形態など類似しているので取り上げた。また同遺跡を1980年に福岡県教育庁が調査した時も、この種の土壙が整然と配列していると調査担当者の伊崎俊秋氏より御教示頂いた。
- 7 註1と同じ。
- 8 岡山県文化財保護協会『二宮遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28) —1978—
- 9 今村啓爾(陥穴(おとし穴))『縄文文化の研究』2 雄山閣 —1983—
- 10 註5と同じ。

ま と め

- 11 現在、福岡県教育委員会により調査中である。
- 12 青木遺跡調査団『青木遺跡発掘調査報告』Ⅱ —1977—
- 13 註12と同じ。
- 14 基山町遺跡発掘調査団『干塔山遺跡』 —1978—
- 15 佐賀県教育委員会『大門西遺跡』（九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告1）—1980—
- 16 福岡県教育庁管理部文化課主任技師小池史哲氏より御教示頂いた。
- 17 箱式石棺への竪穴式石室構築上の手法の導入は、D地区の箱式石棺から更に進んだ段階では、側壁天場に板石を小口積みした竪穴式石室を生みだす。この石棺系竪穴式石室と呼ばれるものは、立野遺跡では検出していないが、横断道関係の土取場である柿原古墳群では多数検出されている。
- 18 甘木教育委員会『神蔵古墳』1978
本墳北西くびれ部出土の土器について、調査担当者の木下修氏は、墳丘盛土前の供献土器として報告している。これに対し、柳田康雄氏は上記の土器群が盛土下の旧表土中に含まれ、墳丘下に同一型式の土師器を出土する竪穴住居跡群が存在することから、木下氏の見解に疑問を呈している（『甘木市史』上巻 291 頁）。筆者には判断がつかかねるので調査担当者の見解を尊重し、出土状況から神蔵古墳は、北西くびれ部出土の土器群の示す時期をさかのぼらない、と考えておく。
- 19 甘木市教育委員会『甘木市史』1982、1984
- 20 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—1— 1982。
- 21 甘木市教育委員会『池ノ上墳墓群』1979
- 22 藤田憲司「山陰『鍬尾式』の再検討とその併行関係」考古学雑誌64—4 1979
- 23 京都府教育委員会『京都府文化財調査報告』第21冊 1965
- 24 山田良三「筒形銅器——附筒形銅器集成」古代学研究 55、1969
- 25 本文中にも触れるが、今回報告の立野遺跡の東方に広がる集落主体の遺跡であり、7～8世紀代の遺構、遺物が主体をなしている。
- 26 小郡市干潟遺跡の10世紀中頃に比定されている円形周溝墓の主体部では、木蓋の陥没した痕跡と思われる炭化物混りの層を境に棺内・棺外の土器が分けられている。しかし、棺内とされる土器でも床面に密着したものは少ない。この場合、棺内としているものは遺体の上に置かれていたものであろうか。
福岡県教育委員会『干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書 第59集 1980
- 27 佐原 真「食器における共用器・銘々器・属人器」『文化財論叢』同朋舎 1983
（奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集）
- 28 多くの土器が出土した場合に、会葬者の飲食に使用したものとすることも当然考えられる。
中間研志「大宰府の奥津城」（『九州歴史資料館開館十周年記念、大宰府古文化論叢』吉川弘文館 1983
- 29 小田富士雄編『立山山窯跡群』八女市教育委員会 1972
同 上 『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 30 田崎博之「干潟遺跡出土土器の編年」註26文献所収。
- 31 森田 勉「大宰府の出土品③——土器・陶磁器」（『仏教芸術』146号）1983
- 32 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(2)』1983
- 33 甘木市教育委員会『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告 第5集 1979
同 上 『古寺墳墓群Ⅱ』同上 第15集 1983
- 34 註28文献

圖

版



立野・宮原遺跡周辺航空写真（1961年撮影，国土地理院撮影KU-61-1，約1/10,000）



立野・宮原遺跡周辺航空写真（1981年撮影，国土地理院撮影KU-81-1，約1/10,000）



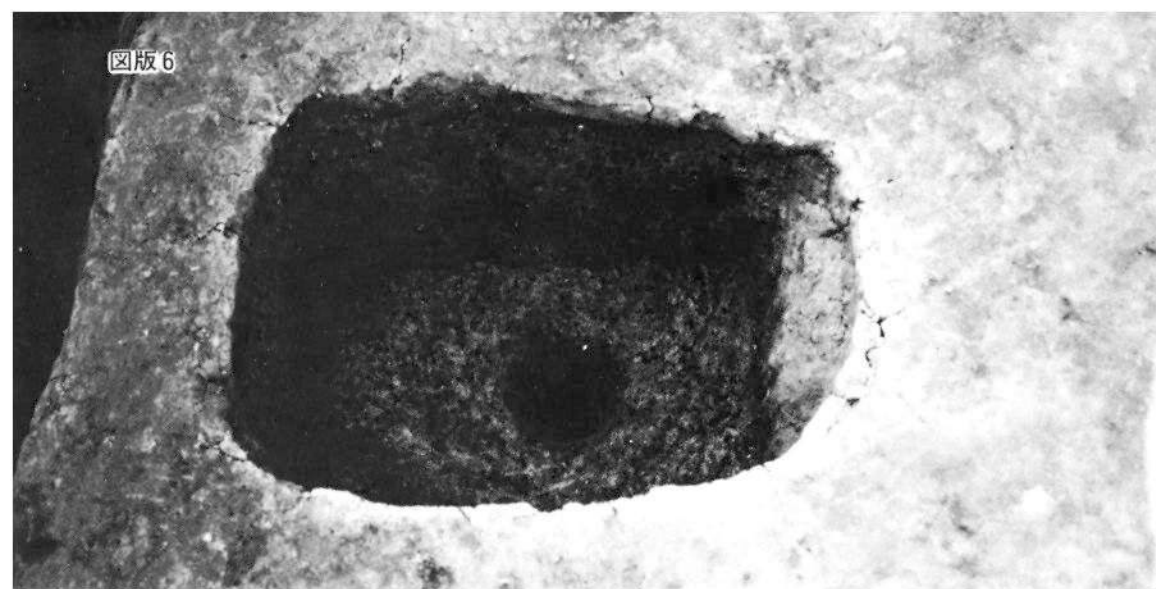
立野・宮原遺跡周辺空中写真（南西から）



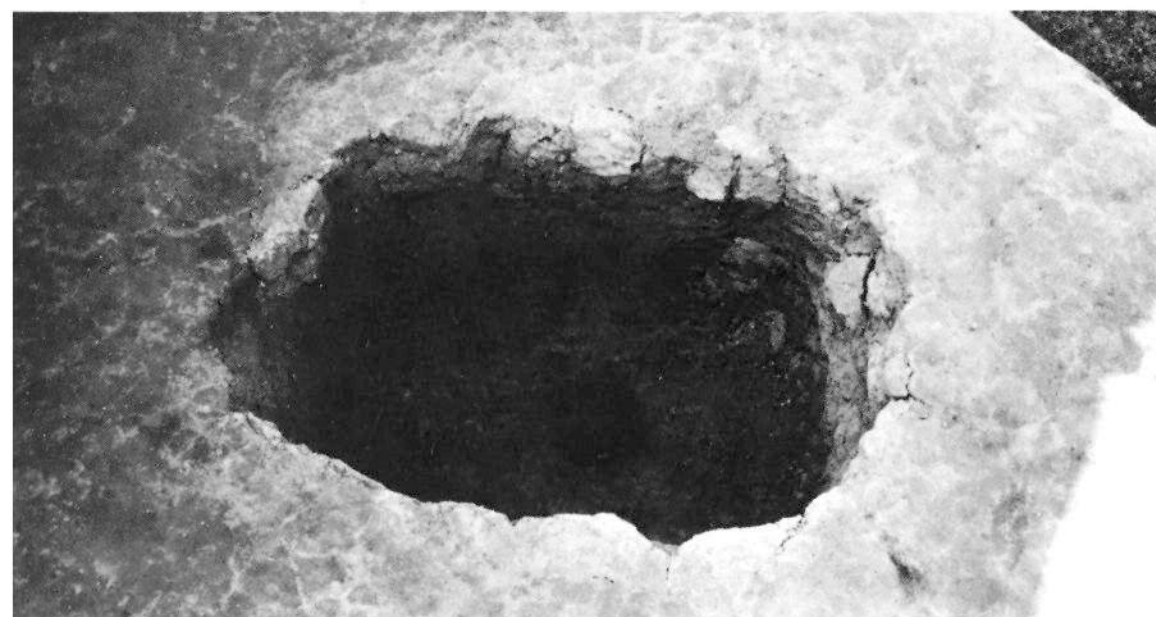
立野遺跡 A 地区全景（北上空から）



立野遺跡A地区全景 (西上空から)



2号土坑



3号土坑



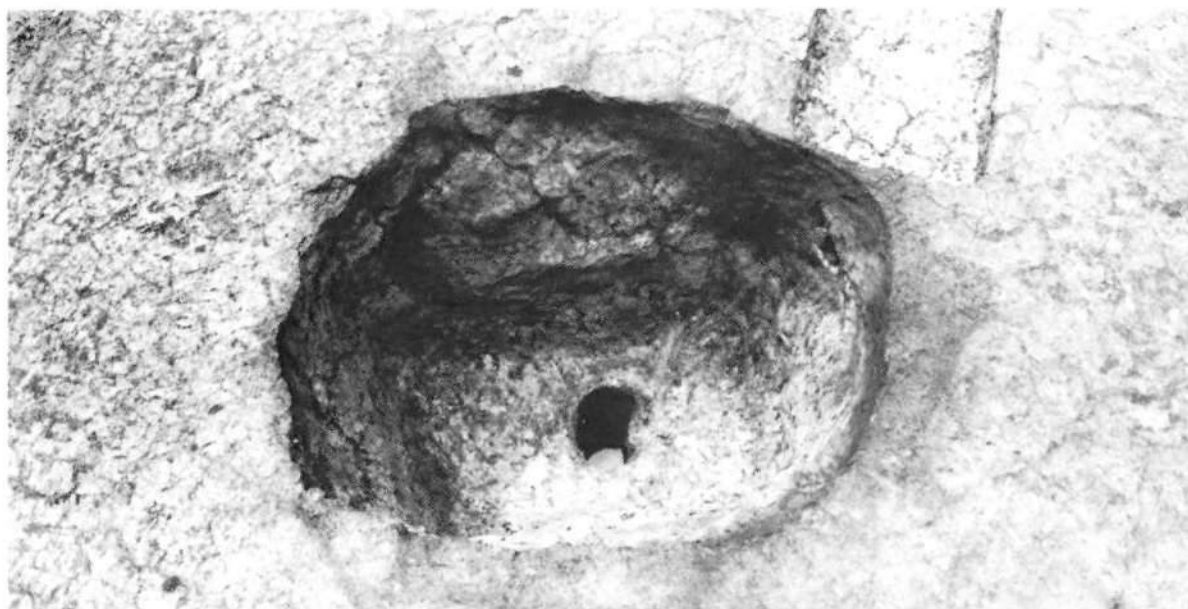
9号土坑



10号土墼



12号土墼



14号土墼



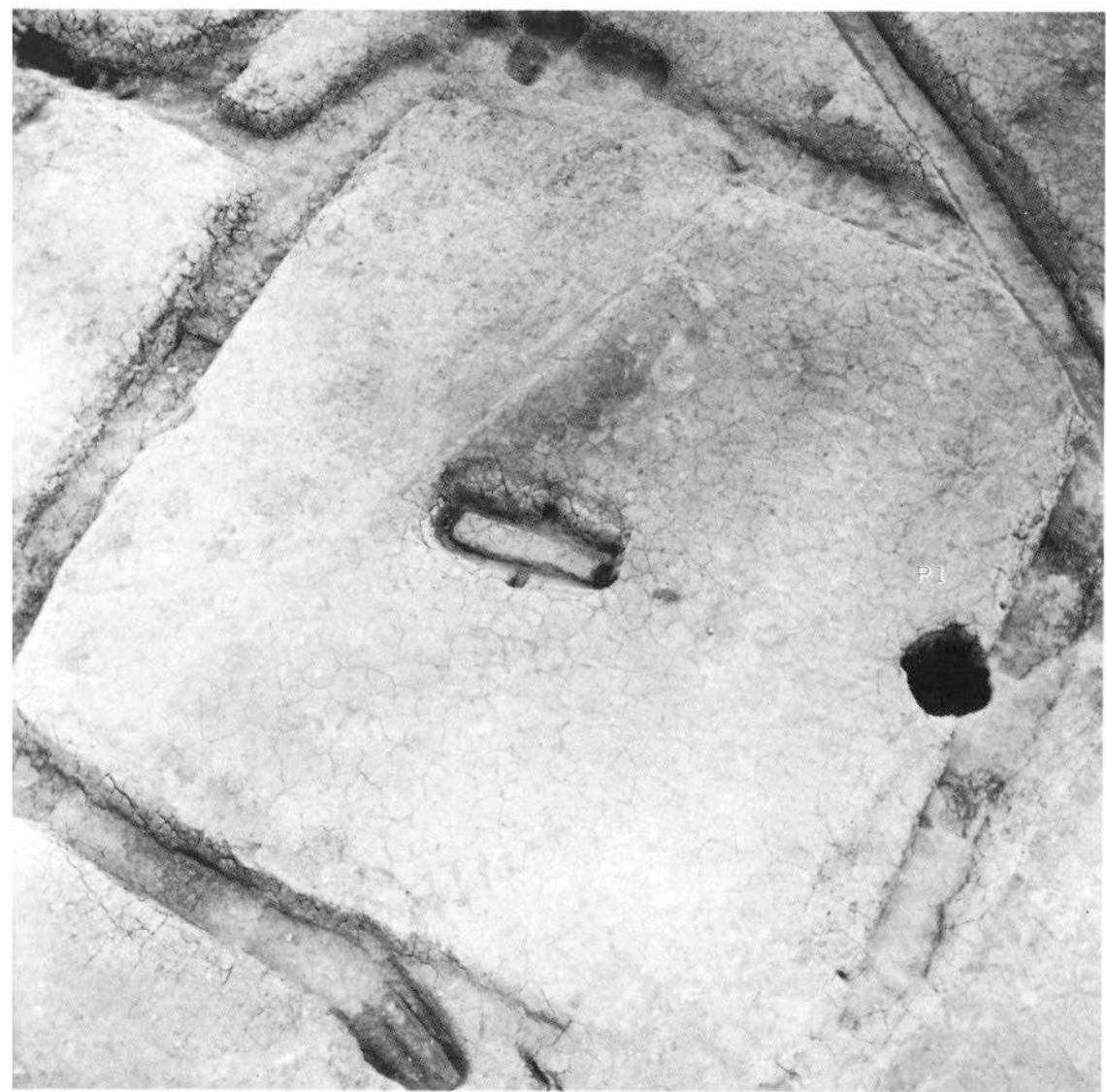
上 西支群全景 下 西支群方形周溝墓の配列（数字は遺構番号を示す）



円墳群の配列



東支群全景（数字は遺構番号を示す）



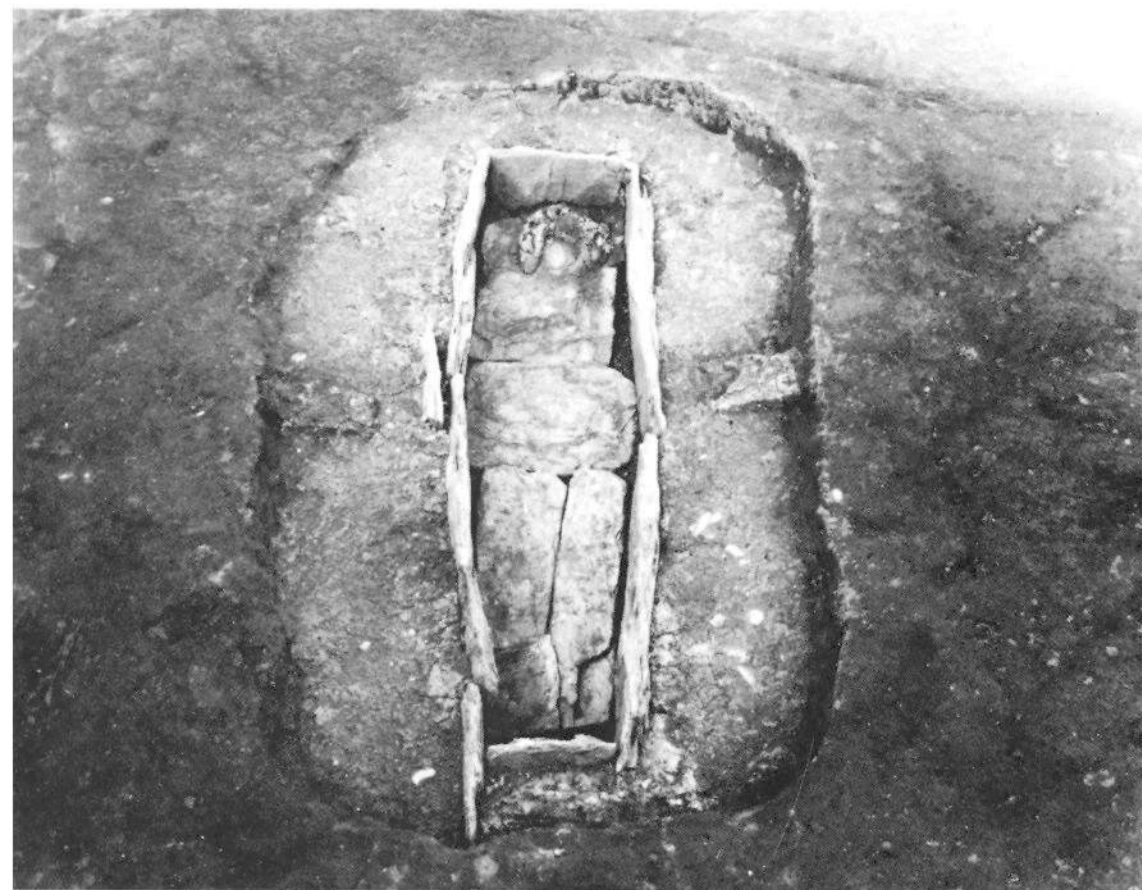
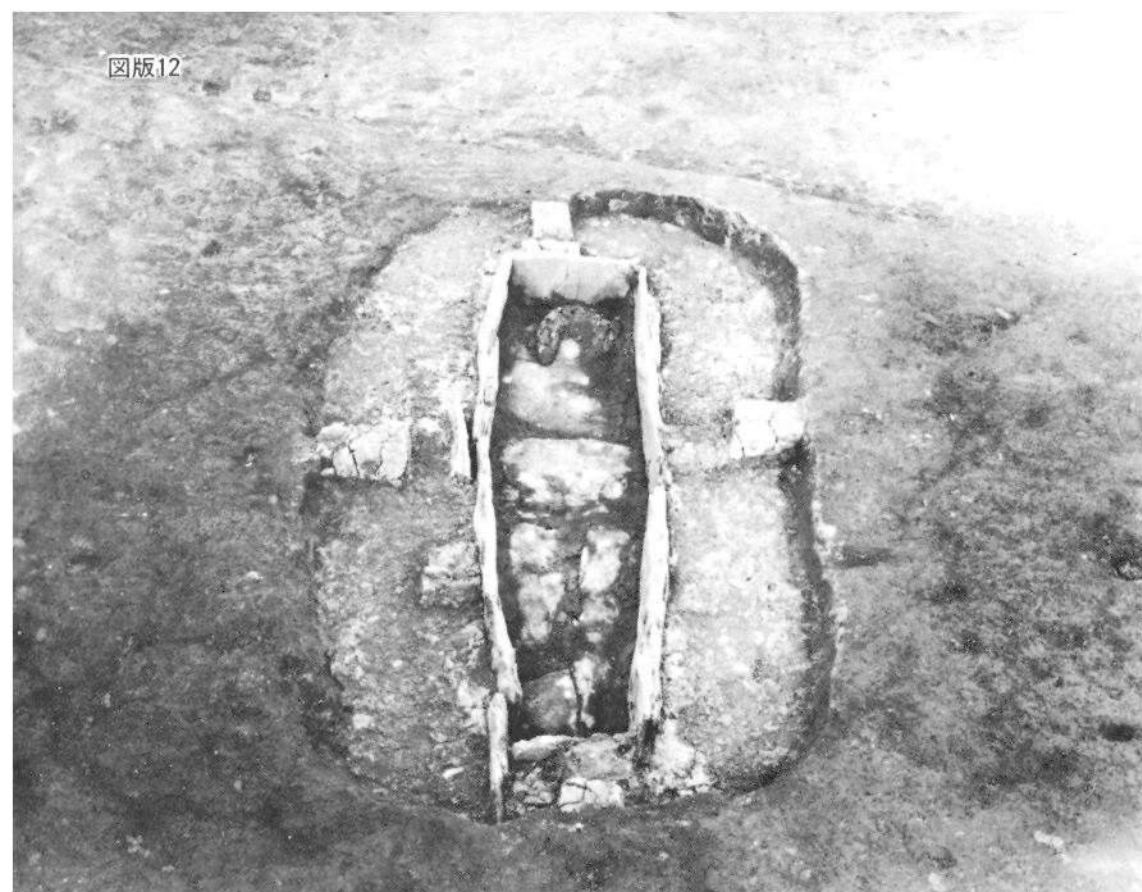
上 1号方形周溝墓全景

下 同台状部空中写真



上 1号方形周沟墓内部主体

下 同粘土枕



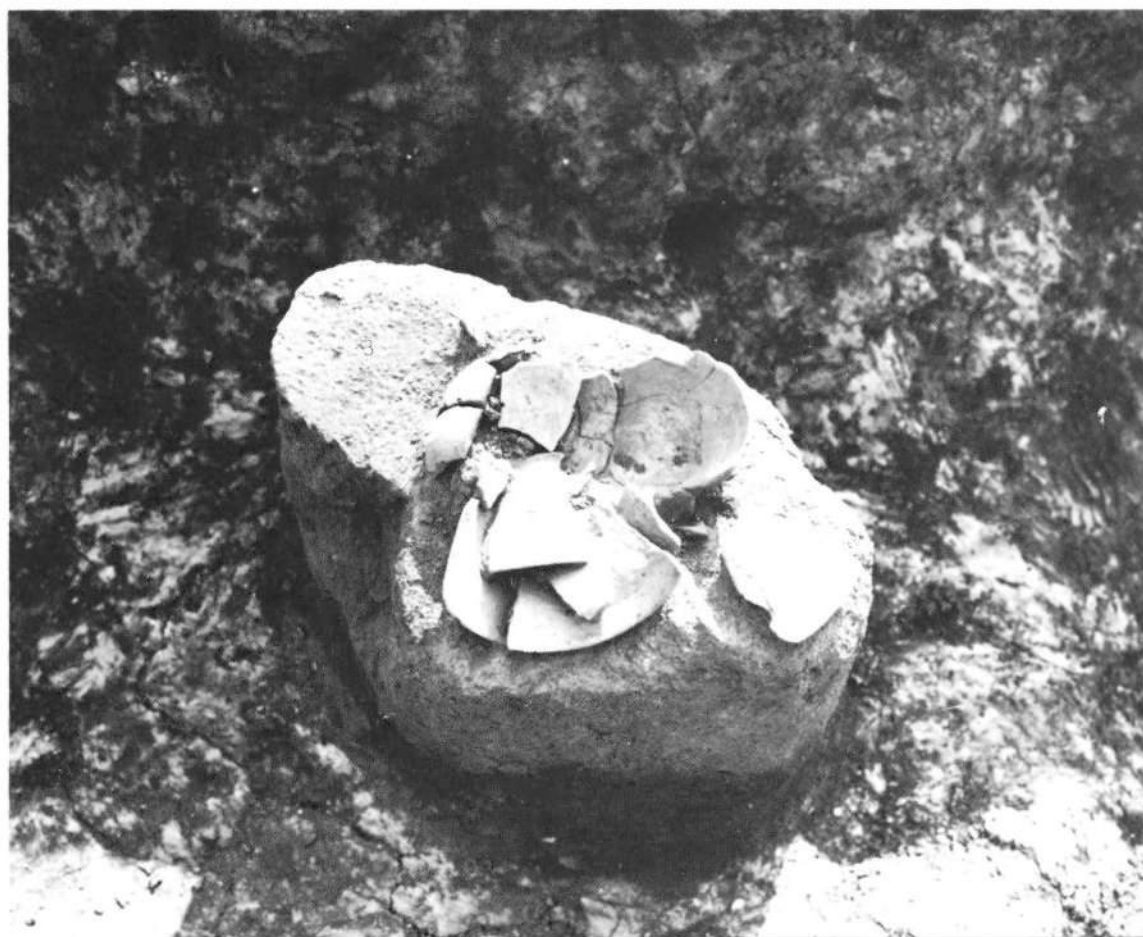
上 1号方形周溝墓開棺後全景

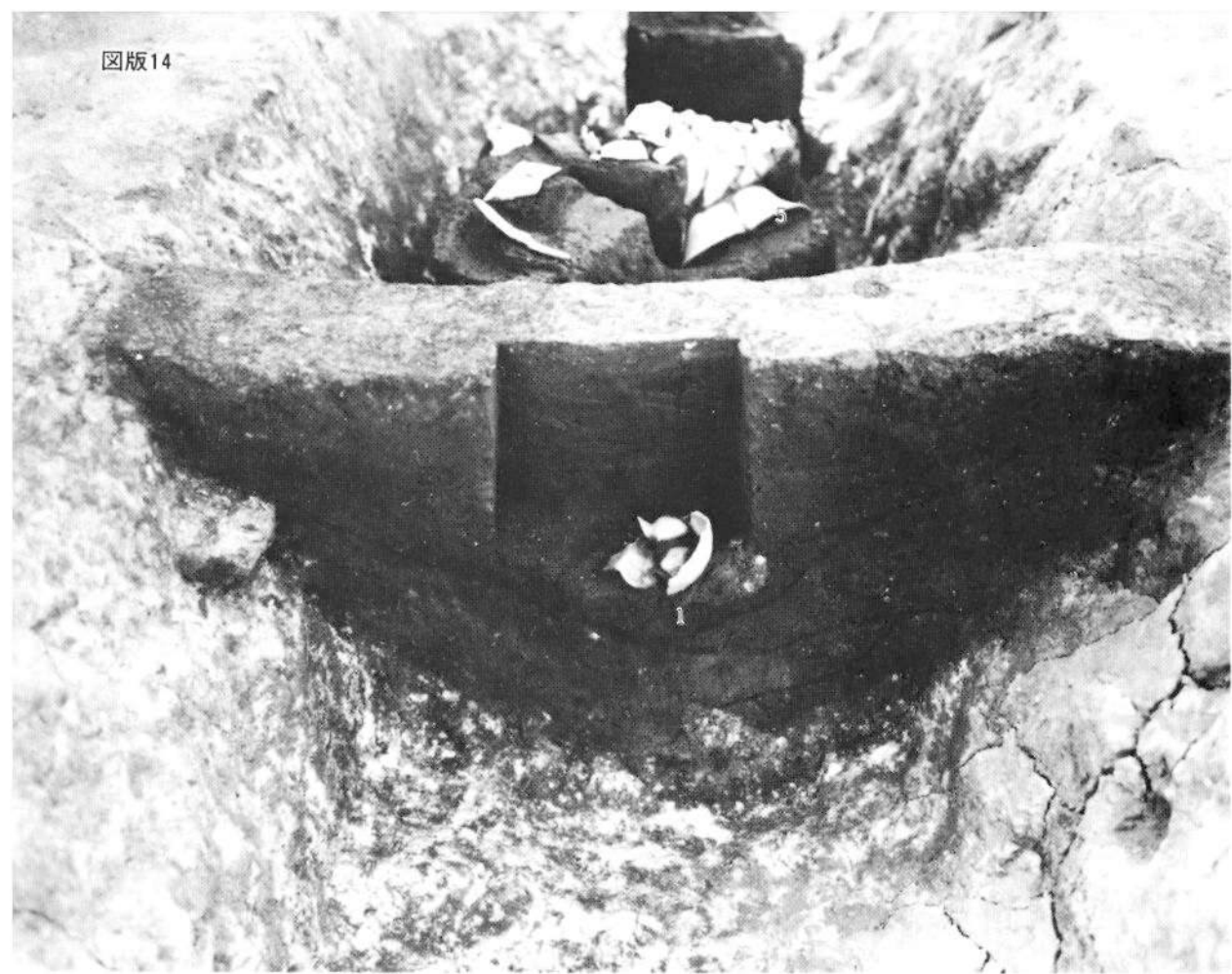
下 同棺底粘土除去後の床石の状況



上 1号方形周溝墓北周溝の土器出土状態

下 同北周溝土器出土状態





北周溝



西周溝

1号方形周溝墓土器出土状态と土层断面



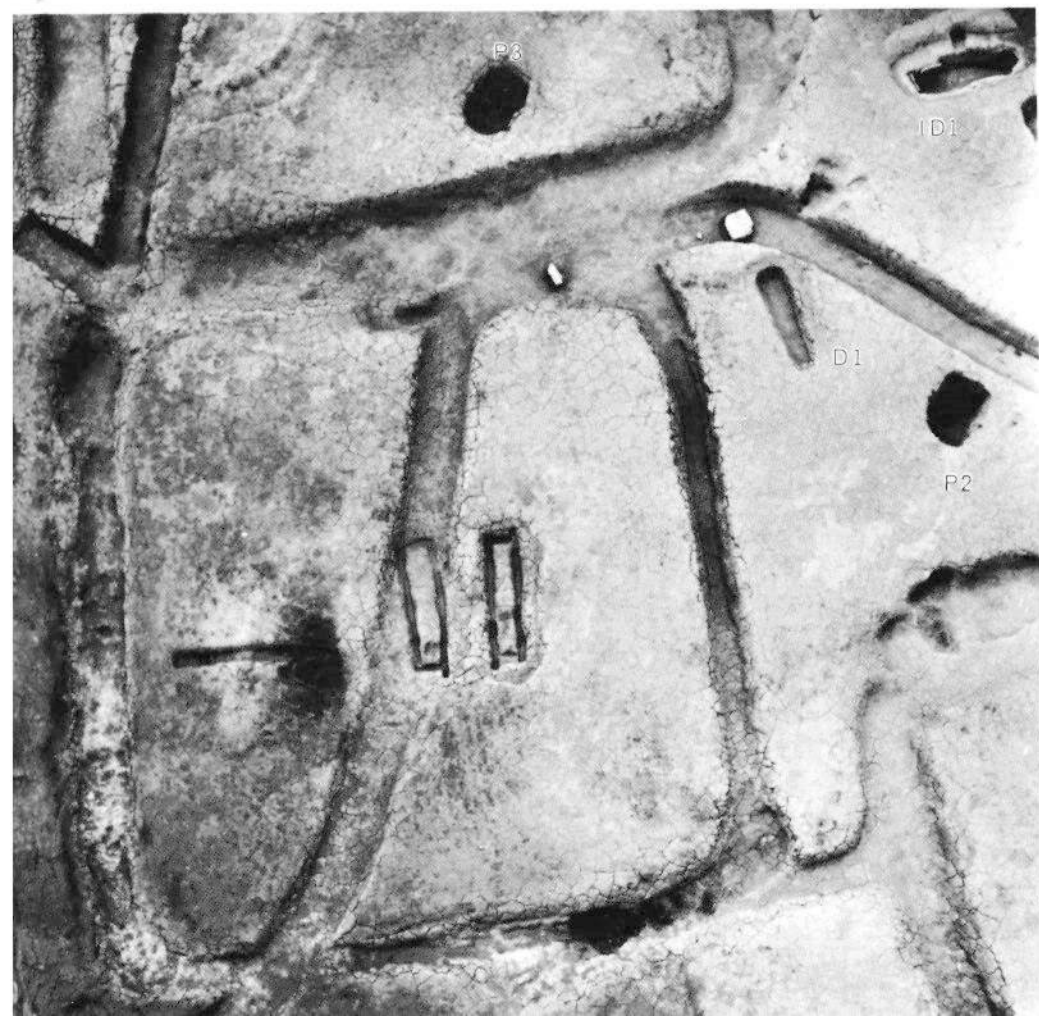
2号方形周溝墓内部主体



同開棺後全景



同粘土枕



上·下
3号方形周溝墓全景



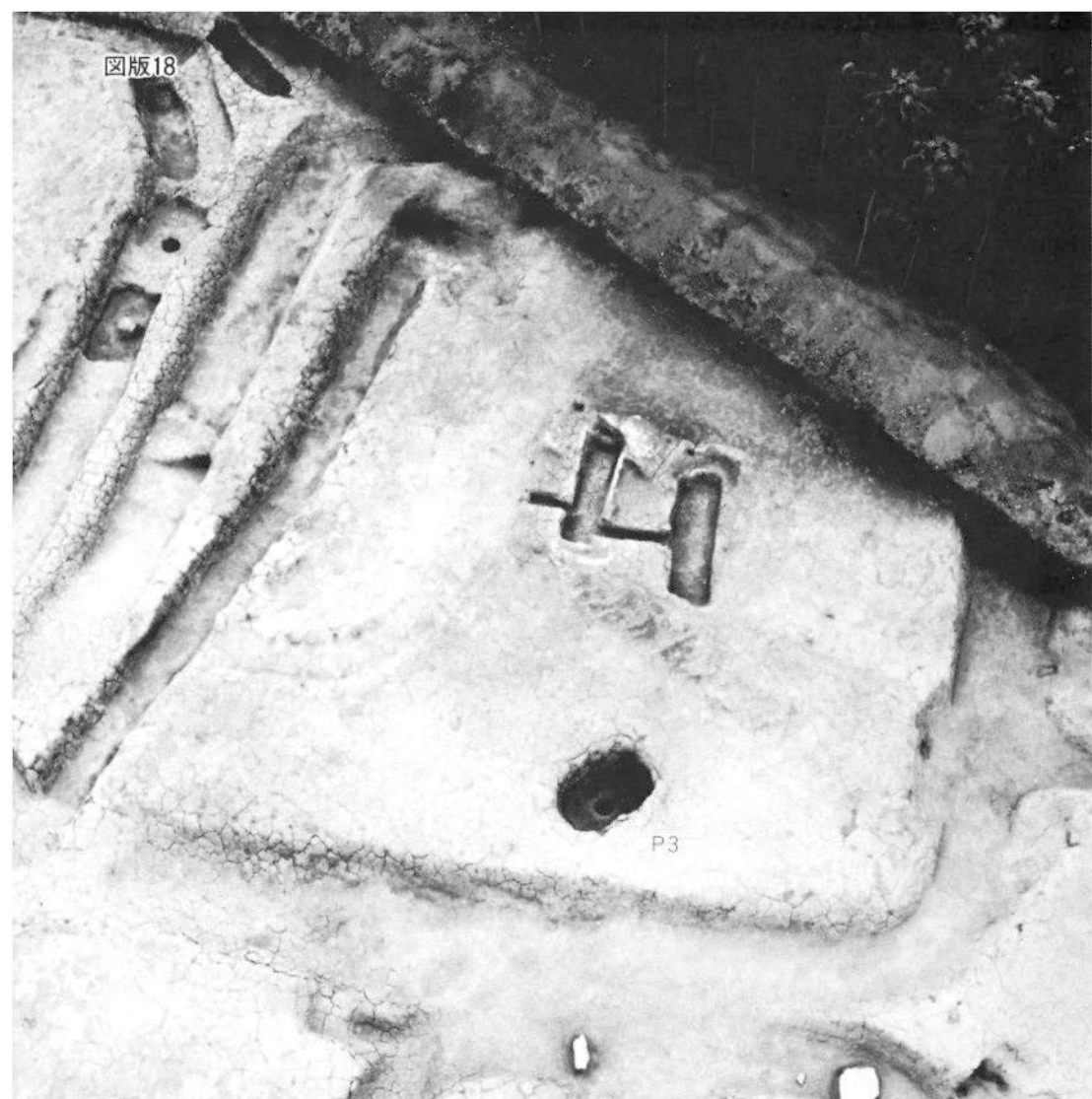
東周溝



北周溝



西周溝



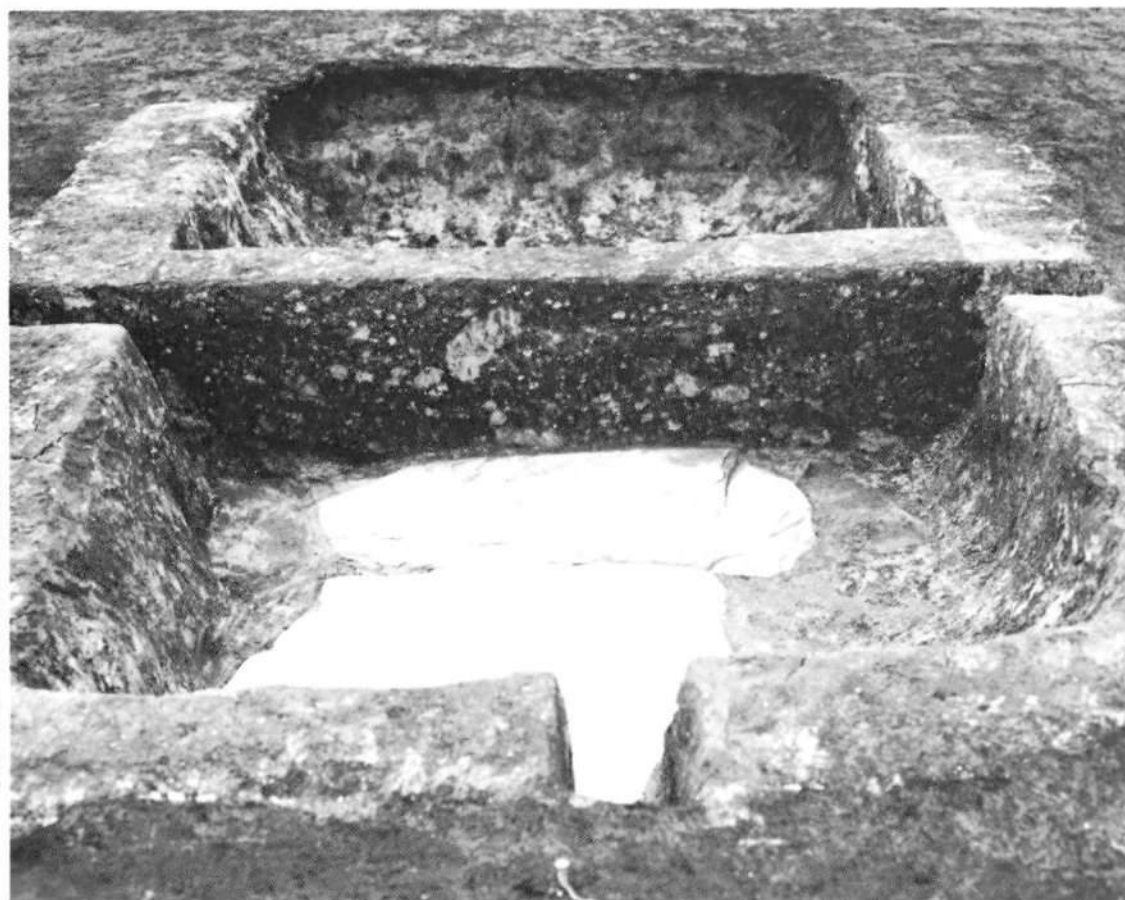
4号方形周沟墓全景



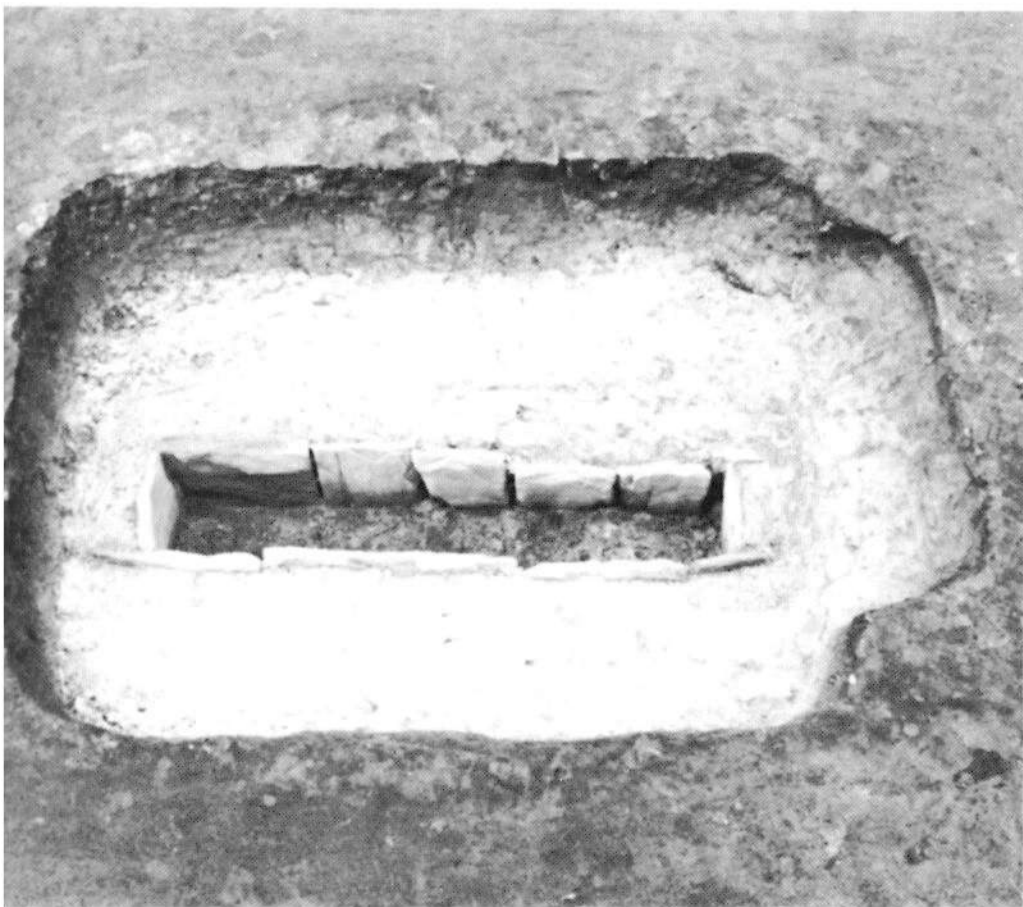
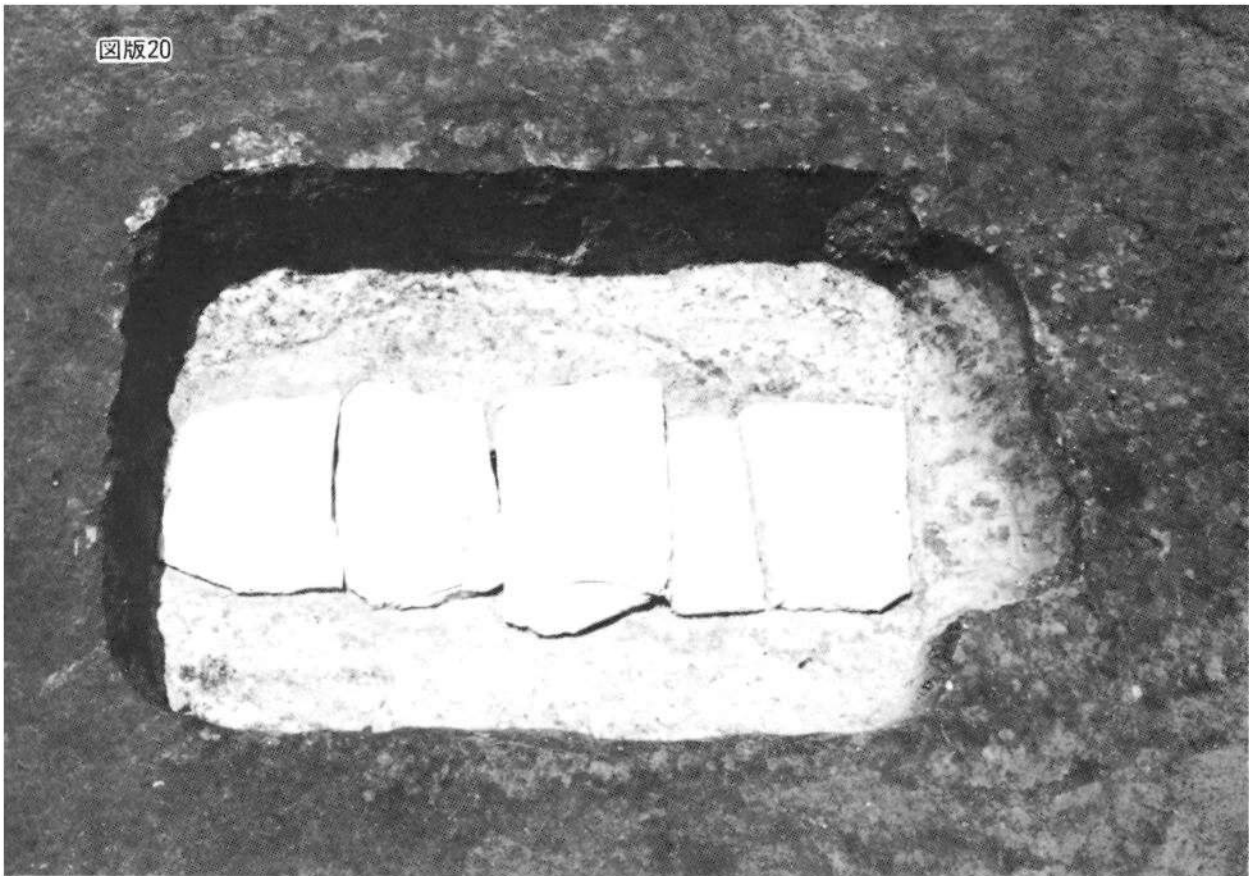
5号方形周沟墓土器出土状态



6号方形周溝墓全景



内部主体と土壇の切り合い状況

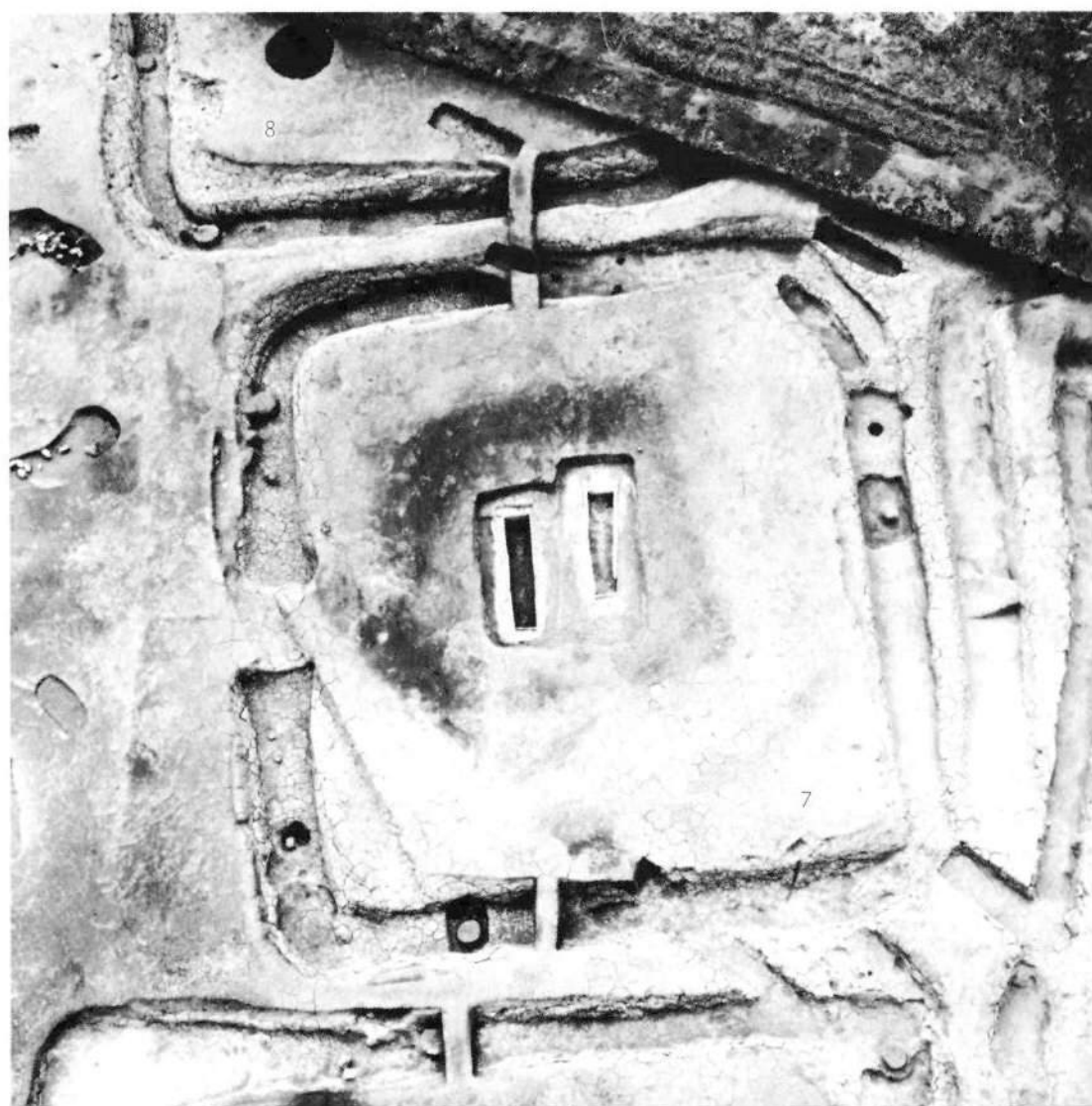


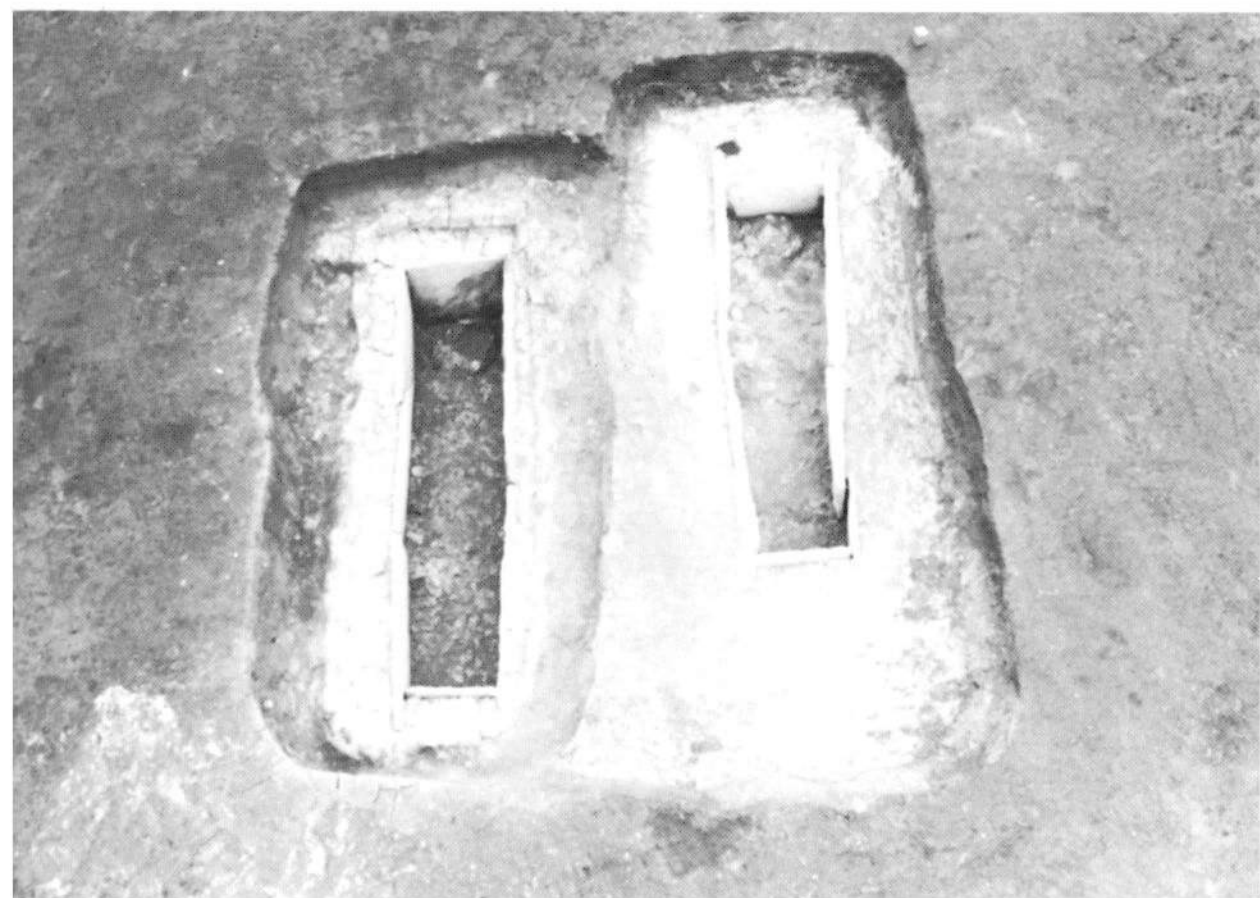
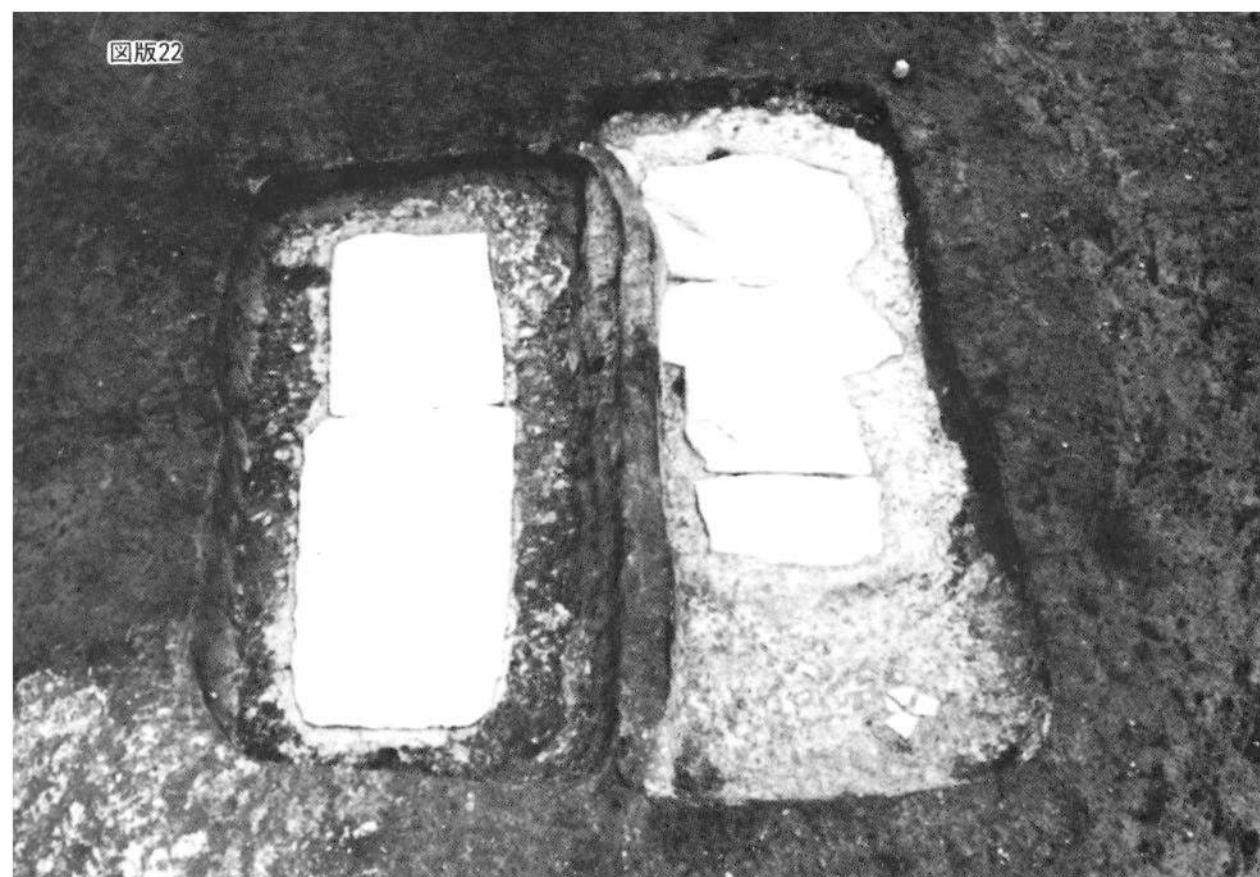
上 6号方形周溝墓内部主体全景 下 同開棺後全景

6号方形周溝墓北隅の土器出土状態



7・8号方形周溝墓全景

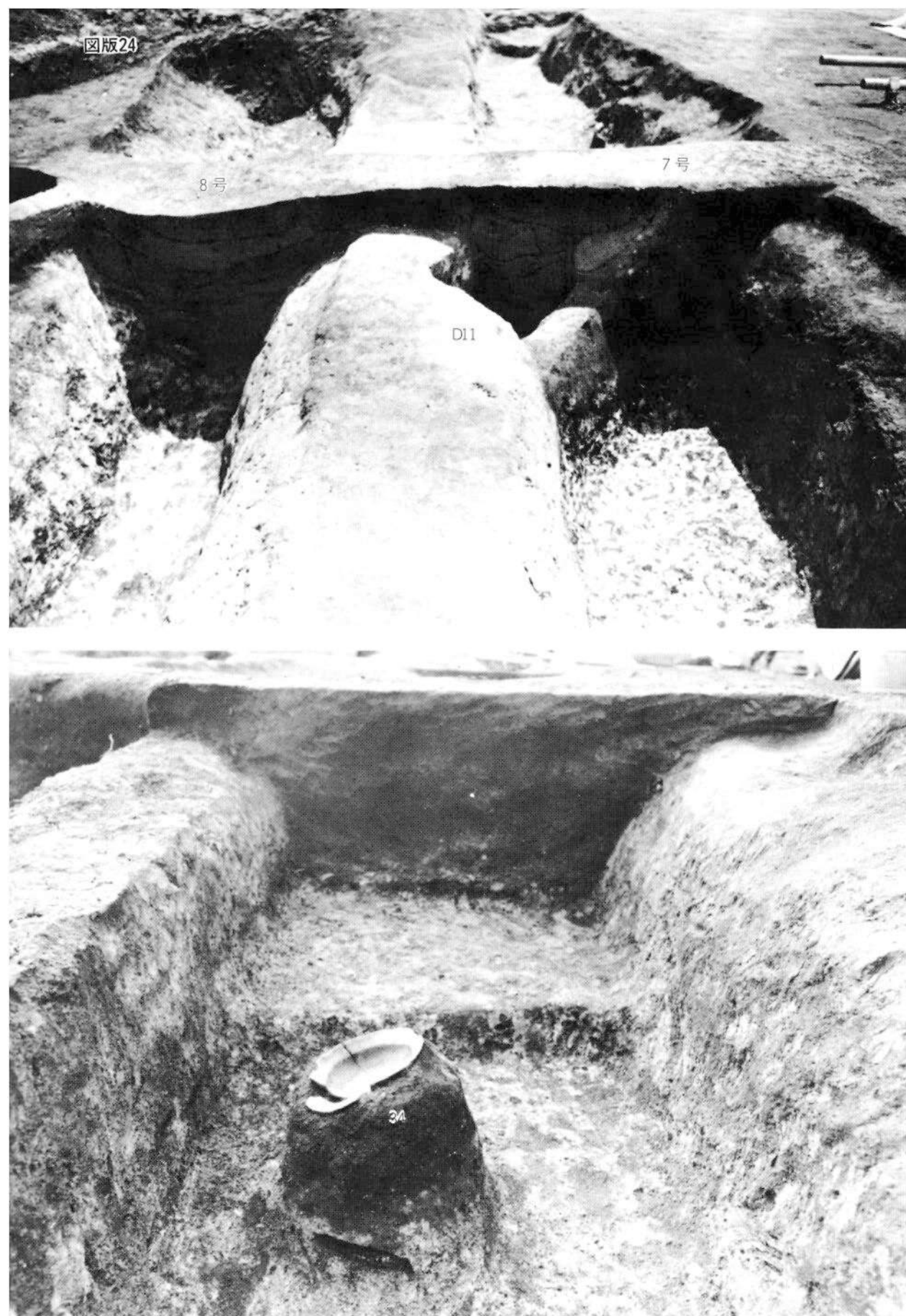




上 7号方形周溝墓内部主体全景（右が第1主体、左が第2主体体） 下 同開棺後全景



7号方形周溝墓第2主体の粘土枕と棺材の加工痕

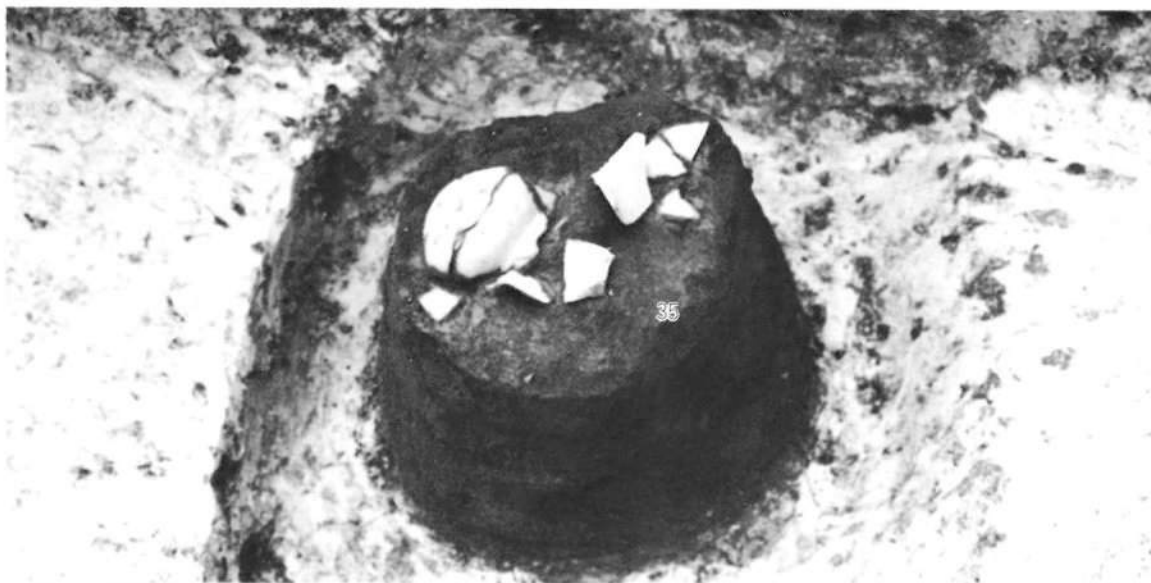


上 7・8号方形周溝墓の周溝土層断面 下 7号方形周溝墓土器出土状態

7号方形周溝墓北溝土器出土状态



同東溝土器出土状态



同北隅鉄器出土状态



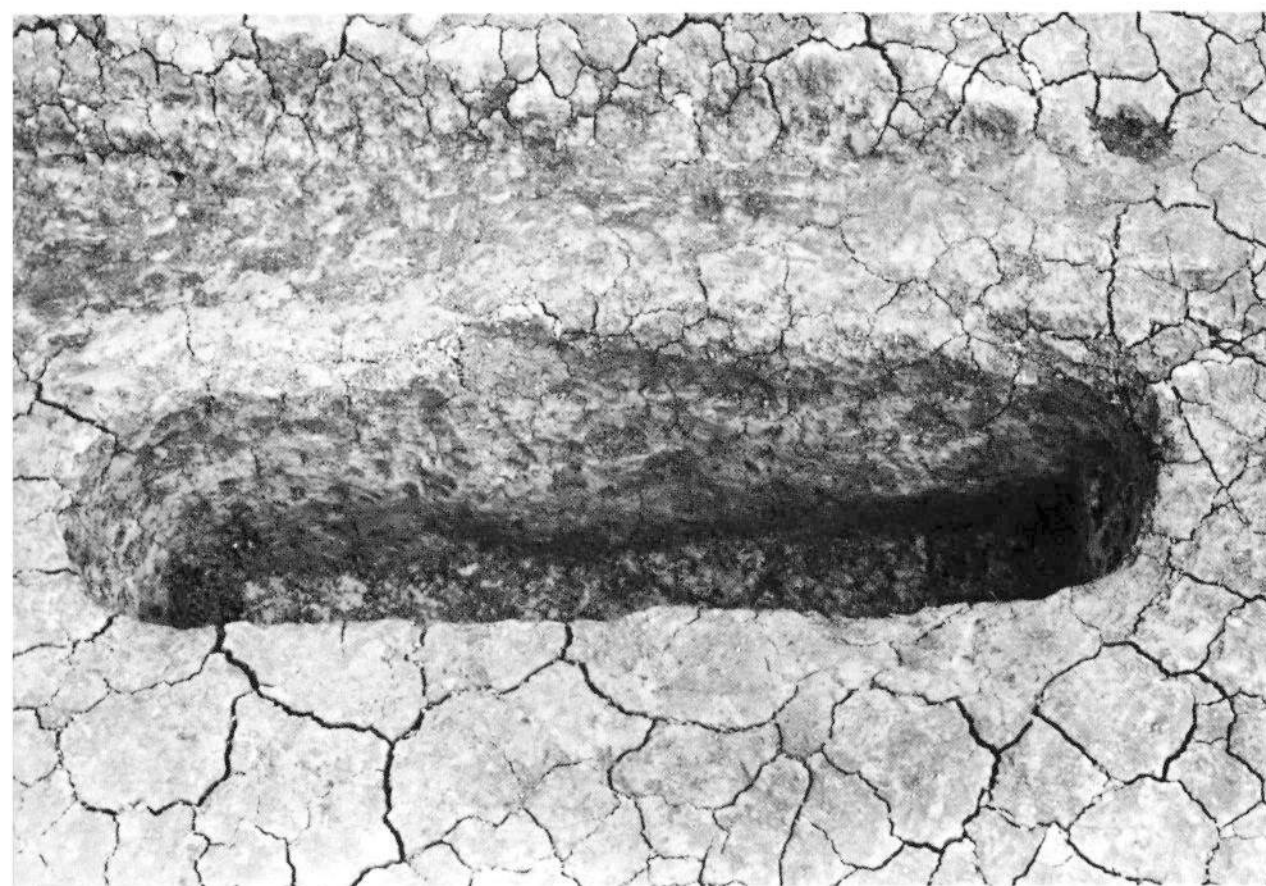


上 8号方形周溝墓北隅土器出土状態

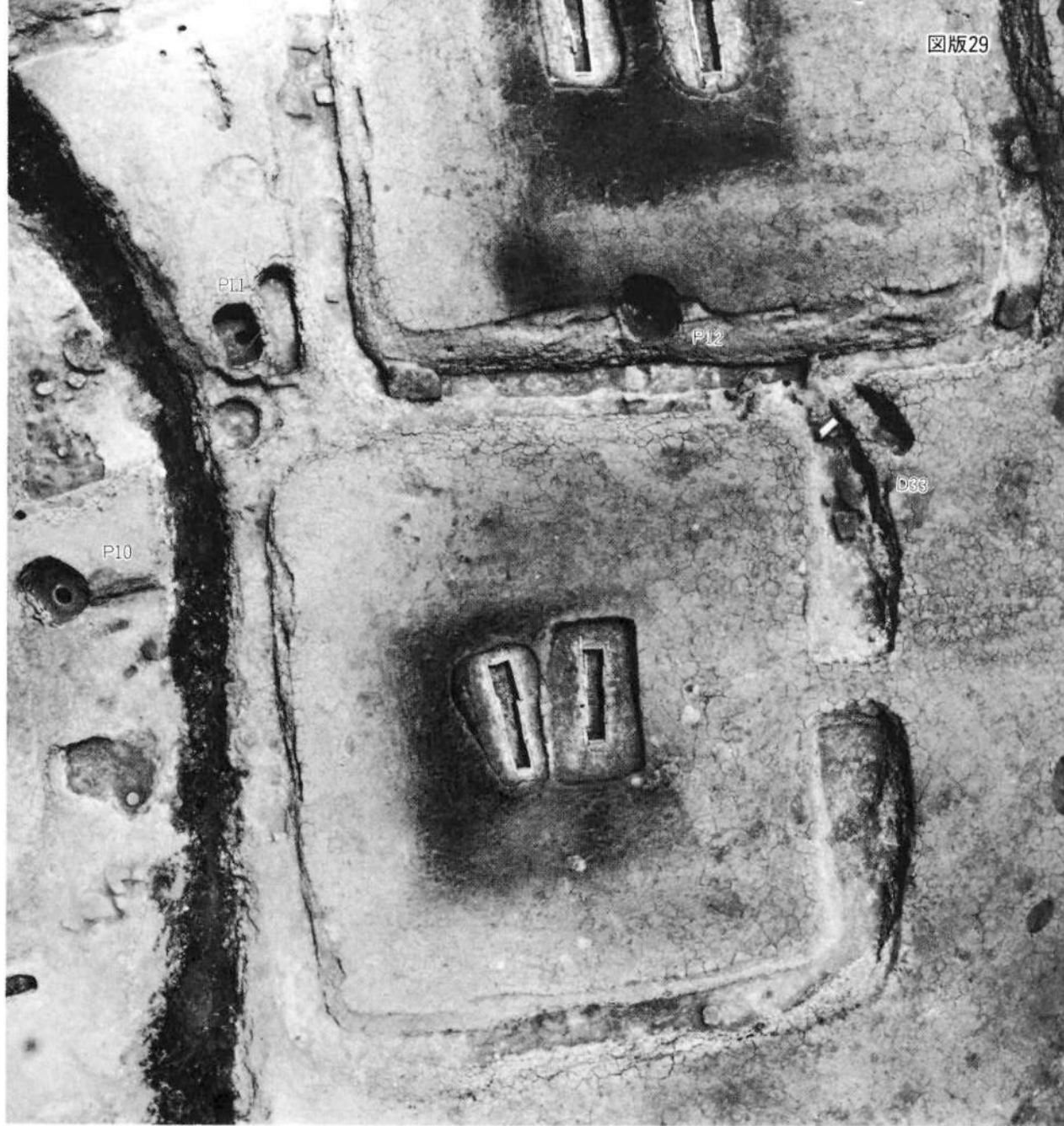
下 同北周溝の土器出土状態



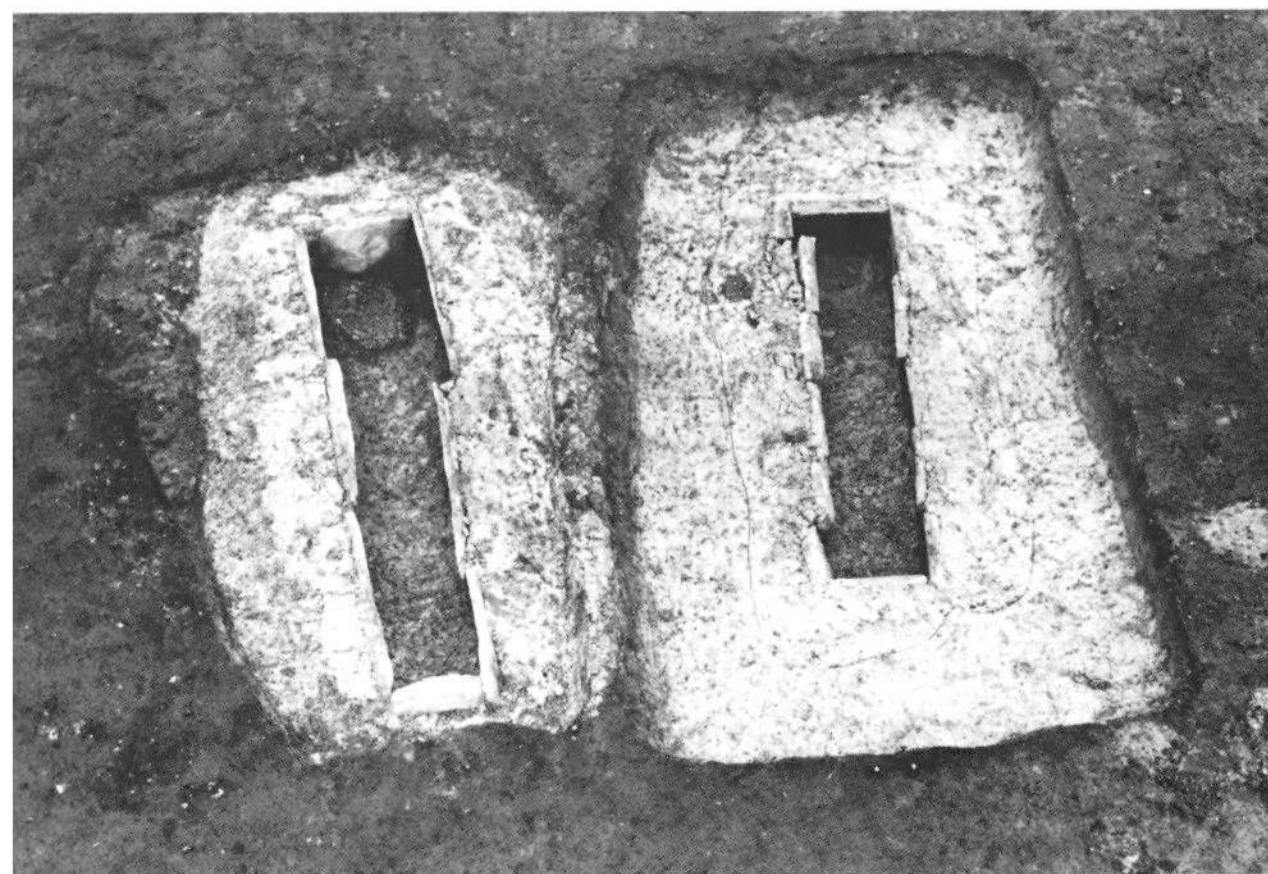
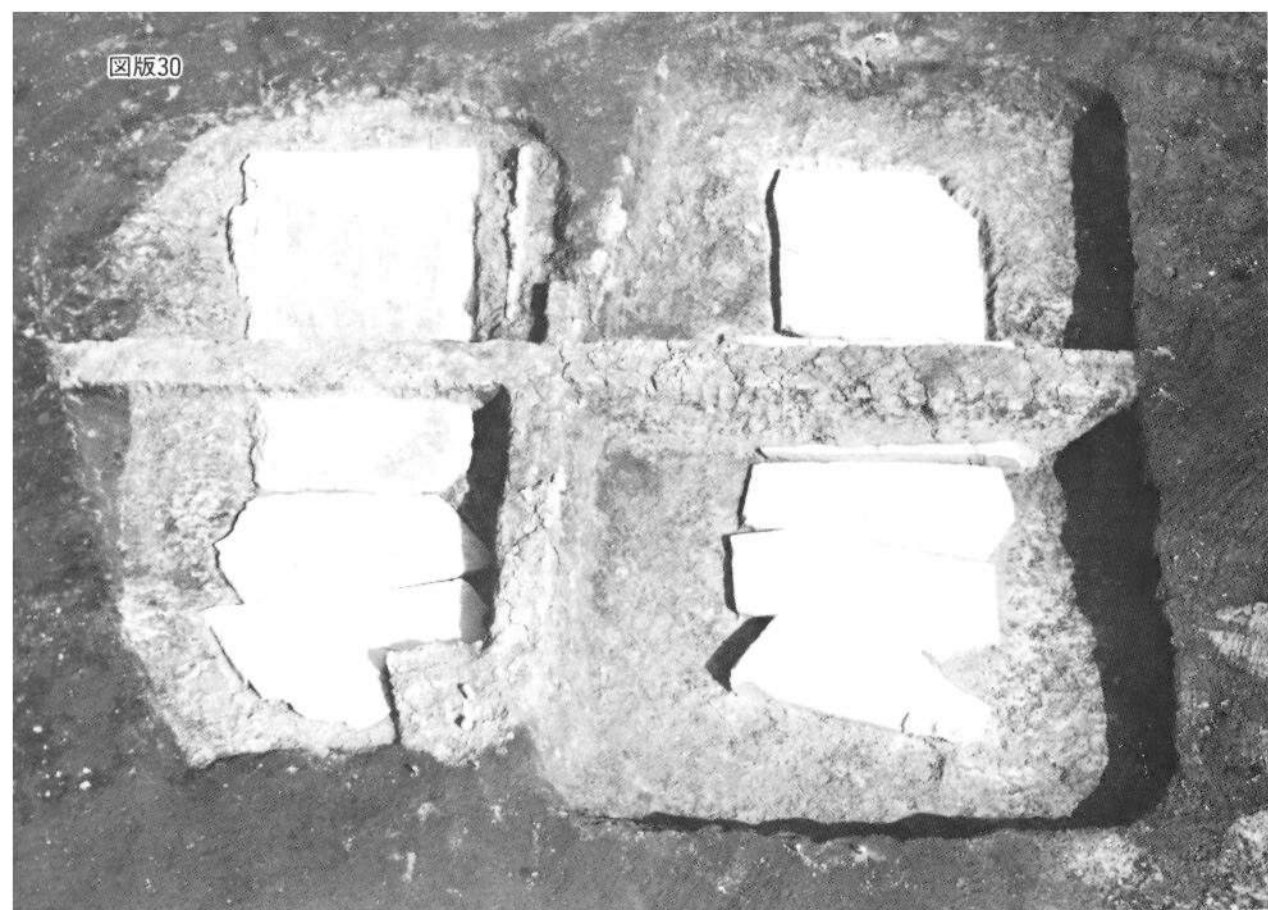
9号方形周溝墓全景（東から）



上 9号方形周溝墓西南隅の土器出土状態 下 同西周溝底の随葬墓（土壙墓1.）



10号周溝周溝墓全景（西から）



上 10号方形周溝墓内部主体全景（左-第1主体、西から）

下 同開棺後全景（西から）



第1主体



第2主体

10号方形周溝墓内部主体の粘土枕



上 1号方形周溝墓北周溝土層断面と土器出土状態

下 同西周溝の土器出土状態

53



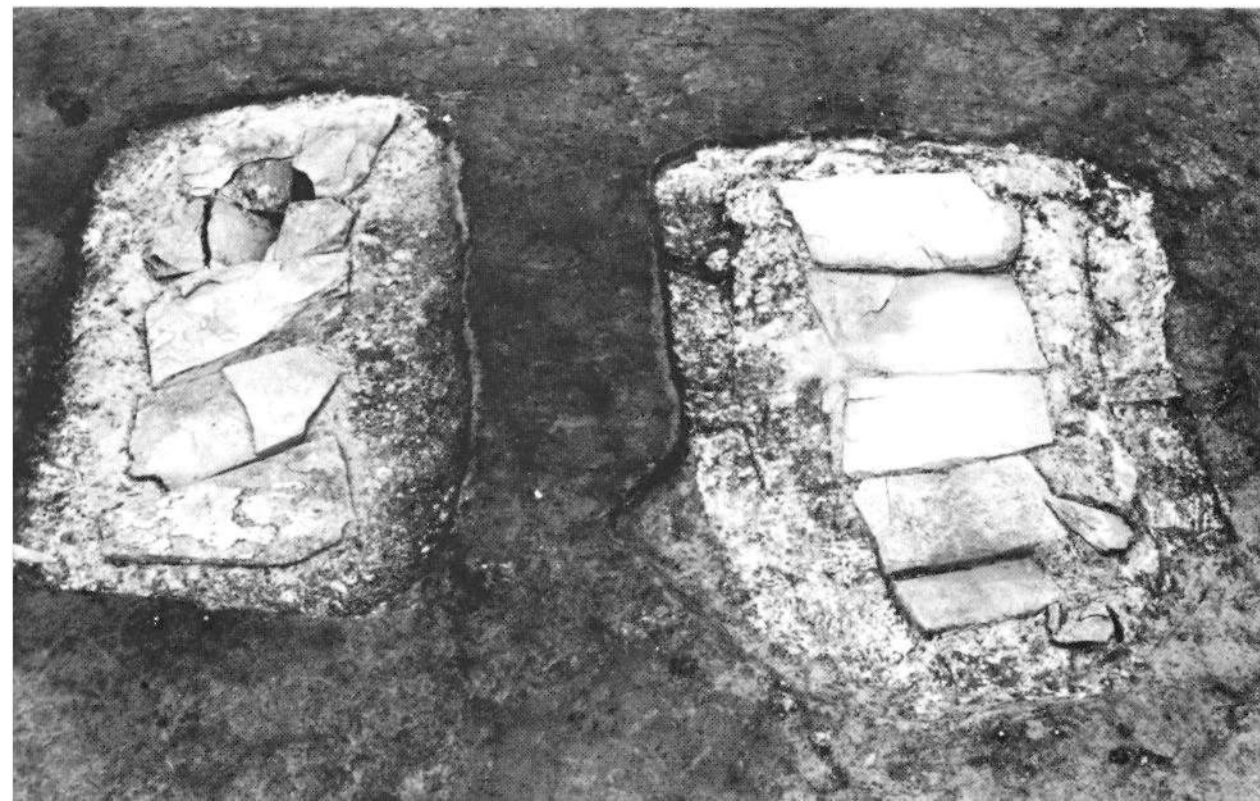
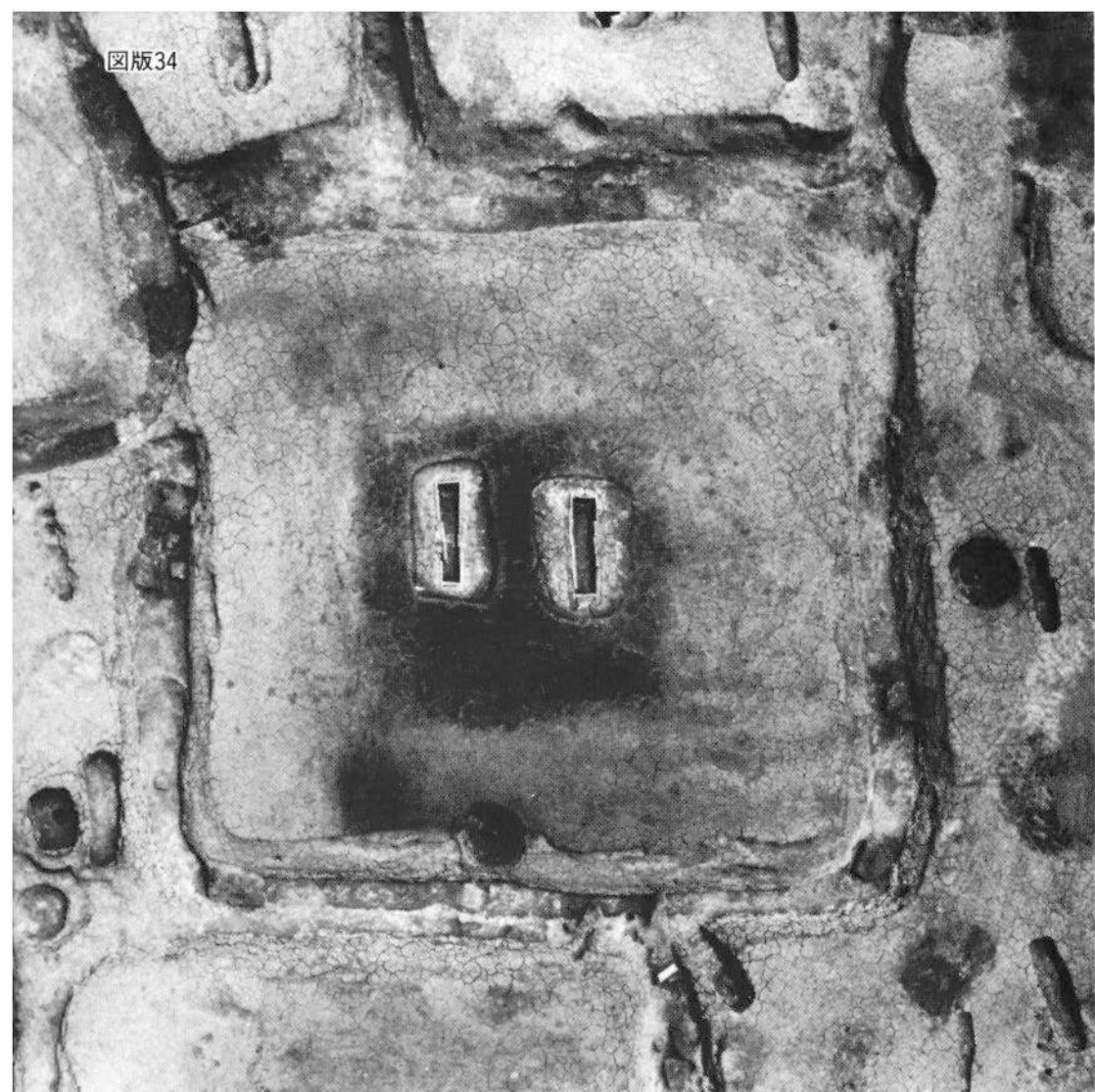
西周溝



南周溝

10号方形周溝墓土器出土状态

上 11号方形周溝墓全景
下 同内部主体全景(右—第1主体)





11号方形固溝墓内部主体开棺後全景 (右—第1主体 左—第2主体)



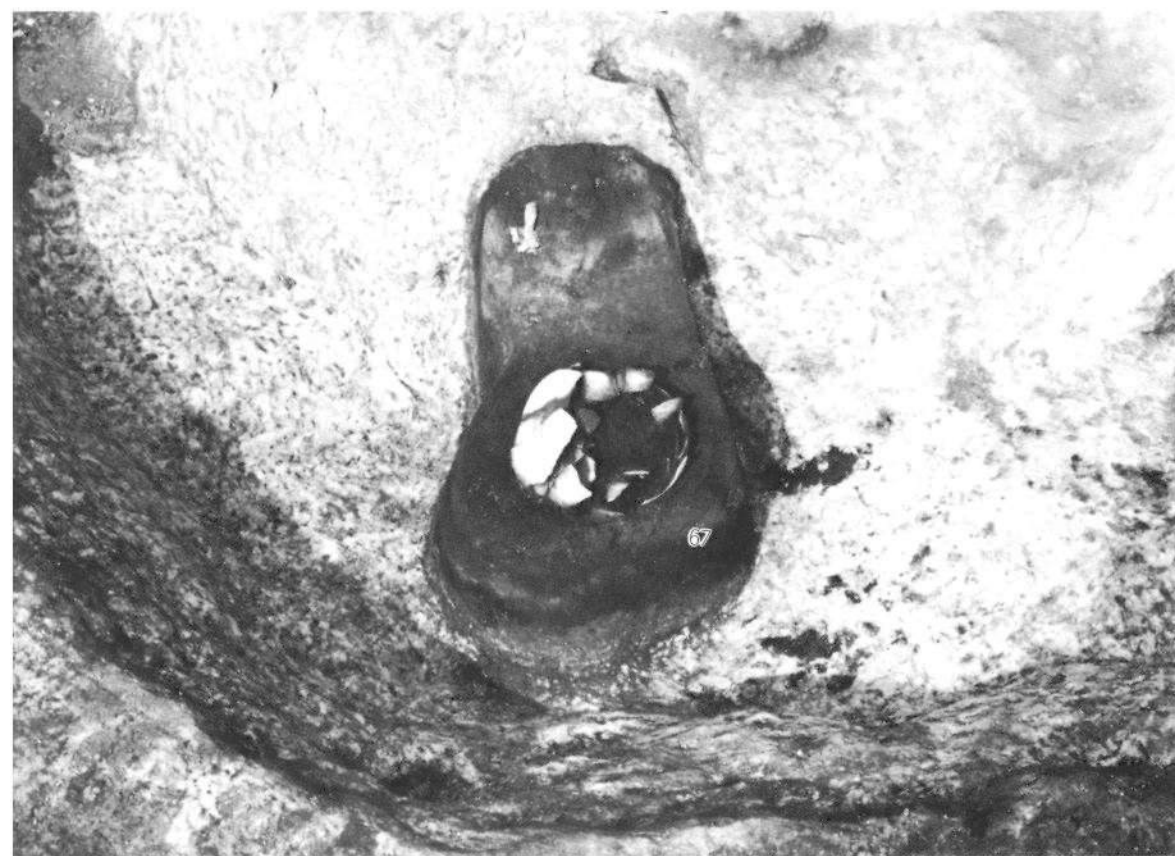
11号方形周溝墓北周溝の土器出土状態（東から）



11号方形周溝墓西周溝の土器出土状態



東周溝

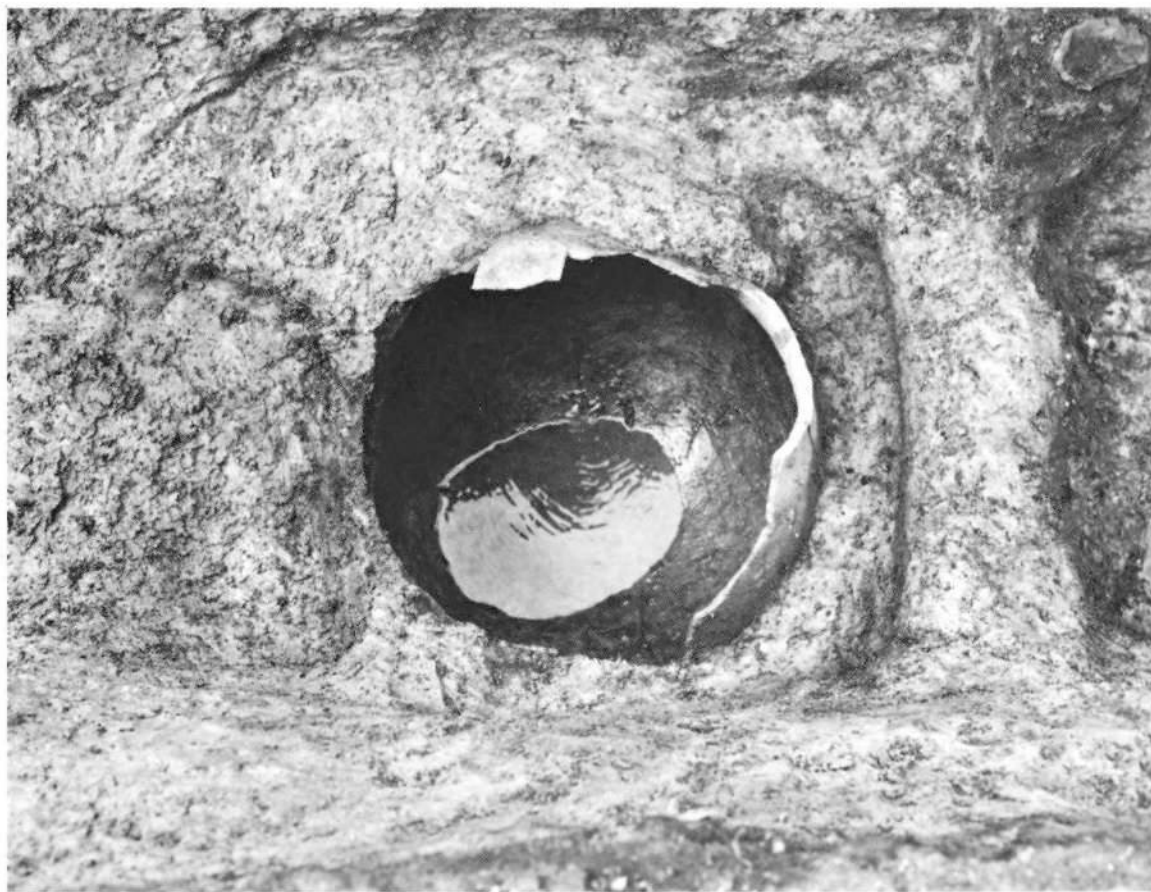


周溝南西隅

11号方形周溝墓土器出土状态

11号

10号



上 10·11号方形周溝墓周溝土層断面 下 12号方形周溝墓壺棺



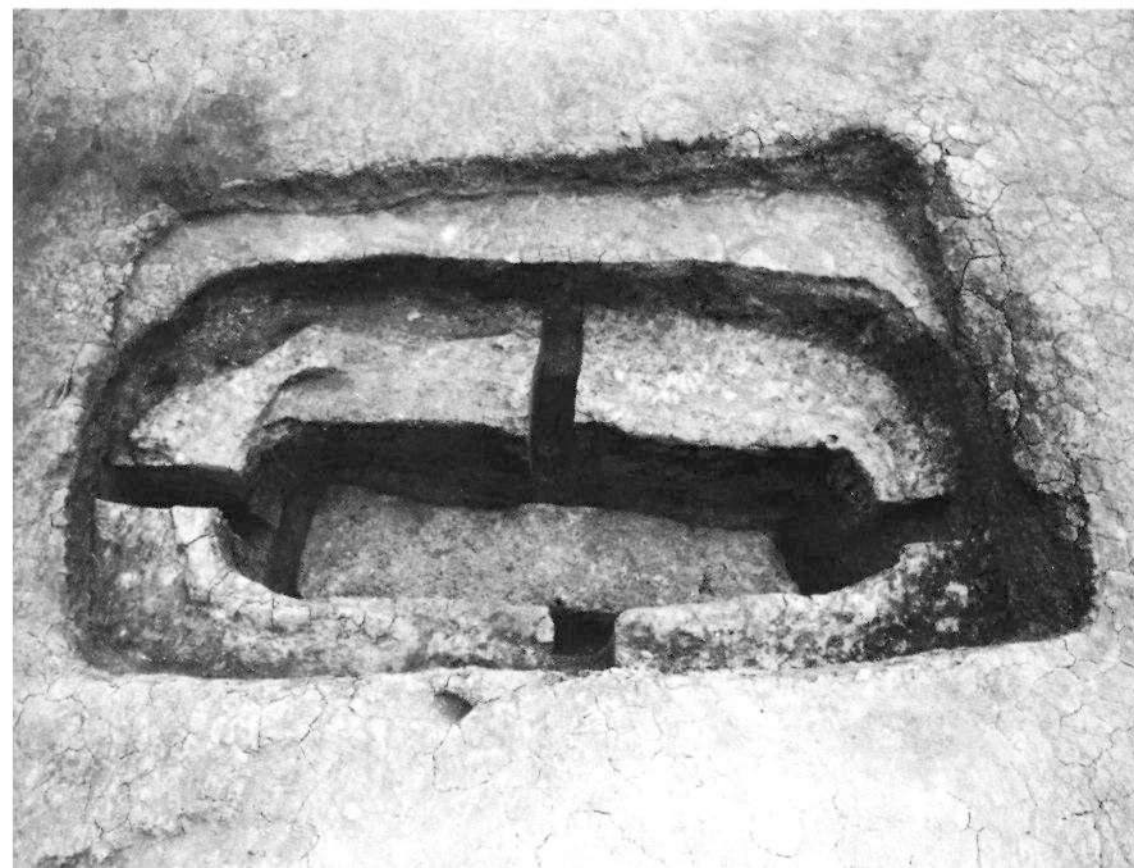
13号方形周溝墓全景（東から）



上 13号方形周溝墓内部主体（東から） 下 同南周溝土器出土状態



14号方形周溝墓全景（西から）



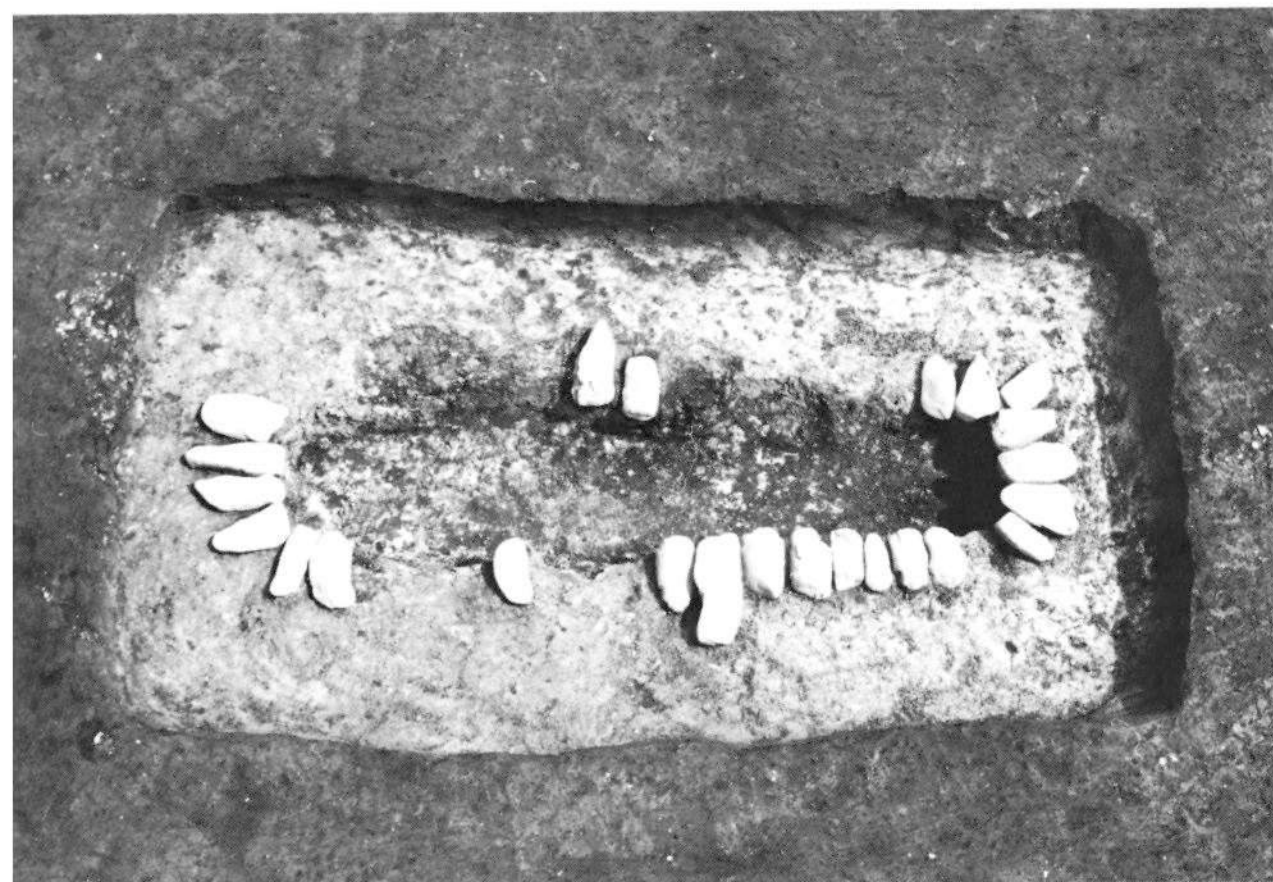
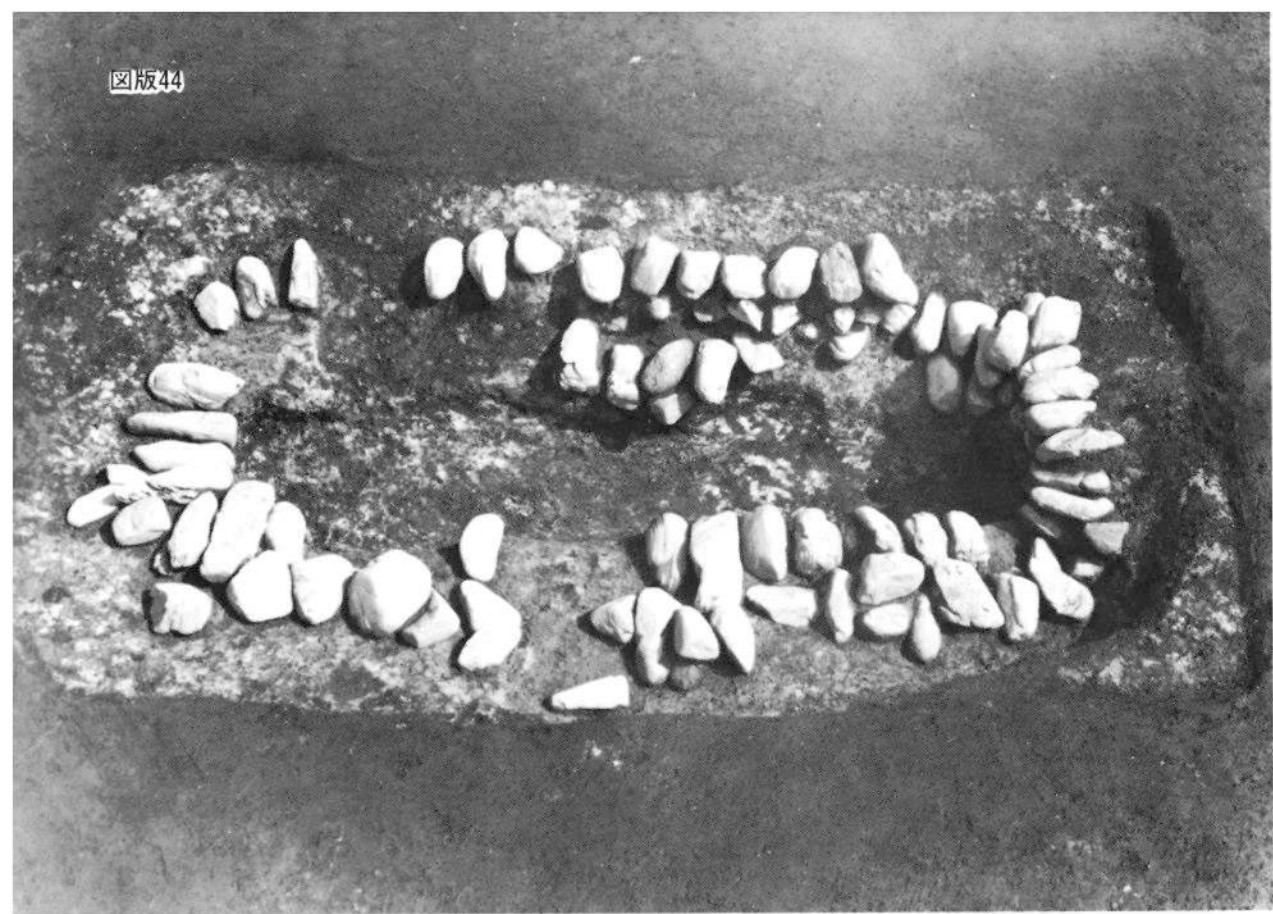
同内部主体全景（北から）



1号墳全景（南から）



2号墳全景（南から）



2号墳内部主体全景（北西から）



頭位側



足立側

2号墳内部主体石積みの状態



2号墳周溝内土器出土状態



3号墳全景



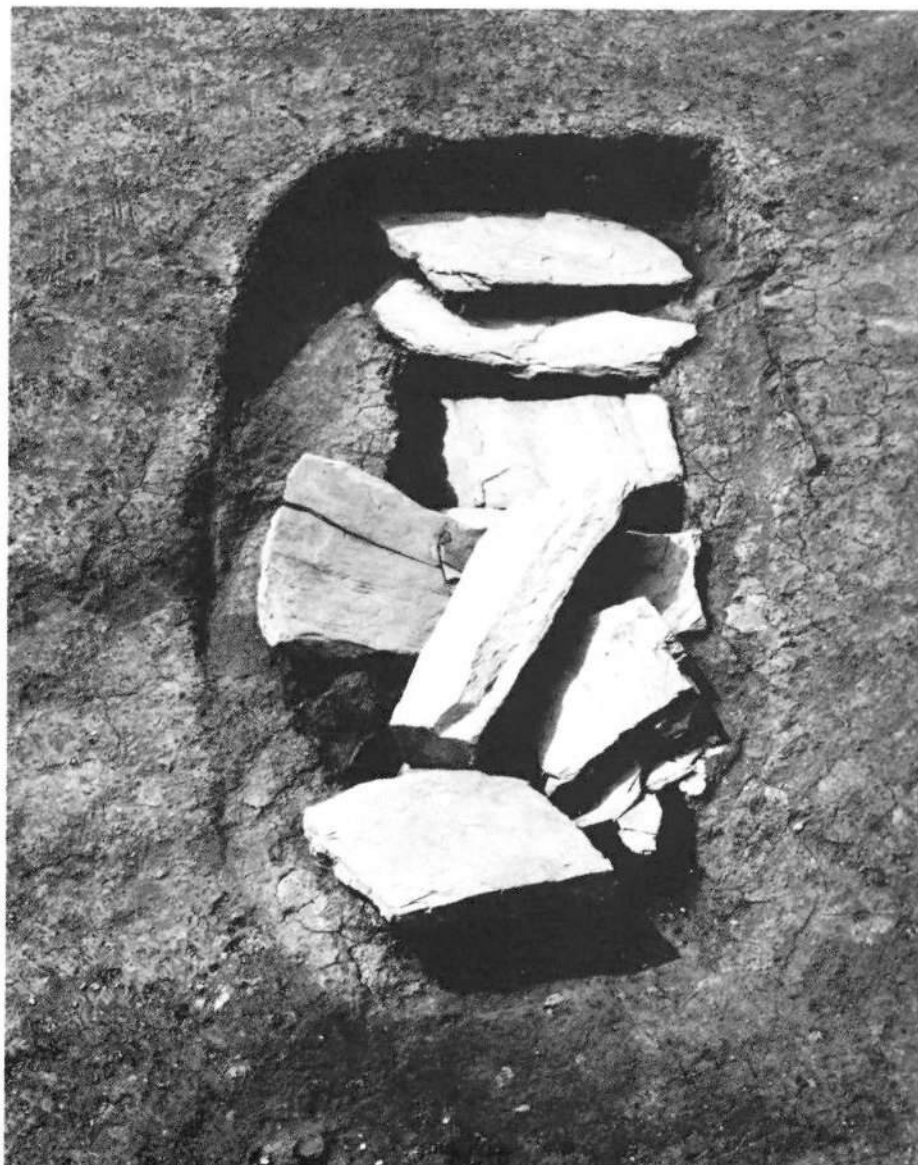
上 1号石蓋土墳墓 下 2号石蓋土墳墓と6号土墳墓

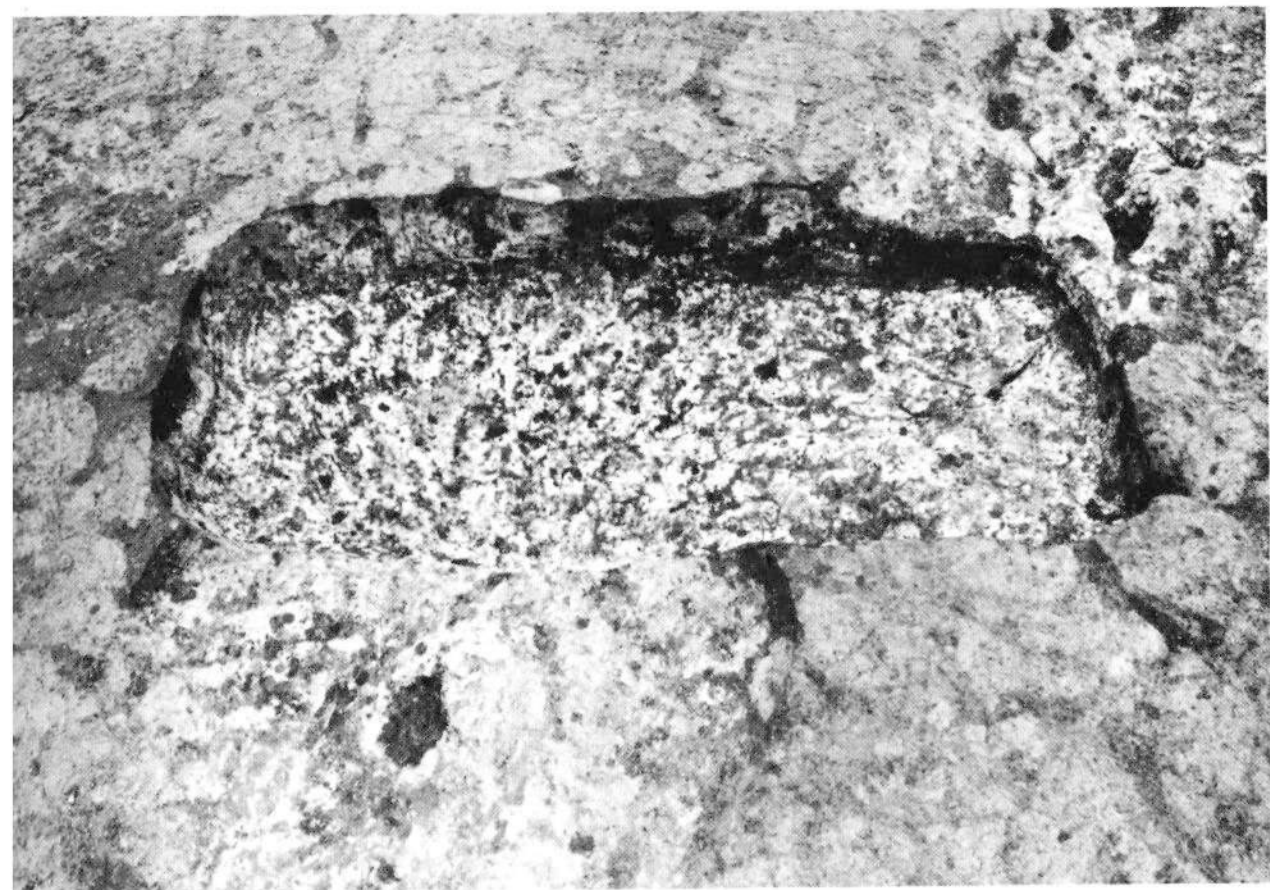
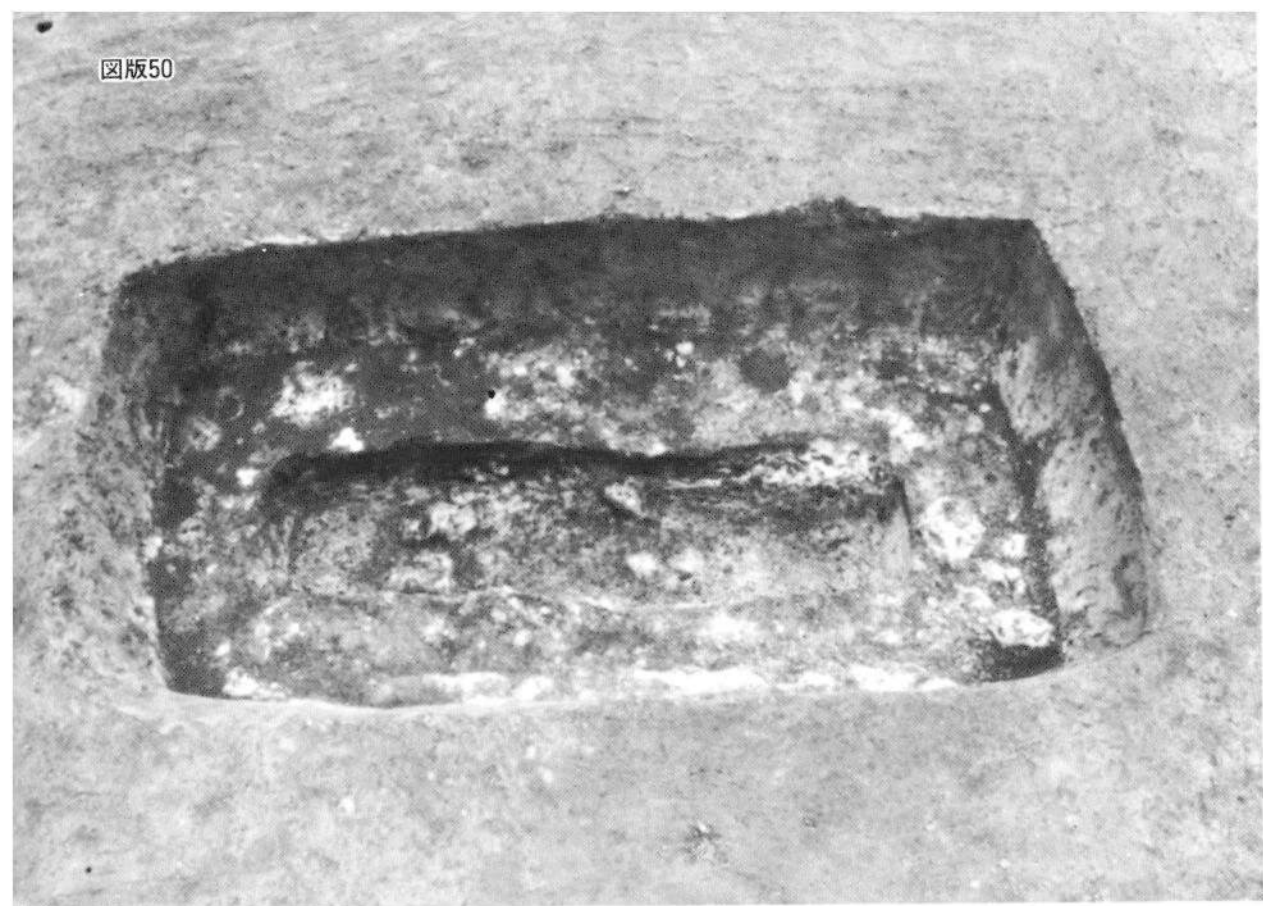


上 3号石盖土壙墓 下 4号石盖土壙墓



上 5号石盖土壙墓
下 6号石盖土壙墓



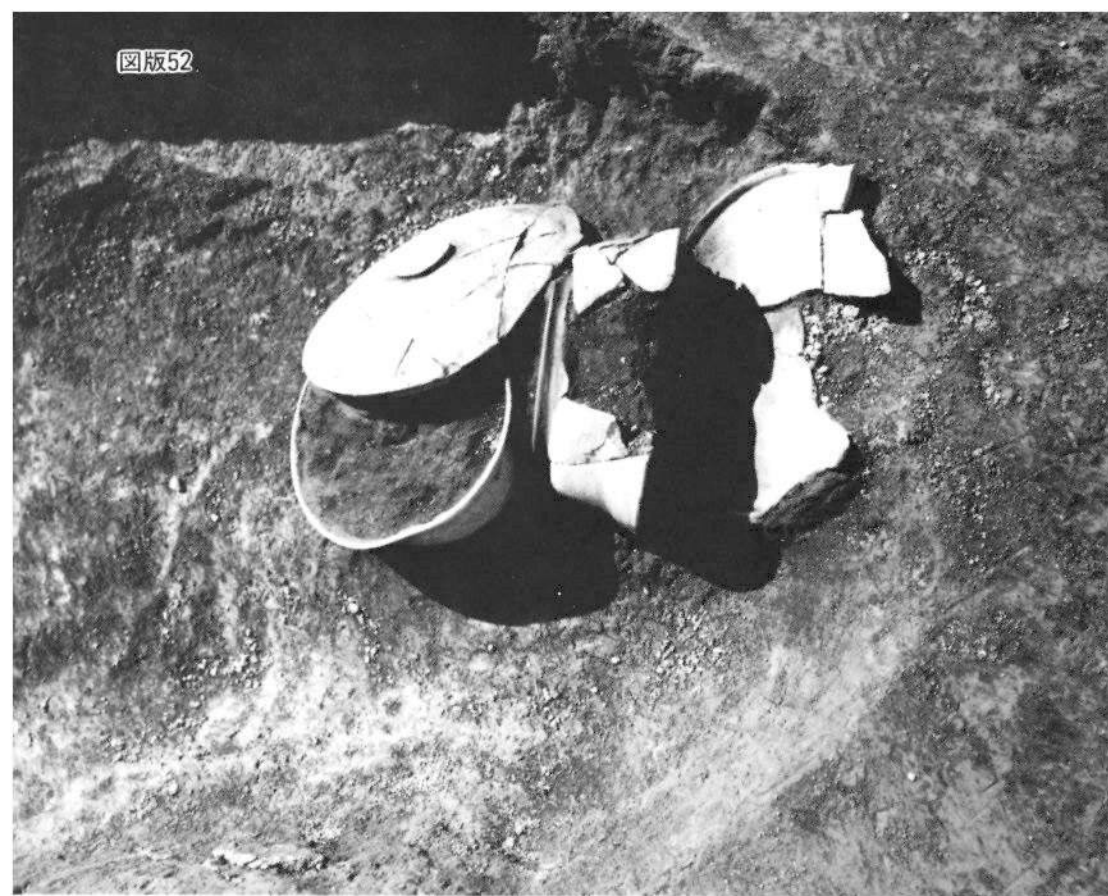


上 2号土坑墓

下 3号土坑墓

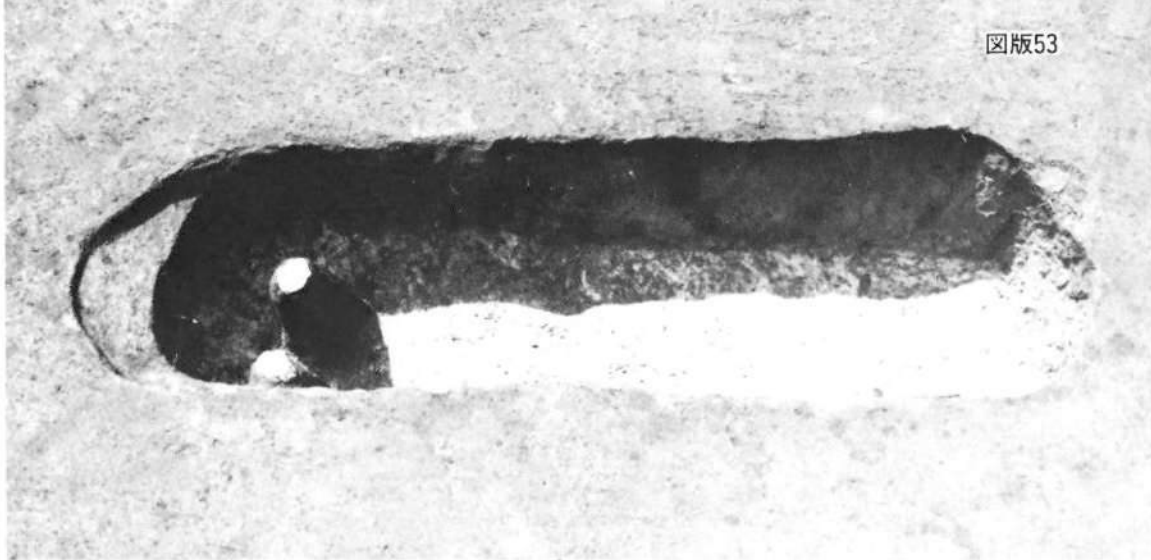


上 4号土壙墓 下 6号土壙墓

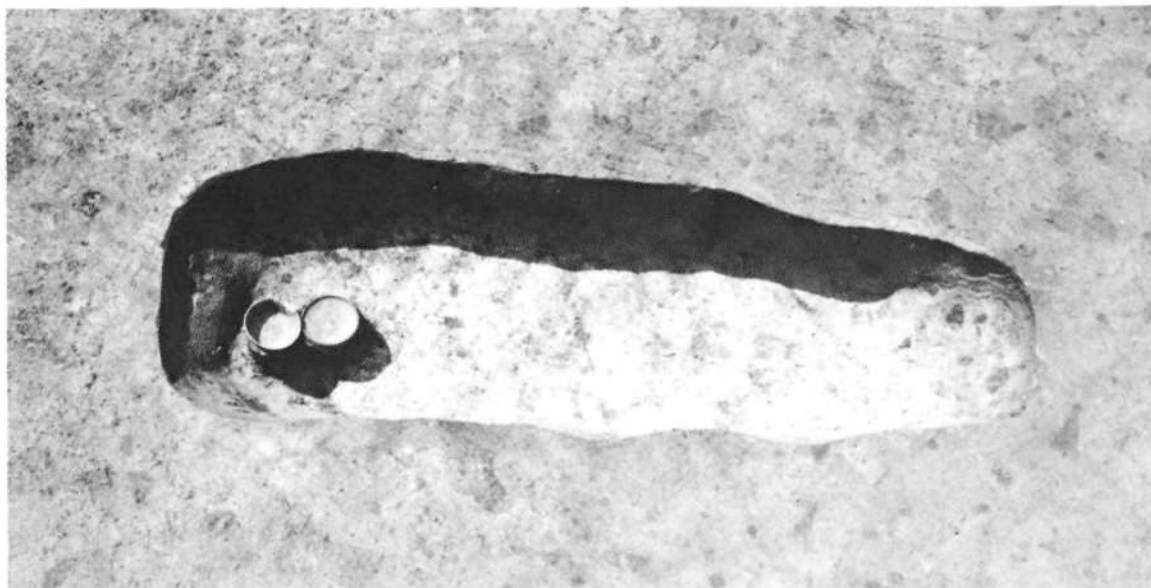


6号土壙墓遺物出土狀態

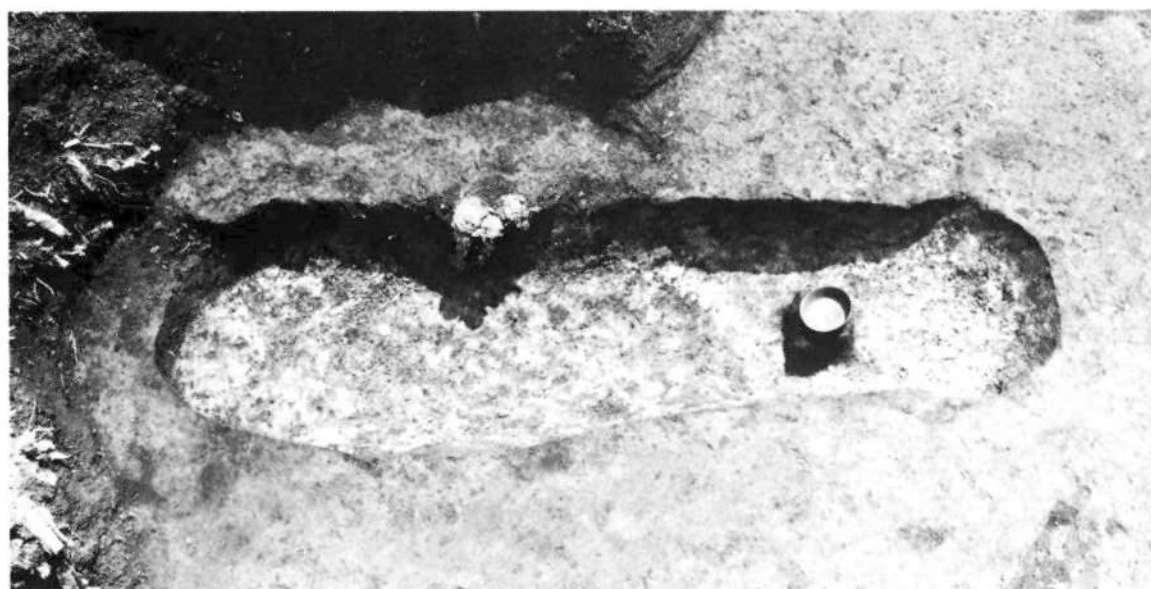
14号土坑墓



18号土坑墓

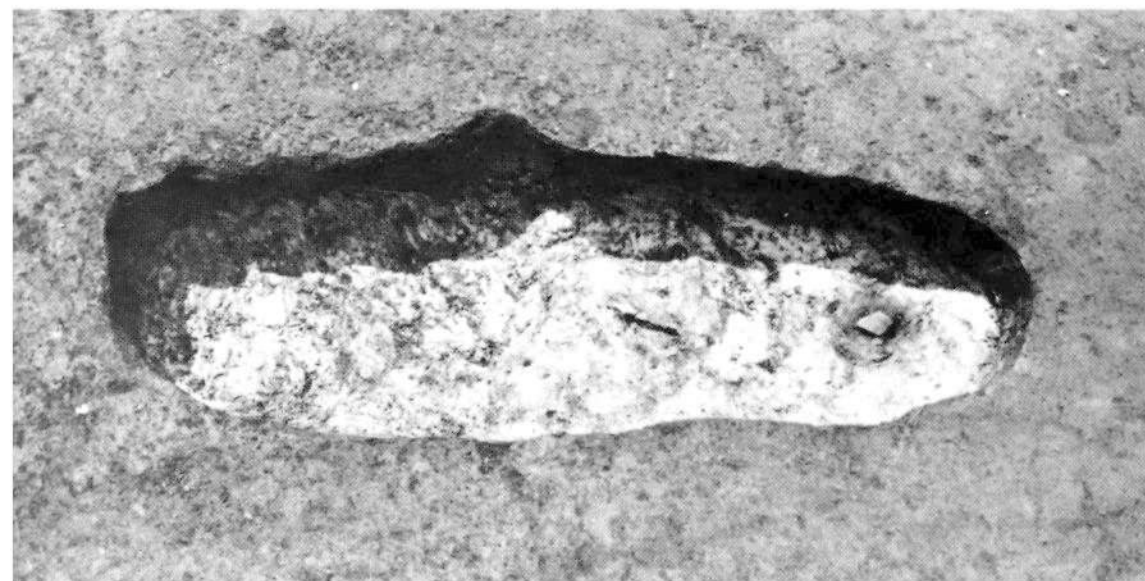


22号土坑墓





23号土壙墓



25号土壙墓



27号土壙墓



上 下
28号土壙墓 33号土壙墓





中·下
31号土壙墓 36号土壙墓

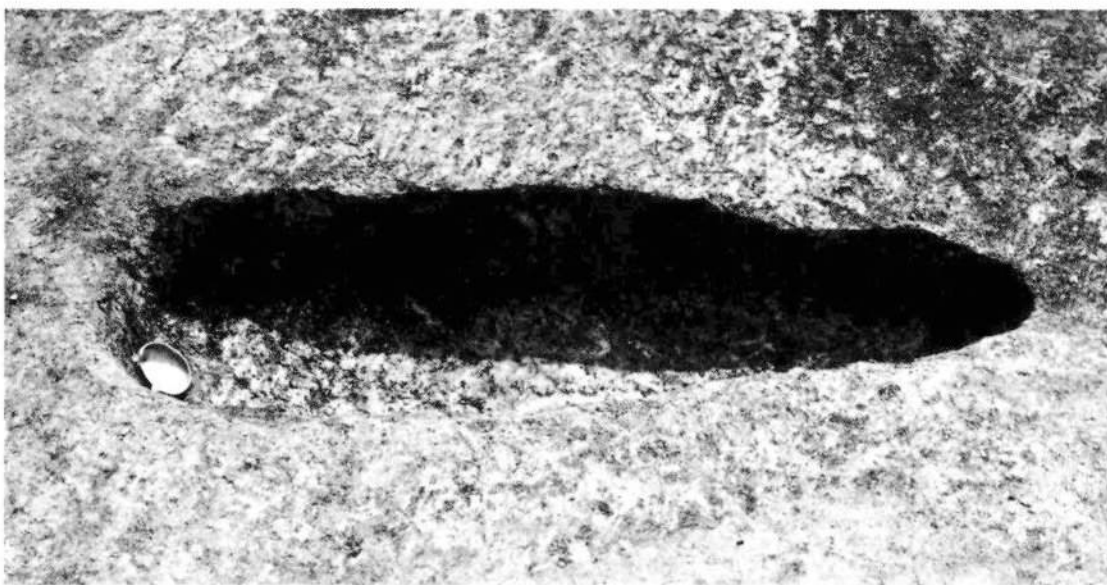
39号土坑墓



42号土坑墓

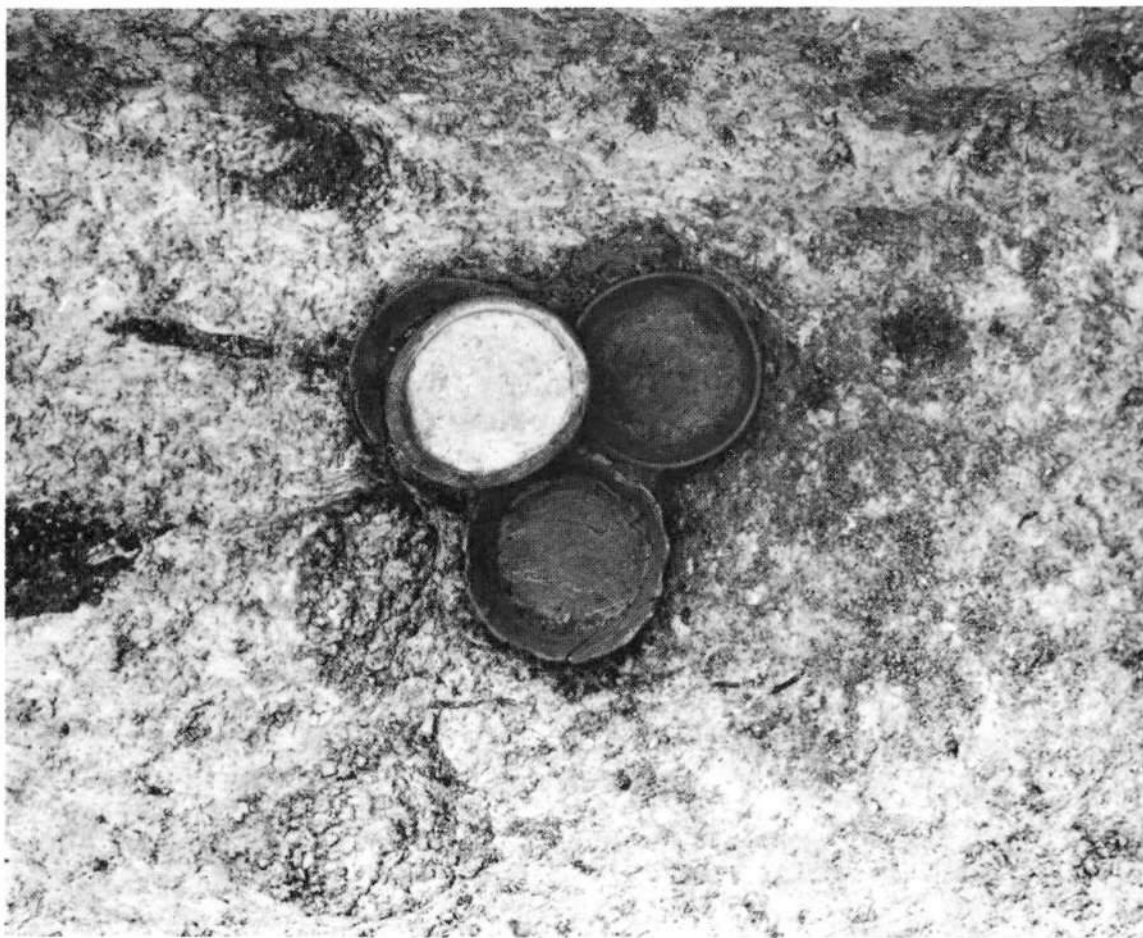


44号土坑墓





上 下
46号土壙墓 49号土壙墓



上·下 48号土壙墓



1



3



6



7



9



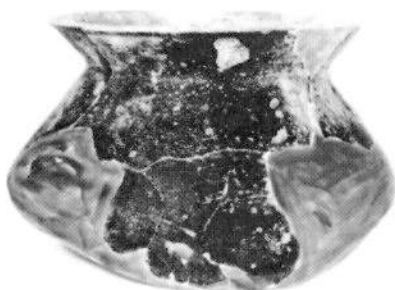
11



10



12



20



13



21



14



23



15



31



27



38



32



39



34



35



36



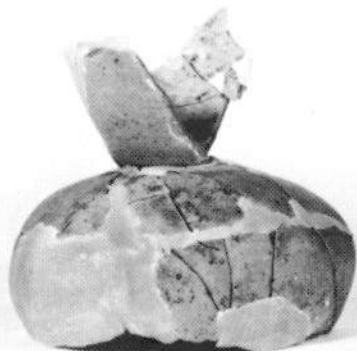
50



40



45



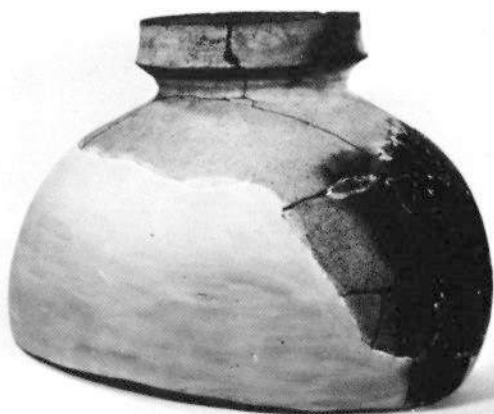
41



50



44



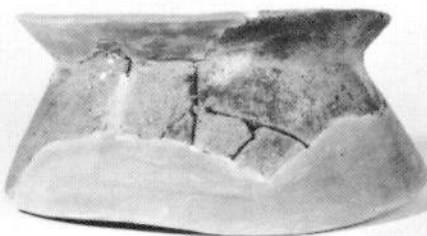
51



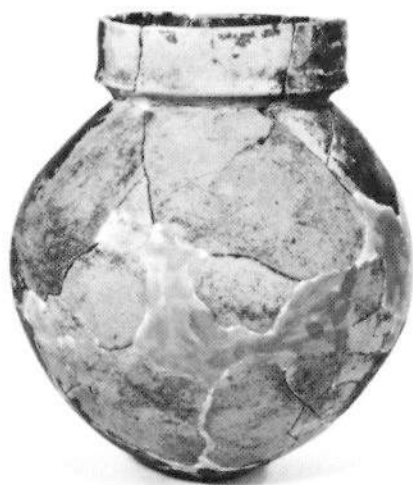
43



46



52



53



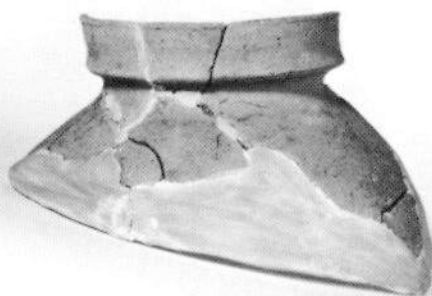
56



57



54



59



55



65



62



63



67



66



68



71



60



70



69



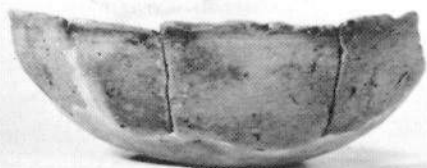
75

12号周溝墓壺棺

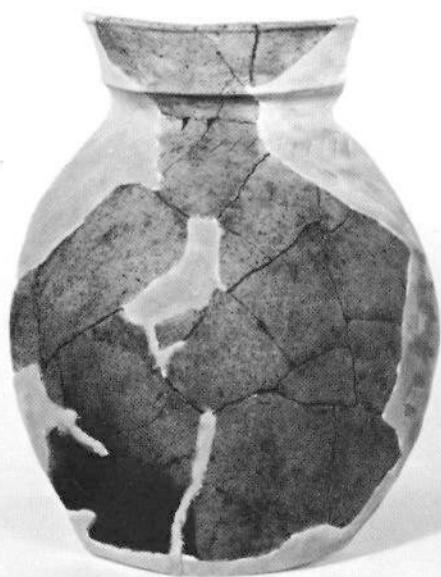
11・13号方形周溝墓出土土器と12号方形周溝墓の壺棺



72



77



76



80



78



79

16号方形周溝墓·2号墳出土土器



1



10



2



11



3



12



4



13



5



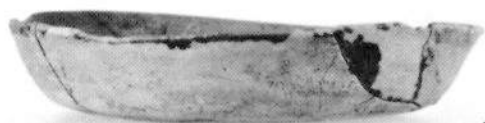
14



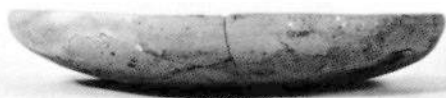
6



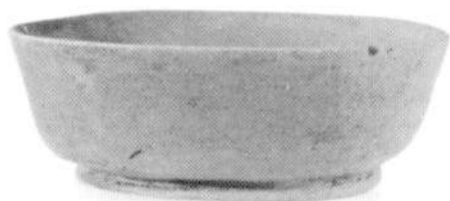
15



16



17



19



20



21



22



23



24



25



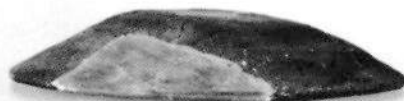
26



27



30



31



32



38



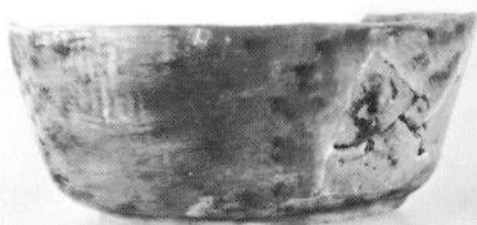
33



39



34



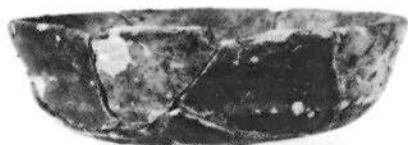
41



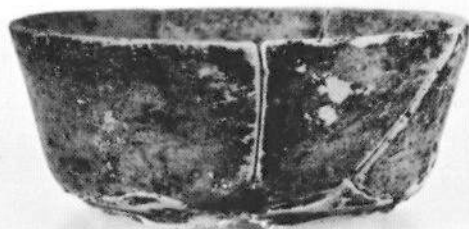
35



44



36



45



37



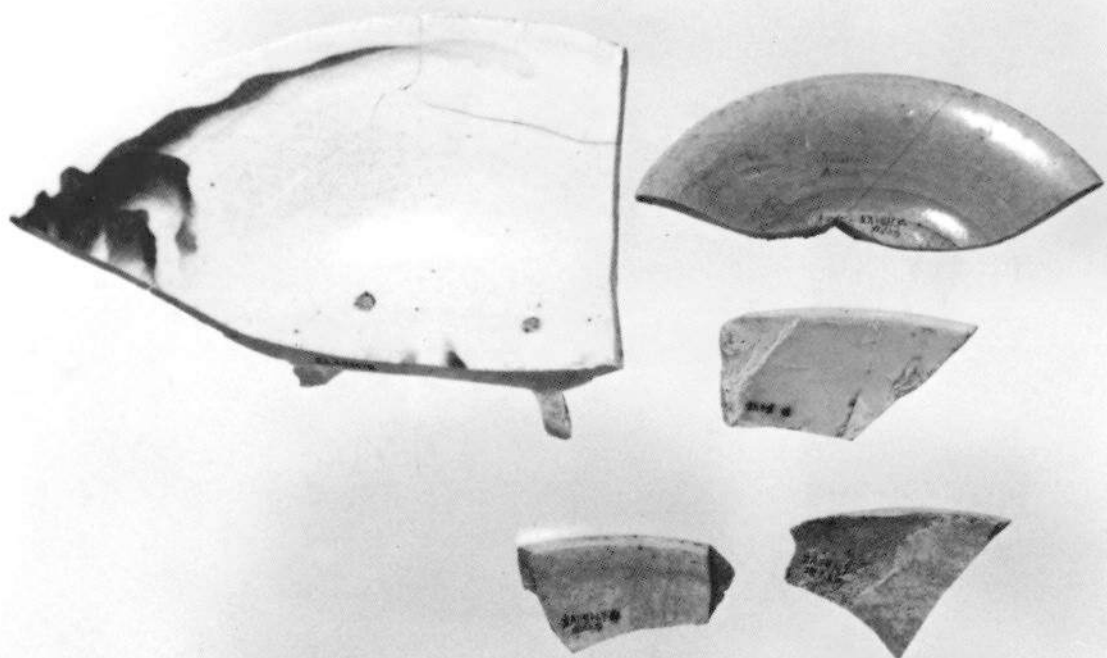
46



40



47



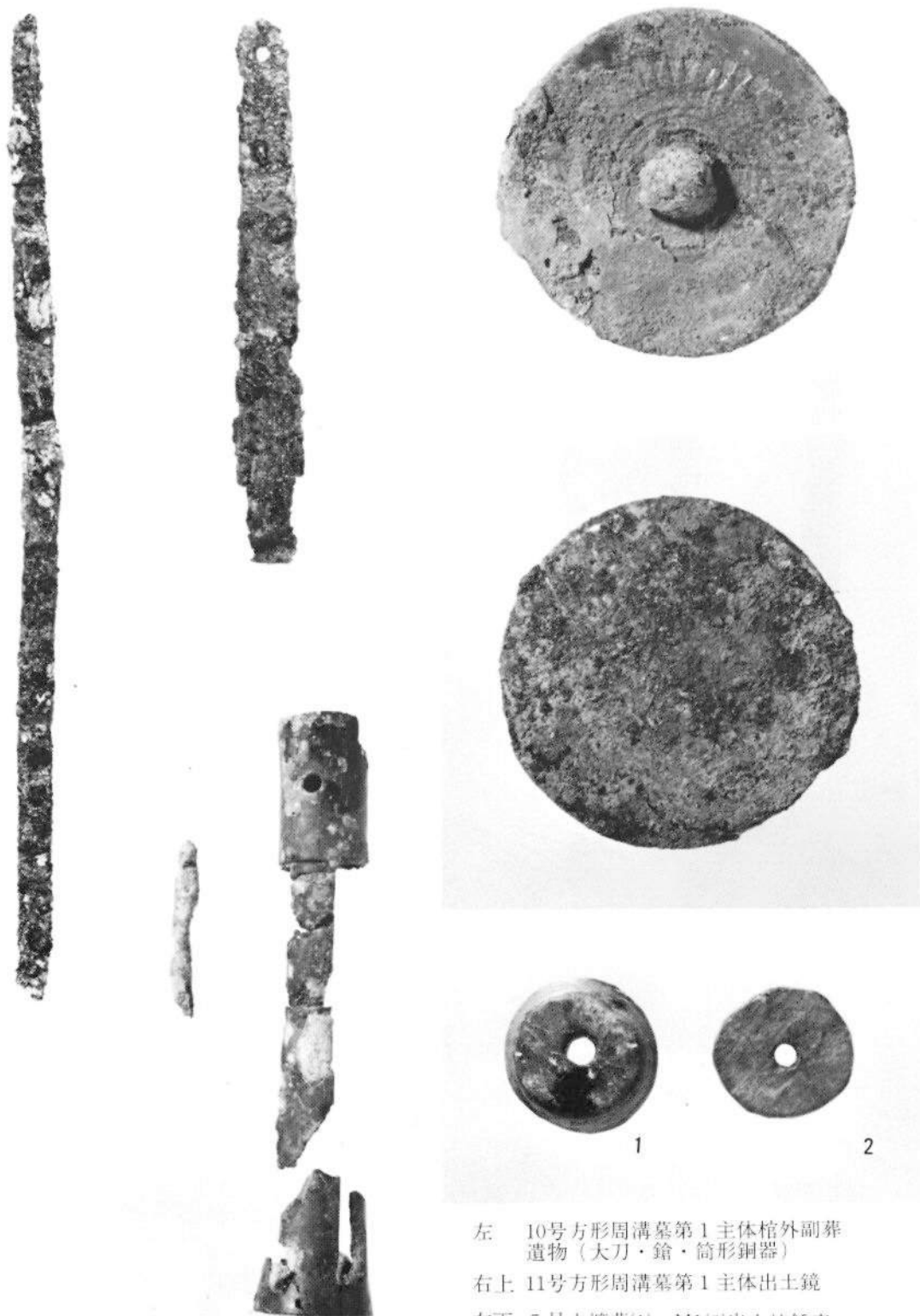
A地区出土陶磁器（上—外面，下—内面）



A地区出土鉄器



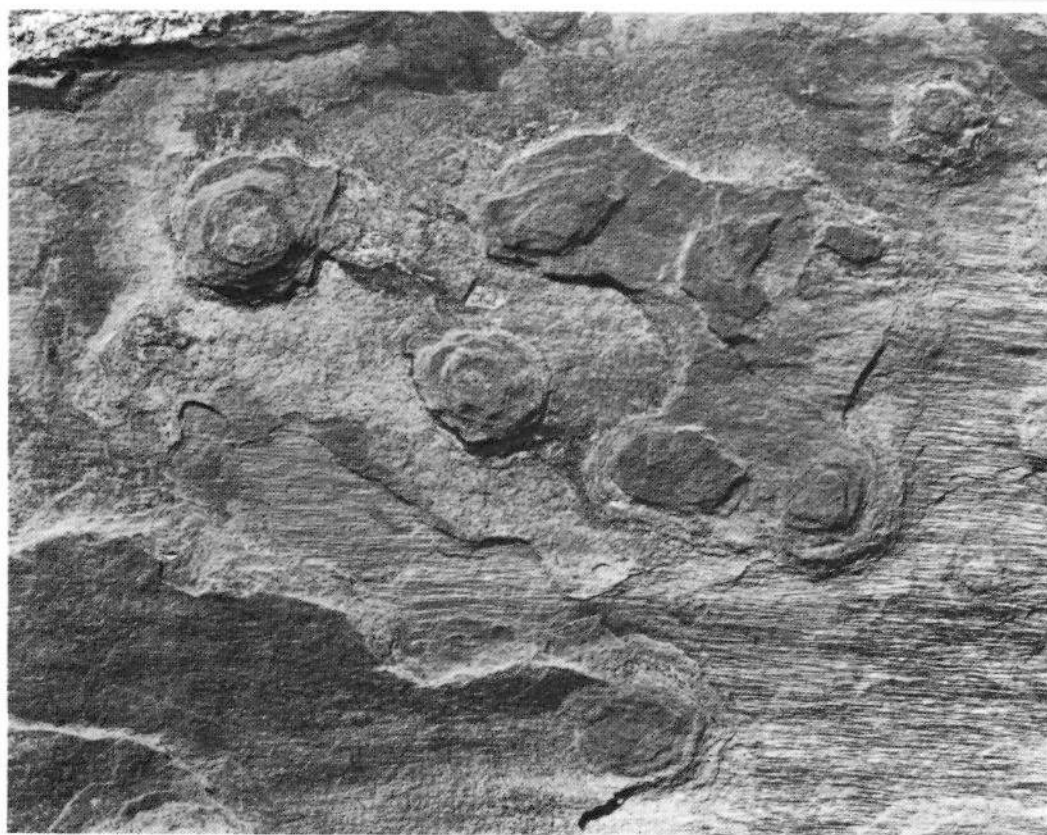
A地区出土鉄器



左 10号方形周溝墓第1主体棺外副葬
遺物(大刀·鎗·筒形銅器)

右上 11号方形周溝墓第1主体出土鏡

右下 5号土壤墓(1), M1(2)出土紡錘車



6号方形周溝墓内部主体棺材の盃状穴

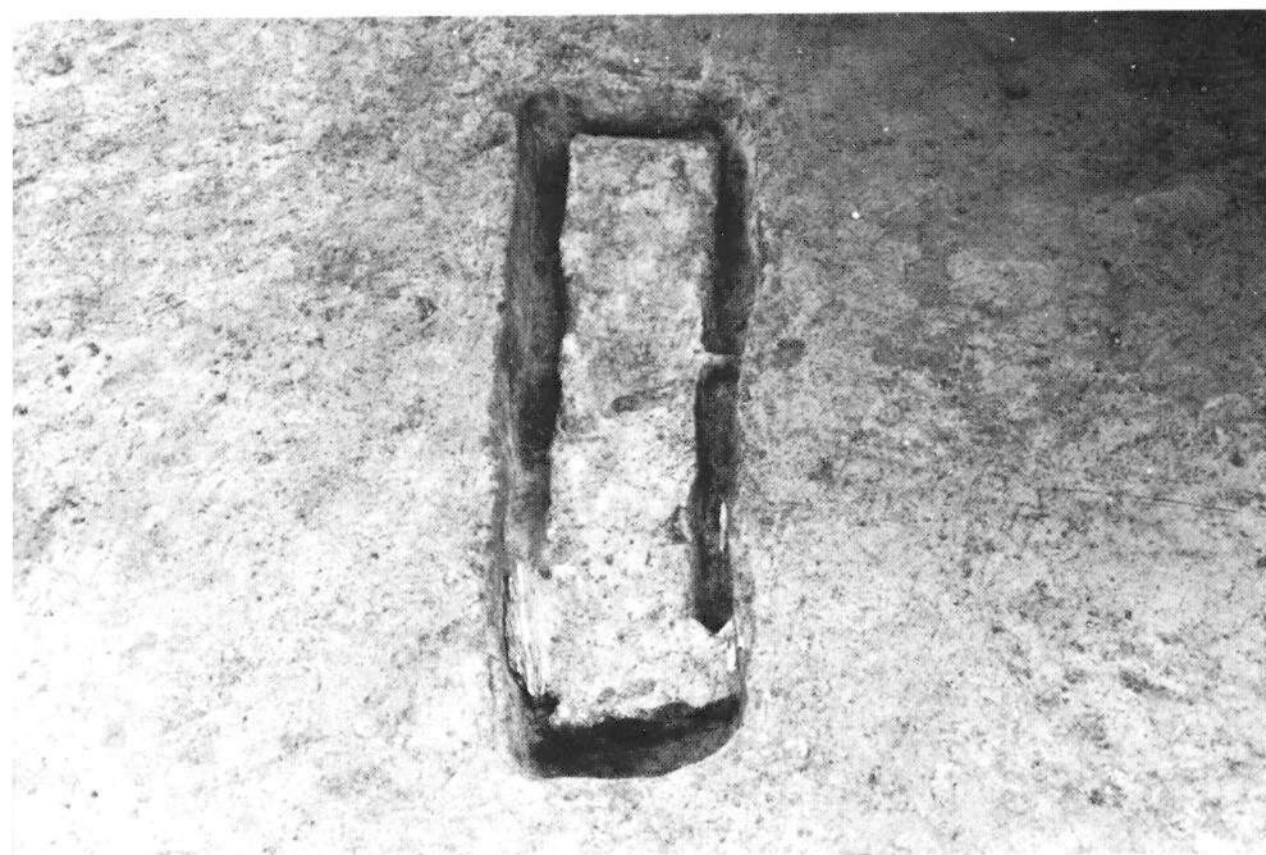
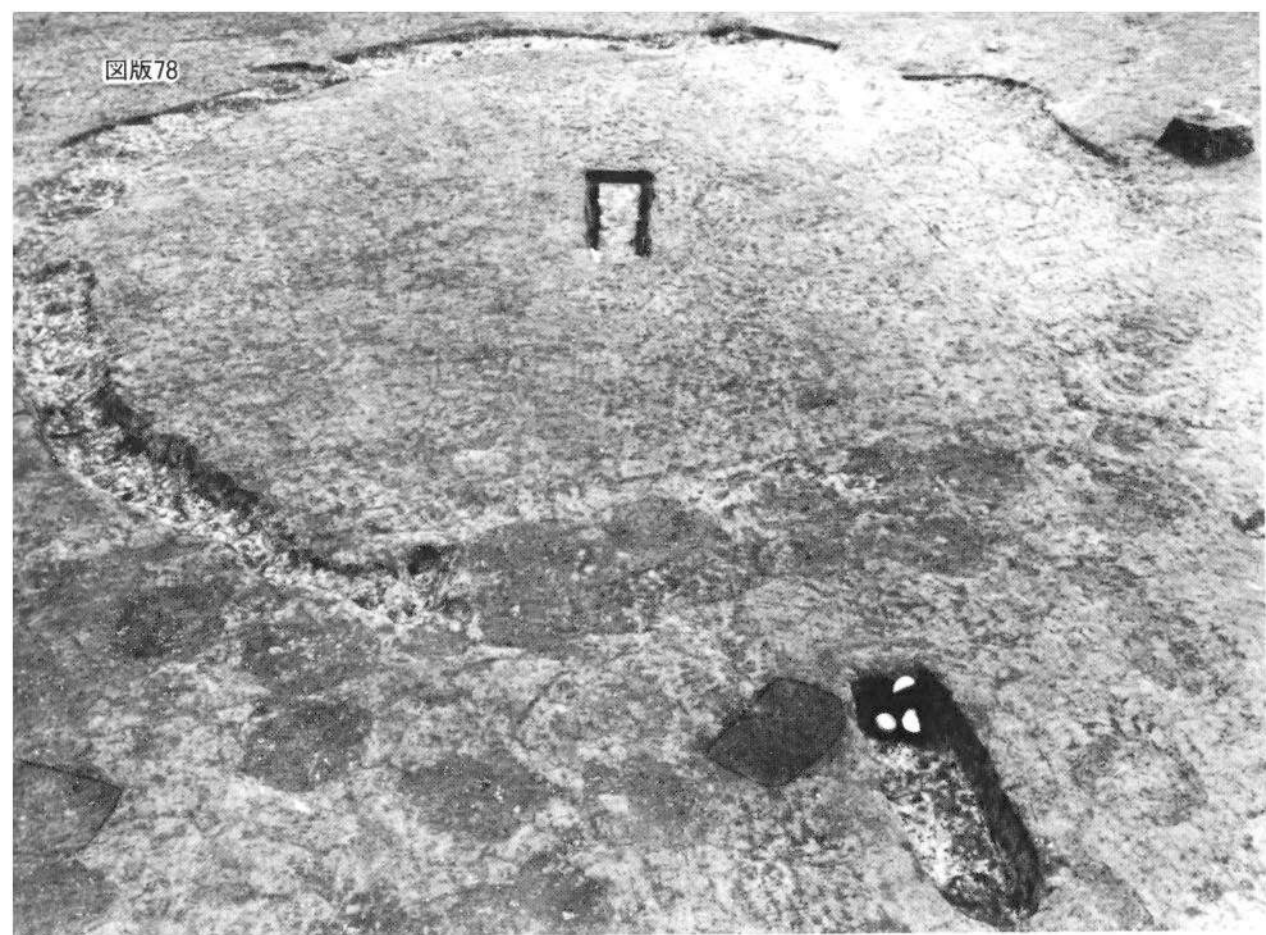
C地区



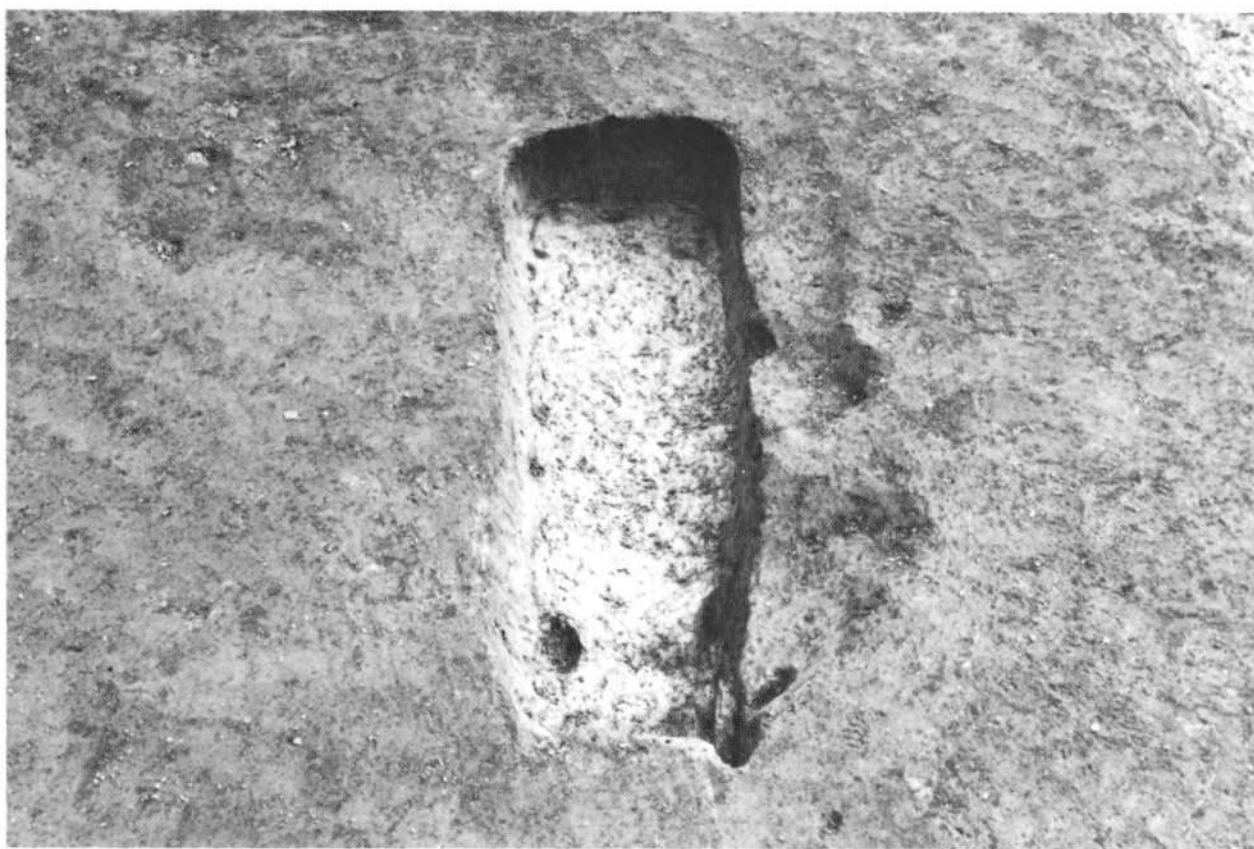
上 立野遺跡D地区全景（西から） 下 同西半部全景



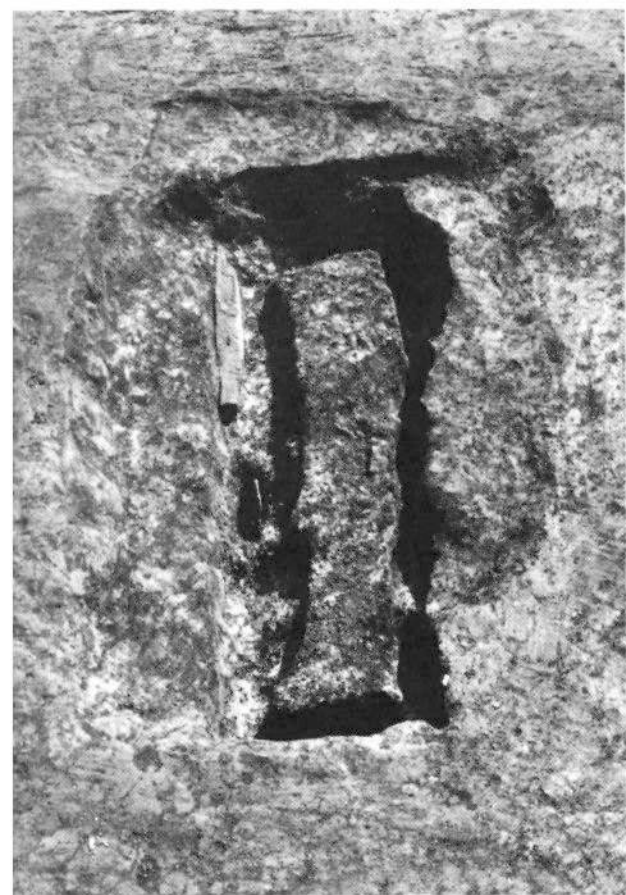
上 1号墳全景（南西から） 下 同周溝西部の土層断面



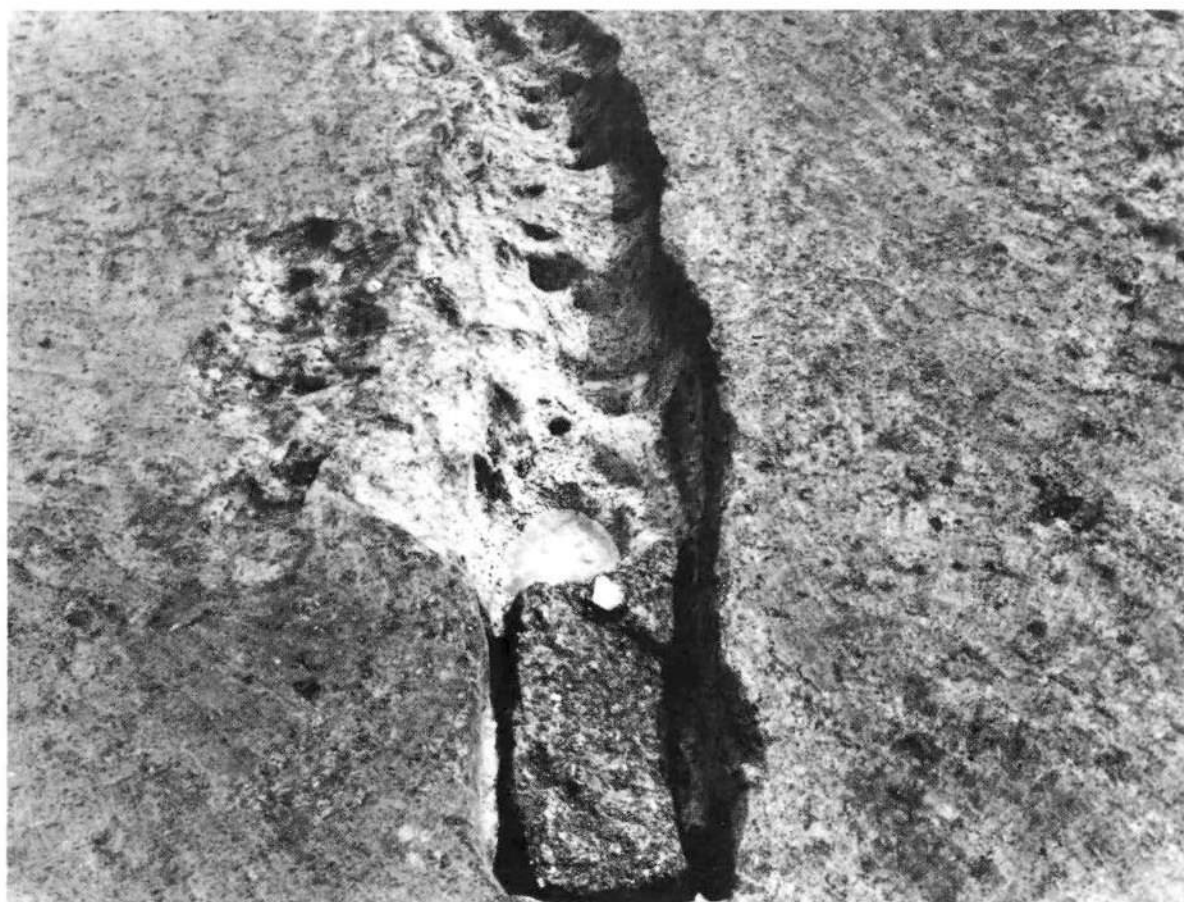
上 2号墳全景（西から） 下 同内部主体



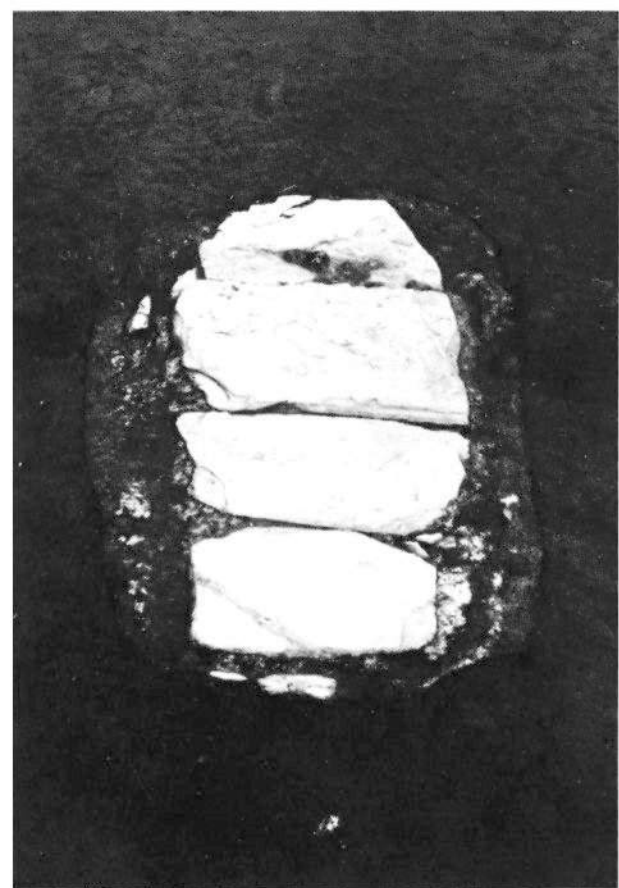
上 3号墳全景（西から） 下 同内部主体



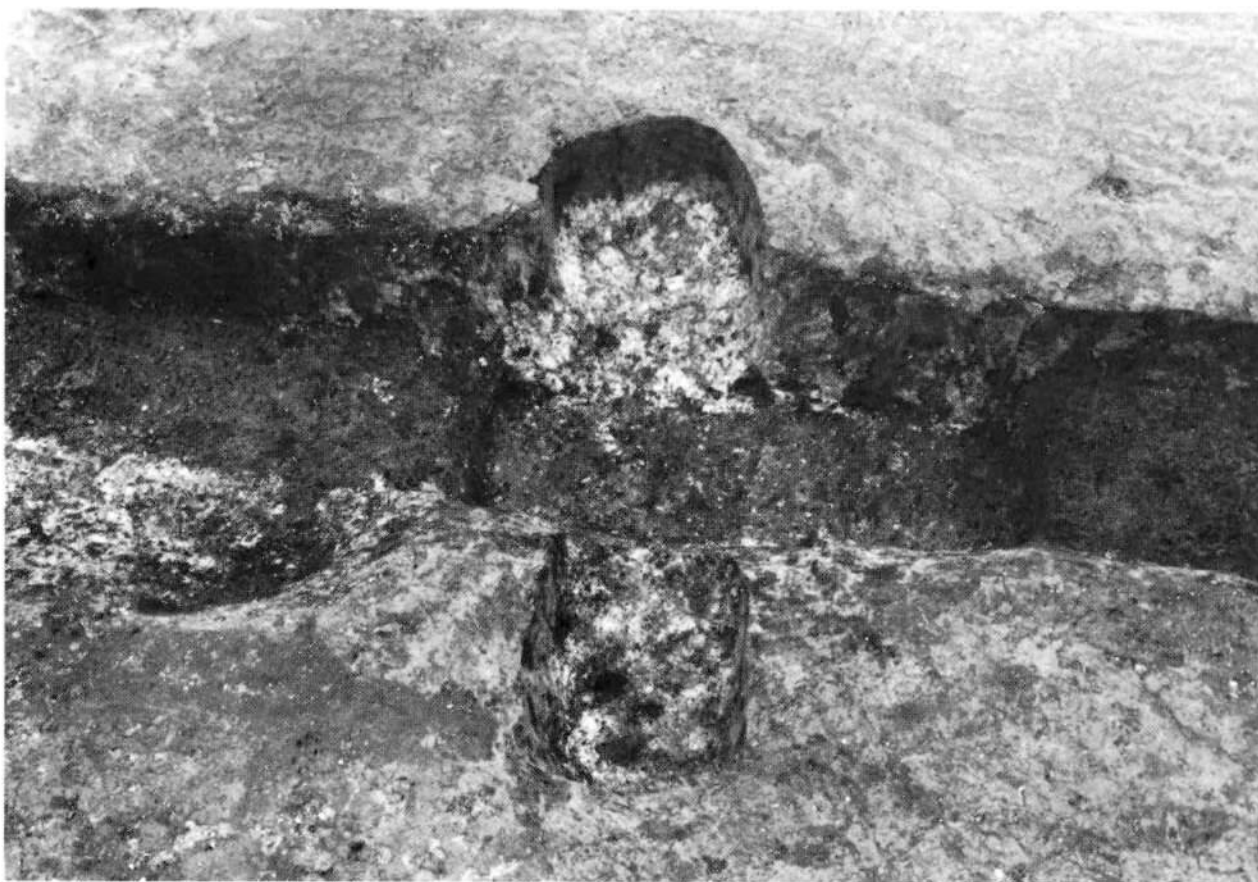
上 4号墳全景（西から） 下 同内部主体



上 5号墳全景（西から） 下 同内部主体



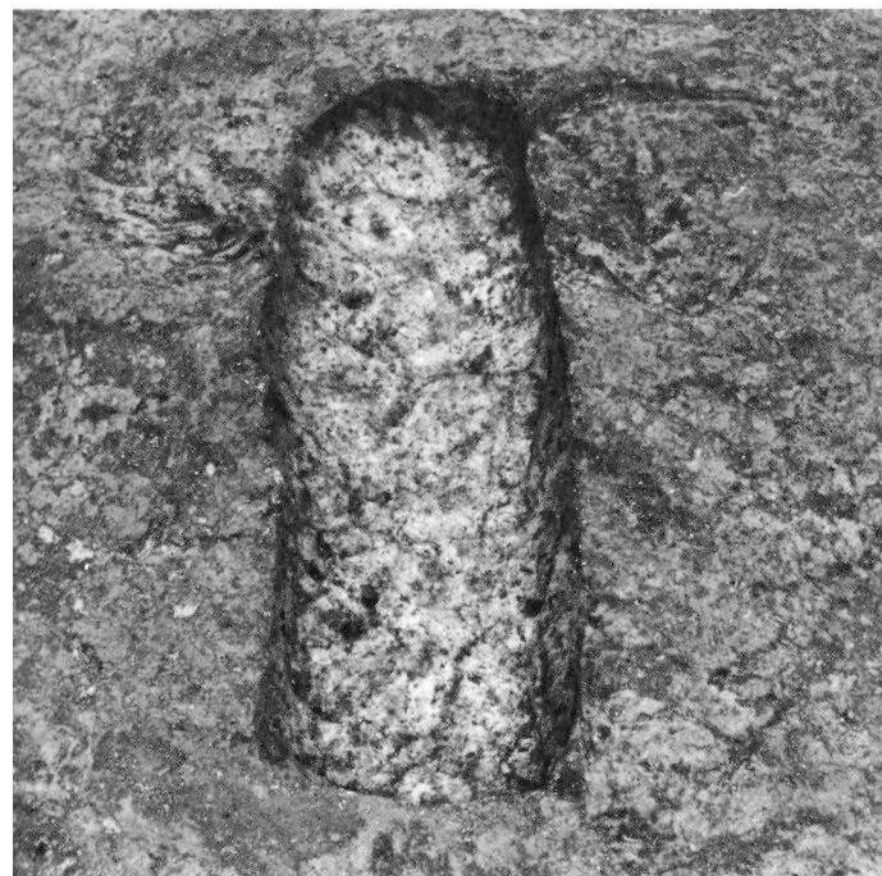
上 6号墳全景（西から） 下 同内部主体



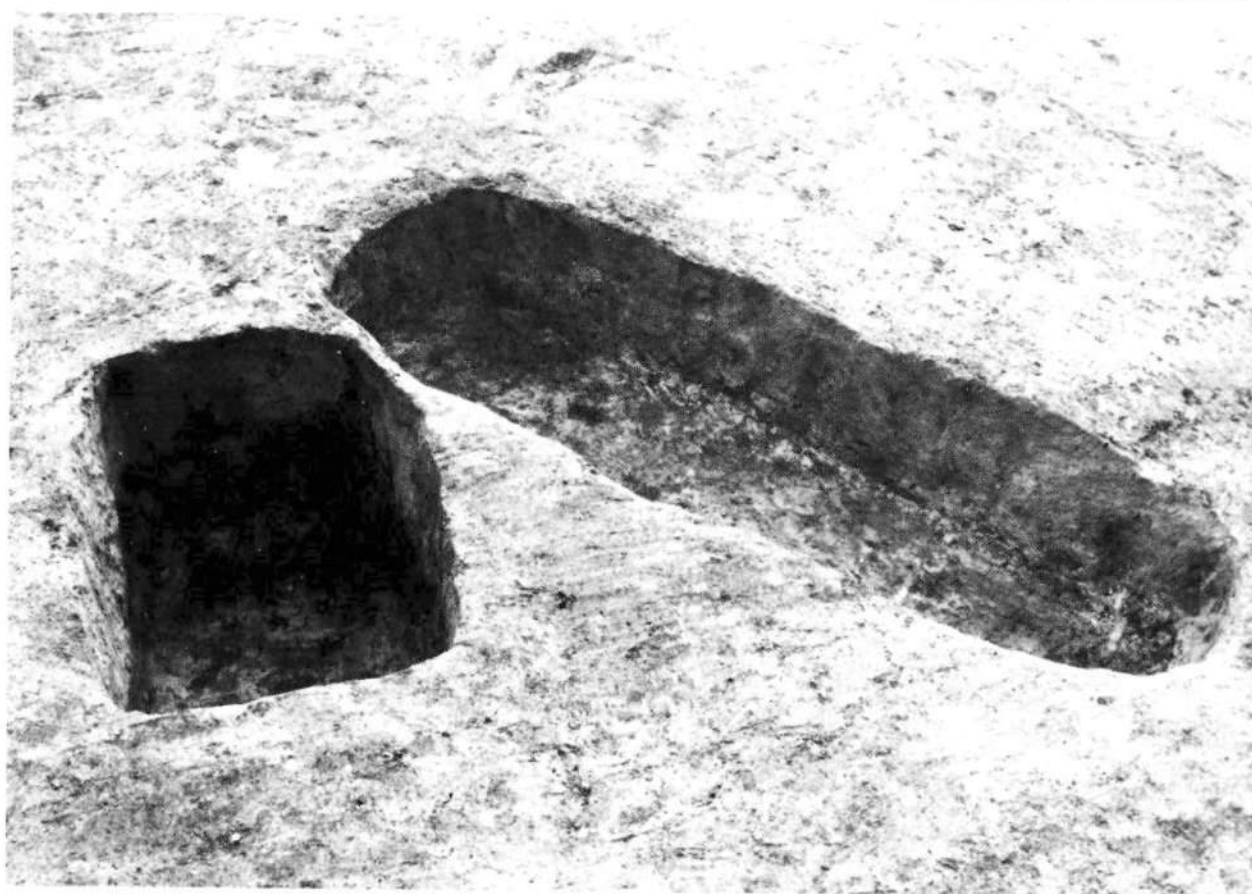
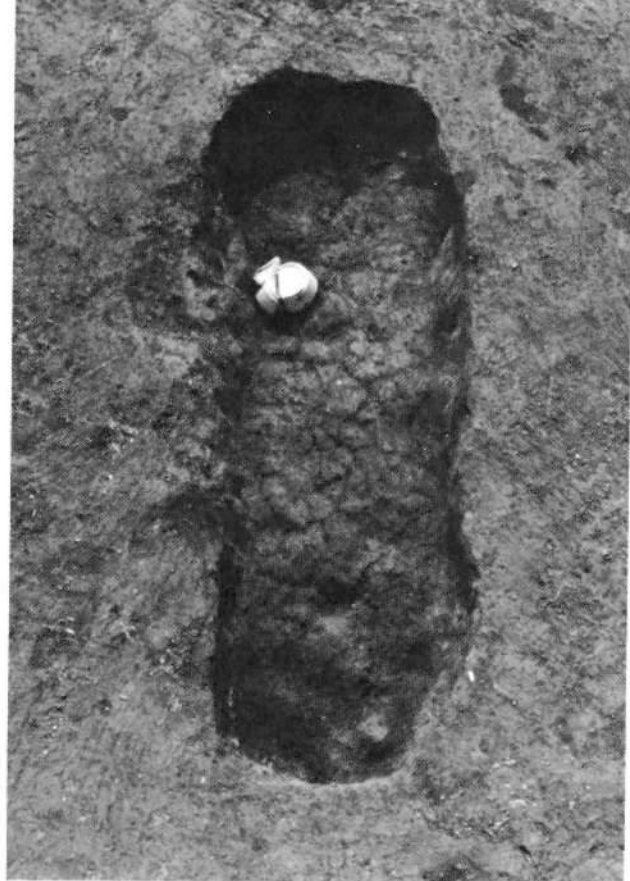
上 6号埴随葬墓(13号土壙墓) 下 1号土壙墓



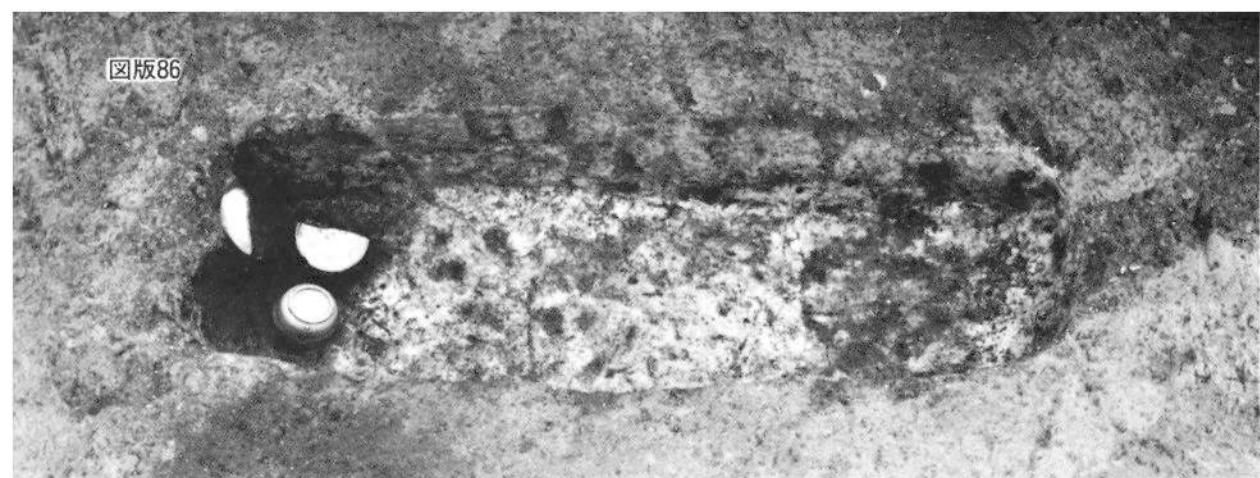
2号土壙墓



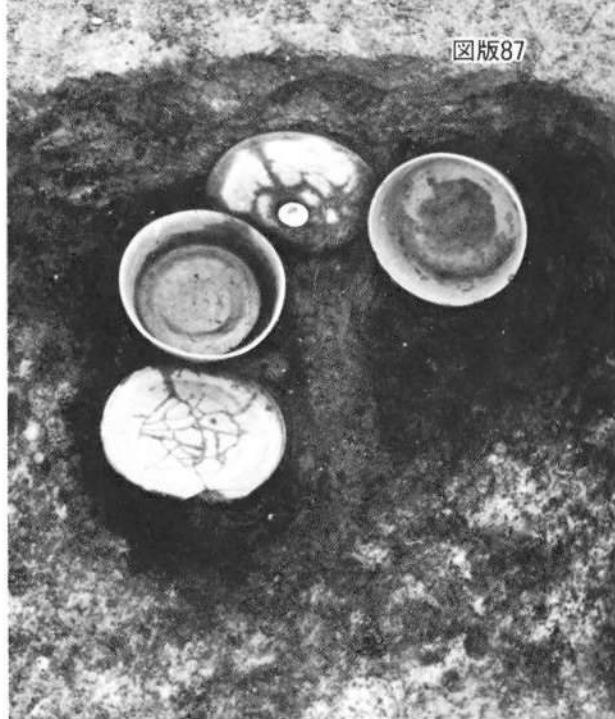
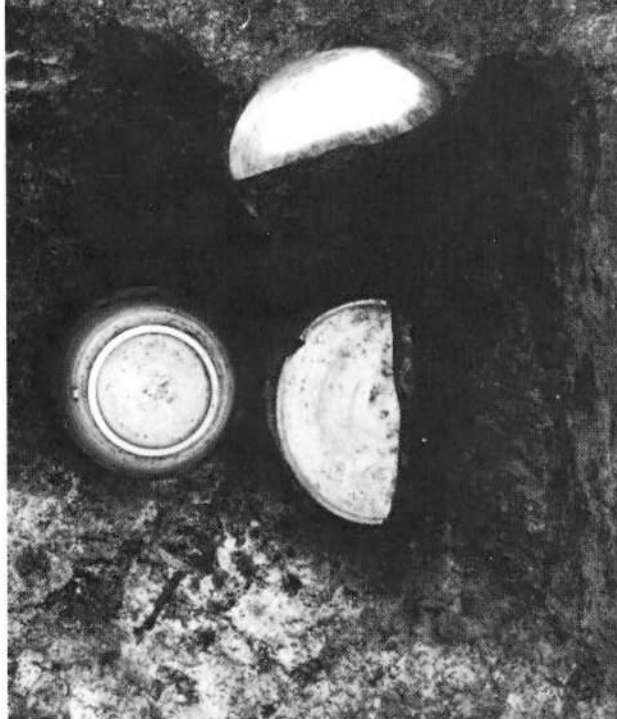
3号土壙墓



上 4号土壇墓 下 5号土壇と5号土壇



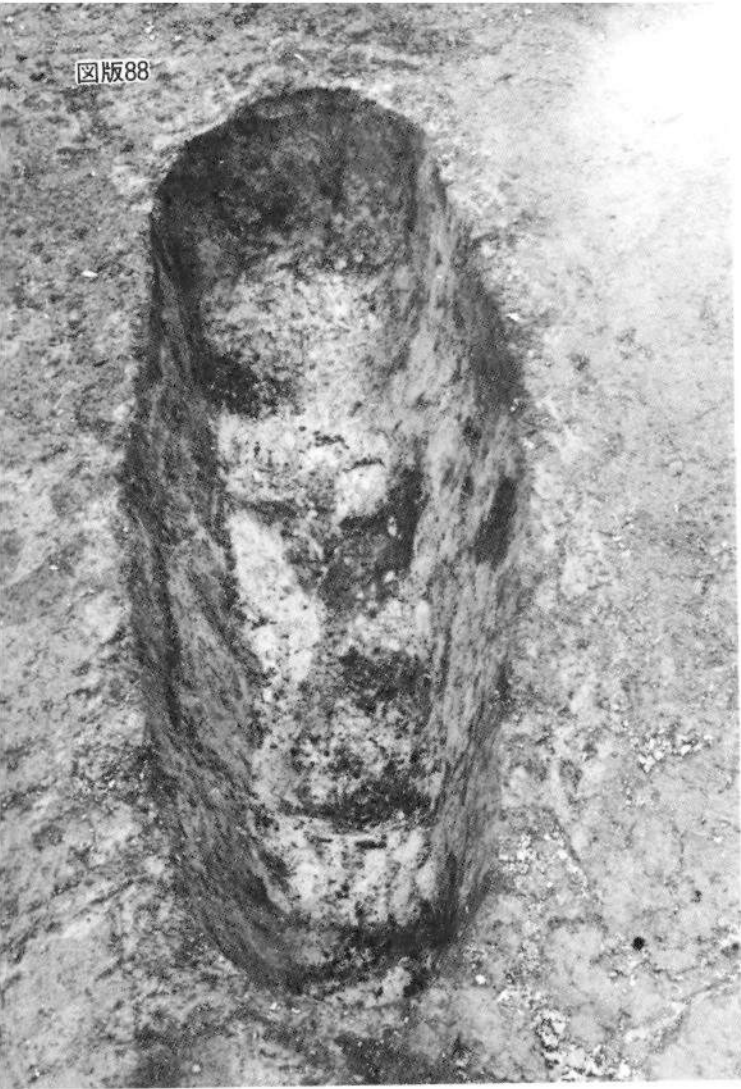
上 5号土壙墓
中 7号土壙墓
下 6号土壙墓



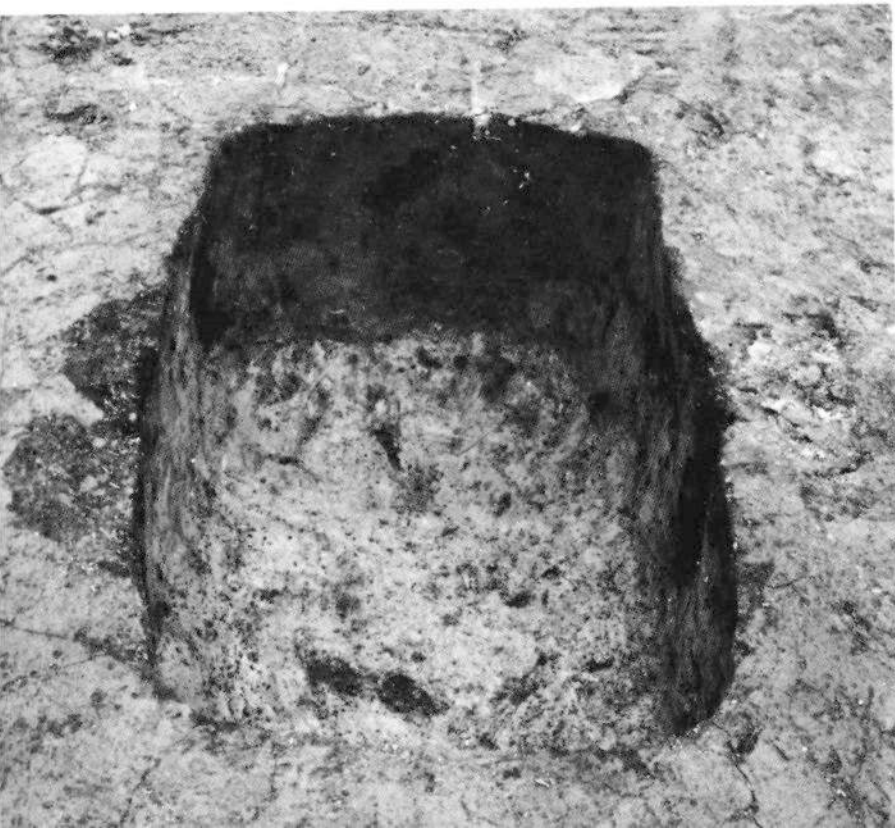
上 7号土壙墓土器出土状态

中 8号土壙墓

下 9号土壙墓



1号土壟



2号土壟



1



2



3



4



5



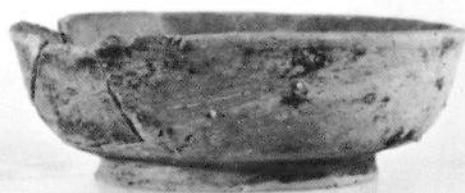
6



7



8



9



10



11



12



13



14



土壙墓・1号墳周溝内出土土器とD地区出土鉄器

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告— 5 —

昭和 59 年 6 月 30 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門 1 丁目 8-34